THE KAIZO

改造

十二月号

1924


クラブ煉歯磨
クラブ煉歯磨
THE IMPERIAL
TOILET CLUB
MADE IN JAPAN
理想の歯磨
歯を強く美しくするクラブ歯磨は歐米の高級品に優るよい歯磨であります
CLUB
DENTAL CREAM
TRADE MARK


Platon Ink
PLATON INK
PLATON



改造 十二月號 目次



滿天下の聲望を擔

キング
KING

見よ!!

天下に斯の如き
―破天荒の雜誌ありや!

◉莫大の犧牲と三年間の日子を費して生る!
◉本文三百五十二頁口繪三十餘頁悉く一粒選り!
◉定價僅に金五拾錢こんな安い雜誌は斷じてない!

▼新年創刊號内容の一部

■富の力、智の力、人格の力……高橋是清
■自治の眞精神……後藤新平
■脚下を照顧せよ……新井石禪
▼長壽教學者の外讀むべからず……二木謙三
▼大事件小事件（時事百態）
▼何時も若々しく快活に暮す工夫
▼人物掘り出し物語
■野田卯太郎評傳……風雲學人
■名士の腕白時代……遠野草刈
■名人達人決死の大試合……鳴弦樓
▼蟻の生活ものがたり……（趣味の科學）
▼[illegible]から名舗となる迄……（成功美談）
▼各方面キング譚まくり
▼古今東西逸話の泉
■リンコルンを讃ふ……永井柳太郎

グラフ

原色版、オフセット版、藝術的寫眞版等の口繪。今まで見られなかつた鮮明寫眞上等紙印刷の畫報十六頁。共に本誌の苦心蒐集せるもの、或は一流畫家に囑し、或は外國より名畫を取寄せたる等逸品揃ひ。

小說と

■長篇小說 人間味……村上浪六
■歷史小說 嵐を衝いて……關笙之助
■傳奇小說 酒中仙……前田曙山
▼講談 大久保彦左衛門……松林伯知
▼落語 喋舌小僧……松廼家錄
▼武勇 直江山城守……小泉長三
▼童話 金出ろ銀出ろ……宮原晃一郎
■家庭小說 獅子王……渡邊霞亭
■熱血小說 悲願千人斬……下村悦夫

つて

新年號より發刊

創刊の日近し！

四大附錄

天下に比類なき精選記事滿載の本文に加ふるに又と得られぬ次の如き大附錄四種……

【第一附錄】趣味實益新案番附六十種
……これ丈で一册の値打は充分各種各方面の番附なれば家庭必備

【第二附錄】二十八大家苦心の結晶 人々よ覺めよ！祈れ！歌へ
……冠婚葬祭、老幼男女少年、各種職業者の祈念愛誦の名篇實に三十章

【第三附錄】各地六十名士 愛誦の金言名句修養訓
……聲名一世に鳴る諸名士が特に本誌に寄せられた金玉の大文字！

【第四附錄】新東京名所巡り競爭双六
……今までにない新式の面白い遊び方、繪に目も覺る程美しいもの、

以上は本誌創刊號内容の一部總てトテモ擧げ離し。兎に角書店で評判をお聞き下さい。

十二月五日發賣

如何にして希望を達す可か……野間清治

洋行土產（海外奇聞）……坂崎坦

▼名士名流結婚ローマンス……

▼軍神泣く孝子濟一郎（美談）

▼世界珍聞新知識……

▼時計發達繪ものがたり……

五千名當選大懸賞募集

雜誌界で未だ前例のない大計畫です。特に創刊を記念する爲の懸賞募集ですから誰方も奮つて御投書下さい。詳細は本號にあります。

講談

探偵小說 罠の罠……奥田野月

▼小說加藤宗之助奇策……向井瑠璃

▼小說傑僧天海の一喝……喜多川眞之輔

▼逸傳鬼將軍エフリー……高木哲夫

▼講談不破數右衛門……南田畔太郎

長篇小說 處女……中村武羅夫

武勇小說 劍難女難……吉川英治

怪奇小說 肉饅頭……伊藤銀月

【定價五拾錢 郵稅二錢】

發行所 東京本鄉 大日本雄辯會・講談社

（振替東京三九二〇 全國各地書店販賣）

高橋是清題字
大木遠吉題字
元田肇題字

田健治郎序
永井柳太郎序
井上雅二序

勝間順藏著

定價四圓八拾錢
送料二十錢

南洋の文化と富源の實際

最新刊

菊版六百三十頁上製箱入　挿入地圖三葉着色圖表六枚
各種統計五十面　三色版コロタイプ寫眞版五十個挿入

學界と財界への一大貢献

人生の膨脹、殖民、この本能は遠くはジョシュアの古より近くは米阿の山河に各國が新郷土の爭鬪を繰り返して居る今日まで、人類史上の一大事實である。世界第一の人口を記錄する我が同胞の進路は何所ぞ。米國に排せられ濠洲に入れられない。北辰を斜に仰ぎ、四時花は暖に惠まれ、青海波穩かな南洋、南洋のみが吾人の第二の郷土である。そこにはその昔天風と海潮に乘じて殖民せし吾等祖先の同族が豐沃な原野と未拓な天富を捧げて待つて居る。望ましき南洋、美しき南洋はそもその實在は何であらうか。

永井柳太郎氏の序して「邦人中最も南洋に精通せる一人」の著者は十年の研究を打つてこの書に一彈として居る。シンガポール問題が注視せらるる今日南洋の研究に先づ繰るべき頁は本書に在る。その地の經濟に政治に自然界に驚ろくべき境地は頁一頁と共に展けて行く。

田健治郎氏は「この書を一覽して南洋開發に貢益する所」大なるを喜ばれてゐる。

發兌
東京市神田區通神保町六
振替東京六八九八四番
白鳳社

野口米次郎著

最新刊

先驅者の言葉

四六判並製

定價壹圓八拾錢

送料十三錢

ヨネ・ノグチの詩人的名聲は散文家としての功績を教へて居る。本社はこれを遺憾として、今本書を出版し彼の文明批評家としての價値を世に問はんとするのである。

謙譲の徳を知る彼が、先驅者を以て自任するに於ては、何事か語るに相違ない。彼は想像と現實との間に音樂を奏する樂天家である。一地方主義を世界心から批判し價値付けて精神的破産から逃れる近代人である。人生の偶然を眞理の必然から眺めて群集から離れる勇者である。然し先驅者として彼の悲哀は盡きない。乞ふ本書を繙いて彼の樂觀が悲觀と一變する場合の痛ましい叫を聞け。

東京芝區愛宕下町
發行 改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

岩波書店新刊書

カントの目的論　田邊元著
菊判一五八頁總布表裝函入　定價一圓八十錢　送料内地書留十七錢

哲學古典叢書(1) アリストテレス 詩學　松浦嘉一譯
菊判二六〇頁總布表裝函入　定價二圓二十錢　送料内地書留二十五錢

ケーベル博士 續々小品集　久保勉譯
四六判三七五頁背絹表裝函入　定價金二圓　送料内地書留十八錢

英文學形式論　夏目漱石述　皆川正禧編
四六判二〇〇頁總布表裝函入　定價一圓五十錢　送料内地書留十七錢

冬の日抄　幸田露伴著
菊判三〇二頁總布表裝函入　定價二圓三十錢　送料内地書留二十五錢

ハンスリックの音樂美論　田村寛貞譯著
菊判三九〇頁總布表裝函入　定價二圓五十錢　送料内地書留二十七錢

春の目ざめ　ヴェデキント作　野上豐一郎譯
四六判二五〇頁厚紙表裝函入　定價一圓六十錢　送料内地書留十七錢

古事記及日本書紀の研究　津田左右吉著
菊判六五〇頁總布表裝函入　定價金四圓　送料内地書留三十六錢

英國現代の經濟　堀江歸一著
菊判七〇〇頁總布表裝函入　定價四圓二十錢　送料内地書留三十六錢

經濟學研究　高田保馬著
菊判八二二頁總布表裝函入　定價四圓五十錢　送料内地書留三十六錢

發兌　東京神田南神保町　岩波書店　振替東京二六二四〇　電話四谷二九七三



（十二月號）

勞働黨の敗北

英國保守黨は議員數に於て勞働黨、自由黨の通計したる二倍以上の數を示し茲に絶體多數を傲稱し得るも、而もその投票數は却つて勞働、自由黨のそれに及ばざることは保守黨將來の弱點であるばかりでなく全世界勞働者階級の有する絶大の強味でもある。然るに我國の有産階級及び軍閥者流は對外硬の稱あるチヤンバーレンが外相となり、そして英國政界の所謂遣り手であるチヤーチルが藏相の印綬も帶びたのをさもブルジョア階級の擡頭の如く、若くは彼等が武斷主義に出でゝ直ぐにも東洋に對して侵略主義に出づるかの如く——例へば新嘉坡の海軍根據地問題の如き——臆測し、又は強いてそう想像さするやうな吹聽を敢えてしても、思慮ある我が民衆はそんな馬鹿げた宣傳に乘るものではない。從つて我が軍閥の陰謀とも目るべき軍事教育問題なぞも、時こそよけれと尾鰭をつけて對外硬の假面の下に國民的義務の如く強課さるゝ恐れ無しとせず。此點充分の注意を拂ふべきである。

保守黨内閣如何に人材に富むと雖も、既に頽齢の徒のみ、二十年前の花形役者のみ、歐洲大戰以前の思想の持ち主であり、働き手である人々が今日返り咲きに藏相となり、外相となつたからとて既に六分通傾斜したブルジョア政治を根本的に再建することは絶對不可能であり、加之、露西亞、支那、獨逸の新政治傾向を想ふものゝ英國の今回の選擧の結果があまりに不自然であることにも念ひ當るであらう。その上、自國に於て半數だに足らざる選擧民を後援として出來したボールドウイン内閣が世界の波の上にどれ丈けの怒濤を起し得るかが疑問だ。

ただ一つ羨ましいのは英國の政變が必ず議會の多數によつて正當に政權の授受が行はれることそれ丈けである。我國の政治家が若し保守黨の大捷を以つて英國新興階級の潰滅であり、陥没であるかの如き謬想を有ち、又は我軍閥が保守黨内閣の下に對外政策の一異變を豫想して我が國に對應策を強迫するが如きことなきやう、大警戒を拂ふべきである。之と共に英國の陰險なる政治家の行動をも監視する要はある。

刻下我國の重要この一事にある。



無産階級政黨の社會進化上に於ける意義

大山郁夫

一　『簡單解決』の無價値への眼ざめ

我國に於ける無産階級の政黨組織の機運は、今や着々と醱酵しつゝある。それは、我國の民衆生活の基底を通じて瀰蔓しつゝある。そして、その隱れたる存在を標示する諸徵候は、既に至る處に現はれてゐる。今こそ人々は、各種の社會的新傾向の動きに對して極度に盲目でない限り、『事實のロジツク』に依つて、充分にそれを感知するやうに强要されてゐる。しかも彼等は、彼等がそれを好むと好まないとに拘らず、それの社會的重要意義を認識するやうにさへも强要されてゐる。殊に、この新生の機運は、我國の社會進化を、この次の或る段階へ導くべき役目を持つ能働的諸要素の主

勢力として、漸次にその內在力を向外的に展開させようとする可能性を帶びてゐるものとして見られるとき、それに最も重大な或る社會的意義が含まれてゐるものであることが、誰れの眼にも明白に映じなければならないものになつて來てゐるのである。

無論、あらゆる場合に於て、過度の樂觀は禁物である。それは、古來の人類生活の歷史に於て反復的に證明されてゐることであるが、それにも拘らず、多くの空想的傾向の人々が際限もなく沒まり込む陷穽となつて來てゐるところのものである。が、我々は、少くとも我々の直接の利害感に依つて繫がれてゐる諸問題に關聯する限り、極力それを避けなければならない。從つて、當面の無產階級の政黨の問題の場合に關しても、我々がそれの上に、我々の緊切な關心と多大の期待とを集中してゐればゐる程、その前途を不當に樂觀するやうなことは、誰れの注意を俟つまでもなく、我々自身に於て、あらかじめ警戒して掛からなければならないことである。それは、聊か常識的な口吻でいへば、『世間はそんなに單純なものでない』といふやうな平凡な點に歸着する事である。

世間はそんなに單純なものでない！かういふことは、月並みの經驗至上主義者から、諄々と說法されるまでもない。それどころか、實をいへば、無產階級の政黨組織の準備運動それ自體の來歷が、もともと、さうした世間の非單純性の認識から出發したものである。もとより、個々の場合に於て、直接または間接にこの運動の出現を促進した社會的諸原因を具體的に列擧すれば、際限もないほど多端であることは、事實である。そして、それらの或るものには、私自身も、この論述を續けてゐるうちに、少くとも私の目的に必要な範圍內に於て觸れることもあらう。が、今しばらくその問題を離れて、單にそれらの諸原因に刺戟されて無產階級政黨の準備運動に着手した人々の態度なり、及びそれに響應した大衆の態度なりに就いていへば、彼等は詰まるところ、彼等の企ててゐる社會改革の實現のためには、一時譯もな

く流行した『簡單解決』の試みが、畢竟無價値なものに過ぎないことを意識し始めたところから、再び新たに政治行動の方面から出直すことに決心するやうになつたものである。『簡單解決は最善解決でない』といふ原則が妥當的に適用し得られる場合は、個人關係に於ても、社會關係に於ても、無限に多くあるが、殊に無産階級解放運動の場合に於ては、それが極度に重要視されなければならない因縁があり、約束があるものだといふのは、決して過言ではない。現代の支配階級が擁して立つてゐる大勢力に直面してゐるばかりでなく、その上になほ各種の傳統及び因襲から來る社會的偏見及び邪推と言つたやうな、見えざる――しかしそれにも拘らず、若しくは、寧ろそれがために異常に强い――力と戰つて、その終極の勝利を得た上で、始めてその歷史的使命を完成することが期待されるであらうところの無産階級解放運動が、一片の『簡單解決』で押し通せようなどといふことは、冷靜に省察すれば、その不合理さが直ちに判明することであるが、しかし、一時すべての人々から、多少の程度に於て、心意の平衡と判斷の聰明とを奪ひ去つたところの社會的動亂が、世界の各部に、亘つて出現した期間に於ては、それは必ずしも、さうではなかつたのである。が幸にも、さうした颱風時代は、今では明かに世界から一過し去つた。殊に我國に於ては、昨年の秋に於ける東京の大震火災の後を受けて、或る沈靜狀態が、引續いて社會生活の各方面に現はれた。そしてその間に、人々に今一度、比較的冷靜になつて、自分達の内心、及び自分達の周圍を見直ほす餘裕を取戻した。その頃以來、一時多分の躁狂氣分に驅られた餘りに、直接行動に依る社會經濟組織の即時改造の實現を絕叫しつゞけてゐた多くの熱狂者たちも、彼等のこの要求が科學的及び實際的に支持し得られないものだといふことを、次第に反省し始めたのであつた。かくて、この理法の認識の上に、無産階級運動の方向轉換が新たに主唱されるやうになり、それに續いて、無産階級の全勢力を政黨に組織化するための準備運動が着手される傾向が、徐々にもせよ、一歩一歩と順調に展開せしめられるやうになつて來たのである

る。

『簡單解決は最善解決でない!』——この常識的な、しかし堅實な見解は、今や、右の新傾向の根柢に横はる一原則としての意義を得て來てゐるのみならず、それは同時に、我國の社會運動の殆んどすべてのものの再整理の基準となりつつあるものである。そしてそれは、この意味に於て、我國の社會運動の新時期を劃する一つの目標となつてゐるものだとさへも言ひ得られるのである。

二 躁狂氣分の位置轉換

それにしても、世界大戰の終熄を中心としての前後の數個年に亘る無産階級運動が、獅子奮迅の勢を以て眞一文字に突進して、少くとも外觀上は壯烈無比の景況を示してゐた時の狀態に比べると、所謂方向轉換後の無産階級運動が、先政黨の組織から出直ほして、そこから一歩々々と堅實な地盤を踏みしめつつ、その終極の社會改革の目標の方へ向はうとするやうな行き方を見せるやうになつたといふことは、何といふ變り方であらう! 如何にも、或る一部の人々——本文の筆者もその組の中に含まれてゐるのだが——には、無産階級運動が一度は議會政治の關門を通過しなければならないことが、避け難き進化の一段階のやうに、當初から見られてゐたことは事實である。けれども、當時社會改造の際に熱中した大多數の者に取つては、さうした間緩い物の言ひ方は、堪へ難い閑人の囈語のやうに響いたものであつた。そしてただ『直接行動』だけが、彼等の頭腦に鋭く響くことが出來た唯一の聲であつた。若しくは、少くとも鑛山・工場・交通業などに於ける勞働者等の組織的經濟行動が、彼等が望んでゐる社會經濟組織の徹底的即時改革のための、中心生命的媒介者であるやうに、彼等に見られてゐた。政治行動、——それは社會運動を無用の傍徑に迷ひ込ませようとす

る誘惑の聲だ！　と、かう彼等は考へてゐた。もとより一面からいへば、さうしたことは、おしなべて世界的當時の社會改造運動の上に現はれてゐた躁狂氣分の反映と見るべきものであつた。そしてまた、當時さうした躁狂氣分が世界的に波動してゐたことも、それ相當の理由がないことではなかつた。先づそれには、絶大なる世界歴史的意義を帶びた政治的社會的變革が、一つとか二つとか言ふのでなく、次から次へと疊みかけて、目まぐるしく展開せしめられてゐたのであつた。たとへば、一方に於て資本的帝國主義の最後の幕を象徵した大戰が全世界を動搖させて居た間に、他方に於ては、數百年間に亘つてスラヴの世界の上に君臨して居たロマノフの朝廷が、一朝脆くも革命の山風のために顚覆されたかと思ふと、そのあとには、ケレンスキー時代の短き期間を經て、無產階級の獨裁の上にボルシェヴイーキの支配が確立され、更らにその餘波が直ちに爾餘のヨーロッパ諸國の上に及び、第十九世紀の初頭に於て、「ロマノフ家」提携して、當時の急進的政治運動の鎭壓のために雄視してゐた神聖同盟の下に鼎立した歴史を持つたハツプスブルブ家及びホーヘンツオルレルン家の大黑柱が、順々に凄ましき音響を立てて將棊倒しに倒れて行つて、各種の社會運動及び政治運動が、蜂の巢を突いたやうな狀態を、その場面の上に現出させた、――と言つたやうな報道が、櫛の齒を引くやうに引續いて、世界の果てから果てへ傳へられたのであつた。かういふことは、それ自身、一部分は從前からの世界的燥狂氣分の結果であつたと同時に、更らにそれに續いて起つた世界的燥狂氣分の漸增の前驅となつたものでもあることは、いふまでもないことである。いづれにしても、それらの諸事實の波瀾重疊の過程は、日刊新聞紙を通じて、我國の大衆にも、手に取るやうに知られた。それに、現代の所謂文化人らは、或る意味に於て、共通の空氣を呼吸してゐるものである。かう考へるとき、當時の我國の社會運動の上に、右の世界的躁狂氣分と共通のものが力强く支配してゐたこと、別に不思議とすべきことではなかつた。

けれども、さうかうしてゐるうちに、一時それほど熾烈を極めた燥狂氣分も、漸次それ自身を費消し盡くすやうになつて、社會運動の上には、兎も角全體の上からいへば、世界を通じて再び沈靜期が到來するやうになつた。そして、さうした燥狂氣分は、寧ろ段々と各種の反動運動の上に乘り移る傾向さへ見られるやうになり始めた。イタリーやドイツの國粹黨の狂暴な行動は更らにも言はず、從來新大陸の別世界に安住して、そこから全世界に向つて正義人道を高唱してゐたアメリカの支配階級さへも、一旦大戰中に贏ち得たその成金的地位から生じた世界的威力に眼ざめると、忽ちそれに陶醉し始めて、次第に帝國主義及び軍國主義の惡夢に浮かれて、いつとなく、戰敗前のプロシアの支配階級の二の舞ひを演ずる氣勢を示すやうになつて來た。しかも、それは皮肉にも、我國の軍閥に向つて、國民生活の軍國主義化の口實を與へてゐるのである。それに加へて、イギリスの帝國主義的勢力を代表する保守黨の行動すらもまた、その傳統的保守主義及び穩健着實的行動の假面の下に、或る種の燥狂氣分——若しくはそれと一味相通ずる一種の變態心理的氣分——を漂はして、そこから眞綿で首を締めるやうな行き方で、世界の——そして同時に我國の——反動的勢力の燥狂氣分に向つて、肯定の根據を提供しようとするやうな手に出てゐるのである。さういふところに、世界の諸國内に於ける反動的諸勢力間の國際的需給相通の暗默的實行の趨勢が進行してゐることが、我々にも覗ひ知られるのである。兎も角、曾て一般の社會運動の上に現はれてゐた一種の燥狂氣分は、今は却て、各種の反動運動の上への位置轉換を遂げた形跡の見られることは、我々の注意から漏れることが出來ない一の顯著な現象である。

そこで一方の社會運動は、世界を通じて大體上沈靜期に入つたやうに見えてはゐるが、しかし、それは決して、そのまゝ立消えになつてしまつたものでもなければ、また立消えになつてしまはうとしてゐるものでもないのである。假りに若しさうだとすると、何よりも殊に、現在各種の反動運動が燥狂的氣分を帶びてゐることの理由が判らなくなる筈で

ある。作用あつての反動である。だとすると、現在各種の反動運動が無規律に跳梁跋扈してゐることは、寧ろ社會運動が、その表面上の沈靜狀態の下に於て、着々實力の養成に努めてゐるとか、乃至は、實際効果を目標とする今後の仕事に向ふべく準備しつゝあるとか言つたやうな事實を指標してゐるものとして見るのが、最も至當な解釋ではあるまいか？兎に角私には、そこにも『簡單解決が最善解決でない』といふ一原則が、漸次に一般の社會運動を導くやうになつて來てゐることの徵證が求め得られるやうに、考へられるのである。

三　經濟行動と政治行動（上）

――兩者のそれぞれの本質――

しかし『簡單解決が最善解決でない』といふ原則が、縱しこの際腹臟なく是認し得られるとしたところで、若し如何なる意味に於てでもの政治行動が、本質的に社會運動と相容れないものだとするならば、無產階級運動が、如何なる目的の下に於てにせよ、その方向に就くのを撰ぶといふことは、理論上及び實際上絕對的に排撃すべきものでなければならない。この點は、無產階級運動の政治行動の出發點に於て、最も愼重に考慮されなければならないところの一根本問題を含んで居るものである。

この問題は屢々、經濟行動と政治行動との相關的地位から論じられて居るものである。それに關して先づ第一に我々の考察に上ることは、勞働階級の經濟行動は、純粹に階級的行動であるといふ一點である。即ちそれは、何よりも殊に、彼等が彼等だけに依つて組織される勢力を後楯として、一本立ちになつて資本階級側の勢力に直面して、それに向つて挑戰し抗爭することに終始するものである。そして、その目的が單に、勞銀の値上げを手始めとしての一切の勞働

條件の改善にある場合に於てにせよ、或はまたそれに附け加へて、若しくはそれを通して、社會改革の實現を期する場合に於てにせよ、それは獨り彼等だけが組織する勢力に依つて行はれるものである點に於て、どこまでも生一本の階級的行動の範圍を出ないものである。

けれども、これに反して、無産階級の政治行動は、それが現在既存の國家組織内に於て、現在既存の政治機關及び政治手段を通じて行はれるものである限り、實際上純粹に階級的行動としての形式を以て終始することが出來ないものである。更らにまた、若し一切の政治行動が、或る將來に於て、最早現在既存の國家組織内に於てでなく、且つ現在既存の政治機關及び政治手段を通じてでなく行はれるやうな時代が到來するものといふ假定が許るされるならば、さうした時代は、最早階級差別の徹廢された時代――若しくは無階級の時代――である筈だから、その時代に於ける如何なる政治行動も、階級的行動だと言ひ得られる根據が毛頭なくなる譯である。

政治行動の說明の場合に限つて、さうした遠き將來の假定にまで及ぶことは、或る人々には不必要のことのやうに思はれないではなからうが、しかし私の立場から見れば、實はさうではないのである。階級闘爭本位の意味で理解されてゐる通りの勞働階級の『經濟行動』の概念の裡に含まれる一切の組織的行動は、將來の無階級時代に於ては、全然不必要になる譯であるが、しかし、それに對立するものとして理解されて居る通りの『政治行動』の概念の裡に含まれてゐる各種の組織的行動は、その根本的作用及び形式に於て、如何なる時代の如何なる社會組織の下に於ても、いつまでも存續するものと考へ得られる根據があるのである。無論それは、異がつた社會組織の下に於ては、異がつた目的のために行はれるには相違なからう。けれども、政治行動そのものは、苟しくも人類の社會生活が存續する限り、決して不必要になる筈のものではない。少くとも、人類の社會生活が存續する限り、決して不必要になる筈のものではない。少く

とも、人類の社會生活の上に、苟しくも或る樣式に於ける社會的統制が存續する限り、そしてその社會的統制の方針の決定を中心とする人間の組織的行動が適當に「政治行動」と呼ばれ得る限り、――私はそれが適當に「政治行動」と呼ばれ得ることを信ずるものであるが、その理由は後に譲る、――「政治行動」の必要が決してなくなる筈のものでないのである。無論、將來の無階級の社會に於ては、それが階級鬪爭の道具として用ひられる必要がなくなるには決まつてゐる。が、さうした社會に於ても、或る社會的統制の必要が除き去られようとは、私たちには考へられないことだから、從つてまた、そこに政治行動の必要がなくならうといふやうなことも、私たちには考へられないことなのである。

無論、個々の具體的場合に於ける或る特殊事情の下では、勞働階級に取つて、經濟行動が一層多く必要であるとか、或は政治行動が一層多く必要であるとか、といふやうなことが、實際上の緊要問題となる機會は屢々起り得ることでもあるばかりでなく、時としては、或る目的の達成のために經濟行動だけが必要であつて、政治行動の必要は更らにないとか、或はそれは却つて有害であるとかいふやうなことが、當然のこととして主張し得られる機會さへも、決して起り得ない譯ではない。更らにまた、現在の社會經濟組織の上に見られる通りの階級的差別の存續する限りは、勞働階級に取つては、階級鬪爭はその階級的生活に於て避け得られないのが必然であるから、純粹に階級的行動ある經濟行動こそ本筋のものであり、從つてその重要さに於て當然主位に置かれるべきものであるが、これに反して、純粹に階級的行動だとは言へない政治行動の如きは縱しその必要性が認められ得る場合に於てにもせよ、寧ろ傍系的のものと見做されるべきものであつて、從つてその重要さに於て當然其位に置かれるべきものだ、といふやうな主張すらも、現在の社會經濟の組織の下に於ては、相當に有理な言ひ分として認められなければならない根據があるものである。

しかしながら、かうした個々の具體的場合の或る特殊事情の下に於けるそれぞれの相對的價値無價値の問題から離

れ、且つまた、或る社會經濟組織の範圍内に於けるそれぞれの重要さの主位從位の問題から離れて、單純に經濟行動及び政治行動の本質そのものを基準として言へば、少くとも我々が今日普通に慣用してゐる通りの、或る限られたる意味に於ける『經濟行動』は、純粹に階級的行動であるだけに、階級鬪爭の必要のなくなつた時代にまで存續する可能性のあるものではないが、しかしこれに反して、それに對立する概念として理解されて居る『政治行動』は、純粹に階級的行動であることを以てその本質としないだけ、縱し或る場合には階級鬪爭の目的のために用ひられることのあるのは事實であるにしても、しかし階級鬪爭の必要のなくなつた時代に於ても尚ほ、或る樣式に於ける社會的統制のために、その後々までも存續する可能性のあるものである。——とかういふのが、この問題に對する私の立場である。

四　經濟行動と政治行動（下）

——兩者の相互的補償——

その次に當然に起つて來る重要な問題は、勞働階級の經濟行動とその政治行動とは、本質的に相反撥する性質を持つてゐるものでないか否かといふことに關する、前に示唆して置いた通りの一根本問題である。

この問題は、或る特殊の社會經濟狀態の——若しくは個々の具體的場合の——下に於ける或る特殊事情に對應する必要上から、勞働階級が經濟行動に專念し得るために、その注意を政治行動の方向に分散させないやうにすることを努めなければならないやうな場合に關する問題と混同され勝ちのものである。實際上、かういふ問題が屢々生ずる機會があることは事實である。現に我國に於て、所謂無産階級運動の方向轉換が叫ばれるやうになつたまでの一時期に於ては、この點に就いての考慮が、勞働階級の政治行動否認の論據中の最も重要なものの一つとされてゐたものであつた。けれ

ども、かういふことが言へるのは、或る特殊の社會經濟狀態の――若しくは、個々の具體的場合の――下に於ける或る特殊の事情に對應する必要上からでこそあれ、しかし、それは決して、勞働階級の經濟行動と政治行動とが、如何なる場合若しくは如何なる狀態の下に於ても必然的に相反撥する性質を持つてゐるものだといふことを論證するための根據とされ得るものではないのである。さればこそ、或る社會經濟狀態の下に於て、經濟行動の上にその組織されたる勢力が集中する必要の意識から、最も強硬に政治行動を否認して居た我國の勞働者らも、その後の社會經濟狀態が變遷したのに伴れて、漸次經濟行動以外に、政治行動をも企てる必要を感じ出して來た譯である。そして、私達の立場からは、そこに何等の不所があるやうにも見えないのである。

次に、經濟行動と政治行動とが本質的に相反撥するものか否かの問題は、現在の社會經濟組織の下に於て、勞働階級に取つて、經濟行動が本筋のものであり、從つてその主要さに於て主位に置かれるべきものである、といふやうな、私が前に述べた考察に結び附けられることが屢々ある。が、しかし、この場合に於ても、これらの二つの行動は、本質的には、相互的に無關係の地位にあるものであり、從つて相互的に兩立して相冒さないものである。それ故に、この點からこの問題を論ずるのは不當である。寧ろこの問題の重心點は、經濟行動と政治行動とは、相互的に補償し合ふやうに運用され得るものであるか否か、といふ一點の上に置かれなければならないものである。

資本階級は常に、その經濟行動とその政治行動とを補償的に運用してゐる。それは、誰もが知つてゐる通りである。が、勞働階級に取つても、それが政治行動を執り得る段階に達した場合には、矢張り同樣のことをなし得ない譯はないのである。無論、或る一定時に於ける政治機關の組織や政治手段の狀況の如何に依つて、同樣の意味を帶びた政治行動を企てる上に於ても、勞働階級が、資本階級よりも遙かに不利益な條件の下に置かれてゐることを豫見するやうな場合

は、近代立憲制度の下に於ても、事實上始終起り勝ちのことである。それは、近代立憲制度は、表面上國民政治の機關として標置されてゐるにも拘らず、その實質上に於ては、主として資本階級の社會的・經濟的・政治的支配の目的のために設定されたものであり、從つて、その目的のために都合よく運用され得るやうに仕組まれてゐるものでもあるからである。けれども同じ現象をその裏側から見れば、近代立憲制度は、その實質上に於ては、主として資本階級の階級的支配上の目的のために設定されたものでもあれば、またそのために都合よく運用され得るやうに仕組まれて居るものでこそあるが、しかしながら、これは表面上は、どこまでも國民政治の機關として標置されてゐる關係上、そこに勞働階級がそれに參加するとか、それを利用するとかの方法に依つて、それを通じて政治行動に入り込むことが出來る間隙が開かれてゐるのである。そして、勞働階級が政治行動を、その階級的目的のための經濟行動の補償物となるやうに運用し得るか否かは、その時その時の政治機關の組織及び政治手段の狀況の如何に繫かることの多いのは無論であるが、しかし、事實上に於ては屢々、それ以上に、勞働階級自身の實勢力如何に繫かることもあるのである。

もとより、將來に於て勞働階級が、資本階級より以上の便宜を以て、政治機關をその階級的目的のために利用し得るほどの實勢力を擁するまでに成長して來てゐる時代が到來した場合の假定が許されるならば、その時代は最早、さういふ政治機關が彼等の目的のために無用となつて來てゐるか、但しはそれが彼等に依つて彼等の目的のために、資本階級より以上の便宜を以て利用され得るやうに改造されてゐるかになつて來てゐる時でなければならないから、問題が自ら別樣になつて來るのである。すなはち、その時には、他に何等の障碍がない限り、勞働階級は、經濟行動に依つて達成しようとする目的を、最早一擧に政治行動に依つて達成し得るやうになつて來てゐる筈だから、從つてその時には、經濟行動と政治行動との補償關係などといふことが問題でなくなつて來てゐる筈である。かういふ譯であるから、經濟行

動と政治行動との補償關係が問題にされたり、或はまた、或る社會經濟狀態若しくは個々の具體的場合に於ける特殊事情の下に政治行動が閑却――屢々『否定』の形式に於て――されたりなどする必要が起るのは、寧ろ勞働階級が、資本階級と同樣の便宜を以て政治機關を利用し得ない間に限つてのことである。このことは、現在勞働階級より以上の便宜を以て政治機關を利用することも出來、また利用しても居る資本階級が、さういふことを一切問題にしてゐないことに依つても知られるのである。

我國の現狀の下に於ては、縱し現在『普通選擧』の名の下に政府及びその與黨に依つて協同的に立案されつゝあるやうな選擧權の擴張が實現された曉に於てにもせよ、勞働階級が現在の政治機關及び政治手段を、有利な條件の下に――資本階級のやうに有利にといふやうなことは問題外だが――利用し得るやうにならうとは、誰れにも考へられてゐないことは事實である。それは、我國の現在の政治機關の組織からも來てゐることだが、しかし同時に、廣い意味に於ける政治手段の裡に包含されてゐるところの世間の一般人の感情若しくは偏見などから來てゐることも、決して少くはないのである。が兎に角、それにも拘らず、或る種の特殊事情の起つて來ない限りは、勞働階級がその經濟行動以外に尚ほ、政治行動に就くことを擇ぶのを得策とせしめる多くの事情が、我國の現在の社會經濟狀態の上にも出現し始めたことが、一般の無産階級の側で强く感じられるやうになつて來てゐるのである。廣い意味に於ける所謂無産階級運動の方向轉換が、曾て流行した政治行動否認の聲にも拘らず、今日では一般の無産階級側から當然のこととして承認されるやうになつて來てゐるのは、そのためである。それはいふまでもなく、經濟行動の補償物としての政治行動が、彼等に依つて要求されるやうになり始めてゐることを意味するものである。しかもそれは、その核心に於て、經濟行動の上に置かれてゐる諸目的に、政治的表現を――出來得べくば政治的效果をも――與へることの必要の意識から出て來てゐるも

のである。そしてこの傾向が、我國の一般無産階級が、少くとも當分の間は、極めて不利な條件の下に於てしか、政治機關及び政治手段を利用し得る可能性がない時に現はれたのは、一見甚だ不當然のやうに考へられることでありながら、實は上記の理由に依つて、極めて當然なことでなければならないのである。

私が今しがた偶然に示唆した通りに、經濟行動の補償としての政治行動への要求は、資本階級の場合に於ても同様に、勞働階級の場合に於てもまた、その核心に於て、經濟行動の上に置かれてある諸目的に、政治的表現を――出來得べくば政治的效果をも――與へることの必要の意識から出て來るものである。これは、特に勞働階級の場合に在つては、その經濟行動に依つて達成しようとするその本來の諸目的の社會的妥當性を、眞に嚴格なる意味に於ける勞働階級――若しくは更らに廣き意味に於ける無産階級――に屬する人々に向つてのみならず、その他の諸階級に屬する社會的諸集團をも包含する一般大衆に向つても有效に訴へ得るために、非常に重要な意義のあるものである。かくして、勞働階級は、その政治行動に關して一般大衆の支持を得る範圍が擴大すればする程、その本來の諸目的を、より急速に達成する機會に近づくことが出來るものである。

勞働階級の經濟行動は、純粹にそれの階級的行動であるから、從つてそれは、組織されたる勞働者群の勢力に依つて行はれるものである。この點から出發する推論の當然の歸結として、勞働階級の經濟行動の補償物としての政治行動もまた、組織されたる勞働者群の諸勢力――鑛山・工場・交通業などに於ける勞働組合や、小作人組合などの如き――を、若しくは、更らに廣き意味に於ける無産階級中の組織されたる諸勢力――無産階級運動のために存する或る種の思想團體の如きもその中に含めての――を基礎とするのが當然だ、といふことが出來るのである。

けれども政治行動はしかし、かうした經濟行動の補償物としての意義の外に、別にそれ自身獨特の意義を持つてゐるものだ、といふこともまた、我々が一應──若しくは一應といふ程度以上に──注意しなければならぬ一要點である。

この點に關して、先づ第一に考へられることは、勞働階級の政治行動は、廣い意味の無產階級の間に於ける、組織されてゐない諸分子、及び一時的若しくは永續的事情のために全然組織され得ない──若しくは有效に組織され得ない──諸分子を、それ自身の大旆の下に、一時的若しくは永續的に組織することが出來る、といふ機能を持つてゐるものである。そして、この機能のために、それは、廣い意味の無產階級運動に於て、誰れもが無視することの出來ない大切な要素と見做さるゝ資格を持つてゐるものである。このことは、現在我國の無產階級政黨組織の準備運動に從事しつゝある人人に依つて、充分に了解されてゐることであるから、私はこれ以上、それを解說する必要を認めない。が、政治行動は更らに、單にさうした種類の意義よりも、更らにもつと深い、もつと本質的な意義をも、それ自身獨立的に持つてゐるものでもある。

それは、前に一應述べて置いた通りの政治行動の永遠性から來てゐるものである。殊にそれは、政治行動そのものが獨立的に、勞働階級の經濟行動の終局目的としての社會改革が行はれた後でも、尙ほ引續いてその機能を發揮する可能性を持つて居るものである、といふ考察に關聯するものである。が、この問題は、今少し立ち入つた論述を必要とするものであるから、私は次に、別に項を改めてそれを取扱ふことにする。

しかし、その前に尙ほ一言附け加へておきたいことがある。私は今まで、勞働階級の經濟行動を中心としての立場から出發して、それの補償物としての政治行動を視察して來た。それは、私としては、本篇の全體の論旨から見て當然のこ

とをしたまでのことである。けれども、それとは反對に、政治行動を中心としての立場から、それの補償物としての經濟行動を觀察することも可能である。今その一二の例を擧げると、或る政治制度——たとへば徹底的普通選擧制度——の實現を目的として、組織されたる勞働者群が全國的ストライキを行ふといふやうな場合とか、或は政府が或る主戰的外交政策を實行しようとするのを阻止するために、組織されたる一般の——若しくは或る一部の——勞働者群が同樣の經濟行動に出るといふやうな場合などに於ては、少くともそれの直接の表現に於ては、經濟行動が政治行動の補償物としての役目を演じてゐるものだ、といふのが至當である。この點に關しても、私の當面の目的の爲めには、私の論述をこれ以上に進めて行く必要がないと思ふ。が、私は當初からこの一事を念頭に置いて居たのだから、これで本節の小見出しを『兩者の相互的補償』と附けた譯である。

五　政治行動の社會的統制上の機能

政治行動は、經濟行動の補償物として考へられるその意義以外に、それ自身獨自的の意義を持つて居るといふ點は、上に一寸觸れておいたことだが、茲で今少し詳細にそれを解説してみようと思ふ。

政治は力だとか、政治は勢ひだとか、或は更らにドイツ流に、政治は國家的技術（Staatskunst）だとか、いつたやうな粗笨な通俗解釋は、私の今の論述のためには、何の役にもたたないものである。或はまた、政治は國家政策の遂行に於て、各種の手段を其の目的に調節する行動だ、といつたやうな幾分學術的に響く説明も、屢々我々に説き聞かされるところのものであるが、しかし、かうした定義の中には『政治』の概念が先づ判つてゐなければ理解の出來ない『政策』といふやうな言葉が説明なしに用ひられてあつたり、でなくとも『目的』とか『手段』とか言つたやうな、それ以

上の解說がなければ通らないやうな言葉が、何の屈托もなささうに勝手に用ひられてあつたりするやうな缺點がある。これらの多くの擬似學術的說明に遙かに立ち勝つて光つてゐるものは、今は我國の學術界でも有名に——恐らく餘りに有名に——なつてゐるフランツ・オッペンハイマーがその著『國家』で試みてゐる通りの、政治的手段と經濟的手段との區別の上に現はれてゐる『政治』の定義である。そこでは彼は、人間の欲望充足の手段を『勞働』と『掠奪』とに別ち、前者を『經濟的手段』、後者を『政治的手段』とし、更にそれから布衍して行つて、『經濟的手段』の組織されたものが『社會』で、『政治的手段』の組織されたものが『國家』だと、大體斯う要約し得られる趣旨を述べてゐる。

オッペンハイマーの『政治』に關する右の說明は、彼自身が言ふ通りに、一種の社會學見地から出て居るものであつて、この裡には我々を少からず啓發する卓見が含まれて居るが、しかし、それは尙ほ大體に於て、幾分我田引水的に響く彼の一家言としての意義や價値やを持つて居るに過ぎないものであつて、それが一般的承認を得るためには、そこに幾分かの缺けたもの——若しくは幾分かの餘つたもの——があるやうに、私には考へられる。そして、同樣のことが、ジー・エッチ・ディー・コールがその著『社會原理』で、『政治的活動』に與へてゐる定義に關してもまた適當に言ひ得られると思へる。即ち、そこで彼は、『人間は各種の共同體に於いて共同生活を營むものである、といふ事實から直接に發生し、しかも直接に社會的に組織し得られるものであるところの、人的諸關係の社會的統制に交涉を持つてゐる活動の諸形式を、私は「政治的」活動といふ言葉で諒解する』（I mean by *political* activities those activities which are concerned with the social regulation of those personal relationships which arise directly out of the fact that men live together in communities, and which are susceptible to direct social organisation. Cole, G. D. H., *Social Theory*, London 1920, p. 83）と言つてゐるが、この說明は、一面に於ては餘りに廣すぎるし、他の一面に於ては

餘りに狹すぎるやうである。けれども、この定義の裡には、我々が理解する意味に於ける『政治』に直接交渉する一つの重要なる表現が含まれてゐる、それは『社會的統制』といふ言葉である。コールは、『人的諸關係の社會的統制』を『政治的活動』と呼んでゐるが、しかし、『人的諸關係』を、單に個人間の諸關係を指すものだといふ風に、その言葉の意味を狹く見ずに、個人と集團との間の、及び集團と集團との間の諸關係をも含むものだといふ風に、それを極度に擴大して見ても、矢張りそこに何か缺けたものがあるやうに見える。コールは、『政治的』といふ言葉の直ぐ次に『活動』といふ言葉を置いて、後者で前者の意味を制限させようと企ててゐるのかも知れないが、しかし、若しさうだとすると、それは何と言つても、自體無理な行き方である。少くとも、彼以外の他人には通じない行き方である。『政治的活動』と言ひ續けても、その中に含まれてゐる『政治』といふ言葉は、矢張り他のすべての場合に於ける『政治』と同じ意味で解されるのでなければ、我々は始終概念の混亂に導かれつづけてゐなければならないことになる。

ところで私は、今は『政治』を精密に定義づけようと試みて居るものではないが、しかし假りに、私が『政治』と言ふ言葉で理解してゐる意味を暫定的に掲げてみると、それは、或る一定の主義に依る社會的統制を目標として、或る一定の社會的組織若しくは秩序に向つて、肯定的（擁護的）に、若しくは否定的（破壞的）に働き掛けるところの、人間の集團的行動に交渉してゐるものだ、といふやうな點に歸着するのである。コールの所謂『人的諸關係の社會的統制』といふ言葉を、率直にその表面上の意味のままに解釋すれば、その幾部分——或はその大部分——が私のこの解釋と符合するものと言へるかも知れないが、それの全部がそれと合致するものとは言へないのである。若し強ひて合致すると言ひ張るならば、結局『人的諸關係』の概念の或る部分を不當に擴大させ、或る他の部分を不當に收縮させなければならないことになるものである。」

右のコールの說明とは茲で手を別つことにして、今若し假りに私が上に否定的に揭げた「政治」の定義が支持し得られるものとするならば、如何なる樣式の社會組織の下に於ても、政治行動がなくなるものとは考へられないのである。無論、異がつた社會組織の下に於ては、異がつた目的の下に政治的行動が行はれることは、自明の事理である。それは、肯定的（擁護的）の側に關しても、否定的（破壞的）の側に關しても、同樣に妥當的に言ひ得られることである。それ故に、封建的社會にはそれに特有的な政治行動が、そして資本的社會にはそれに特有的な、それからまた、各樣式の社會組織の間の過渡期にもそれに特有的な、政治行動が、それぞれにあるものだと言ふことに、何の不合理な點もなかるべき筈である。この論理を更らに推し進めて、社會主義の理論に於て當來の人間生活の境地とされてゐる無階級の社會にそれを交渉せしめて考へても、矢張りその社會に特有的な政治があるものだとしなければならないのである。假りに我々が、一派の無政府主義者の言說に調子を合はせて、權力の組織のない社會の下に於ては、人間の協同生活が順調に行はれるものだといふやうな議論を承認しても、——私自身はさうした樂天的社會觀を承認するものではないが、——それにしても尙ほ、さういふ議論は單に、さういふ社會に於ては、人間性の相互的調和に依つて、社會的統制が權力の行使なしに、破綻なく圓滿に行はれるものだ、といふやうなことを意味するに過ぎないものであつて、從つて、その場合にも我々は、社會的統制の概念から離れ去ることが出來ないのである。かういふことは、詰まるところ、人間の生活が社會生活であり、且つ社會生活以外の何物でもない、といふ赤裸々な事實から來てゐるものである。

茲で私は今一度、オッペンハイマーの「政治」の定義を振返つてみる。如何にもそれは、階級國家内の支配階級の現狀維持的（卽ち當該時代の社會的組織若しくは秩序に向つての肯定的擁護的）政治行動の性質を、適切に言ひ當てて

ゐる。それは恰度、彼の『國家』の定義が、我々の理解する通りの意味に於ける『階級國家』の性質を適切に言ひ當てゝゐるやうに。然しながら、それは、被支配階級の現狀打破的（即ち當該時代の社會的組織若しくは秩序に向つての否定的、破壞的）政治行動の性質を常に完全に照明してゐるものといふことは出來ないのである。少くともそれは、現代資本社會に於て被支配階級の根幹をなす無產大衆の政治行動を精確に性質づけて居るものとは言へないのである。例の『掠奪者が掠奪される』といふ有名な警語をそれに關聯せしめて考へても、その結論は矢張り同じところに歸着する。といふのは、現代資本社會に於ける無產大衆の政治行動は、『掠奪者を掠奪する』といふことよりも、寧ろ『掠奪者をなくする』といふことを目標としなければならない必然性があるものだからである。この推論は、理論上は、無產大衆の政治行動はそれの解放運動の一形式だといふ點から來るものであるが、しかし實際上は寧ろ、無產大衆の政治行動は、それが純粹に階級的行動でないことの結果として、嚴密に無產階級に屬するものとはいへない他の社會的諸集團からの援助支持をも招來する必要があるものだ、といふ事實の認識から來るものである。それ故に、若しオッペンハイマーの『政治』の定義を徹頭徹尾妥當的なものだとすると、無產大衆が解放運動の一形式として政治行動に就くといふことは、甚だ不合理なものとならなければならない譯である。けれども、私の見るところを以てすれば、オッペンハイマーの『政治』の定義を、彼一流な皮肉な表現を眞似て批評すれば、それは半分の眞理にすぎないものである。だが私は、『半分の眞理は全部の誤謬よりも大なる弊害を伴ふ』と言はうとするほども惡意に、彼の口調を模倣しようとしてゐるものではない。そこで更に仍、言ひ方は拙づいかも知れないが、私の見解に從へば、前に述べた通りに、政治はどこまでも、或る一定の社會的統制上の主義を目標として、一定の社會的組織若しくは秩序に向つて、肯定的若しくは否定的に働き掛ける人間の集團的行動に交涉するものである。かういふ風に『政治』を理解するとき、我々は始めて、現在の

資本社會に於ける無産大衆の政治的行動を適切に性質づけることも出來るし、從つてまた、それの社會的統制上の機能を明確に掴むことも出來るのである。」

勞働階級の經濟行動も、それが或る一定の社會的統制上の主義を目標として現在既存の社會的組織若しくは秩序に向つて（否定的に）働き掛ける限りに於ては、形式上は兎に角、實質上は政治行動としての性質を併はせ帶びてゐるものだ、といはなければならないのである。そして、それを斯う理解する事に依つて、我々は、例の『一切の社會革命は政治革命に依つて成し遂げられる』といふ命題の全斑を、殘る限なく理解する事が出來るのである。この意味に於て、經濟行動と政治行動との區別は、少くとも或る場合に於ては、その本質上からよりも、寧ろその形式上から行はれる事もあるのである。

けれども、私は今、私の當面の論述の目的のために經濟行動と政治行動との區別を、實質上の標準の上にではなく、どこまでも形式上の標準の上に置く立場から、尚ほ少し説きつづける。ところで、假りに現在既存の社會的組織若しくは秩序に向つて（否定的に）働き掛けた經濟行動が完全にその効を奏した場合を想定すると、その場合には、その經濟行動はその機能を全部發揮しつくしたことになるものである。が、さうなると、今度は、政治行動が、それが獨自的に持つ社會的統制上の機能を最も適當に發揮する順番が廻つて來るのである。何となれば、さうした場合に、經濟行動がその否定的もしくは破壊的事業をなし終へたばかりで、そのあとへ或る肯定的もしくは建設的の社會的統制が行はれないとすると、そこにはただ支離滅裂の混亂狀態が殘るばかりとなるからである。

この點は、コールがその著『勞働の世界』の第十三章の『經濟及び政治』の項下で、異常な明快さを以て説き示して

ゐることであつて、そして、私は、これに全幅の支持を與へることが出來るものである。が、私は私自身の立場から、私自身の言葉を以て、今少し此の點を補說したい。一口に無產階級と言つても、これは徹頭徹尾共通の利害關係で結びつけられてゐる純粹の統一體ではない。否、それは寧ろ、相互的に相反撥する可能性のある――そして屢々現實に相反撥してゐる――諸利害關係をそれぞれに持つ諸集團から成立つ一つの尨大な團塊であつて、そしてその結合の連鎖をなすところの唯一の共通の利害關係と見られるものは、實に現在既存の社會的組織若しくは秩序に向つて否定的に働き掛けるといふ意識そのものなのである。ところが、この仕事が完成された曉には、そこには最早やそれらの相反撥する諸利害關係を持つ諸集團を繫ぐ唯一の連鎖をなすところの共通利害關係が失はれて行つて、そのあとには、それらの諸集團の紛然雜然たる群立狀態だけが殘ることにならなければならないのである。それは、階級的差別の撤廢された社會ではあつても、集團的種別の撤廢された社會ではないのである。（尤も集團的種別が撤廢された社會などといふものが、永久に出現しさうな可能性もないが。）それ故に、若しその場合に何等かの社會的統制が直ちに行はれないものとすると、そこには階級的差別が直ちに復活しさうな種成さへ充滿するやうになるであらう、といふやうなことが、當然のこととし推論し得られるのである。

かう考へて來るとき、我々は益々、政治行動が獨自に持つ意義を明白に掴むことが出來るのである。すなはち、若しさうした場合に於て、階級的差別のない社會的組織及び秩序が維持されなければならないものとするならば、そこでは社會的統制の役目を演ずる政治行動は、勢ひ、そのための『肯定的』作用に向けられなければならないのである。それには、何よりも先づ、集團と集團との、個人と個人との、及び個人と集團との間の、すべての人的諸關係、並にこれに統轄するすべての物的諸關係の社會的統制が必要となるであらう。そして、或る期間に亙る過渡期に於ては、無產階級

が斯ういふ仕事の中心的負擔者にならなければならないことにもならう。無論、終極に於て無產階級が無產階級でなくならなければ、階級的差別のない社會が完全に實現されたとは言ひ得られないのである。そして、さういふ社會が實現されるまでの過渡期に於て政治行動が必要であらうといふことは、さういふ社會が維持されるために之れが必要であらうといふことと、同樣に有理に想定し得られるのである。

或る卑近に限られたる意味に於ける實際問題としては、右に述べたやうな場合を豫想することは、或る不急な空事業だと言へるかも知れない。けれども、若し我々が無產階級の政治行動の意義及び價値を徹底的に理解しようと欲するならば、我々は必然的に、かうした考察を回避する譯に行かないのである。で結局我々は、現在の資本社會に於ける無產大衆の政治行動は、右に述べた場合のそれへの準備的過程上の訓練としての意味に於ても、極めて有價値であり、有意義であることを主張することが出來るのである。更らにまた、無產階級が無產階級としては、現在既存の社會的組織及び秩序に向つて（否定的に）働き掛ける仕事の上に於ける共通利害關係で結び付けられてゐること以外には、寧ろ相互間に相反撥する諸利害關係をそれぞれに持つ諸集團から成立つ一の尨大なる團塊であるといふことを考へるとき、現在の資本社會に於けるそれの政治行動の重要さをも無視することの出來ない譯を、我々は一層強く意識することが出來るのである。かういふことは、すべて皆、政治行動の社會的統制上の機能を中心として、最も力強く主張し得られるものである。そして、この點に關する考察は、私が次に論及しようとしてゐる問題の方へ、自然の順序として我々を導き込むのである。

六　無產階級の政治行動の人類史的意義（上）

——一元的國家觀の盛衰——

現在を出發點として、我々の推論の當然に及ぶ限りの將來を豫想して、無產階級の政治行動の社會的統制上に於ける機能及びその意義を討究して來た我々は、この上更に、今しばらく過去を振返つて、無產階級の政治行動が、社會進化の過程の上に、それの產物として出現するに至つたまでの來歷を見究め、且つその意義を吟味しなければならない。我我は斯くすることに依つて、無產階級の政治行動が人類生活の上に於て演ずべく運命づけられてゐるその歷史的使命を、一層確實に掴むことが出來るばかりでなく、それと同時に、それがそれ自身の今後に向つての進行のまにまに、當然それ自身の前途に掲げるべき運動の目標を、一層明白に見定めることが出來るのである。

近代國家は、民族國家の形成の過程を通じて、專制國家として誕生した。その後、立憲國家制度が專制國家制度を排除して、それ自身の地位を確立したといふことは、無論それを單に表面上の事象として見れば、驚くべき歷史的大變革であつたには相違ないが、しかしその內質の本質からいへば、立憲國家制度の上にも、專制國家制度の標識の或るものが、多くの場合に於ては隱くされた形式の下に於てでこそあれ、依然として多分に保存されて居るのである。

ヨーロッパの各國に於て、それぞれに近世紀の或る時期まで續いた專制國家制度は、各當該國の君主及びその周圍に團集して居た少數の貴族僧侶の社會的・經濟的・政治的支配を確保するための權力の組織として、それ自身の地位を確立してゐたものである。それ故に、それの支配が尙ほ優勢であつた時代に行はれてゐた國家哲學や政治理論やは、此事實の自然の反映として、多くは皆相率ゐて、君主の權力の絕對性の肯定の上に打建てられてゐた。そして、それは單に、國家權力を君主主權說の上に基礎づけた法理論となつて現はれたばかりでなく、或は宗教的見地からの、或る道德的見地からの、神秘的若しくは獨斷的解釋の上に立脚せしめられたところの、各種の神聖國家若しくは全能國家の學說とも

なつて現はれたのである。

近代專制國家制度の上に附き纏つたこの特質は、近代立憲國家制度の出現と同時にその痕跡を沒して行つたのではなくて、却つてそれの上へ乘り移つて行つたのである。いふまでもなく、近代立憲國家制度は、近代專制國家制度の末期に於て勃興したブルジョアジーの反抗運動の中から生れたものである。で、この事實から來る當然の歸結として、近代專制國家に對して挑戰したブルジョアジーが、尙ほその反抗時代に在つた際に於て必要とした種類の概念が、近代立憲國家制度の上に、多大の程度及び範圍に於て具體化され、組織化されてゐることは、如何にも顯著な事實である。從つて、立憲國家が、その前に行はれた專制國家制度との對照上、政治的自由の組織だと言はれてゐることにも、それ相當の理由のあるものだといふことは、誰れもが承認しなければならないことである。

けれども、近代立憲國家制度の上に具體化され組織化されてゐる自由の概念は、どこまでもブルジョアジーの自由の概念を基礎としたものである。それは、歴史的にさうでなければならない通りに、事實的にもさうである。ただしかし、ブルジョアジーの自由といつたところで、別に自由そのものの上には、個々の場合に應じて特殊の本質的種別があつたりする譯でもなく、またその種別の標識があつたりする譯でもなく、自由は依然としてどこまでも自由である。――『契約の自由』とか、『移動の自由』とか、『營業の自由』とかいふのは、『自由』の種別に交渉するものでなくて、『自由』が要求される方面に交渉するものである。――それ故に、ブルジョアジーの自由の概念を具體化し組織化するといふことも、ブルジョアジーが積極的に、個々の場合の必要に應じて自由そのものを種別づけたり、その種別の標識を設けたりすることよりも、寧ろ消極的に、ブルジョアジーの支配的目的のために好都合な範圍・程度・及び樣式に從つて、個々の場合の必要に應じて自由を制限することを意味するものである。もとより、その制限は、露骨に行はれることを必要

としない。否、それが露骨に行はれるよりも、寧ろ婉曲に行はれる方が、あらゆる意味に於て、ブルジョアジーに取つて利益である。が、どういふ風に自由を制限するにしても、それに就いて第一に問題になるものは、そのために必要な機關のことである。それを、ブルジョアジーは、專制國家に於ける支配階級と同様に、本能的に、國家そのものの上に求めたのである。

それ故に、自由を基調とする近代立憲國家肯定のための政治理論も、結局は一元的國家觀の基礎の上に打ち建てられた各種各様の主權論から離れ去ることが出來ないままで、今日に及んだのである。ルソーの政治學説は それを典型的に代表してゐる。彼はその『社會契約』の學説に於て、人間の本然の自由から出發しながら、『一般意志』の臆説の下に於ける國家主權の絶對性に到着してゐる。が、ルソーが代表するやうな合理主義の政治學説に對する反動として起つたドイツ流の法治國家説は、そこから更らに一歩を進めて、一元的國家觀の主權論を出發點としてゐると同時に、それをまたその歸着點ともしてゐる。從つて、この方には、專制國家學説の殘滓が、より多分に、より露骨に、保有されてゐる。このことは無論、特にこの型の法治國家説の出生を促進した政治的環境と關聯して考察すべきものである。

更らにまた、イギリスの立憲政治の特殊相の中から生まれた議會主權論にしたところで、突き詰めたところ、ドイツ流の法治國家説に於ける國家主權論と共通の基礎の上に立つてゐるものだと、見られることが出來るのである。ただイギリスに於ては、ブルジョアジーの政治的支配が夙くから比較的完全に確立されてゐたから、從つて、それに伴つて起つた政治理論は、專制國家に於ける支配階級と新興ブルジョアジーとの間の妥協から生じた一種の立憲國家制度に順應せしめられるやうに形態變換を遂げたドイツ流の國家學説とは、表面上大にその趣きを異にするやうになつて來たのである。がしかし、それは矢張り、究極に於ては、一元的國家觀の上に立脚せしめられてゐるものであつて、法理上、この

學說の場合に於ける主權議會は、他の學說の場合に於ける主權國家と、同一の地位を與へられてゐるものと見られるべきものである。のみならず、實際上の問題として見れば、ブルジョアジーがその發達の過程の上に於ける或る時期に必要とした自由の概念が、一旦は國家制度の上に具體化され組織化されたが、その後の時期に及んで、ブルジョアジーが抑てさうした自由を制限する必要を段々と感じだすやうになつてからは、國家制度がまたその必要に順應せしめられるやうに向けられだした關係が、イギリス系の議會主權の學說に於て、何の破綻もなく說明され得るところに、その最も顯著な特徴が現はれてゐるのである。民衆の政治的自由を確保するのもとせられるイギリスの議會が、男を女に化成すること以外のことなら、如何なることでも出來る、と言つたやうな說明は、この點から見て、我々に示唆するものを多く含んでゐるのである

けれども、一元的國家觀は、現代の政治進化の狀勢の下に於て、段々とその立場を失ひかけてゐる。それは、政治的方面では、一方に於ては、今日では政治的民主主義者たちに依つても認められてゐるところの、各國家內に於けるブルジョアジー本位の立法部の衰頽の傾向の上に現はれ、他方に於ては、從來事實上政治の圈外へ押し出されてゐた勞働階級の組織された勢力が、段々と政治的機能を發揮する機運に向ひかけた事實の上にも現はれてゐる。イギリスの政界に於て、自由と保守との思想的對立が、次第に資本と勞働との階級的對立に變移し行きつつある傾向も、これに關聯せしめられて、始めてその社會進化の過程の上に於ける意義が理解し得られるのである。それは、經濟方面で、表象的に、資本主義の行詰まりといはれて居る現象と、その步調を一にしてゐるものである。無產階級の政治行動の人類生活に於ける歷史的使命は、この現實の事實の進みの趨勢を通してこそ、始めてその本體が認識され得るものである。しかし、私がその點に來るまでには、尙ほ若干附け足しとして言はなければならないことがある。

七　無産階級の政治行動の人類史的意義（中）

——ブルジョア政黨と自由主義との聯合關係——

近代民族國家は、それの形成の發程に於て、專制國家制度を展開せしめた。そしてまた、後者が更らに一元的國家觀の基礎の上に支持されるやうになつたのは、極めて自然のことであつた。それは、何よりも殊に、各々の近代民族國家は、その出生及び成長のために、一方に於ては、久しくヨーロッパ全土を統括する傳統的概念をなしてゐた神聖ローマ帝國の殘骸に鞭うたなければならなかつたと同時に、他方に於ては、當時尙ほ相當に活力を持つてゐた封建的諸國家及び自治的諸都市の存立の基礎をなしてゐた地方的分權主義に向つても、死活の戰ひを戰はなければならなかつたからである。そして各民族國家がこの戰ひを戰ひ果ふせた上で、それでの勝利者として現はれた時に、一專制國家制度は益々その威力を發揮し、その肯定のための哲學としての一元的國家觀は、實際政治上に有力に行はれるやうになつたところの、中央集權的制度からの鞏固な支持の上に、可なりの現實性を帶びた學說としての外觀を得て來たのであつた。

私は今、この事實に關する史的考察を試みる積りはない。が、ただ私は、私の說述をこの次の論點へ移す必要上、一般に周知されて居る通りの、右の概說を與へておくだけのことを、どうしても避けることが出來なかつたのである。それで、次に言ひたいことは、一元的國家觀は、出來得べくば社會の多元的構成（若しくは、各自に獨自的生活を持つ社會的諸集團の構成及びその增殖）を無視して、國家を直ちに社會と同一視することを努めたものであり、またそれが出來なくなつても、國家を以てその本然の權力に依つて社會的諸集團の上に君臨して絕對的統率を行ふべきものであり、また現實に行つて居るものであるかのやうに見せ掛けることを努めたものである。尤も、その說明の上に於ける論理の

進め方は、それが本來專制國家制度の肯定のための論據として用ひられてゐる場合と、立憲國家制度の肯定のためのそれとして用ひられてゐる場合とに依つて、樣々にその趣きを異にせざるを得ないことは、たとへば、ヘーゲルの國家哲學と、ルソーの政治理論との對照の場合などの上に於て、最も明白に觀察することが出來る通りのものであるが、しかしただ、社會に對する國家の全能的優越を、その根本要點として强調して居ることだけは、それのすべての場合に共通してゐることである。

專制國家制度に反抗して、政治的自由を守り本尊として戰ひつづけたブルジョアジーは、その終極に於ける勝利者として自ら各近代國家内に於ける支配階級の地位を占めることに成功してからも、依然として一元的國家觀の衣鉢を、その前行者から受繼いだ。それは一見、矛盾のやうであるが、しかしそれは矢張り、ブルジョアジーの階級生活上の必要から出て來たものである。まづ第一に、彼等の經濟生活が主として國民經濟の基礎の上に置かれて居た間は、彼等は民族國家主義を肯定せざるを得なかつた。その後彼等の經濟生活が、原料品の産地及び製造品の市場を世界的に求めることを必要とするやうになつてからは、彼等は民族國家主義の概念を、漸次に侵略的帝國主義に奉仕せしめられるやうに擴大して行つたが、しかしその基調は依然として、一元的國家觀の上に置かれて居た。ただ、最近に及んで、國際經濟生活の進化のために、侵略的帝國主義が段々と行詰らうとする形勢を示すやうになつてからは、一元的國家觀は、それが他方に於て無産階級の政治的生存表現のために、反對の方向からの脅威を受けて居るのと同樣に、この方向からの脅威をも感じなければならないやうになつたのは事實である。けれども、それにも拘らず、侵略的帝國主義が愈よその最後の斷末魔に逢着するまでは、一元的國家觀は、國際協調主義の假面を冠りながらでも、尙ほもこの影の薄い生存を續けて行くであらうことが、當然に考へ得られるのである。

かうした點に關する考察を、私は今持ち合はせてゐないが、ブルジョアジーが、專制國家からその一元的國家觀の遺産を相續したとの結果として、立憲國家學說の上にも、專制國家學說の殘滓が多分に保留されて居る一點だけは、今一度それを强調しておく。國家主權論とか、議會主權論とかが、今でも立憲國家學說の基調をなしてゐる事實は、このことを最も雄辯に物語つてゐるものである。それはしかし、上に言つた通りにブルジョアジーの階級的生存上の必要上から來たものである。かくして、ブルジョアジーは、それ自身の發達の各段階に於て、この主權論、及びその基礎をなして居る政治的諸要素を、極度に巧妙に利用したものである。

かういふ譯であるから、ブルジョアジーが、まだ完全に各國家内の支配階級と成り果ふせてゐなかつた間は、彼等は社會生活の各方面に於て自由政策を要求し、殊に産業生活の方面に於ける放任無干涉政策の必要を强調して、主としてこの立場から、國家權力が個人的自由の保障として行使されるべきものであることを主張したものである。ところが、彼等が段々と各國家内に於ける支配的地位を確實に取得する樣になつてからは、彼等は自ら國家權力の主人公として、彼等の階級的生存上の必要若しくは便宜に應じて、社會生活上の各方面に於ける自由を、主權の名に於て局限するやうになつたのである。そして、この傾向は、彼等の階級的生存の基礎としての資本主義が帝國主義の形式を取るやうになつてからは、一層昂進するやうになつて來たのである。で、曾て放任無干涉政策の下におかれるべきものとされてゐた産業生活までも、段々と種々の名目の下に、國家統制の下へ移されるやうになつて行つたのである。

殊に大戰中に於て、この傾向が如何なる點にまで止め度もなく進んで行つたかは、イギリスに於てさへ――といふよりはイギリスに於て特に――産業生活の目ぼしき部分の殆んどすべてが、工業動員の名の下に於て國家管理の下に持ち來たされたかを回想すれば、誰れにでも判斷がつくべきことである。

無論、主權の名の下に於けるかうした自由の局限は、ブルジョアジーの階級的生存上の自由の伸張を意味するものであつた。けれども、一般民衆生活の上から見れば、ブルジョアジーは、最早や疾くに自由主義の支持者ではなくなつてゐる。それ故に、ブルジョア諸政黨の中に自由主義の政黨があるといふことは、少くともイギリスに於ては、時代錯誤となりつゝある。大戰前まで自由主義の傳統を、段々と曖昧にでこそあれ、兎も角持ち續けてゐた自由黨が、最近數個年間に俄にその强勢の末勢をさへ失つて行つてゐるのは、一體何を意味するものであるか？　それは無論、まづ第一段には、二元的國家觀の沒落の傾向を豫感ぜしめる勞働黨內閣の出現――縱し今までの處では短期のものであつたにもせよ――に依つて示唆されてゐる通りに、議會が次第に社會生活の上に於ける階級對立の關係を反映するものとなつて來たことから來てゐるものであるが、しかしながら、それと同時に、それはまた、ブルジョア政黨が自由主義の上に立つことが如何に不合理になつて來たかを物語るものではないか？　無論、自由黨が勞働黨內閣を支持する根據として唱へたところの、反軍國主義及び國際平和主義の外交政策とか、それから派生したシンガポールの要塞放棄とか、ロシア承認の必要とかいつた樣な諸項目は、適當に現代民衆生活の上から自由が要求される方面の範圍に屬するものであるが、しかし、さういふことがブルジョア政黨に依つて主張されることは、著るしく矛盾に見えるやうになつて來たのである。さういふ方面の自由の主張は、もつと適當に、もつと矛盾なく、勞働黨に依つてなされるやうになつて來てゐる。かう考へて來ると、勞働黨が、さういふ方面の自由の要求に於て自由黨と一致してゐるにも拘らず、極力自由黨との提携を忌避してゐることには、或る深い意味がある。そして、それは同時に、近き將來に於て我國にも當然現はれるべき無產階級の政黨もしくは諸政黨の進むべき道の、少くとも一つを指標してゐるものと見ることが出來るのである。

同樣の傾向は、アメリカの政界の上にも、より微弱な程度に於てではあるが、兎に角外間に見える位には現はれて居

る。年來久しく共和黨及び民主黨の二つの對立を本筋として來たアメリカの政界に於て、ラフォレットの率ゐる第三黨が、今回の大統領の豫備選擧に於て、少くともこれらの兩黨の戰術に對して可なり强き壓力を加へることの出來たことは、その決際點に於けるそれの失敗といふ事實を離れて考へると、相當に重大なる意味のあることである。もとより我々は、勞農ブロックとしてこの第三黨が、イギリスの勞働黨の如き階級的色彩の濃厚なものでなく、その主張の如きは、寧ろ勞働黨と自由黨との合ひの子のやうなものであるといふ事實を無視するものではない。が、それにしても、イギリスに於てよりも、一般民衆の政治思想が遙かに保守的であり、且つ資本階級の優越の比率が遙かに高いアメリカに於ては、實際政治上の一要素としてのこの第三黨の出現したのは、或る意味に於て、確かに革命的であつた。——その政敵に依つて、立ち續けに指摘された通りに。——またそれと共に、實際の選擧戰に於ては、共和黨と第三黨とが相互的に排擊することに熱中して、その期間を通じて、兩黨とも恰かも民主黨の存在を忘却したかのやうな態度を裝ふ戰術を用ひた事實も、今度の選擧戰に於ける各黨の得票數を離れて、大に我々の注意に値するものである。それは、民主黨の近き將來に於ける運命を暗示してゐるものではないか？　多くの點に於てイギリスの自由黨に類似した地位をアメリカの政界で保つてゐる民主黨が、大西洋の彼岸のそれの僚黨の步みの跡を追ひつつ、段々と沒落の淵に近づきつつあるのでないとは、何人が保證し得よう。

八　無産階級の政治行動の人類史的意義（下）

——無産階級政黨の行動の目標——

一元的國家觀からの支持を受けて居た全能的神聖國家もしくは少くとも主權國家が、その威力を逞しくして居た間

は、それの肯定のために立てられた政治學說と、現實の政治との間には、目立つた矛盾や破綻がなかつた。少くとも、そこにあつた限りの矛盾なり破綻なりは、表面上の統一なり調和なりで、覆ひ隱されてゐた。それは、國家主義全盛時代（一般的には殊に第十九世紀の後半期に於ける）であつた。そして、その支配下に於て、對內的には行政上の中央集權が強硬に行はれてゐて、對外的には資本的帝國主義が現實政治家たちの思想及び行動の指導原理となつてゐた。

しかし、かうした狀態の下に於ても、理論上の全能國家は、實際上すべての點に於て全能であり得なかつた。殊に社會生活の方面に於ては、それはその支配の下に於て着々進捗しつつあつた「集團過程」——それぞれに獨自的生活を持つ社會的諸集團の構成及び漸增の過程——を阻止することは出來なかつた。一元的國家哲學の理論が指示する通りに、主權國家は社會生活のすべての方面の上に君臨して、その高き地位から、集團過程の進み方を統制し整理しようと試みた。そのために、それはそれの內部の支配階級がその發達の過程の上に於ける或る時期に確立した言論、印刷、信敎、集會、結社などに關する自由を、主權の名に於て樣々と局限するやうな方策を、絕望的勇氣を以て行つた。が結局、さうした努力の效果も、段々と薄れて行つた。各近代資本國家——殊にイギリス——に於ける勞働組合の、國家の統制的政策の下に於ける漸層的發達は、かうした傾向を示すところの、最も顯著な一例である。

私は長くなりさうな危險のある私の論述を、最も短かく刈り込まなければならない必要に差し迫まられて居る。勞働黨の政治的勢力の漸進の結果、それがそれの階級生活から出た要求を、從前よりも一層明白に（縱しまた充分明白に、といふ程度に於てでないことは無論であるにせよ）、政治的に表現する樣になつたとは、政治學說史の上からいへば、一元的國家觀の崩壞の傾向を暗示して居るものと見ることが出來るものであり、實際上の政治經濟社會事情に於ては、對內的に行政上の中央集權の、對外的には資本的帝國主義の行詰まりと相呼應するものであり、社會的には、ブルジョア

ジーの支配の爛熟期に生じたあらゆる社會的缺陷が、一般民衆に依つて段々廣く、段々明白に、意識し始められたといふ事實を反映してゐるものである。少くともそれは、現在さういふすべての事情を産み出すまでの段階に達した現在既存の社會組織及び秩序に對して、今尚ほ頑强に肯定的に作用しつゝあるブルジョアジーの政治行動に向つて、否定的に働き掛けるところの或る新しき政治行動が、少くとも民衆生活の一部から要求されるやうになつて來た傾向を指標するものでなくて、何であらう！　そして、その所謂新しき政治行動が、まだ充分に試みられざる、そしてまだ政治的に腐敗せしめられてゐない新政治的勢力であるところの、無産階級の組織されたる勢力を中心とする政黨若しくは諸政黨に依つて行はれようとするそれでなくて、何であらう！

近代立憲國家に於ける中心的支配階級としての地位を占めてゐるブルジョアジーは、産業革命以後の時代に於て漸次に赫々たる光彩を放つ様になつた産業文化を通じて、一切の近代文化の建設者としての、助成者としての、擁護者としての名譽を、それ自身の上に負はされて居た時に於て、政治的には國家善と同一視されることに依つて、その全盛期にあつたものである。が、それは其後、一切の社會的・政治的・經濟的の缺陷、及びそれから來る一切の人類的不幸若しくは文明的病弊の釀成者としての、促進者としての、少くとも傍觀者としての責任を、その上に負はされる時に於て、政治的には國家惡と同一視されることに依つて、その衰頽期に向つて居るものである。さういふ時が、現在一般的に來てゐるか？　無論、來てゐるとは言へないかも知れない。けれども、來かかつて居ないとは尚ほ更ら言へないであらう。

そこに、無産階級の政治行動の、人類生活に於ける歴史的使命が掴み得られる基礎がある。無産階級の政黨の政治行動は、前に述べた意味に於て、純粹に階級行動でない。少くとも現在既存の政治機關及び政治手段を利用しなければならない間は、それは必然的に、嚴格に無産階級とはいへない他の社會的諸集團の援助支持にも依賴しなければならない

根據がある、といふ意味に於て、それは純粹に階級的行動だとは言へない。けれども、無産階級の政治行動の目標は階級的だとはいへようか？　それは、或る意味に於てさうだといへるが、或る意味に於てさうだとはいへない。それが階級的だといへるのは、それが必然的に無産階級の階級的生活から迸しり出たものでなければならないからである。そこに、無産階級の政黨の、既成政黨に比較しての興味がある。が、それが階級的だとはいへないのは、一方に於ては、無産階級は、現在既存の社會的組織及び秩序に對して否定的に働き掛けようといふ意識（さうした意識が存在する限り）以外には、別に大した共通利害關係を持たない諸集團から成立つ團塊だといふ事實からも來て居るが、また他方に於ては、無産階級の政治行動が純粹に階級的行動であり得ないとの結果として、無産階級以外の社會的諸集團からの援助支持をも無視することが出來ないといふとからも來てゐるのである。かうした事情のために、無産階級の政治行動の目標は、自階級內外の諸集團が甚だしく色目でない限り、それは階級的生活から迸しり出たものでこそあれ、階級的イデイズムから流れ出て來たものである譯には行かないのである。換言すれば、それは、無産階級のイディオロギーに立脚せしめられたものであるべく運命づけられて居るのである。階級的差別撤廢の要求の如きは、その一例である。それは、階級的生活から出たものである點に於て階級的だが、階級をなくしようといふ無産階級のイディオロギーに立脚せしめられてゐる點に於て、明かに階級的ではない。それは寧ろ、人類的といはれるべきものである。かうした無産階級のイディオロギーが、無産階級內外の社會的諸集團の人々の共鳴を贏ち得る範圍が廣まるだけづつ、無産階級の政黨の政治行動の前進の成效の確實性が增大することになるのである。

（附記　本篇は私が今計畫してゐる「我國の無産階級政黨の政治的文化運動の目標」といふ論文の結論に當る部分である。）



經濟的優勢の條件を論ず

堀江歸一

一、經濟的優勢の思想に於ける變遷――重商主義――重商主義の弊――金融上に於ける金の地位、二、通貨の三形態――金の増減と信用の伸縮――我國に於ける實際問題――金貨の吸收蓄積と其反動、三、農業立國又は農本論の價値――獨逸の農業保護關稅――之に關する誤解――獨逸と日本とを混同するの弊――獨逸に於ける政策の不徹底、四、農業國に安ずるの結果――平和の斷絕と原始物資供給に對する脅威――將來に處する方針――國際聯盟の態度如何、五、原始的物資の輸入と貿易の均衡――對外債務を容易に決濟する方法――資本輸出に伴ふ利益――經濟的優勢の必要條件、六、我國の經濟的優勢は如何――從來の謬見一斑――金の禁輸問題――農村保護問題、七、日本の開放的政策――日本に對する原始的產物の供給――日鮮滿支の經濟的關係

何を以つて、一國は内に經濟的繁榮を保ち、外に經濟的優勢を示すを得るとするであらうか。此問題に對する解決は時代の推移に依つて、異なるし、又學說の變遷に依つて、違はざるを得ない。往昔重商主義の下に、金銀を以つて、富であるとし、又富の重なる形態であるとする思想の盛なるや、金銀を多く保有する國は其多きに隨つて、經濟的繁榮を維持するを得るものであると云ふ信念の下に、多くの國は自國に多額の金銀を吸收することを眼目とする政策を行ひ、端的に其目的とする所に到達する爲めに、如何に不自然なる政策であつても、如何に不合理なる手段であつても、金銀の吸收若しくは其蓄積の爲めには、厭ふ可きものなしとした。斯くて輸出奬勵とか、輸入抑制とか云ふことは課稅に依る間接迂回の方法に依つて、行はれたのみならず、直接禁止の手段を通じて、勵行される所と爲り、原料品の輸入は自由であつても、既製品の輸入には大なる制限が加はり、既製品の輸出は奬勵されるが、原料品の輸出は嚴重なる制限の下に置かれる一方に、機械や、技術の輸出も亦制限されるが如く、經濟上に於ける個人の行動は總て外國から多くの金銀を吸收する方便たらしめる見地の下に、盡く國家の監視統制の下に置かれて、極まる所を知らなかつたのである。

金銀の吸收並に蓄積を以つて、經濟的繁榮であり、又之を以つて經濟的優勢を備へる所以であるとする見地から云へば、右の如き政策にも亦認容す可き所ありとしなければならないが、斯る不自然なる方法に依つて、國內に金銀を蓄積した曉に、其結果は如何なるものであつたか。金銀が社會に存在する富の一形態であるに止まり、金銀以外に、國民的需要を滿足せしめる幾多の形態の富の存在する以上は、上記の如き不自然なる方法に依つて、金銀を蓄積した所で、必ずしも國の經濟的繁榮や、經濟的優勢を維持する所以と爲らず、却つて國內に於ける金銀の分布と金銀以外の富の供給

との間に保たれ可き正常の關係を失はしめて、國民生活を擾亂し、國民をして其利己的精神に支配されて、行動する自由を求める能はざらしめ、時に國際間の平和を傷け、友好の精神を涵養す可き通商貿易を以つて、却つて國際間に闘爭を逞うする武器たらしめるが如き弊害の生ずることを免かれなかつたのである。

故に重商主義の如きは夙に諸國の排撃する所と爲り、今日に於ては、如何なる國と雖も、此主義に基く信念を實際政策に加味することなきを以て、理の當然としなければならない。然も金に對する國民の愛着心の特に强烈なるの致す所であるか、或は他に然る可き理由ありてか、今日に於ても、尙ほ重商主義全盛の當時に行はれたと同一の思想又は之に類似する思想が或る事情の下に、依然として殘存し、時に實際の政策を支配する事實のあることは、吾人の注目を逸する能はざる所である。固より今日の思想たる、重商主義の當時に於けるが如く、簡單に金の蓄積なり、吸收なりに重きを置くものではなく、其蓄積吸收に伴う效果を重要視する次第であるとしても、尙ほ金を愛好し、偏重する點に於て、其軌を一にする。此種思想の特に顯著なるもの、一として、舉げられるのは、金融上の見地から、或る程度に於て、金の國内に現存すること、時に其適當なる分量に於て、存在することを必要とする議論であつて、此議論が一轉すれば、即ち金の現存を喜び、又重商主義に行はれた程に、極端なるものでないとしても、尙ほ或方法の下に、國内に金を吸收し、一旦吸收した金は勉めて之を他に散逸せしめざらんとし、其吸收する所多ければ多いだけ、金融上に有利であるとする者を醸成するに至るのである。

二

然らば金融上の見地に於て、金の吸收又は蓄積が特に重要視されるのは、何故であるか。蓋し今日の通貨制度を組織

する重要なる分子は銀行券、補助貨幣、小切手の三者である。時に戰前の英國に於ける如く、金貨の流通を見ることもあるが、今日に於ては、殆ど一の除外例と爲つて居るから、姑く之を略し、上記の三者を以つて、通貨の重なる形態であるとする。然らば是等の三者が能く本位貨幣たる金貨に對して、同價を以つて、流通するのは、何故であるか。補助貨幣は貨幣法に於て、本位貨幣に對する同價流通の規定の認められて居る一方に、其供給が適當の程度に於て、統制されて居れば、流通上に別に議す可きはないから、姑く之を略し、他の二者に就て考へると、銀行券の流通に就ては、必ず其兌換を行うに足る金貨の發行銀行に所在することを必要とする。銀行が全然兌換を行はず、又兌換請求に應ずるだけの金貨を準備をせず、單に銀行券の發行額に制限を加へ、一方に物價指數なり、外國爲替相場なりの高低を標準として、發行額を調節する方法も想像し得られないではないが、價値の維持に於て、到底不完全であることを免かれない。小切手に至つては、振宛先銀行に於ける當座預金の存在を以つて、振出の根基とし、而して當座預金に關する信用は之に對して銀行の所有する金銀在高に依るものであり、金銀在高は銀行券を以つて、重なる形態とし、其銀行券は發行銀行に於ける金貨の準備に依つて、信用を繫ぐものであるとすれば、小切手も亦結局金貨を基礎として、同價流通の維持されるものであると云ふ道理が推窮されるのである。玆に於てか一國に於ける信用の伸縮は金貨の增減に依つて、徃される、如何にして信用の膨脹を必要とする事情に接しても、之に對する金貨の伴うものがなければ、信用の膨脹には危險の伏在することを免かれず。随つて信用の膨脹を拒否せざる可からざるに至る。斯くて信用の膨脹に依つて、金融市場の發展を謀らうとするには、其前提として、必ず若干の金貨を必要とし、斯くて金貨の國内に吸收され蓄積される場合には、金融上の見地に於て、之を有利であるとする。蓋し近き將來に於て、金融緩漫の事相を生じ、金融の緩漫は商品有價證券の市價を騰貴せしめるに至るからである。随つて此反對に金貨の流出に依つて、内國現在高に減少を來すと

きには、自ら近き將來に於ける金融の緊縮の待望される結果として、總ての狀態をして不利のものたらしめざるを得ないのである。

故に金の流出又は其內國に於ける減少を以つて、不利とする一方に、金の流入又は內國に於ける增加を以つて、有利とする點に於ては、往昔行はれた重商主義の思想と、今日金融市場に行はれる感想とは、正に軌を一にするものと言へる。前者に於て、金を所有すること多ければ、以つて經濟的優勢の維持されるとした如くに、後者に於ては、金を所有すること多き場合には、以つて金融市場を安全にし、又其發展に備へるを得るとする。唯異なる所は前者に於ては、金を多く所有することを以つて、國民生活の全體に關係ある問題とするに反し、後者に於ては、之を以つて單に金融市場と云ふ一局部に限られた問題とするに止まる一事であつて、此相違の結果、前者に於ては、國力の全部を竭して、金を外國から吸收するに反し、後者に於ては、唯金利步合の引上、外債の募集、國債貸借の方法を有利ならしめること等、要するに尋常の經濟的手段を施して、目的を果さんとするに過ぎないのである。

兎に角重商主義の下に於て、經濟的優勢の維持に至重の關係を有した金の吸收獲得は今日に於ては、單に金融上の安全を維持する問題に局限されるに至つた。金を多く所有することは、金融上の見地に於て、便宜であり、時に必要とされるに相違ないが、經濟生活の發展を謀り、又經濟的優勢を示すには、單に金の多量を所有することのみを以つて、足れりとするものではない。金を所有することの以外に、幾多の要件の備はるものを要するのである。

上記の諸點に就て、私は今、日本現在の問題に考を向けたい。歐洲戰爭中我國の經濟社會が國際間の變動に乘じて、有利なる地位に向つて、展開したことは、著名の事實であるが、世人は何を以つて、最も有利なる事相であるとしたかと云へば、多くは金貨の吸收され、蓄積される一事を以つて、之に充てたことの疑ふ可からざるものがある。即ち我國

の政府なり、日本銀行なりの內外國に所有する正貨の高の日に月に增加する事實が當局者に依つて、世間に發表されるや、世人は多く其の增加を喜び、之を以つて我國經濟的優勢の維持される所以であるとし金貨の增加する分量と國力の發展する勢との間に、何等か動かす可からざる聯絡の存するやに考へる者すらあり、國を擧げて重商主義者たらしめるの趣きすら示した。當時我國は既に多額の金貨を外國から吸收するを得る勢に居りながら、諸外國が金輸出禁止の政策を取るの故を以つて、我國に於ても金禁輸の政策を布き、其後金の增殖する勢の盛なる時に於ても、尙ほ金輸出を自由にするを得なかつたことの如き我國財政當局者が如何に重金的思想に支配されて居るか、假に此思想に深く支配されて居らないとしても、尙ほ金の輸出の禁止されることに依つて、爲替相場を政府の欲するが如くに左右し、其間に輸出に有利にして、輸入に不利なる相場の實現を期したことの如き、矢張り政府の方針が重金主義に類似する思想に束縛され、其埒外に出づることを許されなかつた證據である。而して斯る重金的政策は我國の經濟生活に如何なる結果を齎したであらうか。金の外國から盛に吸收されて、內國に蓄積されるや、當時我國に於ては、金に過剩を告げて、却つて他の諸物資の供給に不足を來し、國民をして兩者の均衡を失した結果として、過度の物價騰貴に苦しましめるもの少しとしなかつた。而して斯る不均衡に基く弊は何時までも經濟社會に禍を及ぼし、漸く反動的趨勢の顯著なる時期に至れば、金輸出禁止の依然として行はれつゝある爲めに、却つて我國貨幣の對外價値を低落せしめ、一方に內國に於て通貨の收縮する自然的調節の行はれることを妨げて、貨幣價値をして其低きに居らしめるが如き、何れも金の不自然なる吸收や、其蓄積に重きを置いた政策の餘殃を以つて、目す可きものであつて、單に金を吸收し、蓄積することが如何に經濟的優勢の獲得若しくは經濟的繁榮の維持に深く關係しないかは、我國現實の問題に依つて、之を論證するを得るのである。

三

更に我國に於て、從來經濟的優勢を維持するに必要なる條件として、考へられて居つたのは、一國を食糧自給の狀態に居らしめることであつて、此見地から、多くの機會に於て、農業立國論とか、農業保護論とか云ふが如きものが主張されたのである。我國には古來農本論と稱して、農業を尊重する思想が存在して居つたし、封建時代には、固より商工業の發達は四圍の事情に制されて、大規模に經營される道なく、斯業特有の長所を發揮するを得なかつた一方に、開國以後諸政の一新される時代と爲つても、事實農業に從事する者の全國に多く散在することゝ、食糧を國内の供給に仰ぐの安全であるに對して、之を外國に得るの危險であることゝは、相重なつて不知不識の間に農業保護論に强き刺戟を與へるに至つた。殊に獨逸が帝國組織以來數年を經過して、早くも保護關税策を農業に應用し、食糧並に原料品の內國自給を目標として、着々施設する所あるや、邦人中獨逸に於て經濟學を學んだ者は斯る政策の獨逸に及ぼした效果の如何なるものであつたか、將た又國際政治上の關係に於て、獨逸が如何なる地位に居ればこそ、斯る政策を試みるに至つたものであるかと云ふ獨逸特殊の事情は全然之を閑却し、日本にも亦食糧自給の政策を施す可しとしたのである。

故に此流の論者をして立言せしめれば、一國が食糧並に原料品の如き原始的産物の供給に就て、外國から獨立する程度の大であることを以つて、經濟的優勢の標準とするのであつて、結局是等の供給に就て、國際共通經濟を排して、一國孤立經濟を營むことを以つて、可なりとするに至るのである。或は戰前の獨逸の如く平生軍國主義を以つて、重大なる國策とし、何時他國と事を構へて、平和時代に於ける經濟上の關係に斷絶を來すや、測り知る可からざる地位に居る國に於ては、原始的産物の自給に依らなければ、國家存立の安全を保つに難い。而して此地位に居らんとして、他に如何なる手段を講じて、經濟的繁榮の到來を謀つても、原始的産物の供給を他國に仰ぐようであつては、其繁榮には何等

確乎たる根據を存しないと云ふのが動かす可からざる信念と爲つて、獨逸をして國際共通を眼目とする經濟生活を營むことに躊躇するに至らしめたのである。

獨逸に留學したり、又は獨逸人の著書を生嚙りした邦人の內には右に掲げた獨逸人の所說を取つて、金科玉條視し、獨逸に於て原始的產物の國內自給を計畫した如くに、日本も亦之を計畫しなければならない、此一事を閑却したならば、遂に經濟的優勢は之を求めるに難しと極論するに至つた。最近十數年間我國に於て、外國米に對する輸入稅の賦課が主張されたり、擁護されたりしたのは、專ら原始的產物に關する供給を外國から獨立せしめる爲めに、內國農業の保護を必要とする見地に基いたのであつて、原始的產物の自給と經濟的優勢の維持とを以つて、分離す可からざる關係を有するものゝ如くに考へる信念は今日に至つて、容易に其跡を絕つに至らないのである。然しながら歐洲戰前に於ける獨逸の經濟的繁榮若しくは經濟的優勢を以つて、此原始的產物の自給政策に基くものとしたならば、其れは誤解の最も大なるものであると云はざるを得ない。如何にも獨逸の學者は農業立國の必要とか、國際共通經濟に對する制限とか云ふことを口に、筆に絕叫して、倦まざるものゝ如くである一方に、當時の政治家亦斯る言論に動かされ、關稅政策を以つて農產物の輸入を制限したこと、前記の如くであるが、此政策は些も實際に徹底せず、原料品なり、食料品なり、外國供給を仰ぐ分量は獨逸に於ける製造工業の發達するに隨つて、次第に其多きを加へ、又事實斯る物資の供給に就て、外國に之を仰ぐこと多ければこそ、內國に於ける製造工業の隆興を見るを得たのである。現に歐洲戰爭に際し、獨逸が聯合諸國の封鎖に依つて、殊に原始的產物の供給を遮斷されたことは、掩ふ可からざる事實であつて、此遮斷に依つて、國民を舉げて、饑餓の狀況に陷らしめ、又外國の原料品供給に依賴して存立するを得た紡績、製鐵製鋼製革、護謨、毛織物、電氣等の諸事業をして頽敗の已むを得ざるに至らしめた程、獨逸は外國の原始的產物に依賴したものであるとすれば、

戰前に於ける獨逸の經濟的優勢は原始的產物に於ける孤立經濟の齎したものに非ずして、寧ろ國際共通經濟の產物であつたことが論證されるのである。我國に於て、獨逸を以つて原始的產物の孤立經濟に依つて、經濟的優勢を維持したものと解釋する者があつたならば、大なる解謬に陷つたとす可きであり、又獨逸は學者の間に孤立經濟の必要を唱道する者があつたとしても、事實は斯る議論を裏切り、益々國際共通經濟の圈內に向つて突進しつゝあつたとするを得るのである。

然らば獨逸に於て、假令ひ徹底的に實行されなかつたとしても、尙ほ學者間に孤立經濟の必要を說く者があつたり、又微温的ながら、實際政策上に斯る主張の加味されたことに就ては、之を獨逸の立場から云へば、多少是認しなければならない事情を存したのである。即ち獨逸が海外に原始的產物の供給を求めるに當り、如何なる所を以つて、其供給地としたかと云へば、多くは自國を遠く距つる外國か、殖民地は專ら獨逸の假想敵國である英國の管轄下に居り、其外國と獨逸との間に介在する海洋は英國の制海權に扼される有樣であつて、有事の際に於て、何としても外國から原始的產物の供給を受ける道の安全であることが想像されなかつた。加ふるに獨逸が貿易上に於ける差額を決濟するだけの對外債權收入を持つに至つたのも、近年の事であつて、其以前に於ては、外國から原始的產物の供給される勢を其赴く所に任せて、輸入超過の狀勢を釀成しつゝ、一方に果して之を決濟するだけの對外債權の存するや否やと云ふことの不定であつた爲めに、益々原始的產物の輸入に對して、疑惧の念を懷かしめたものと見ることが出來たのである。然しながら此疑惧を懷きつゝ、獨逸が一方に原始的產物の自給を必要としながら、他の一方に於ては、何時の間にか、國際共通經濟の圈內に突入し、外國から多額に上る原始的產物の供給を受けて、內國商工業の發展に資し、世界戰爭の結果、多くの國を敵として、求めて原始的產物の供給される道を遮斷し、遂に自國の經濟組織を壞敗するに至つたのは、無謀の甚だしきものであつた。國際共通經濟が世界平和の維持を隨行しなければならないものであることは、恰も自由貿易と國際平和との間に於ける關係と異ならないのである。

四

假に一國が農業國を以つて安んじ、他に發展の道を講じなかつたならば、如何なる結果を生ずるであらうか。此政策を極端に推及すれば、製造工業の發達に對して、人爲的妨害を加へることを必要とするのであつて、彼の外國からの輸入される穀物に對して、相當高率の輸入稅を賦課し、以つて其内國市場に於ける價格を騰貴せしめ、或は工業上に於ける生産費を加重し、或は勞働者の生活を脅迫し、製造工業の發達す可き自然の經路を閉塞し、農産物の價格騰貴に伴つて、上進する利潤を農業者に與へんとするが如きは、確に其一方策として、考へられる。斯る場合には、利潤の高きことは農業に多くの資本の投下される勢を促し、農業から多量の原始的産物を産出せしめて、此種産物の供給に就て一國をして全然他の諸國に對して獨立する地位に立たしめるに相違ないが、本來其獨立は農業立國の結果として、内國に給養される人口の寡少であり、其需要する物資の量の亦寡小であることに伴つて生ずるものであると云ふ事實に注目しなければならない。農業が地方に於て、多數の人口を給養するに足らず、又給養するとしても、其れ等の人々に優良なる生活程度を許すを得ないのは、著明の事實であつて、畢竟此事たる、農業の特質として、其經營に要する土地の面積の廣大である割合に、産出する富の饒多ならざるの一事に基く。果して然らば原始的産物の内國自給を目標として、經濟生活を律するが如きは、決して一國に經濟的優勢を齎す所以でなく、却つて國民をして限られた富源に賴つて、限られた領域の下に、生活を營ましめるの結果に終るのである。

唯戰前の獨逸に於ける如く、原始的産物の供給を求める地方が自國を距ること、頗る遠き地位に居り、其間の交通が一朝事變に臨んで、安全に維持される望の乏しき場合には、原始的産物の自給は遂に已むを得ざる所に屬すると云ふ說

を生ず。然しながら一國が原始的產物の供給に就て外國に依賴する所、多き狀勢と爲り、又斯る狀勢の下に、國民經濟の發展を來し、又更に進んで經濟的優勢を獲得するを得る機運に達したとすれば、此際原始的產物の自給主義を行ふことは、既往幾年の間を通じて、自然に成立した經濟的趨勢の進路を遮斷し、之を不自然なる方嚮に逆行せしめようとするものであつて、國民經濟上の利益に背反することの甚だしきを認めなければならない。斯る不自然なる策に出づるに先だち、經濟生活上に於て、他國物資の供給に依賴する端の開かれた國としては、

第一、其國自ら平和を主義とし、他國と事を構へざるのみならず、他の諸國をして平和に傾かしめる努力を致し、此點に於て成效を收めるを得ざるものであるかどうか、

第二、時に國際上の關係から、平和の狀態の持續されざることありとしても、自國に原始的產物を供給する國とは常に友誼的關係を保たれないものであるかどうか、

第三、萬一平和の斷絕が廣き範圍に亙り、自國に原始的產物の供給され、通送される通路が自國の海軍力に依つて保護されないものであるかどうか、

の諸點に就て、顧みなければならないのであつて、獨逸の如き外交策の失敗から、殆ど世界を擧げて、敵國とするに至つた國に於ても、尙ほ戰時原始的物資の供給を他に仰ぐを得た事實に徵したならば、外交上に賢明なる態度を持する國に於て、必ずしも平時の供給の悉く遮斷されるに至ることを恐れるに及ばない。戰爭の不可避的事實である理由の下に、自給的政策を行ふよりも、原始的物資の供給を廣く諸外國に仰がざる可からざるに至つたことを理由として、國際間に平和的關係を確立する方嚮に向つて、機運を釀成するのが經濟の求める所に適した處置であると考へられる。唯私が此際に於て怪訝に堪へないのは、歐洲戰爭直後交戰諸國の間に勃興し來つた國際平和の風潮が其後に至つて、必ず

しも大なる發展を示さゞる一事である。現に獨佛兩國の如き賠償金問題に關聯して、風雲の暗憺たることを免れなかつたし、日米兩國の關係も亦米國の排日的立法に依つて、著しく攪亂されることを免れなかつた。幸に英國に於ては勞働黨、佛國に於ては社會黨が共れ〴〵政權を掌握し、他の政黨の政局に當つた場合に比較して、國際平和を重んずる念の盛であつた爲めに、賠償金問題に於ける獨佛兩國の關係も圓滿なるを得たし、日米問題に至つては、幸か不幸か、日本に全然戰意の備はらなかつた爲めに、平和の持續を見るを得たのであるが、更に仍國際平和の脅かされる原因の幾多の方面に存する事實に對しては、何人も疑を挾まざるを得ない。然も此間に處して、彼の國際聯盟の如き、表面形式の事を處理する以外に、何等爲す所なきは、何故であらうか。事の根本に遡れば、今日世界諸國が多年の傳習に基き、孤立經濟、自給生活を基礎とする經濟政策に從ひ、諸國の經濟的關係をして自然の命ずる程度までに、緊密なるに至らしめざる結果とす可きである。國際聯盟の如き、其成立した當初の精神から云へば、國際經濟關係の改善に就て、爲す可き重大なる使命を持つものと認められるのである。

五

以上論述した諸種の方面から考へれば、一國が經濟的優勢を獲得するには、自給孤立の如き退嬰を事とする經濟生活に就く可きものでなく、進取を旨として、國際共通經濟の圏内に於て、一の地歩を占めるの方針に出でなければならない。既に此方針の下に、原始的產物の自給と云ふ希望を放擲し、其外國から輸入される勢に制限を加へない一方に、其國をして農業國として立たしめるに必要なる天然富源に乏しきを告げるに至つたならば、外國から輸入される食料品や、原料品の分量は次第に增加せざるを得ない。而して斯る增加は自ら其國の貿易をして輸入超過の逆勢に陷らしめる

であらう。現に我國に於て、內國米作の不良であるときには、必ず外國米の輸入高を增加するし、前者の豐作である場合に於ても、尙ほ米以外の食料品の輸入されるもの少なからざるのみならず、原料品に至つては、內地產の不足であつたり、或は全然內地產のものゝ得られ難かつたりする爲めに、外國から輸入されることを以つて、常態とし、是等の輸入高の多きときは、必ず輸入超過を生ぜざるを得ない。此輸入超過に對抗するには、斯る原料品に依つて製造された既製品の輸出を以つてし、結局輸入と輸出との間に均衡を得て、輸入超過なきに至らしめるのも、一の政策には相違ないが、本來原始的產物の輸入されるや、內國人の消費を充すことを以つて、其目的とする、時に或は重大なる目的とすることもある。然らば輸入品を原料として製出した既製品の全部なり、全部に近い數量なりを輸出して、輸入貿易を決濟しようとするのは、其事に於て、至難であると認められるのみならず、斯の如きは對外債務を決濟する方法として、國民に取つて、輕易なるものとするを得ない。國民に對する負擔を輕易にして、對外債務を決濟するには、內國物資の輸出に依らず、貿易關係外に於ける對外債權の收入を以つてするのが其道であつて、而して其收入を得るには、外國特に未開國に資本を放下し、事業を經營し、之に對して收められる利子や、利潤を充てることを以つて、最善の方法とするのである。即ち資本のものたる、其蓄積される當時に於てこそ、當事者に或る負擔を加へ、犧牲を荷はしめるに相違ないが、蓄積された後に於ては、純然たる剩餘物に屬する。其剩餘物も餘りに多く國內に集積したならば、不當に金利を低廉ならしめて、投機熱を誘致したり、恐慌を刺戟したりすることを免かれない。隨つて剩餘物の一部分が外國に輸出される場合には、右の如き餘弊の生ずることを回避するを得る外に、第一其資本をして內國に於けるよりも、遙に高き率に於て運用せしめ、第二外國に放下される資本は自ら其國に於ける富源を開發し、事業を隆興し、資本輸入國の資本輸出國物資に對する需要の力を大ならしめ、第三斯く資本輸入國に於て開發される富源の增加する場合には、其資本輸

出國に供給される分量を豐富ならしめ、第四に輸出國は資本と共に、事業經營の擔當者や、技術者をも供給することに依つて、彼等に對する報酬をも利得する等、種々の利益の伴ふことを知るを得るのである。

幾年か以前に於ては、領土の擴張を云ふことが富强國の常に畫策して、已まざる所であつて、統治し、管轄する領土の多ければ、多いだけ、其國は富强の要件を備へたものゝ如くに考へられたが、假に今日或る國が此考へを以つて、國策の基調とし、以つて他に臨んだとして、果して經濟的優勢を獲得するを得るかと云へば、決して斯の如くなるを許されない。蓋し今日世界の未開地方や、半開地方と雖も、尙ほ强國の權力の及んで居り、又强國の支配下に在る地方と接壤して居る。隨つて如何なる國が如何なる方面に於て、新に領土を擴張するにしても、他の國と利害の衝突を招き武力に訴へて、之を解決するか、然らずんば平生武備を盛にして、領土上の利益を擁護しなければ、擴張した領土の安泰を期するを得ず、一方に新領土に於ける土着民の知識が進歩すれば、必ず統治國に對して、獨立する希望を懷き、統治上の困難を大ならしめざれば、已まないのである。斯くて多くの國は武力に依賴して、他に領土を擴張することを畏なりとし、一方に成る衝突抵抗を少なくして經濟的膨脹を遂げる方法を求めて、資本の放下、事業の經營に依る發展法を見出すに至つた。即ち此方法と共に、資本輸出國は其外交方針の基調として、未開國並に半開國に於ける門戶開放、機會均等を主張し、彼等をして其領土內に於ける原始的產物の開掘に就て、何等偏私的處置を行はしめず、又諸外國に對する取扱を同等にして、何等の獨占、優越を認めざらしめることゝする。斯くて資本の調達に便宜を有し、之を外國に放下し、外國に於て、事業を經營する諸國に於て、他の諸國を凌駕した國は自ら經濟的優勢の條件を備へ、永く繁榮を期するを得るのである。

右に述べるが如き形勢の下に於ては、苟も資本の供給に於て、外國に於ける事業の經營に就て、他國に比較して、一

力の長ある國は自ら經濟上の覇者たるを得べく、斯く特長を缺く國は國際經濟上の競爭に於て、落伍者たらざるを得ない。英國が十九世紀の後半から、着々國際經濟の局面に於て、覇權を掌握するに至つたのも、獨逸が十九世紀の末年から、二十世紀の始めに掛けて、敢て英國既得の地位を脅かすに至つたのも、歐洲戰爭以來合衆國の經濟的地位に一進歩を來たしたのも、要するに上記の理法に基き、經濟的優勢の必要とする條件を獲得したり、獲得することに勉めたりした結果に外ならない。而して斯の如き、狀勢となれば、一國は自由の輸出し、輸入する物資を運送し、更に進んで外國の物資を輸送する爲めに、海運業を經營して、運賃を獲得し、海上に於て船舶なり、物資なりの蒙る危險を保障して、保險料を收得し、又諸外國の取引を決濟する中心市場となつて、之に對する手數料を收納し、斯くて利子、利潤保險料、運賃、手數料等を對外收入に充て、總て外國より輸入する物資であつて、自國物資の輸出に依つて、決濟するを得ざる分即ち輸入超過に屬する分は此對外收入を以つて決濟し、若しも剩餘に屬するものがあれば、更に之を新なる對外放資に充てて、以つて對外債權に於ける收入の間斷なく增加することを期する。是れが無限に一國の經濟的優勢を持續し、又之を發展せしめる要訣と爲るのである。

六

私は以上論述した所を直に日本現在の問題に應用して、我國に果して經濟的優勢を獲得する可能性があるかどうか、今日之に近づきつゝあるか、將た又遠ざかりつゝあるかを考へたい。我國には從來重商主義類似の論者が居つて、金貨を吸收蓄積しなければ、以つて我國財政の信用を維持す可からざるものとし、之を吸收蓄積するの急に驅られて、殆ど他の利害關係を閑却する弊の著しかりしことを免かれなかつた。輸出入貿易の趨勢に途方もない干渉を施したり、內地

の産金事業を奬勵する爲めに、當業者に過大の保護を與へたり、歐洲戰爭中、外國から莫大の金を吸收し、我國の內外に所有する金貨に著しき增加を示すや、國民の內に、之を以つて恰も我國の經濟社會に一種の福音を齎すが如くに、信ずる趣きのあつたりするが如き、何れも我國民の胸臆に重商主義の信念の潜在するの致す所としなければならない。

大正六年以來行はれつゝある金輸出禁止の如き、當時歐米諸國が擧つて金の輸出を禁止しつゝある際、我國獨り金の輸出を自由に付したならば、如何に急激なる取付に接するか、危險の測り知る可からざるものありとした一種の恐怖心に基いて、採用された次第であり、而して禁輸實施の爲めに、何人も金の輸出に依つて、對外債務を支拂ふ能はざるに乘じ、爲替銀行をして輸入爲替に不利の相場を建てしめたことの如き、金禁輸の裏面に依然として重商主義の思想の存する事實を示すものと云へる。固より今日の如く對米爲替相場が四十弗に底落し、時に三十九弗臺にも落込むと云ふ慘憺たる場合に、一擧に金解禁を斷行することは、一般經濟社會殊に輸入貿易業に急激なる變動を及ぼすの故を以つて、之を避けなければならないが、或る時期を劃して、金解禁を實行することを豫定し、其時期の到來するまで、或る價格の下に、政府自ら金を拂下げる一方には、財政の緊縮に依つて、物價の下落を招き、以つて貿易の逆勢を轉回するの計に出でなければならない。然るに從前對米爲替相場が略ぼ平準點に恢復した際の如き、金解禁を斷行するに、適當の時期にあつたのに、政府に之を爲すの斷なく、經濟社會の一部にも、亦之を尙早くとするの議あり、相率いて今日の如き紛更した狀態を惹起すに至つたのは、要するに我國民に重商主義の思想の存在した結果であると認めなければならない。

重商主義の外に、之に類似した思想として、金輸出禁止を支持したものは、卽ち之に依つて輸出奬勵を期圖するの一事であつた。蓋し金禁輸の下に、政府が爲替相場を支配し、輸出業者に有利なる點に相場を置いたならば、以つて輸出を奬勵するを得るが如くに考へられる。一應の道理としては、斯の如く思はれるが、要するに斯の如きは、一を知つ

て、之を知らざるの據なきを得ない。蓋し物資の輸出に有利なる爲替相場は其輸入に不利なる相場でなければならない。而して我國は今日原料輸入國の地位に居るのであつて、諸種の工業の必要とする原料品は或は合衆國から、或は加奈陀濠洲から、或は英國から輸入される。然らば我國の輸出貿易を盛ならしめるに就ては、斯る原料品を低廉なる價格を以つて輸入するを得るや否やと云ふことが重大なる關係を持つ道理であるのに、金輸出禁止、之に伴ふ爲替相場の支配に依つて、斯る原料品の輸入を高價ならしめたならば、結局輸出貿易の發展に大なる障害を及ぼさざるを得ない。輸出振興の見地に於て、爲替相場を左右し、之を左右する一の方便として、金の輸出を禁止するが如き、我國情を無視するの甚だしきものである

農業保護若しくは食糧自給の問題に就ても、亦我國民に誤まれる思想の存することが認められる。農村に生活する多數の國民が農業の衰微し、國を擧げて工業化せんとする過渡期に於て彼等に職業上、一時の逃避場を與へようとする社會上の見地の下に、農村救濟策が講ぜられるものであれば、私も亦其必要を認める。然しながら農産物を國内に於て自給する計畫の一端として、農産物の價格を人爲的に騰貴せしめ、之に依つて農村を救濟しようとするものであれば、私は此我國に經濟的優勢を獲得する手段として、誤まれるものの多きの故を以つて、之に反對せざるを得ない。蓋し農村を維持することのみが我國經濟社會に於ける全般の問題ではない。農村を維持することに依つて、如何に多くの農民に豐富なる生活を送らしめるを得るであらうか、農村を自然の運命の赴く所に任せて、衰微するに至らしめた場合に、他に農業に代つて、農村の住民を吸引するに足る適當の生産業の起ることが期待されるであらうか、此種の生産業としては、製造業を推す可きであつて、而して製造業は都會に起り、一方に製造業の起る所亦都會と爲るを常とし、結局國の全體を都會化するに至らしめるが、爲めに何等の弊害を生ぜざるを得るか、或る弊害は生ずるとしても、社會政策其他の施

設に依つて、之を刈除するを得ないか。是等は此問題に關聯して、充分攻究す可き諸點であつて、私は農村衰微の過渡期に於てこそ、離村の已むを得ざる狀態に陷つて、生計に窮乏を告げる者に對し、國家に於て保護的見地に立つて、一時の大勢を緩和する必要に接するとしても、大勢其ものを逆行せしめんとするが如き、愚の極であり、又斯の如くして、我國の工業化せんとする勢を妨げるのは、角を矯めて、牛を殺すの愚と擇ぶ所なきことを信ぜざるを得ない。

七

故に、我國にして今日の國際經濟場裡に立ちて、經濟的優勢を獲得しようとするには、金に愛着して、之を蓄積したり、農産物の自給を必要として、農業を保護したりするが如き謬見は一切之を排除し、一方に開放的政策の下に、我國の經濟的勢力を外に發展すると共に、外國の我國に與へんとする天然の富源を取つて、以つて利用するの計に出でなければならない。獨逸が斯る開放的政策を行はんとした場合に、之に對する障害として、一部の世人に依つて、指摘された所は原始的産物の所在地の自國に對して、遠隔なる外國であり、其れ等の諸國と自國との間に於ける交通を有事の際に保護する能はざるの一點であつた。我國が今日原始的産物の供給を受くる對手國中には、或は英國あり、或は合衆國あり、或は濠洲加奈陀、印度、海峽殖民地あり、是等は何れも日本を距ること、頗る遠隔なる地位に居り、有事の際に原始的産物の供給に就て、其通過する通路を我國の軍事的勢力に依つて、保護することの不可能であるのは、往年の獨逸に比較して、異なるを得ない。即ち我國一部の論者が原始的産物に就て、自給主義を取るの必要を信ずる所以であるが、私は此說に對して、表面から反對する。如何にも現下の狀態に於ては、日本が原始的産物の供給を受けるのは、我國を距る遠隔なる地方に相違ないが、若しも日本にして自國に近接した所から、之を得ることを必要とし、之に適應す

る政策を講じたならば、優に其目的を達し得るではないか。我國が往年朝鮮問題に就て、支那と戰ひ、更に滿洲問題に就て、露西亞と爭ひ、結局朝鮮を始め保護國とし、後に進んで合邦を斷行し、續いて滿洲を我國の權力範圍に收め、之を爲すに就て、殆ど我國力の總てを傾倒するの概きを示したのは、必ずしも戰捷國たる虛榮に誇らうが爲めではない、軍事上の威力を示して、軍國主義の基礎を固める爲めでもない。朝鮮に對して、將た又滿洲に對して、外國の權威を揮はしめて、其支配下に置いたならば、我國が兩地方に於ける富源を利用して、以つて國民生活の安全若しくは工業の發達を謀らうとする計畫は水泡に歸せざるを得ない。此計畫を全からしめると云ふ經濟上の要求が日本をして所謂滿韓經營の名の下に、兩地方に對する積極政策に出でしめた次第である以上は、日本は何處までも此方針を體し、兩地方に出來得る限り、多種多量の原始的產物を獲得することを期しなければならず、而して一方に兩地方に就て原始的產物を購入すればするだけ、他の一方に兩地方をして我國の製造工業品を需要し、之に對する支拂を行ふ能力を備へしめ、日鮮滿の間に經濟上の共通的關係を有するに至らしめ、更に進んでは支那本土をも此關係の行はれる圈內に引き入れるのであつて、我國をして經濟的優勢の地步を築かしめるの道は此一事を除いて、他に之を求めるを得ないのである。

然らば我國が從來滿鮮に對して、施しつゝある政策は果して右に述べた經濟上の要求に適合して居るかと云へば、私は不幸にして正然るを認めるに苦む。試に私の認めて、以つて遺憾とする點を列記すれば、左の如くである。

第一、朝鮮統治以來年所を經るの久しきに拘はらず、日本人の施設に對して、朝鮮人をして悅服せしめるに至らず、鮮人の日人に對して持つ不平反感が日人の事業發展を妨げ、又日本人をして充分の資本や、經營能力を朝鮮に投ぜしめることを妨げる。

第二、支那に對しても、日支兩國民の間に於ける親善の關係は容易に實現されず、支那の對日反感なり、排外的氣風

なりは常に日本の對支企業を妨害する。殊に將來支那が自國内に於ける工業の發展を急務とし、原料品の國内保留を主眼とする經濟政策を行ふに至つたならば、上記の妨害は愈々顯著と爲らざるを得ない。

第三、殊に日本に於ける資本の供給の寡小である其上に、近年の如き金利の步合の昂騰を以つてしては、我國資本の對外輸出は甚だ困難であつて、隨つて我國對外企業も亦不振の嘆あるを免かれない。現に朝鮮の如き、其金利步合は我國に行はれるものに比較して、更に高率であり、而して我國資本の輸出に依つて、其調節を期するを得ざる次第である。

第四、日本の如き原料品の供給に就て、不安を感ずる以上は、天然資料の豐富なる支那に於て、當に地中に埋藏される資料を開掘するに止まらず、土壤を利用して、日本の必要とする原始的產物を產出せしめる爲めに、各種の試作植を爲す可く、時に或る地域を租借して、日本の資本や企業能力を移植し、以つて他の蠶食を許さゞる方針に出でなければならない道理であるのに、少數の場合を除いては、斯る事實を實現するに至らない。

我國にして經濟的優勢を收めるには、以上の四點に就て、深く省察しなければならないのは勿論であつて、既往並に現在の狀況を以つてしては、經濟的優勢を獲得する條件に缺けて居るもの〻多きことを遺憾とする。唯吾人としては、金を偏愛したり、原始的產物の國内自給を必要としたりする僻見を一擲し、國際共通經濟の營まる可き針路に向つて、我國經濟政策を進めることを以つて、目前の急務とする。斯の如くして經濟的優勢と經濟的繁榮と併せ到來するものと考へられるのである。



剩餘價格第三論

——河上博士の再論について——

高田保馬

一、問題の内容

河上博士は其『社會問題研究』第四十三冊所載『高田博士の再論について』と題する論文に於て、私が博士の剩餘價格論に加へたる再度の批評に對し二回目の答辯を與へられた。此雜誌の公にせられたのは昨年八月末の事にて、當時滿洲旅行から歸つて間もなき私は此論文を手にするに至らずして震災にあひ、はじめて之を讀み得たのは十月に入つてからの事である。其後健康の恢復するまでこれに關する私見の執筆を許されなかつた爲に遂に今日に及んだが、私は博士ならびに此問題に學問的興味を有する人々の必ずや此遲延を諒とせらるゝことを信ずる。

私は今三たび私見を陳ぶるに際し、少しく前言を附け加へたいと思ふ。私が今私見を述ぶるもの、それは主に河上博士の批評を得むとする爲ではあるけれども、他方に於てはまた、世の識者の捉はれざる判斷を得之によりて敎へらるる所あらむが爲である。然るに、此問題に關して最初私が所見を發表してより既に一年半以上にもなる事はしばらく云はずとするも、河上博士の敎を受くる事既に二回、私が自分の考を述べたることもまた二回、從ひて此第三論は當然にこれらの議論の交換を前提とし背景としてゐる。從ひて卒然これを讀まれる人々には當然に理解し得べからざる點が多いかと思ふ。此理解を可能ならしめ又は容易ならしめむが爲に私は今、かの背景となつてゐる事柄を略述して置きたい。勿論それはほんの荒筋に止まるが故に、これによりて「理解を可能ならしむ」ると云ふ私の目的が十分に達せられないとしても、此企ては決して無用のものに非ずと思ふ。

河上博士の、今から見れば六年前の舊稿「剩餘價格の成立」に於ける其見解の骨子として私が認めたものは次の如きものである。(一)企業は社會の人々の中一部分のもの丶獨占に屬する。然るに獨占には獨占價格從ひて剩餘價格を伴ふ。かくて、剩餘價格は企業の獨占の結果として成立する。(二)獨占にありて獨占價格を生ずるは生產制限の故である。企業一般に於ける生產制限は企業者が最後に加へたる費用と之によりて生ずる所の所謂限界生產力との相等しき點を超えて生產を擴張することなしと云ふ事に存する(此點、叙述不精確なれども、今詳述せず、私の以前の論文を參照せられたし。(三)剩餘價格の窮極の負擔者は勞働者である、云はゞ剩餘價格は勞働者の掠奪を意味する。以上三項の論點に就いて私は次の如き批判を下すと共に河上博士の敎を請うた。(一)企業の獨占は必ずしも剩餘價格を生ずるものに非ず、シユムペエタアや私の考へる靜態にありては利潤なし、故に、剩餘價格は企業獨占の結果ではない。(二)各企業に於ける報酬遞減の法則を認め、最後に添加したる費用と其限界生產力との等しき點をこえて生產を擴張する事なしと云ふ見方は

クラアクの所説と同一である。然れども此見解は到底支持すべからざるものである。（三）窮極に於て剰餘價格を支拂ふものは勞働者なりと云ふ意見は成立しない、勞働者は其勞銀によりて僅に衣食するのみ、價格として負擔し得べき、又掠奪せられ得べき何物をも有しないのである。私の前後二回の所論は極めて多岐に亘れども、其主眼は此三點を出でない。此批判に對する河上博士の主張の骨子は次の如くに述べ得ると思ふ。（一）剰餘價格が企業獨占の結果として成立すると云ふ見解は拋棄する必要を感ぜざるものである。（二）企業一般に於ける生産制限は限界生産力と費用との均等なる點に於て行はれ、從ひて限界以前の費用に關しては餘剰が成立すると云ふ説明は博士の見解に於ける從たる部分である。且つ博士はクラアクの限界生産力説と同様なる説を主張したる事はない。（三）剰餘價格の窮極の負擔者が勞働者であると云ふ見方は勞働者が價格に於て負擔し得べく掠奪せられうべき何物をも有せずと云ふ事實と成程相容れず。しかし、資本家的生産又は資本主義生産そのものはそれ自體の中に矛盾を藏す。擴張複生産は出發點からして行き詰まるべき運命にある。今剰餘價格の負擔者たる勞働者が負擔すべき何物をも有せずと云ふ行き詰まりを見る事は寧ろ博士の所説の正しい證據と見るべきである。勿論枝葉の點としては數多の事柄が取扱はれてゐるし、私もまた種々なる項目に説き及んでゐる。それらは勿論議論を進める必要から觸れたるものではあるが、双方の主張の大體は略ぼ以上に盡きてゐると信ずる。私は今これだけを所謂背景の敍述として、河上博士の最後の論文を中心としたる疑義を記したいと思ふ。

附記。河上博士の前後二回の論文は其個人雜誌『社會問題研究』に載せられてゐる。私のものは二つとも雜誌『解放』に寄せたそものであるが、近著『經濟學研究』の中に收めてゐる。私の所論に關する引用は便宜のため、此著書の頁數による事とする。念のため四の論文の成立の順序を記せば左の如し。

(1) 河上博士の剰餘價格論　經濟學研究第八章。　大正十二年十二月稿。

(2) 剰餘價格論につき高田博士に答ふ。　社會問題研究第四十三册（大正十三年三月號）。

(3) 剩餘價格に關し再び教を河上博士に請ふ　經濟學研究第九章。大正十三年六月刊。
(4) 高田博士の再論について　社會問題研究第四十七册（大正十三年八月號）。

二、經濟原則について

河上博士は其第二回目の論文に於て、主要なる論點に入る前に二の事柄を——私から見れば中心論題の取扱ひに比較して不釣合と見らるるまで詳密に——述べられてゐる。其第一の事柄は私の批評を加へたる『剩餘價格の成立』と云ふ論文の性質に關する。これに就いて反問したい點も數多存するのであるが、それを敢てしても學問の研究に益する所は殆どないかと思ふが故に、（博士にして之を要求せられざる限り）私は之を差控へたいと思ふ。よし經濟論叢の巻頭に載せられたる論文が博士によれば『通俗的の隨筆』であらうとも、又、其所謂五年前の舊說の中心たる獨占論が同一の論理の組立を以て博士の『社會組織と社會革命』のうちに明に述べられて居るにしても、私は今立入りて之を吟味することを避ける。博士が私の加へたる批評を非なりとし、それらの點に關して答辯の責任を辭せずとせらるゝ丈けの事を聞き、私は安じて自分の議論を進め得る譯である。第二の事柄は私の使用したる言葉、經濟原則の意義に關する。これに就いては、是非私見を述べ置くことの必要を感ずる。

私は最初の論文に於て今日一般企業者が費用の最終單位の生產力が此費用と相等しき點以上に生產額を增加しないのは獨占の結果に非ず、彼等が經濟原則の作用に從ふが故である、費用が收益以上に出づる限り生產を敢てせざるが故であるとなした。然るに、河上博士は私の云ふ『經濟原則とは何を指すものか私には能く分らない』（社會問題研究第四十三冊二十頁）と述べられたるが故に、私は之に對して次の如き說明を加へた。『私が經濟原則と云ふのは一般の理論經濟

學に謂ふ經濟原則である。」「故に經濟原則と云ふものは Economic principle, Wirtschaftsprinzip の譯語である事何人にも明白である。それは時に經濟主義の譯語を與へらるゝ」（經濟學研究四九五頁參照）。而して私は河上博士の以前の著述經濟原論中より經濟主義の定義を引用して博士の之を知られざる道理なしとした。之に對する博士の辯明はかうである。

「引用された私の文章には經濟主義の原則とか經濟主義とか書いてあつて經濟原則とはしてない。さうして博士が意味せらるゝところを言ひ表はすためには、從來多くは經濟主義または經濟主義の原則としてゐたかと思ふ。」「經濟主義又は經濟主義の原則を指すつもりで、たゞ經濟原則と云はれてゐるだけでは私には能く分らない事になるのである。」（社會問題研究第四十七冊十七－十八頁）。

河上博士は「私には能く分からない事になる理由としてなほ次の事を述べてゐられる。

「なほ高田博士の敎へらるゝところによれば、博士の謂ゆる經濟原則はドイツ語の Wirtschaftsprinzip の譯語だといふことだが、その Wirtschaftsprinzip ならば、例へばゾムバルトの有名な「近世資本主義」には博士の意味せらるるところと甚だ相違した意味に用ひられてゐる。彼は個々の經濟活動を支配するところの價値觀念、目的定立、主義等の客觀化されたものを經濟原則と名づけ、それには本質的の差異を有つた二つの種類があるとして、一を Bedarfsdeckungsprinzip（欲望充足の原則）二を Erwerbsprinzip（營利の原則）と名づけてゐる。Wirtschaftsprinzip と云へば、先づ斯ふ云つたやうなものが考へられるだらうと思ふ、さうして高田博士の意味せらるゝやうなものは、ドイツ語では das wirtschaftliche Prinzip または das ökonomische Prinzip と謂つてゐはしないかと思ふ。坐右にある二三の本を調べて見るに、レキシスも、デイールも、リーフマンも、また最近に原論を出したレーデラアも、皆な言

wirtschaftliche(ökonomische) Prinzip と云ふ語を用ひて居り・また高田博士の屢々引用せられるオッペンハイマア はdas cökononische Prinzip des kleinsten Mittels といふ語を用ひてゐる。私は外國語の智識に乏しいから能くは分らぬが das Wirtschaftsprinzip といふのと、das wirtschaftliche Prinzip といふのは、ドイツ語でも意味が少し違ひはせぬかと思ふ』(同一七一一八頁)。

私は本來此の如き用語の問題に就いて深入りする事を好まぬ、然れども、河上博士によりて、此の如き批評が下された以上は或る程度までの究明を加へざるを得ない。河上博士が私の經濟原則と云へるものゝ何であるかがよく分らないる以上は或る程度までの究明を加へざるを得ない。理由は私は經濟主義(又は經濟主義の原則)といふ言葉を用ひずして經濟原則と云ふ言葉を用ひたるが故であると云ふ事である。これに對して私は三の主張を敢てする。第一、私は『經濟原則の作用する所人々は費用の價格がこれによりて生ずる生產物の價格に等しき點に到れば生產を中止する。詳言すれば損失を忍びてまでも、生產を擴張しない』と述べてゐる。これによりても、經濟原則とこゝに云へるものが博士の所謂經濟主義であることは、經濟學的常識を有するものゝ當然に判斷し得ることである。博士自ら『分り切つた事をとぼけて知らぬ振りをしてゐる』といふ言葉を用ひられたるが、博士を以て『語るに落ちるもの』といふものあらば、如何なる答辯をせらるゝものかと思ふ。第二、河上博士の此點に關する云ひ方の成立し得る爲には(一) das wirtschaftliche Prinzip の內容が常に經濟主義(又は經濟主義の原則)の語を以て表示せられ、經濟原則と云ふ言葉は私の勝手なる使用に外ならぬ事、(二) 經濟主義の言葉は常に博士の云はるゝが如き內容にのみ用ひらるゝと共に經濟原則の言葉が他の意味に於て一般に用ひらるゝ事あるを要する。然らされば、經濟主義の言葉であつたらば私の云ふ所が分るが經濟原則の言葉で分らないとは云へさる譯である。然れどもこれらの條件はすべて事實ではない。(一) 經濟原則の言葉は決して私のみの勝手なる用語ではない 今身邊の田舍に引

退して文獻をあさる事ができないが、偶手許にある左右田博士著勝本鼎一氏譯經濟法則の論理的性質を見ても、幾度か經濟原則と云ふ言葉が繰返され而もそれには括弧して wirtschaftliches oder ökonomisches Prinzip と云ふ獨逸語が附記されてゐる、左右田博士が『譯稿の有する缺陷を指摘し不備を整へ』られたる以上、譯者のみならず同博士亦此用語を是認せられたるものである。かゝる內容に對して學界の一部の人人が經濟主義の言葉を常用するか故に、經濟原則の言葉では何を意味するか分らないとは全く筋道の通らぬ話であると思ふ。（二）經濟主義と云ふ言葉は勿論以上の內容を意味せしむる爲に用ひらるゝ事屢であるが、それが固定的用義ではない。例へば手許にある小林丑三郎博士著純正經濟學を見るに、それは著しく異なれる意味に於て使はれてゐる。『經濟主義とは經濟に關係する人の行爲を常に左右する所の方針の謂にして此の方針の動機となるべきものは自利心名譽心公共心他愛心德義心』『等種々あり』（同書一一〇頁）。又經濟原則の言葉は河上博士の所謂經濟主義の意味に於てこそ用ひらるれ、一般に他の意味に於て用ひられることを知り得ない。第三。經濟主義と云ふ譯語は甚だ不適當のものである。主義と云ふは常に ism, ismus の代りに用ひられる。而して Prinzip は原則と譯するを一般とする。從ひて經濟原則と云へば das wirtschaftliche Prinzip 又は Wirtschaftsprinzip（私は此二者を同視する、其次第は次に述べる）を意味すると見なすこと、これは當然起るべき考であると信ずる。以上三の主張の中、私の重要視するのは勿論第二のものである。

次に私の附記したる言葉 Wirtschaftsprinzip の問題に入る。第一。私は『茲に經濟原則と云ふものは economic principle, Wirtschaftsprinzip の譯語である』と述べてゐる。然るに河上博士はそれが Wirtschaftsprinzip の譯語であるから經濟主義を指すとは分らない事になると云ふ由を書かれてゐる。（イ）この事は私が第二の論文に述べてゐる。河上博士は第二の論文によりて『所謂る經濟原則が經濟主義または經濟主義の原則を指す』ことが分つたと述べながら、同時

にそれが分らない事になると云はれるのは矛盾である。（ロ）此言葉の前に記したる economic principle と云ふ言葉の意味によりて經濟原則を理解せむとせず、何故にその次に記したる Wirtschaftsprinzip の言葉のみから出發せむとせらるゝや。第二。河上博士は私の意味する所のものがドイツ語 das wirtschaftliche Prinzip として表はされ、Wirtschaftsprinzip といふ時は他の內容が意味されると說かれてゐる。私は今手許に僅に數冊の經濟原論より有せず、數多の例をひく事は出來ないが、私の今知り得る限りから云つても、此博士の主張は正當ではない。たとへば、ヴイイザアはかの das wirtschaftliche Prinzip と Wirtschaftsprinzip を混用し、二者を全然同義となしてゐる。而して此原則は與へられたる事情の下に於て得らるべき最高効用の目的を追求すとなす（Wieser, Theorie der gesellschaftlichen Wirtschaft, S.160, 240ff）。『また高田博士の屢々引用せらるるオッペンハイマアは das ökonomische Prinzip des kleinsten Mittels といふ語を用ひてゐる』と云はれるが、オッペンハイマア自身は das ökonomische Prinzip と das Wirtschaftszinp とを代置し得べきものと認めてゐる。ökonomisches Prinzip des kleinsten Mittels, Wirtschaftsprinzip des kleinsten Mittels, Prinzip des kleinsten Mittels をすべて同義に用ふるのである（Oppenheimer, Theorie d. reinen u. politischen Oekonomie, S. 27,37,74, u.s.w.）。これは河上博士が其參照せられたる頁以外に亘りて調べられたらば明になり得たらうにと思ふ。勿論私の謂ふ經濟原則の內容が Wirtschaftsprinzip と云ふよりも das wirtschaftliche (oder ökonomische) Prinzip として表はされる方が屢であることは確である、然れども、多數決的に多く用ひられる言葉しか使つてはならぬと云ふ法はないと思ふ。若しさうであれば、das Prinzip der Wirtschaftlichkeit, Prinzip des kleinsten Mittels 等の語をば經濟原則（河上博士によれば經濟主義）の對應語として用ふる事も不當となる。此の如しとするならば、私共は先づ學者の用語について統計表を作つてからでなければ物が云へなくならうと思ふ。

第二。河上博士はゾムバルトの經濟原則の内容を說き『Wirtschaftsprinzip と云へば先づ斯う言つたやうなものが考へられるだらうと思ふ』と述べられる。私は先づ『斯う言つたやうなもの』が何であるかを理解する事は出來ぬ、學問上の論爭に於て何故にも少し精確なる表現を用ひられないか。若しそれがゾムバルトの欲望充足の原則營利の原則の（二）（三）由たるものを指すとするならば、何故に先づゾムバルトの用義を考ふべくして、例へばヴイイザアのそれを考へてはならないのであらうか。此の如く述べ來れば河上博士は或は次の如く云はれるかも知れぬ。『自分は何等斷定的なる事を言つては居らぬ。現に『私（河上博士）は外國語の知識に乏しいから能く分らぬが、das Wirtschaftsprinzip といふのと das wirtschaftliche Prinzip といふのとはドイツ語でも意味が少し違ひはせぬかと思ふ』と記してゐる』と。もしさうであるならば私は述べたい。そんなに不確實にして曖昧なる主張ならば、初めから差控へらるゝ方が自他の勞力を省きうる。

私はつまらぬ問題の爲に紙數を費したことを快しとしない。然れども、それは河上博士が此言葉の問題を揭げられたるが爲に已を得ずして費したる事である。露骨に云へば、私にはこの點に關する河上博士の主張が一種の揚足取りの如くにしか考へられぬ。而もそれは失敗に終つてゐると思ふ。

三、獨占論是非

これから議論の本筋に入る。たゞ私の論點が數多であり、最少限に於てこれだけには敎示を願ふと申出でたるもののみにても三四に止まらなかつたに拘はらず、河上博士は其理論組立の中心であるとせらるゝ獨占論のみに問題を限局せられてゐる。私が相當の努力を拂ふ事によりて論駁を加へ其敎示を求めたる數多の點が、すてゝ顧みられざる事に關し

ては自ら逍遙を禁じ得ない。河上博士は此問題の局限に關して二の理由を述べてゐられるが私にはそれが十分納得せられぬ。理由の一。私の『議論は非常に多岐に亘つてゐるから一々之に答へやうとすると』『問題が値すと認むるより遙に多くの頁を犧牲としなければならなくなるから』博士は『問題を私（河上博士）の議論の中心點にのみ限らうと思ふ』（社會問題研究第四十七冊一八―一九頁）。私はこれに就いて次の如くに考へる。河上博士は其所論の冒頭『元來こんな事はどうでも可いとは思ふが』と信ぜられる事柄、即ち『剩餘價値の成立』と云ふ論文の性質について約七頁足らずを費し、次に經濟原則と云ふ言葉の問題――私から見れば言葉尻の爭――に三頁を費してゐられる。それだけの餘裕をもちながら理論の組立をなせる事柄に就いては頁の犧牲を理由として其取扱ひを辭せらるゝ理由いづこにありやと思ふ。理由の二。河上博士は曰く『今この中心點に論爭の範圍を限らうとすることは幸にして卑怯の擬ひを免れ得るやうである。何故と云ふに、それは、私（河上博士）の議論のうち博士（高田）が最も薄弱だと看做されてゐる部分に、私自らが立籠らうと云ふ事由に外ならぬからである。』『議論はさう局限することによつて、遂に簡單に片付き得るであらう。』（同上一九―二〇頁）。私は此論理を奇怪に思ふ。例へば篤行の善人、其篤行の最も顯著なりと思はれつゝあるものを吟味してそれが事實さしたる行爲でないと云ふ事が明にせられたからとて、彼は善人ならずとは云へぬ。同様に數罪を負へる罪人、其罪最も重しと思はるゝものを檢してそれが無實なりと判明したる所で、彼は罪人に非ずと證明せられる譯ではない。河上博士の議論に就いて私は支持し得べからずと信ずる點の數多を擧げてゐる、而もその中には博士の所謂獨占論と必然的聯絡にたゝざるものが多い。私の薄弱なりと見る獨占論が假に成立し得としても、それで議論がさう局限することによりて簡單に片つくべしとは、而して河上博士の理論組立が承認せらるべしとは、如何なる論理によりて云ひ得べきであらうか。

之を他の言葉を以て云ふ。數口の負債は其の中の重なる一口の辨濟によりて帳消しとなるものではない。河上博士はよし今其所謂『獨占論』（私はこれを利潤の獨占說と云ふのが內容をよく表明するものであると思ふ）に於て正當であり得ても、他の數多の論點に關してなほ理論の上の負債者であられねばならぬ。この重なる一口の辨濟が果されてゐるか否かを次に私は檢して見たい。

議論の中心は次の如きものである。河上博士によれば（而して例へばオツペンハイマアによるも）獨占には一方に於て普通の又は狹義の獨占と、他方に於て企業全體としての獨占（廣義の獨占—階級獨占）との二を區別すべきである。普通の獨占にありては生產制限により獨占價格が成立し、從ひて其中には生產費以上の利潤即ち剩餘價格が含まれる。企業全體としての獨占にありても（之と趣同じきことにて）生產制限により一種の獨占價格、從いて剩餘價格が成り立つ。これに對して私は云ふ。二種の獨占は性質を異にする、前者にありて獨占價格從ひて剩餘價格（私はこれを超費餘剩とよび又は廣義に於ける利潤と云ふ）が成立するのは明白であるが、されぱとて廣義の獨占に剩餘價格が必然的に成立すると云ふ推論はなし得られない。價格に關する費用の原則を承認する以上、靜態にありては剩餘價格は認められない。企業全體の獨占はありても、そのことから剩餘價格が成立するのではない。河上博士が私の駁論を打ち破りて其主張を貫き通さむとせらるゝならば、廣義の獨占即ち、企業全體の獨占には必ず利潤即ち剩餘價格の成立せざるべからざる所以を說明せらるべきである。而してこれ正に私の要求したる所、教を請ひたる點である。

河上博士は此點につき次の如く述べてゐられる。「本誌（社會問題研究）第四十三冊一五、一六頁に相當する所の「ともかく獨占論に對する博士の批判を可なとしてゐる」と云ふ文句以下、一五、三二頁に相當する所の「即ち私の云ふ意味の、資本主義の社會における特種の生產制限は、資本主義の社會に特有なる企業獨占の結果であると云ふ意見を、

抛棄しなければならぬ必要を感ぜざるものである」と云ふ文句に至るまで、約五頁に亘り、私は既に若干の言葉を費してゐる積りである。今博士（高田）は是等の議論を何と見られたのであらう？』『博士（高田）が私を捉へて獨占論につき一言も論及せず一語の答辯をも與へないといはれる』が『私は斯う云ふ議論の仕方に對して全く降參するの外はないのである』（社會問題研究第四十七冊二二—二三頁）。之に就いて答へる。私は河上博士が『獨占につき一言も論及せず一語の答辯をも與へない』とは如何なる場合にも述べてゐない。私の述べたる言葉は次の通りである。

『此二種の獨占が價格の形成に及ぼす作用の全然相異なること、一方にありては獨占價格が成立し、他方にありてはその成立せざる事、これが謂ふに、河上博士の剰餘價格論の死活を決定する點である。博士が議論の中心、その獨占論にありと云はるゝ以上、此の如く見ざる譯には行かぬ。然るに博士は此點に關する私見に對し一言も論及せず、一語の答辯をも與へられない』（經濟學研究四九一頁）。而して私は河上博士の抗議にも拘はらず、此言葉を改むる必要を見ない。河上博士は其獨占論についてこそ述べられて居れ、所謂『此點に關する私見』に對して私、何事をも與り聞いてゐないのである。私自身としては博士の高教に就いて一頁も殘す所なく答辯し論駁を敢てしてゐる、從ひて今指定せられたる部分に就いても十分に私見を述べた積りである。

河上博士は其再度の答辯に於て此中心論點につき次の如き所見を述べられてゐる。私は之に對して深く其勞を感謝すべき義務を感ずる。今一語を遺す所なく味解したいと思ふ。

『博士（高田）の説によれば普通の獨占と企業の獨占とは全く種類を異にし、從ひて前者の剰餘價格と後者の剰餘價格とは全く性質を異にすると云ふのである。しかし博士自ら、その双方を名づけて獨占と謂ひ、また双方の場合に剰餘價格が生ずるとされる以上、是等二つの間に何等かの共通點を見出されてゐるに相違ない。さうして私は其の共通點

を重く見るのである。博士が綿密に說明してくれらるゝを俟つまでもなく、私と雖も是等二つの者が全く同じものだと思はない。企業者間に自由競爭が行はれてゐる限り、普通にいふ獨占價格が成立しないのは勿論のことである。しかし、さういふ場合においても、資本家的生產方法の下では、生產せられる貨物の價格の中に剩餘價格が含まれてゐるが、その剩餘價格は企業者が全體として獨占的地位を維持してゐる爲めであるから、其等貨物の價格に一定の剩餘が含まれてゐる限りにおいて一種の獨占價格と看做すべきである。と私は云ふのである。斯くいふ場合の獨占價格が、普通の教科書に又從來の殆ど總べての經濟書に謂ふところの獨占價格でないことは、博士の示教を俟つまでもない。しかし私は、階級内の獨占が其獨占的企業者に平均以上の餘剩を獲すと同じ理法によつて、社會内の獨占は資本家階級に一定の剩餘を獲すものであると見るのである』(社會問題研究第四十七册二三―二四頁)。

これは河上博士第二回の答辯中の最も重要なる部分であると思ふが、私は依然として、その中に何等自ら求むるものを見出し得ない。成程普通の獨占、即ち博士の所謂階級内の獨占と企業の獨占との間にはある共通點がある。それは假に或る經濟的活動の排他的なる營み、又は或る地位の排他的占有として云ひ表はし得る。然れども、一般に云ふ獨占價格と其他の價格との差異、云はゞ獨占價格の特徵は此共通點より生ぜず、二種の獨占の差異より生ずる。これは私の獨斷に非ず、一般教科書の說く所の云ひ表はしを變じたるまでである。從ひて獨占價格に含まる剩餘はかの共通點の存する所に存するのではない。かくて企業の獨占に剩餘價格の伴ふ所以を說明せむとせば、此共通點以外から出發すべきであると思ふ。然るにこれは河上博士の取られたる道ではない。これだけは明であるが、然らば企業の獨占は何故に剩餘價格を伴ふか。以上引用したる部分の中に注目すべき二個所の文句がある。

(一)『資本家的生產方法の下では、生產せられる貨物の價格の中に剩餘價格が含まれてゐるがその剩餘價格は企業者が

全體として獨占的地位を維持してゐる爲めであるから『それは一種の獨占價格と看做すべきである。』

(二)『私は階級内の獨占が其獨占的企業者に平均以上の餘剰を齎すと同じ理法によつて、社會内獨占は資本家階級に一定の剰餘を齎すものであると見るのである。』

然れども此注目すべき二箇所に於て、やはり私は何の説明——何故に企業の獨占が必然的に剰餘價格を伴ふかの——をも見出す事は出來ない。私は決して、企業の獨占をも獨占と稱する事、一般企業者があげつゝある剰餘價格(又は之を含める價格)を以て獨占價格と稱する事を不可なりとするのではない。若し此剰餘價格が普通の獨占價格と同様なる理法によりて説明し得らるゝならばそれは當然の事であらう。然れども、此理法、此「何故に」は未だ與へられない。「その剰餘價格は企業者が全體として獨占的地位を維持してゐる爲であるから」と云はれるが、これが第一に論證せらるべき事柄ではないかと思ふ。普通の獨占價格が「平均以上の剰餘を齎すと同じ理法によつて」と云はれるが此理法は抑如何。河上博士の二回の論文中、(博士の申出でによりクラアク的限界生産力説による説明を取除けば)私は何等これを發見し得ない。博士は『私は必ずしも直ちに又は躊躇なくさういふ推論をしたのではなく、素朴ながら多少の理由づけをしてゐる積りだが』(同上二七頁)と云はるゝ所に從ひて、此説明を強いて求めるならば最初の論文の中に『共通これと同じことになる』と云ふ文句があり、第三回の論文中、『是等二つの間に何等かの共通點』があり、而して『私は此共通點を重く見るのである』と云ふ文句がある。これからして見れば、普通の獨占には獨占價格を伴ふ、企業の獨占も一種の獨占であり、其の間共通點がある、同じく獨占と云はれうるのであるから、同じく獨占價格を伴ふのだと云ふ考へ方とより解せられない。然れども此考へ方は正に次の如き方式のものである。魚は卵をうむ、鯨も魚と云はれうるが魚と云はれるからには一般の魚と何等かの共通點を有しなければならぬ。故に鯨も亦卵を生むものである。

これは私の前回の論文に於ても述べたる所であるが、一向此點が河上博士の承認——私はこれを當然なりと思ふが——を得ざるが故に繰返して述べるのである。而して、河上博士は今までのべたると同樣の意味をもつ前回所論中の私見(1)に對して次の如き反駁(2)をすら與へられてゐる。

(1)私の所論。「河上博士によれば、企業合體が一の獨占に屬する。獨占は獨占價格を伴ふが故に、此獨占によりて獨占價格が成立する。此第一命題より第二の命題への移り行きに博士の論理の誤謬が存する。」「卑近の例を以て云ふ。人は動物である、犬も動物である。(犬と云ふ)動物は四足を有す、故に人も亦四足を有す。此論法に於て人＝企業合體、動物＝獨占、犬と云ふ動物＝普通の獨占企業、四足の所有＝獨占價格の存在、此の如くあてはめて見れば、これが其儘河上博士の議論の組立となる。」

(2)河上博士の反駁。「私（河上博士）は斯樣な說明によつて私の議論の間違を發見することが出來ない。或る一定の標準によつて、人も動物であり、犬も動物あるとせらるゝ以上、人と犬との間に何等か共通のものがなければなるまい。假に兩者の共に動物とされた標準が、例へば動くと云ふことであるとするならば、その動くと云ふこと及び之に必然的に伴ふ一切の現象は犬において發見せらるゝと同時に人においても亦た發見せらるべきである。もし其の標準が、博士の例示されたる如く四足の所有といふことであるならば『人は動物である』『故に人も亦た四足を有す』といふことにならざるを得ぬのである」（社會問題研究第四十七册二六頁）

私は思ふ。河上博士は犬も人も動物である以上、動物としての共通標準は共に之を有すと云はれる點に於て勿論誤りはない。しかし私はその事を爭ふのではない。たゞ犬に就いてのみ確められたる四足の所有を直に、犬と等しく動物なるが故に人の上に移し、人も亦四足を有すと云ふ事が誤りであると云ふのである。等しく獨占なるが故に、狹義の獨占に

ついてのみ確認し其存立を證明せられたる所の獨占價格を、企業の獨占にもまた認むるのを誤れりとなすのである。前例において、問題の所有を物の共通標準とはなして居ない。河上博士は私が之をかゝる標準となしたりと云ふ論據の上に自分の立場を辯護せらるゝが、何を證左として此言をなさるゝか。

博士は語を續いて曰く「私は是節の文章を通讀して、其處には只だ一定の斷案の繰返しのほか何物をも發見し得ざることを、頗る遺憾とする。博士（高田）の言はるゝ所は、河上は企業全體が一種の獨占をなす事から、直ちに、または躊躇なく獨占の場合なるが故に、總ての企業には一種の獨占價格が伴ふと云ふ推論をしゐると云ふことゝ（中略）、博士の見らるゝ所によれば其れが問題だといふことゝ、此の二つが只だ斷定されてゐるに過ぎない。何故資本家階級の所有に歸する不勞所得を、一種の獨占に本づく剩餘價格の所産と見ることが出來ないか、その積極的の理由は前掲の文章に少しも述べられてゐないと、私は思ふのである」（同上二七頁。）私はこれに對して次の如くに答へざるを得ぬ。第一。河上博士が直ちにまたは躊躇なく總て企業には獨占價格が伴ふと云ふ推論をせられたと云ふ斷案の繰返しをしたのは事實の確認を表明したに過ぎぬ。赤きものは赤しと云ひ無いものは無いと云ふより外に仕方がない。博士が生産力遞減の法則によりて剩餘價格を說明せられたる部分には勿論複雜なる議論の組立てもあるが、クラアクの分配論と同樣なる見方は現在の自分の考にないと云はれる以上、私はそれを離れて見ねばならぬ。然る以上、其獨占論のみを見てかく云ふ外はないのである。第二。何故に不勞所得を一種の獨占に本づく剩餘價格の所産と見ることが出來ないかの積極的理由を私が述べぬと云ふことであるが、これは「私自身かく見るを得ずと云ふ理由を擧げよと云はるゝか」、「河上博士の議論の組立からかく云ふを得ずと云ふ理由を述べよと云はるゝか」と述はざるを得ぬ。（イ）後者であれば答へ得る。河上博士の議論では企業の獨占から剩餘價格の成立する筈であるであると云ふ確證がない、故に企業によりて利潤が常に伴ふとし

ても、それが企業の獨占から來るとは斷言する譯に行かぬ。（ロ）前者であれば次の如く答へる。河上博士の議論の吟味の場合であるが故にたゞ其理論の當否を見たのである。私自身の主張は私の第一回の論文に述べてゐる。即ち企業の獨占あるも靜態には超費餘剩なし、故に所謂剩餘價格は企業全體の獨占の結果に非ずと云ふのである。このことは私の他の論文『利子の嚴密動學說』（經濟學研究特に三〇七頁以下）に詳述してゐる。

四、經濟原則と剩餘價格との關係

河上博士は次に、經濟原則と剩餘價格との關係について述べられてゐる。此部分は、前二回の論文に於て公にしたる私見に對し、反駁の鋒をむくる事によりて、其立場を擁護せむとせらるゝものである。

私は前にかう云ふ事を述べた。河上博士は費用の最終單位の價格が其（單位の）生産物の價格をこゆる間は生産が擴張せられるけれども、生産力遞減して二者相等しくなればそれ以上に生産が擴張せられない、此制限によりて、かの限界單位以前の費用單位は費用以上の生産力を擧げてゐる、ここに剩餘價格が成立するのである、而して此制限は獨占の故であると說かれるが（此見方そのものが正しくないけれども姑く此立場を許して、云はゞ内在的批評を下してゆけば）、此生産の制限は獨占の故ではない、生産物の價格が費用の價格をこえては生産しないと云ふことは、經濟原則の作用である。何も企業が一階級の獨占に屬するからはじめて存する事柄ではない。此見解に就いて、河上博士は此たび、三のことを主張せられると、少くも私はさう思ふ。

第一。私（高田）の云ふ經濟原則は資本家的經濟原則、即ち企業獨占の存する社會の經濟原則ではないか、それでゐて、資本家的社會に存する剩餘價格が少しも企業獨占の結果でないとはどうして云へるのであるか（同上二七一—三〇

頁）。

第二。私は「資本主義制の下に行はるゝ歴史的法則を、自然的法則と置き換へて概念する」ことをせずと云ふ事を或程抽象的には明言してゐるが、行論の事實の上ではやつてはゐないか（此點私には博士の議論明瞭でないが）（同上三〇―三二頁）。

第三。私は剰餘價格の成立を以て私有財産制度の當然なる結果であると云ふ。それは企業獨占の結果であると云ふのと事實に於て何の差異あるか。

私は以下順次に此三點について答辯を試みる事により、博士の主張に何等の根據なき事を明にしたいと思ふ。それは私見の誤解と云ふよりも不然なる無理解の上に立つてゐる。此無理解の爲に甚だ議論が運び悪い。しかしそれは何れにせよ、私は自分の考を述ぶるに先たち、豫め二の事柄を述べて置く。

（A）經驗科學に從事するものは一般に原因と條件とを別ちて考へる。或る事象の生起に對して著しき影響を有するものの A B C D……等のうち、B C D…等はやゝ廣く一般的に存立するがそれ丈けにては此事象Xを生ぜず、たゞAが加はるに及びてXが生ずとする。此時Aを原因と云ひBCD等をXの條件であると云ふ。而してXは結果と云ふ言葉の廣狹に從ひ（a）Aを原因とする結果である即ちAのみの結果であると云ひ、（b）又はBCD等の條件によりて決定せらるゝ結果即ち、Aの結果たると共にBCD等の結果であるとも云ふ（因果の認識論的分析は今の私の仕事ではない、たゞ此常識的なる述べ方が議論を片づけるに十分である）。

（B）私は河上博士の云はるゝ企業獨占による生産制限が剰餘價格を成立せしむと云ふ命題を支持しない。正面より之に反對してゐる。私自身は動的變化が利潤即ち超過餘剰を生むと考へる。たゞ博士の主張に内在的批評を加へむが爲

に、所謂生産力遞減の法則を中心として假に考へると云ふ見方を試みたまでである。

さて私の論駁に移る。

第一の點。此點につき河上博士は先づ私の云ふ經濟原則即ち經濟主義を如何に理解すべきかにつき留意すべき二の點ありとなし、一、「犠牲が最小だといふ方を主にするか、報酬が最大だといふことを標準にするか、」最大の差益を標準にするか、二、犠牲報酬の内容を價格とみるか、又はそれ以外のものと見るかがそれであると述べられてゐる。進みて、「『資本家的に觀念する限り』經濟原則に於ける報酬も犠牲も共に價格なりとなし、此原則はかゝる價格に於ける最大差益を目標とするものなりとの解釋が加へられる。此點、私も亦同樣に考へてゐる。然るに博士はこれを土臺として次の議論を試みられてゐる。『今私（河上博士）は博士が謂ゆる經濟主義の原則を、以上述べたるが如き意味においての、「資本家的意義に解釋して居られると思ふ者である。資本家が生産手段を獨占することによつて、從つて勞働者が賃勞働者となることによつて、犠牲が始めて費用の價格となり、報酬が始めて生産物の價格となり、且つ此の犠牲と報酬との差益を最大ならしむることが始めて生産の目的となるに拘はらず、資本家的に觀念された斯かる内容を有つた經濟原則を以て、「根本の前提とし共通の約束としておいて、然る後に、かの資本家階級全體に向つて不勞所得を齎すところの剩餘價格の成立を以て、それは少しも階級的獨占、企業全體としての獨占の結果ではない、たゞ經濟原則の當然の結果であると斷定されたのである。私から見ると、それは溫度が高いのだと云はれてゐるのと、同じことに聞える』（同上二二九―三〇頁）。

この論駁は第一、私見の無理解の上に立つ見當違ひの議論である。私は剩餘價格の成立を以て經濟原則の當然の結果であるとは毛頭認めて居ない。私は博士の試みの如く、「報酬遞減の法則を中心となし生産因子の一部分を固定せしめて」

他のものに變動を加ふれぱと云ふ考へ方を飽まで否認してゐる。而して剩餘價格の原因を經濟的變動そのものに認めてゐる。私が『かの資本家階級全體に向つて不勞所得を齎すところの剩餘價格の成立を以て、それは少しも階級的獨占、企業全體としての獨占の結果ではない、たゞ經濟原則の當然の結果であると斷定されるのである』と述べらるゝが、其證據いづこにありや。第二。博士は企業一般に剩餘價格の伴ふ所以をば企業者が其獨占的地位の利用により、生産額を費用が收益をこゆる點まで擴張せずと云ふ事にありと、主張せられたるに對し、(同一の見方の上に立つとすれば)私は生産をかの限界以上に擴張せずと云ふのは獨占的地位の利用によるに非ず、他人が同樣なる企業を營み得ると得ざるとは此制限に關係なし、たゞ經濟原則の作用によると述べた。今假に、收益と云ひ費用と云ふものが價格を意味するのは一に企業の獨占によると云ふ河上博士の見方を許すとしても、此斷定に何の變改を加ふる必要ありや。收益費用が價格を意味すること自體に何等生産をかの限界に制限せしむる力はない、それが價格を意味しても、かの原則の作用なくばこれを超えて生産の擴張せらるゝ可能がある。進みて云へば、經濟原則に於ける收益費用が價格を意味するのは資本家的經濟組織の結果であると云ふ主張にも賛同し得ない、私は反問するに單なる商品生産の經濟に於ける價格と經濟原則との關係如何と云ふことを以てせむとするものであるが、此點は今姑く措く。第三。河上博士は私の經濟原則が資本家的經濟原則であることを主張することにより、『少しも階級的獨占、企業全體としての獨占の結果でない』と云ふ文句を非難せらるゝが如きも、それは肺病は少しも人間生命の結果ではない(不攝生の結果である)と云ふ文句について、肺病と云ふことが既に生命を豫想するではないか、少しも生命の結果でないと云ふべきに非ずと云ふ非難に同じ。私は生産をかの一定限界に止むる原因を求む、其條件を求むるのではない。

第二の點。今此點に關する博士の主張を述べる。『博士(高田)は其の著社會學原論の一節を引用して、自分は社會

法則をば一定の歷史的段階に關する法則であると云ふことを證明された。私は之によつて博士が抽象的には斯樣に明言されてゐることを承知した。しかし『或る個人が自分自身のことを何う考へてゐるかによつて其人を判斷する譯には行かない。』『社會法則を抽象的には斯く說明して居られる博士が、當面の具體的の場合に、その謂ゆる經濟法則を果して如何に解釋されてゐるかゞ、今私の問題とする所である。』而して高田にありて、『犧牲は忽ち費用の價格となり、報酬は忽ち生産物の價格となつてゐる。かくて博士の謂ゆる經濟原則は完全に資本家の經濟原則となつてゐる。』（同上三〇——三一頁）。私は此議論に於ける博士の主張、私が行論の事實の上では經濟原則を永久的な自然法則として考へてゐるではないかと反駁されなければならぬ行掛りにあると信ずるが、所論の內容は全く反對となつてゐる。博士は私の爲に「私（高田）が此原則を資本家的經濟と云ふ一つの歷史的段階に屬するやうに觀念してゐる」と說かれてゐる。博士の所謂『檢事兼辯護士』の役目は博士自身によりて營まれた樣に思ふ。若し然らずとならば、此議論一體何を意味するか私には全然不明である。

第三の點。河上博士は次に論じて曰く『餘剩價格の成立を以て、一方には此の如く經濟原則の當然の結果であるとされてゐる博士（高田）は、他方には——同じ章句の續きにおいて——私有權制度の當然なる結果ともされてゐる』（同上三三頁）。此論難の目標となれる私見は次の通りである。

『博士によれば（河上）（中略）剩餘價格は企業の獨占行はれ、此獨占を利用して獨占者が企業の經營をば自由に左右し得る事に基くとせられる。企業者は何故に獨占的地位を利用しなければ其經營を自由に左右し得ざるか、經營を自由に左右する事は生産財の自由處分、云はゞ私有權制度の當然なる結果ではないか』（經濟學研究四九九頁）。

（イ）河上博士によれば私は剩餘價格が私有權制度の當然の結果であるものと說く者である。博士は何を根據としてか

ゝる見當違ひの斷定を敢てせられるか。私は企業者が企業の經營を自由に左右することを以て私有權制度の當然なる結果であるとなしてはゐるが、剩餘價格を以て其結果なりとはしてゐない。（ロ）假に一歩を讓りて、博士の所謂一種の生產制限に就いて、これが生產財の自由處分、云はゞ私有權制度の當然なる結果なりとなしたりとて、これを他方から經濟原則の結果なりと見たると、何の矛盾ありや。經濟原則は一定の點に於て生產を制限せむと意志せしむる原因であり、私有權制度は此意志の實現を可能ならしむる條件である。一方の結果であると見ると共に他方の結果であると見るのは何等相矛盾する事柄ではない。制限の意志又は動機を中心にして見る時は經濟原則に基くと見ざるを得ず、今博士が制限實行の能力を主眼として見らるゝが故に之に反對して、そは私有權制度に基くと云ふ。之を以て『私の理解し得るところでは無い』となす博士の言葉が寧ろ私に理解し難きものである。

河上博士は更に語を繼いで曰く『之を問はずして語るに落つとでも言はうか。その博士（高田）の謂ゆる生產財の自由處分を爲し得る地位、それを私は資本家階級の獨占的地位といふのである。勞働者は生產手段の所有から隔離されることによつて賃勞働者となり非勞働者は生產手段の所有を獨占することによつて資本家となり、かくて資本家によつて行はるゝ特種の生產制限の下に、資本家的生產物の價格には常に何パアセントかの剩餘價格が含まれることになる。それはまことに私有權制度の爲すところの、資本の獨占の當然なる結果なのである。博士は口吻だけ檢事の口調を採りながら、私のために事實は辯護士の役目を勤めてゐるやうである。しかし何故に率直に破綻を承認しないかなど尋問されてゐるところは石井某が判事に叱かられてゐるやうで、甚だ體裁が惡いけれども、私には辯護士兼檢事兼判事の話がよく分らないのである』（同上三三頁）。私は河上博士の私見に對する無理解がこゝまでであらうとは豫想しなかつた。（ハ）博士は私が剩餘價格を以て私有權制度の當然の結果と見るものと云ふ前提の上に、此論難を築き上げてゐられるが、此

前提は前述の如く明白に誤つてゐる。從つて私は語るに落つるものに非ず、語りて從落ちざるものである。（ニ）河上博士は生産財の自由處分をなし得る地位は即ちこれ資本家階級の獨占的地位であると云はれるが、私有財産の制度が直ちに資本家的制度であるとは博士の驚くべき發見である。博士によれば資本家階級の獨占的地位は封建制度の昔から、否溯りては氏族制度の崩壞により家長制度の確立したる昔から、或は溯りては原始社會から、存在してゐなければならなかつた事になる。これは私有財産權と資本家階級の獨占的地位とを同視せらるゝ當然の結論である。（ホ）『かくて資本家によつて行はるゝ特種の生産制限の下に、資本家的生産物の價格には常に何パアセントかの剩餘價格が含まれることになる』と説かれるが、此常にが當然論證を要する事柄である。私は靜態概念を中心として博士の立場を論駁し其教示を請へるに拘はらず、たゞ繰返して同一の斷定を主張せらるるに止まるのを遺憾とする。（ヘ）私が河上博士の爲に事實は辯護士の役目を勤むと せられるが、これは私見の無理解に基く。博士は私が、（a）剩餘價格は私有權制度の當然なる結果であるとなすものとし、（b）然るに、私有權制度の所有は資本家の獨占的地位なりと見らるゝが故に、私見には剩餘價格は獨占の結果なりと云ふことに歸着すと云ふ推論を下し、かくて私は博士の見方を事實に於て辯護するものと考へられたのであらう、これ以外に此解釋の道はない。しかし（a）は全然私の主張する所ではない。（b）は私共の採り得ざる、而して明白に誤れる博士の見解である。かくて私は何等博士の議論の爲に辯護の地位に立つものに非ず、飽迄その『破綻の承認』の實現せらるゝ日をまつものである。私は河上博士が『私には辯護士兼檢事兼判事の話がよく分らない』と斷言せらるゝ前に、何故に私見を理解したる後に批評を下されざるか、と思ふ。私に淺學不敏のものあではるが河上博士の所論（此問題に關する）については（少くも大體の骨子に關して）十分に理解し得たつもりであり、而して此理解の上に議論を試みてゐる積りである。然るに河上博士は少くも私の利潤の説明に關して無理解のまゝに議論

をつゞけ種々なる論難を試みられてゐるとより思へない。これでは、私は最初に私の論斷のすべてに亘る答辯の與へられざるを遺憾なりと述べたけれども、「これから先きまだ三十頁以上のものがある」「三十頁あまり飛ばして」と云ふ態度をやめて一々教示を忝くした所で相互の議論は同じ所に停滞する他はなかつたらうと思ふ。私は博士に對して「未熟なる私見」の理解の上に論難と教示とを與へられたことを願ふものである。

さて、以上説きたる所を以て、私は河上博士の第二の答辯に關する私見の叙述を終へた。結局私は當初の私見に何等の改訂を加ふる必要を見ず、博士の教示に承服すべき點を見出し得ざる事を遺憾とする。

五、資本增殖の問題

然れども私はなほ一つの仕事の殘れるを思ふ。それは私の再論の補完とも見るべきものではあるが、單なる補完としては餘りに大なる題目である。それは資本家的生産又は資本主義生産の必然的行き詰りの問題に關す。

私は私の第二回の所論(剩餘價格再論——經濟學研究四七五頁以下)に於て、博士が擴張視生産の不可能を理由として非勞働者被扶養論を辯護せられたる立場に論及した。然れども此際の所論は、なほ博士の主張を駁するに十分なりしとは云へ(少なくも私はかう考へてゐる)、此主張の前提となれる點の吟味を省略してゐる。此取扱はざりし部分に關する多少の考察を述べ、以て河上博士の剩餘價格の窮極の負擔者は勞働者なりと云ふ意見を拔本的に覆へしたいと思ふ。」

私をして少しく問題の來歷を說かしめよ。私は最初の論文に次の如く說いた。

『博士(河上)によれば、企業が全體として一種の獨占業を形成する結果として、獨占價格が成立し、從ひて其中には剩餘價格が含まれる。此剩餘價格は窮極に於て消費者の負擔する所となる。此點より見て勞働者と企業者とは共立

場を異にする。勞働者は其全所得を擧げて消費者である。從ひて自ら剩餘價格即ち資本利子を負擔しなければならぬ。然るに企業者は成程生産財をば生産費以上に他人より買入るゝ事によりて、他の企業者の資本に對する利子を負擔しつゝありと雖も、之と同時に他方に於ては更に自己の生産物をば生産費以上に他の企業者又は消費者に賣り付くる事により、一旦自己の負擔せし利子を他人に轉嫁せしむるのみならず、自己の放下資本に對する利子をも併せて此等の人々に負擔せしめる。かくして企業者は其支拂ふ利子を他に負擔せしめるが、勞働者はたゞ消費者として自ら之を負擔する外無し。而して、勞働者は自己の商品たる勞働を其生産費にて賣る事を餘儀なくせらるゝ故に、剩餘を得來る道が無い。

私は思ふ。博士の立場を論理的に貫き通すとすれば、勞働者が利子の負擔者なりと云ふ結論は生じ來らない。其故如何。勞働者は其勞働と云ふ商品の生産者である。而して此商品をば生産費を以て賣る。此生産費を構成する生産財は何物なるかと云ふにそれは其買入るゝ所の消費財に外ならぬ。買はれたる消費財の價格は剩餘價格を含む。而も此價格が勞働の生産費をなす以上、勞働者は其支拂ひたる剩餘價格を勞働の需要者に轉嫁し、これより受取るのである。支拂ひたる利子を自己の商品の買手より受取る點に於て勞働者も企業者も異なる所はない。たゞ企業者の如く「自己の商品の上に生産費以上の新なる剩餘價格を要求する能はざるのみ。此の如く見來れば、勞働者にありて消費財が同時に勞働の生産財たる以上、勞働者は利子の負擔者ではない。』

『赤手空拳の外何物をも有せざる勞働者は其勞働を生産費を以て賣るが故に、何の剩餘をも有せず。如何にして之を負擔し得るか。何物を掠奪せられ得るか。若し勞働者の掠奪又は負擔によりて利子が成立する事を說かむとするならば此利子の根據を勞働者の支拂ふ價格そのものに求むべきに非ず。彼は剩餘を支拂ふとも之を轉嫁するに非ざれば生

き得ざるものなればなり』（經濟學研究四七〇―四七二頁）。

これに對して、河上博士は其最初の答辯中に次の如き反駁を述べられたのである。

『（前略）から考へてくると、問題は全く解決のしやうが無くなるが、私は正に到底解決のしやうの無い斯んな問題を含んでゐると云ふ點に、資本家的擴張複生産―資本増殖―それ自體に内在するところの本來的根本的の矛盾を見出すのである。』『博士（高田）が私の理論を推して遂に私（河上博士）を窮地に陷れ來手賃銀の外何物をも有せざる勞働者は其勞働を生産費にて賣るが故に何の剩餘をも有せず如何にして之を負擔し得るか、何物を抛棄せられ得るか』と詰問してゐるけれども『しかし斯樣に私（河上博士）の理論が行詰まるのは資本主義制の下における剩餘價値の實現そのものが事實上に行詰るからであり、從て私は其の事を自分の議論の缺點と見ずして、寧ろ其の瞭解に非ざることの一の證據となさんとするものである』（社會問題研究第四十三冊三六頁）。

之に關して私は再度の論文（剩餘價格再論）に次の如くに說いた。『然れども博士はこれによりて何事を論證せられたるか。それは資本主義的生産が純粹なる限り、それが必然的に行き詰る事、詳言すれば擴張複生産の出發點より不可能なる一事である。私は博士の努力の頗る大なるに拘はらず、此論證が果して成功せるや否やに關して一種の疑問を抱く。しかし此點は今立入りて論ずる事を避ける。兎に角に今論證せられたる所は擴張複生産の不可能である。而もこれと私が論結し來れる點と直接に如何なる交渉あるべきか、私の不敏なる、全然之を理解し得ない』（經濟學研究五五〇―五五一頁）。而して私は當時、假に河上博士の擴張複生産行き詰り說を認め、その上に博士の勞働者利子負擔說が維持し得らるゝやと云ふことに問題を限局し、結局之を否認し去つた。かくて河上博士の持出されたる前提そのものには立入ることを止めたのであるが、併しながら、其見解から一切の據り所を取去らむとせば、此前提それ自體を吟味する必要

がある。私が再論の補充として此問題を取扱はむとするは、かう云ふ事情に基く。これは今私の敍述の順序から云へば補遺的地位に立つのであるが、其問題としての重要さ、特別の考察を要して餘りある事は云ふまでもない。それはかつて福田博士と河上博士との論爭の中心題目をなしたる事、周知の事實である。此或は議論し盡されたるかの觀ある問題を今私の取扱ふのは、先輩の教示によりて啓發せらるゝ事少からざるものゝ、私は私自身の眼を以て物を見ざれば、議論の上に落ち着き點を有しないからである。

六、河上博士に於ける擴張複生産不可能論の論據

河上博士によれば資本主義的組織に於ける擴張複生産は當然行き詰らざるを得ざる運命をもつ。「マルクスの資本複生産の表式は資本主義的生産が到底行き詰らざるを得ざる必然性を有する所以を、數學的の確さを以て吾々に指示するものである。純粹な資本主義の組織と云ふものは嘗て世界に存在した驗しがない。しかしマルクスが、この複雜極まる現實の世界から資本主義の特徴を摘發し、之をその純粹性に於て、邪魔になる附帶の諸状態から離して之を理解するといふ方法に於て純粹な資本主義的組織の下では、擴張複生産は初發の第一歩から絶對に行き詰まるものだといふことを、悟らざるを得ざらしむるの機縁を吾々に供へてくれたことは、まことに彼れの學問的功績の最大なるものゝ一つであらう」（社會組織と社會革命二二三頁。）然らば、博士は如何なる理論的組み立てによりて、此必然的行き詰りを主張せらるゝか。これは二に區分して考ふる事が出來る。其一は福田博士とツガン・バラノウスキとの「資本增殖の可能にして資本主義的生産の行き詰らず」と云ふ見解に對する否定的批判即ち云はゞ消極的議論にして、其二はマルクスの、複生産の數表により行き詰りを必然的なりと論證する積極的議論である。從つてこれに對して批評を加へ十分なる吟味

を遂行せむとせば勢ひ一方に於てはツガンの主張にまで溯り、それに對する河上博士の論難を紹介し、他方に於てはマルクスの擴張複生產の理論と其數表とを叙述し、これから來る河上博士の推理を示さなければならぬ。而かもこれは極めて煩瑣なる仕事にして、讀者を苦しむる事多く、敎を請はむとする河上博士にとりては何の必要もなき事柄なるが故に、之を出來得る限り簡單に述ぶる事とし、議論の筋に必要なき限りは、其多くの部分を省略したいと思ふ（若し、此點の詳細について知らむとせば、福田博士社會政策と階級鬪爭、河上博士社會組織と社會革命の二書を參照せられむことを望む）。

ツガンの見方では可變資本即ち勞銀の總額從ひて勞働者階級の消費は減少し、且つまた、資本家の消費は少しも增加せず、餘剩の殘餘はすべて資本化せらると假定しても、生產手段の生產さへ擴張せられてゆけば、資本の增殖、擴張複生產は何等行き詰る所なく、無限に行はれ得る。今左表に於て p を生產手段（生產要具） a を支拂はる勞銀、 r を利潤とする。而して、每年の支拂はるる勞銀の減少率を二割五分、第一年の資本家の消費は總利潤の四分の三、此消費額は年々變化なく、殘餘は資本化せられる。

	（一）生產手段の生產	（二）勞働者消費料の生產	（三）資本家消費料の生產
第一年度	1632p + 544a + 544r = 2720	408p + 136a + 136r = 680	360p + 120a + 120r = 600
第二年度	1986,8p + 496,8a + 828,7r = 3312,3	372,6p + 93,2a + 155,2r = 621	360p + 90a + 150r = 600
第三年度	[illegible],4p + 494,6a + 12[illegible]0r = 4309	366,9p + 68,7a + 175,7r = 611,3	360p + 67,5a + 172,5r = 600

『右を說明して見よう。第一年度に於ては生產用具の價値は支拂賃銀高の三倍と假定し、支拂賃銀高と利潤とは同額と假定する。そこで假りに（一）生產用具の生產に於ては、後の二者を五四四とすれば、生產要具高は、其三倍の一六

三二である。此三者の總計が、生產要具生產一ヶ年の結果である、其の高は二七二〇である。(二)勞働者消費料の生產に於ては、後の二者を各々一三六とすれば、前者は四〇八で、三者總計六八〇となり、(三)資本主消費料の生產に於て、後の二者を各々一二〇とすれば、前者は三六〇で、三者總計六〇〇となる譯である。ところが第二年度に於ては支拂賃銀高(a)は二割五分減少し、利潤高(r)は斯く減じた高丈け增加すると假定し、資本主の消費高は其價値が變らぬものと假定してあるのだから資本主消費料の生產に於て次の變化が起る。"利潤の高は第一年度に於ては(一)五四四、(二)一三六、(三)一二〇であるから總計八〇〇であつた。前の假定によりて、其の二割五分即ち四分の一が資本化せらる、即ち二〇〇が資本として蓄積せられるのである。仍て資本主が第二年度に於て自己の消費に充て得る高は 800−200=600 である。資本主の消費高は變らないものと假定した、即ち其高は常に此六〇〇である。第一年度の終りに於ては、生產要具は二七二〇丈け生產せられたことは、前に算出した通りである。此高は第二年度の生產に全部投下せられて、生產要具用一九八七・四、勞働者消費料生產用二七二・六、資本主消費料生產用三六〇の割分で分割せられる。同じく第一年度の終りに於ける勞働者消費料生產高は六八〇である。此高は即ち第二年度の三部門に於ける支拂賃銀高の合計 496.8+93.2+90=680 である。即ち全部其儘第二年度に於ける勞働者消費用に充てられるのである。資本主消費料に就いても亦同樣に考へることができる。第二年度と第三年度との聯絡も亦同樣なる見方をすゝむる事によりて自ら理解せらるべきによりこれ以上の引用を省略する(河上博士社會組織六八頁以下、福田博士社會政策四九五頁以下)。

かくて人間の消費はよし減少しても、生產手段の生產的消費が增加することにより、擴張複生產從て資本の增殖は何の差障りもなく行はれ得べきであると見る、これツガンと福田博士との立場である。然るに之に對して河上博士は根

本的否認の立場をとられる。其批評は四段に分れてゐるが少くとも私の見る所では其根本的決定的なるものは其第三段、即ちツガンの數表の檢討である。河上博士によれば擴張複生産の不可能を必然ならしむるのは生産物の賣れないと云ふ事である。然るにツガンは生産物に對して際限なき販路を見出す。「福田博士やツガンは、此の際限なき販路を何處に求めつゝあるかと云ふにそれは此等の物を生産する資本家階級それ自身に於てである。即ち資本主によりて際限なく生産せられたる物を、際限なく需要する所の購買者は資本主それ自身であると云ふのである。然らばツガンは斯かる主張を何によつて支持してゐるかと云ふに、それは僅に數行より成る簡單な數字表に過ぎない」（社會組織と社會革命九四頁）。從ひてツガンの數表の成立すると否とが無限擴張可能説の是非に對して決定的意義を有すと見なければならぬ。」

かくて河上博士がツガンの數表に下されたる批評は其擴張複生産の無限可能説に對する論難の骨子をなすものであると考へる。而して此論難は二の論據の上に立つ。

『第一の理由は享樂財の生産額が年々減少してゐるのに、生産手段の生産額が際限なく年々増加するが如きことは、事實に於てあり得ないと云ふことだ』（同上九八頁）。

『理由の第二は、ツガンは其の數字表に於て資本家の生産した生産手段をば、資本家同志をして相互に買取らしめてゐるが、私の見る所によれば、資本家が相互に斯樣なことをしてゐるのでは、彼等は到底利潤を得ることが出來なくなる筈だからツガンの假定は資本主義の下に於て所謂實現され得べからざるものだと云ふに在る』（同上一〇〇—一〇一頁）。

以上は河上博士の資本主義生産行詰り説の消極的部分の眼目である。次に其積極的部分を見よう。これは次の如くに要約する事が出來ると思ふ。擴張複生産の差支なく進行し得る爲には二の條件が必要である、即ち一方に於ては各種生

産部門の比例的關係が保たれてゐることであり、他方に於ては生産せられたるものが賣れると云ふ事、即ち社會の消費力が生産に應ずると云ふ事である。然るに資本主義生産にありては、此比例的關係は容易に保たれ得るとしても擴張複生産を營まむとする限り、其出發點からして生産物が賣れ殘る。かくてかの條件の充されざる事は必然的である。即ち資本主義生産に於ける資本の增殖、擴張複生産は資本主義の純粹なる限り、最初の第一步より行はるゝ事を得ざるものである。『各種生産業の間に一定の比例的關係が維持されてゐなければならぬと云ふことは、あらゆる社會組織の下における複生産を支配する法則である。だから資本主義の社會に於ける複生産も、固よりその支配を免れ得ないのであるが、しかし資本主義的生産といふ特殊の組織は、この一般的拘束のほかに、たほ別に特殊の拘束を有する。それは全生産物が一旦は必ず貨幣（又はその代用物）に對して賣られなければならぬと云ふことである。』『さうしてマルクスの擴張複生産の表式そのものは、實は生産物が社會の消費力不足のため、必ず一部分しか賣られぬ狀態にあることを、明瞭に指示するものである』（同上一七五—一七六頁）。

今擴張生産の出發點たるべき年度即ち『基本年度』に於ける生産を次の如しとする。cは不變資本、vは可變資本、mは剩餘價値、IとIIとは生産業の部門を示す。

I.　$4000c+1000v+1000m=$　生産手段　6000.

II.　$1500c+750v+750m=$　消費資料　3000.

この消費資料三〇〇〇のうち、後に說明せむとする次年度の擴張を豫想しても、一五〇單位だけはどうしても賣れ殘る（これだけでは說明著しく不足にて理解し得られない、十分なる說明は何れ後篇に於て述べる筈である）。それが賣れ殘ればIIの部門の生産業者は其商品資本を、少なくも一部、貨幣資本從って生産資本の形に轉化せしむること能はず、生産

の擴張を營み、剩餘價値の資本化を行ふ譯に行かぬ。然らば、この一五〇單位は如何にして、又何故に賣れ殘らざるべからざるか（價格を引下げざる限り――此點には今立入らない）。それは需要者を見出さゞる故である、社會の消力費の小なるが故である。

さて、私の見る所によれば、河上博士が資本增殖の無限可能說に對して、資本主義生產の必然的行詰りを主張せらるるこの論證は、少くも私の知る限りに於て、以上の二部分より成る。此二部分に於ける理路の當否を吟味する事は私の仕事である。先づ消極的論證から出發する。

七　ツガン數表の檢討の檢討―其一

私はツガンの數表に對する河上博士の批評の吟味に入るに先だち、自分の立場を簡單に述べる（後にそれを稍詳しく說明する積りであるが）。私は後に說くが如く、河上博士のツガン批評を到底成立し得ざるものなりと考ふるものであるが、それで直ちに私を以てツガン說の贊同者なりとなすものあらば、これ匆急の速斷である。甲に對する乙の批判を支持すべからずと見る丙の見解は必ずしも甲の見解と同一ではない。私はツガンの數表に示したる所を以て一の『客觀的可能』なりと見る、而して、資本主義の社會にありては、事實として存し得べからざる架空の數字、紙上の算術演算なりとなす河上博士の見解とは此點に於て相容れず。然れども此數表よりして容易に『人間の消費の代りに、生產の擴張即ち生產手段の生產的消費が行はれ、恰も經濟が人間に役立つのでなく却て人間が經濟に仕へてゐるかのやうに、總てが圓滑に進んで行く』と云ふ斷定は下し得べきものに非ずと思ふ。このことは論術の中に自ら明にせられやう。

河上博士がツガンの數表に對して『プラスマイナスの計算に一つも間違つた所は無いのだから、算術の答案として

は、私は之に滿點を附ける。只經濟學の答案としては、いくら贔負目に見ても、三十五點以上は附けられないと、せらるゝ第一の理由は前述の如く、享樂財の生産額が年々減少してゐるのに生産手段の生産額が際限なく年々增加するが如きは、事實に於て在り得ないと云ふにある、然らば此主張の根據如何。博士によれば「總て生産手段なるものは直接か間接か、間接の又間接にかは必ず享樂財を生産するための手段となるゝのであるから、その手段となるべき物のみ無暗に殖えて、その目的とする所の享樂財の生産が却つて減少すると云ふやうなことは、決して在り得ないからである。だから數字表を事實に合はすためには、第一部門に於ける生産手段の生産額の增加につれて、第二部門乃至第三部門に於ける享樂財の生産額が增加するやうに訂正しなければならぬ。」此主張は一讀誠に尤もらしく見ゆる、然ども私共は一歩立入りて考へなければならぬ。此場合に於ける生産額とは果して何物を意味するか。事情を單純ならしむる爲、生産せらるゝ消費財はその種類性質に於て變化せざるものと假定しよう（此假定はマルクスの見方にもツガンと櫛田博士との見方にも河上博士乃至ロオザ・ルクセンブルクの見方にも、容れられざるものではないと思ふ）。ツガンの表に於ける消費財の價値は成程年々減少してゐる。然れどもこの事は必ずしも消費財の數量の減少を意味するものではない。從ひて其使用價値の減少を意味するものではない。吾後に說かむとするが如く、ツガンの數表の示す所によれば、それは消費財の數量の增加を意味し得ない筈はないと思ふ。從ひて若し生産額を生産せらるゝ財の數量の意味に解する時はツガンの數表の解釋として誤つてゐる、かの數表は決してかゝることを必然的に意味するものではない。何となればツガンの數表はたゞ消費財の價値の年々減少することを示すのみ。而してかの生産額を以て生産物の價値の總量又は價格の總額の意味に解すとすれば、享樂財の生産額が年々減少して生産手段の生産額が年々增加するが如き事は、事實に於てあり得べからずと云ふ河上博士の主張は、私思ふに何等の根據なきものである。

河上博士の主張の眞意は消費財ありての生産手段である、故に消費財の産額減少する時は之に應じて生産手段の産額も減少すべし、生産手段の産額増加する時は之に應じて消費財の産額も亦増加するを要すとするにある。然れども試みに今一例を考へる。一團の漁夫を想像せよ。彼等は各一日八時間づゝ働きて四尾の魚をとる。其時、勞働時間をもて價値の尺度とすれば、而して價値の本質を勞働にありとすれば、一日間に生産せられたる消費財の價値は八(勞働時)である。假に百日間を通ずれば八〇〇である。然るに彼等各一日二時間を割き百日を費して網を作るとせよ。此網の價値は二〇〇である。彼等は此網の成れる後毎日二時間を費して第二の網を作る傍ら、第一の網——これは百日にして破損し盡す——を以て日々二時間づゝ働きて四十尾の魚を得るとせよ。此四十尾の價値は毎日の勞働二時間と網の消耗部分二勞働時との合計四に過ぎぬ。生産期間百日の消費財生産額は數量に於て四〇〇より四〇〇〇に増したけれども、價値に於ては八〇〇より四〇〇に減じてゐる。生産手段の生産額は其價値に於て〇より二〇〇に増加してゐる。結局前後の二生産期間を比較するに其生産する消費財の價値に於て著しく減少しながら、其生産する生産財の價値に於て零より二〇〇に増加してゐる。かゝる原始的狀態から眼を轉じて考察しても以上の關係に變化はない。例へば資本家と勞働者とより成る一つの社會をとる、而して二の異なれる時期に於ける生産額を比較せよ。二の時期に於て共に單純複生産の行はるる限り、勞働者の數、勞働時間、餘剩價値の大さに變化なくば、生産せらるゝ消費財の價値に變化なき譯である。然るに拘はらず、生産方法に變化あり、所謂迂回的生産が後期に於て著しきを加へたる場合、年々の生産財の生産額の價値は前期のそれよりも遙に大であり得る。生産力の著しき増加あり、同一の生活標準(生活の爲に要する同一の財量の消費)を維持する爲に以前よりも遙に價値の小なる消費財を以て足る場合には、消費財の生産が——其價値總量に於て——著しく減少し、たゞ生産財の生産額のみ——其價値總量に於て——著しく増大してあり得る。單純複生産の二の時期を

選みて比較したるを咎められざらむことを望む、それはたゞ事實の理解を容易ならしめむためである。而して河上博士の主張の事實の上に根據を有せざることを明白ならしめむが爲である。かくて、生産の方法に變化ある限り、其價値の點から見て、消費財の生産額は一樣であり又は減少しても、生産財の生産額は增加する。而もこれはマルクス的立場から考へて當然すぎる事である。可變資本（これは一面から見て消費財の生産額を示すものであるが——高田附記）を犧牲として不變資本の增加することは勞働の生産力增加の普遍的作用の資本家的表現である。CはVよりも大なりと云ふ公式を資本家的言葉から社會的勞働過程の言葉に移すとたゞ次の事丈を云ふ、即ち人間勞働の生産力が高きほど一定量の生産手段を生産物に完成し上げる時間が短い』（Rosa Luxemburg, Akkumulation des Kapitals, S. 18. ）。而して此生産方法の變化（一面からは生産力の增加を意味するが）は決して資本主義生産に於ける偶然的要素と云ふことは出來ない。マルクス的立場から見るも資本の有機的組立の變化は資本の增殖と共に、其集中(コンセントレーション)と共に、進み行く事實である、また、生産力そのものゝ變化は其經濟史觀の公式が當然に要求するところである（私は生産財の生産額が增加して同時に消費財の生産額が減少する可能の存することを、價値に於ける生産額と云ふ見方から考察した。此點は價値計算と價格計算との聯絡から、なほ一段の考察を加ふる方が議論を詳密ならしむる爲によいとも考へるが、餘り煩瑣に亘るから、これは後日の機會に讓りたいと思ふ）。

生産手段の生産額の增加するにつれて消費財又は享樂財の生産額の增加あることを要すとなすカウツキイ（Kautky Krisentheore. Die Neue Zeit, XX. Jahrg. 2. ）と河上博士との見方は生産方法に變化なき限りと云ふ假定の下に於て眞理である。然れども、資本主義生産と切り離すべからざる生産方法の變化を考へ來れば、これ到底成立し得べからざる見解である。河上博士は曰く『此數字表を事實に合はすためには第一部門に於ける生産手段の生産額の增加につれ

て、第二部門乃至第三部門に於ける享樂財の生産額が增加するやうに訂正しなければならぬのである」と。而も生産方法に變化ある限り、此命題は成立せず。而してツガンの數表にありては、不變資本と可變資本との割合が年々に變化してゐる。これは正に生産方法の變化そのものを意味すると見なければならぬ。此變化ある限り、消費財の生産額減少してなほ生産手段の生産額は增加し得る。博士は更に語をついで曰く、『享樂財の生産は年々減少してゐるのに、其の享樂財を生産するための手段たるべき生産手段――又は其の生産手段を生産すべき他の生産手段――を無暗に增加したならば、實際の事實としては其の生産手段は之を生産した者の手に無用の長物として殘る。そんな無用の長物を際限なく生産したり買入れたりする馬鹿者は、此の世の中にゐないのである。」（社會組織と社會革命九八――九九頁）。これも同一の見方よりして支持し難いと思ふ。享樂財即ち消費財の生産は減少しても、生産方法の變化が生産手段の生産額增加を必要としたる限り、實際の事實としては其の生産手段は之を生産したるものゝ手に無用の長物として殘る道理はない。

同一なる批評はまた、河上博士の『批評の第一段――生産手段の本質』に於ける主張にも當てはまる。博士は曰く。『生産の各部門に對する生産力の分配につき適當な比例を保たうとするならば、吾々は生産財の生産を擴張するにつれて享樂財の生産をも擴張しなければならぬのである。それは、前にも述べたやうに、生産財と云ふものは、直接にか間接にか、必ず享樂財を生産するための手段として役立つことに於て、始めて意味を有するのであるから、生産財の生産を增加すれば、その增加した生産財を以て享樂財の生産をも增加することにしなければ生産財生産の部門と享樂財生産の部門との間に適當な比例が保てなくなるからである」（同上八〇頁）。然れどもこれまた生産方法の變化を忘却したる議論である。所謂適當なる比例は生産方法の變化するに連れて變化し、而も此變化の方向は大體に於て、消費財の生産額に比し生産財のそれを大ならしめる。生産財の生産額增加ある時は必ず消費財の生産額增加を伴はぬ以上、適當なる比

例が成立せずと云ふ道理はない。」

繰返して云ふ。此點に關する河上博士の議論はすべて生産力の增加又は生産方法の變化を顧みざるところに根本的にして決定的なる難點を有する。而して同一なる見方が資本集積（Konzentration――私はこれを集中と譯したいが）の說明にもあらはれてゐる。これは今私が主題として取扱はむとするところではないが、河上博士の見方に於て生産方法の變化又は差異の顧慮の中に入らざる事を例示せむが爲に說き及ぶのである。博士によれば資本の集積は資本主義生産に於ける必然的傾向であり、而して社會主義的社會を準備する道行である。而も此集積は如何にして生じ來るや。曰く其生産の爲めに固定資本を要する生産物の價格は結合生産費に關する法則によりて定まるが故に。今此點を立入りて紹介しない。かゝる價格は如何なる事情によりて資本集積を必然ならしむるや。「事業の經營上固定資本を必要とする度合が多くなるほど、競爭は物の價格を其の生産費以下に押し下げるのである。」「しかもかゝる狀態の下に事業を繼續するならば、早晩全部の資本を喰ひ盡さなければならぬ。だから競爭の結果は、資力の薄弱なる者が先づ競爭に失敗し、資力の强大な者に併呑され又は自ら破產することになるか、或は「聯合又は合同をなす」に至る（同上二五四―二五五頁）。此說明に於て私の最も解し得ざる事は、競爭による競爭の廢止、即ち集積の傾向が生産方法の差異、組織による節約を中心とせずして（俗語を以つて云へば報酬遞增の法則によらずして）結合生産費を中心とする事である。私は決して博士の說明を以つて誤謬なりとはせぬ。併しながら、その誤謬ならざるは晝間の明るきは星の光るが爲なりと云ふほどのものであると信ずる。否、立入りて云へば、結合生産費の法則によりて競爭に於ける勝敗が決せられ資本の集積專ら之によると解する限り、それは誤謬であると思ふ。今日經濟界に於ける競爭は多くの場合、强者も亦損失を蒙ることによりて、齎まるゝに非ず（幾多の例外はあるが）、强者は多くの利益を得ながらに弱者に勝つ。三井、三菱、大倉の事業の

如き大體に於て之を例證すると思ふ。然りとすれば、主に競爭に於ける優勝を決するものは生産力の大小にあり、資本組立の差異にあり、仕掛けの大小にあり、決して損をもちこたへることの長さにあらず。而して、この極めて平凡なる見方はやがてマルクスに於ける集積說の見方であると思ふに拘はらず、河上博士にありては此の生産力の差異が全然看過せられてゐる。此看過が集積の說明に於て博士を邪路に導きたるが如く、ツガン教授の批判に於てまた博士を邪路に引き入れてゐると信ずるが如何。

こゝまで述べ來らば、河上博士は反對せらるゝであらう。自分と雖も生産方法の變化を認めないのではない、現に『勿論産業の進歩に從ひ、固定資本は次第に重きを爲すに至るが故に、一定の時、一定の社會に存在する生産財は、享樂財に對して、次第に其の割合を增大する。』『だから吾人間が直接に消費する享樂財の代りに、或る程度までは、生財の蓄積が擴張されて行くと云ふことは事實である』と云つてゐる（同上四四頁）。誠に然り。然れども、博士はこれから來るべき當然（少くも私にさう思はるゝ）の結論を抽き來る事を中止されてゐる、其結果、私は博士を以つて生産方法の變化を顧慮せられないと云ひ得る。其故如何。博士語を進めて曰く、『しかし此等の生産財は享樂財を生産するための手段として役立つべきものなのだから、生産財の生産が增加すれば、それに伴ふて享樂財の生産も亦た增加する。例へば紡績機械の生産高が增加したならば（中略）それに伴ふて絲の生産高も亦た增加する。』『機械の生産が增加され、それが順序善く他の資本家によりて買はれて居り、さうして其等の資本家が增加した機械を順序善く運轉してゐるのに、』それに絲の生産が增加しないと云ふことは、全く在り得ない（同上四五頁）。ツガンの數式に於て減少するものは消費財の數量に非ずして其價値の大さである（ツガン自身の解釋について今云ふのではないが）。生産せらるゝものをかく價値として解する限り、生産手段の增加はむしろ消費財の減少を目的として行はるゝとさへ見得る。機械の生産額增加して

綿の生産の増加せざることはあるは寧ろ當然の事實である。生産方法の變化を考ふる時、これは當然すぎる當然であると思ふ。極端に云へば、社會の勞働人口L勞働時間Aの一定なる限り、單純複生産の場合を考ふれば、消費財の生産額をPとする時常にP＝ALである。然るに生産手段の生産額をP′とすれば生産方法の變化（此變化の間には勿論單純複生産が行はれない）につれて、H＝0よりH＝1に極めて近き姿まで變動し得る。消費財Pの値は一定不變なるに拘はらず、生産財P′は0より増加してPに極めて近き大さまでに及ぶのである。繰返して云ふ、此際綿の生産が増加すと云ふことに例へば三十番の綿三十貫の生産額が三千貫となると云ふことではない、此綿の價値百勞働時が百五十勞働時となることである。故に、三十貫が三千貫になつても價値は百より五十に減少してあり得る。

私に今ツガンの數表に對する河上博士の批評の中、第一のものを吟味した。次に節を更めて其第二のものに轉じたい。

八、ツガン數表の檢討の檢討―其二

ツガンの數表に對する河上博士の論難の第一の理由は私の疑問を以てすれば、河上博士特有のものに非ず、たとへばカウツキイにもまた認め得るところである、これに反して其第二の理由に、やはり私の疑問を以てかく云ふことを許さるるならば、河上博士特有の見方である。其内容は前に述べたるが如く、資本家同志生産手段を賣買したのでは利潤を得ることができない、從ひてその假定（資本家が互に生産手段を賣買すると云ふ）は資本主義の下に於て到底實現され得べからざるものであると云ふに存する。然らば其理由如何。（一）資本家は利潤を得むが爲にのみ物を生産する、彼等が利潤を擧げると云ふことは資本家的生産の必須條件である。（二）資本家が其の生産物を相互に買取つてゐたのでは到底此の如き利潤を擧げ得る見込が無いのである。何故といふに、例へば甲たる資本家がAといふ商品を百圓で乙な

る資本家に賣り、之によつて十萬圓の利潤を得ると同時に、更に乙なる資本家はBといふ商品を甲たる資本家に賣り、之によつて十萬圓の利潤を得るとするならば、甲は自分の商品を賣る時に儲けた十萬圓の利潤を乙の商品を買ふ時に失つて仕まひ、乙も亦自分の商品を賣る時に儲けた十萬圓の利潤を甲の商品を買ふ時に失つて仕まふので、甲も乙も差引き何等の利潤を儲け得ざることに爲るからである』（同上一〇一頁）。さて此二の主張にして認めらるゝとせば、ツガンの假定は勿論實現せられ得べからざるものである。第一の主張に就いては今論ずることを差控へる。第二の主張は一見極めて尤もらしきに拘はらず、私にはまたこれにも承服し得ざるものである。今甲の資本家（I）と乙の資本家（II）とが各、不變資本八〇、可變資本一〇合計九〇の生產費を以て（皆價格を表はすものとする）夫れ夫れ商品ABを生產するとする、而も甲はAを乙に、一〇の利潤を以て、乙はBを甲に同じく一〇の利潤を以て賣るとする。

I. $80c + 10v + 10m = 100.$ (A)

II. $80c + 10v + 10m = 100.$ (B)

此際、利潤を以て手に入れたる貨幣額と見る限り甲乙共に之を失つてゐる。然れども、利潤は之を資本化すると共に消失すると見るべきではない。もし然りとせばすべての資本家は貨幣資本を生產資本に變化せしむるやその利潤を失ふと見なければならぬではないか。甲乙のそれぞれなし遂げたる所は次の如きものである。甲は九〇の資本によりて得たる生產物を一〇〇に賣りたるが、乙も亦然り。而して甲は其得たる所を以て新に商品一〇〇を買入れる、乙も亦然り。かくて次の期間の生產にありて、甲の資本は一〇〇（甲乙共其生活費を他に求め得る限り）に、乙の資本も亦一〇〇に増すのである。云ふまでもなく、甲乙の利潤は其形を生產財にかふる事により資本化してゐる。從つて、これから博士の例示に移れば、次の如く云ひ得る。資本家相互の賣買により利潤は消失せず、甲乙ともに十萬圓の利潤を贏得て

ゐる。若し、資本家相互の賣買にありては當初から十萬圓の利潤をあげず、生産費を以てのみ賣らるゝものならば、博士の主張は正しい。然れども博士既に一たび甲も乙も十萬圓の利潤を以て賣る事を認められた以上、もはや利潤の隱れ場はない。詳言すれば資本家的商品なる限り、買手が勞働者なると資本家なるとによりて價格を異にすることなく一樣に、生産費以上の價格を以て賣られる。買入れたる生産財の價格は即ち一〇〇にして九〇ではない。此生産財の所有者甲も乙も共に一〇〇の價格あるものを有す、即ち一〇の利潤はどこにも失はれてゐない。河上博士は進んで說いて曰く、『勿論或る一個の資本家について見れば、其の者が買ふよりもより多くの分量を賣つてゐる限り、その資本家だけは一定の利潤を得ることが出來やう。』しかし『吾々は資本家階級を en bloc（全體として）觀察し、Gesamtkapitalisten（全資本家）について考へねばならぬ。しかも之を全資本家について觀察する限り、ツガンのやうに資本家の生産した物を資本家に買はして行つたのでは、資本家階級の所得として利潤の出てくる筈はないのである』（同上一〇二頁）。博士自身の前提を認むる限りこれは當然であるが、私の立場からは勿論これが認められ得ない。甲乙相互の關係について述べたる所はやがて全資本家相互の關係である。すべての資本家が其生産したる生産財を賣ることによりて擧げたる利潤は之を自身の消費に充てず、之によりて他の資本家の生産財を買入れたにしても、やはり其總計が資本家全體としての利潤と見らるべきである。前條について云ふならば、甲乙二人のあげたる利潤は合計零に非ずして合計二〇である。若し社會が此二人の資本家をのみ含むとせば（これについては顧慮すべき點多きも）、利潤の總額は此二〇でなければならぬ。これは極めて平明の事實であるに拘はらず、河上博士の之を否定せらるゝことを私は寧ろ奇怪に思ふ。而して之を否定する以上河上博士の立場からは次の事を認めなければなるまい。單純複生産を例にとる。次の場合、生産手段の生産額は六〇〇、消費資料の生産額は三〇〇である。

I. $4000c+1000v+1000m=6000$生産手段

II. $2000c+500v+500m=3000$消費資料

この生産手段の生産者間にありても、其生産物を相互に買取るもの無しとせず。製鐵業者は石炭を買入れ、炭坑業者は捲上機械、レール、機關車等を買入るゝが如し。此相互賣買の行はるゝ限り、彼等は利潤を失ふものなりとすれば一〇〇〇の餘剰價値即ち利潤（同上一四一頁參照）の中、差引かるべき數多のものがある。從ひてⅠに於ける利潤は一〇〇〇に非ずして例へば七〇〇である、かくて消費資料三〇〇〇は賣り盡されず、單純複生産は不可能となる。同樣なる結論は資本家相互の消費財の賣買、資本家相互の生産手段と消費財との賣買についても亦之を敢てし得べきものなりと信ずる。更にまた、此の如き立場の上に立ちて、如何にして、利剰の總額と餘剰價値の總額とが相等しと云ふ見方を是認しうべきかと思ふ。

河上博士がツガンの數表にありては、『出る筈のない利潤を出てくると假定し』て、之を其中に表はしてゐるとせられる。然れども、私を以て見れば、此主張固より支持し難い。假に資本家同志の賣買にては利潤の出る筈がないと云ふ前提を認めても、これは其結論として生じ來らぬ。博士は曰く、元來資本家階級の利潤なるものは、資本家的生産による商品と、資本家的生産によらざる商品との、交換によつて生ずるものである。資本家の賣るものは、總て資本家的生産による商品であるが、その買入れるものゝ中には、資本家的生産によらざる商品（例へば勞働力）がある。』このことが『資本家の手に利潤を生むに至る根本の原因である』（同上一〇二－一〇三頁）。私は思ふ、若し博士の如く全資本家についで考察する時、ツガンの數表に於て何故に利潤を計上する能はざるか。資本家は勞働力を買入れてゐる、而して勞働者の勞銀は當然資本家的商品たる消費財の買入に費される。所謂資本家的商品と然らざる勞働力の交換は各年度を通じ

て行はれてゐる。この事實は、よし他方に資本家同志の賣買あるにもせよ、儼然たる事實である、此事實がありながら利潤の出て來る筈なしと云ふ河上博士の結論は自家撞着に陷れるものと云ふ外はない。要するに、ツガン數表に對する河上博士の此第二論駁は私共が常識を以て全然理解しうべからざる性質のものである。

九、擴張複生産不可能に就いて

河上博士の擴張複生産不可能に關する主張の消極的部分は既に之を述べた。次に轉じて其積極的部分の吟味に入りたいと思ふ。それは資本主義の純粹なる限り、即ち對立する資本家と勞働者との外、所謂非資本主義的外圍の存在せざる限り、擴張複生産は出發點より不可能であると云ふ見方である。私は最初、此部分の考察に十分の努力を盡したい豫定であつたが、此論紙數を費すこと意外に多く、自身亦執筆に疲る。そこで議論の荒筋を述ぶるに止め、詳細の點に至りては後日博士の教示を得たる上に、立入る事としたいと思ふ。

先づ河上博士の見解を述べなければならぬ。マルクスの擴張複生産の數表はそれが行はるゝ爲に必要なる生産各部門の比例的關係を最も明瞭に示すものである。其一例。擴張複生産の行はるゝに必要なる生産額の振當、即ち比例が保たれて居り、次年の擴張を可能ならしむる所の年度を基本年度とし、擴張の營まれる最初の年度を第一年度とする。第二年度までを摘記す。c は不變資本、v は可變資本、m は餘剩價値、I は生産手段の生産部門、II は消費資料のそれを示す。

$$\text{基本年度}\left\{\begin{array}{l}\text{I.}\ \ 4000c+1000v+1000m\ =6000\\ \text{II.}\ 1500c+750v+750m\ \ =3000\end{array}\right\}\text{合計}=9000$$

第一年度 $\left\{\begin{array}{ll} \text{I.} & 4400c+1100v+1100m = 6600 \\ \text{II.} & 1600c+800v+800m = 3200 \end{array}\right\}$ 合計＝9800

第二年度 $\left\{\begin{array}{ll} \text{I.} & 4840c+1210v+1210m = 7260 \\ \text{II.} & 1760c+880v+880m = 3520 \end{array}\right\}$ 合計＝10780

以上の例に於て餘剰價値率は百パアセント、Iの資本家は餘剰價値一〇〇〇の二分の一即ち五〇〇は消費し、IIの資本家は同じく七五〇の中六〇〇を消費する、此消費額は年々變化せず。消費せらるゝもの〻殘餘（基本年度Iにありては五〇〇IIにありては一五〇）は資本として用ひられる。その不變資本可變資本のふり分けはIにありて四對一、IIにありて二對一、此比例はどこまでも變化なきものとする。先づ基本年度について見る。Iに於て生産せられたる生産手段六〇〇〇は、擴張なくして翌年の生産に用ひらるゝもの五五〇〇を差引き、五〇〇だけ擴張のために用ひられ得る。然るに、Iの餘剰價値の中五〇〇が蓄積せられ、その五分の四即ち四〇〇が不變資本となる、IIの餘剰價値の中一五〇が蓄積せられ、その三分の一即ち一〇〇が不變資本となる。此四〇〇と一〇〇との合計五〇〇の不變資本は擴張用として殘る五〇〇の生産手段と相當する。消費資料三〇〇〇のうち、擴張なくして消費せられうるもの $\text{I}\,1000v+\text{II}\,750v=1750v$、それに餘剰價値の中消費せらるゝもの $500+600=1100$ これ丈を差引いて一五〇を殘す。これは擴張に用ひらるゝ可變資本の增加分 $\text{I}\,100v+\text{II}\,50v=150v$ と相當することになる。かくて基本年度の生産額は餘剰價値の蓄積による次年度の擴張に充當せられて過不足がない。以下第一年度より第二年度に亘りても同一の關係が存する時、生産部門の比例的關係が都合よく保たれると云ふ。

さて擴張複生産の行はれ得るためには各生産部門間に一定の比例が保たれるのみを以て足れりとせず、更に、生産し

たるものが賣れなければならぬ、即ち價値が十分に實現せられる事を要する。資本主義經濟にありては、社會主義經濟又は奴隷經濟などに於けるが如く、各種の生産額が一定の都合よき比例を保つのみで擴張複生産は行はれるのではない、搾取したるものが一旦貨幣として實現せられた上でなくては、來るべき生産に役立ち資本と化することを得ない。『まことに各種の生産業が一定の比例的關係を維持して行かなければ社會總資本の複生産は到底圓滑に行はれ得ないのである。けれども、この比例的關係さへ維持さるれば、只それだけの條件で、資本の增殖、生産規模の擴張は、何の故障もなく行はれて行くかと云ふに決してさうではない。それには今一つの主要なる條件があるのである。』『剩餘價値の實現化のためには各種生産業が適當な比例的關係を維持してゐるといふことと、社會の消費力が之に對應してゐるといふこととの二つの條件が必要とされてゐるのである』(社會組織と社會革命一六七—一六八頁)。

かくて『剩餘價値の實現化は各種生産業の比例的關係により及び社會の消費力により制限されてゐる』さうしてマルクスの擴張複生産の表式そのものは、實は生産物が社會の消費力の不足のため、必ず一部分しか賣られぬ狀態にあることとを、明瞭に指示するものである。既に述べたやうに、次年度から擴張複生産が行はれ得るためには、今年度の生産狀態は次の如くでなければならぬ。』

I. $4000c+1000v+1000m$=生産手段6000.

II. $1500c+750v+750m$=消費資料3000.

次年度の生産擴張のために、各生産部門の生産額は釣合を保つてゐるが（mの消費せらるゝ部分及びその他の條件は前既に述べた）、『吾々が之を資本主義の社會に當嵌めやうとする時は、吾々は茲に踏みとゞまつて、全生産物が果して都合よく賣れて行くかどうかを見なければならぬ。』『資本主義の社會における全生産物の分配は賣買によつて行はれる

のであるから、其全生産物を盡く買取るだけの購買力―マルクスのいふ社會の消費力―が其の社會に存在してゐるかどうかを見極めなければ問題はまだ解決されぬのである」(社會組織と社會革命一七六―一七七頁)。此購買力の吟味のうちに擴張複生産不可能説の論據が見出される。さて博士によれば前記數表について見るに、第二部門の生産したる消費資料三〇〇〇のうち、資本家階級によりて買取られるものが一一〇〇ある。第一部門の資本家は剩餘價値一〇〇〇のうち五〇〇を第二部門のそれは同じく七五〇のうち六〇〇を消費するから。かくて先づ一一〇〇は賣られたとして、殘りが一九〇〇ある。然るに第一部門に投ぜられた可變資本は一〇〇〇、第二部門のそれは七五〇である、この方面から生ずる需要は一七五〇に止まる。かくて、一五〇單位だけのものが賣れ得ないのである。勿論、この一五〇の消費資料は次年度に於て生産規模が擴張せられると、勞働者數が増し可變資本が増加するから、彼等の生活資料に充てらるべきものであるが、『勞働者階級が一九〇〇單位の購買力を有し得るのは、資本家の剩餘價値が既に實現化（貨幣化）された結果としての生産擴張の行はるべき來年度のことであつて、今年度の勞働者階級は、既に述べたやうに、一七五〇單位の購買力しか有つてゐないのである。そこで一五〇單位の消費資料を如何にして賣るべきかと云ふことが、解決すべからざる問題として殘る」(同上一七八―一七九頁)。

かくて河上博士によれば、前掲の數表に於て、消費資料一五〇單位が賣れ殘ると云ふことが、純資本主義生産の行詰りを論證する根據となる。

率直に私の信ずる所を述ぶれば、河上博士の此主張は少くも私にとりては極めて解し難きものである。資本主義經濟が現に營みつゝある種々なる機能を與へられたるものとして考へ來る時、何故に資本主義の純なる限り、かの一五〇單位の消費財は賣れ殘るか。又賣れ殘るとしてもそれが擴張複生産そのことを妨げるか。私には與へられたる事情の下に

ありて、なほ資本家が擴張複生產の道を進み得る可能はいくらにも存在する様に思はれる。思ふに、一五〇單位は究局賣れ殘るものではない、やがて勞働者によりて買取られ得ることが十分に見込まれ得る。從ひてそれは需要を有し得ざるものに非ず、たゞ現在の需要を見出し得ざる丈のことである。此際、其近き賣行の見込まれ得る以上、資本家はその賣行くまで成行に任せて次の生產――**複張複生產**――に取りかゝり得ないものであるか。(イ)資本家の手許には常に單純複生產の場合になほ存し得る貯蓄――固定的性質を有し磨損の漸次なる爲に補償が不斷に行はれ得ず、一定の時期を置いてのみ行はるゝ生產財の購買の爲にする貯蓄がある、これが擴張複生產のために利用せられ得ないか、一五〇單位の賣るるまで立替へられ得ないか、所謂 Schatzbildung の議論は此際必ずしも棄て去るべきものではあるまい(社會問題研究第五十一冊二十八頁參照)。しかしこれは私の立論から云へばほんの附隨的のこと、顧みられざるも妨けぬ。(ロ)信用の本質は來るべき時の購買力を以て現在の購買力を買ふにあり、一五〇單位の賣行の見込十分なる以上、(第一部門の生產に從事する)資本家は此信用のからくりによりて、彼は一五〇單位の價格に相當する丈けの購買力を現在に於て既に有し得る。それのみに止らず、現在に於ける大抵の生產者は企業の出發點より、來るべき生產物の賣上を目あてにして、其資本を信用によりて得たるもの、(c+v)の總額について既に然り。近く賣れ行くべき一五〇單位の價格だけ、資本家が購買力を借入れ得ずと云ふ道理はないと思ふ。シユムペエタア流の言葉を借れば所謂動的貨幣 Dynamisches Geld は今日銀行業者によりて或る限度までは隨時に創造し得られ、これが來るべき購買力に對して現在貸付けられる、而してそれが資本として役立ち行く。(ハ)よし以上の道行を離れて考へても、賣行きの見込確なる一五〇單位は商人によりて買ひ取られないか。綿絲が販賣されるや否や、差當り、その販賣された綿絲が何うなるかと云ふことに頓着なく綿絲によつて代表されてゐた資本價値の循環は、新たに開始され得る。生產物が販賣される限り、その資本家的

生產者の立場から一切が其の順當なる進行をなすのである。その代表する資本價値の循環は、中絕を來たすものではない。『Wが消費者によりて買はれると之を轉賣せむとする商人によりて買はれると、『此點に關しては差異がない。』一五〇單位は商人の手に於て商業資本としての循環の道行を辿りゆく中に、實現せられたる消費財一五〇單位の餘剩價値は生產者の手の中に資本どしての作用を營み得ないか。勿論、社會の總資本の數量に關しては此商業資本の獨立を前提とする限り、顧慮すべき點があるが、それは今立入る必要ありとは思はれぬ。(ニ)所謂次年度に於ける可變資本不變資本の總體が投下せられ終るまでには既に二五〇單位が賣られて居る事を要する。然れども、これ等の資本は大抵の生產業にありて、すべて生產年度の當初にすべて一齊に投下せらるゝを要しないと思ふ。近江の湖水の淀川によりて海に注ぐが如く、漸次に投下せられる。一年の半ば以後に海に注ぐ所の水は一年の最初に瀨田附近にあることを要せず、例へばその時野洲川の川口にあるも亦妨げない。これと同樣に、一五〇單位は年度のはじめに賣れ殘つてゐても、一二三月乃至五六月の間に（若し資本が一年のうち幾たびか回轉するとすれば最初の投下が終らざるうちに）換貨せられ資本としての役目を營めば、なほそれで擴張複生產は都合よく行はれる譯である。ことに可變資本に至りては一時に投下せらるゝ事を要せず、假に前年の終りに於て、一五〇單位が商人の手に渡つてゐなくても、昨年度の生產の進行中賣れ行くに應じて可變資本と化し、勞働者の手の中に渡さるゝことが出來る。又不變資本の中にもかゝる性質を帶び得るものが多い、原料又は補助原料の性質はこのことを示す。以上四の論據は極めて平凡のものではあるけれども、一五〇單位が消費者の手に賣られずに殘るべきものとしても、擴張複生產が（此點よりしては）決して行き詰まらざる事を示し得ると思ふ。此の如き見方は、それが平凡であるだけに多くの人々によりて直に考へ附かるゝ所である。私の寡聞を以てしても、マルクス自身の叙述の中に、かゝる心附きが記され而も否認せられてゐる。マルクスの此種の困難に論及したる場合は前述の

それとは聊か異なる。それは單純複生産より擴張複生産への移り行きである。

I. 4000c＋1000v＋1000m＝6000生産手段

II. 2000c＋500v＋500m＝3000消費資料

Iの資本家が其餘剰價値一〇〇〇のうち五〇〇を蓄積して資本とする。かゝる場合、IIは消費資料三〇〇〇のうち、どうしても五〇〇だけ（I_mの消費の減少により）は之を賣り得ない。しかしこの五〇〇が賣れずにゐてはそれだけIIの商品資本が生産資本にかへられぬ事になる。然らばこの過剰生産をどうすればいゝか。マルクスはこれに對する一の逃げ路（Ausflüchte—この譯語の當否については斷定を保留する）として次の如き事を述べる。それは何も過剰生産ではない。勿論かの數表の叙述に當りては『すべての貨幣とすべての商品とは豫め資本家 I II の手中にのみ存する。商人も兩替商も銀行家も、單なる消費者、直接には商品生産に與らざるものゝ階級もこゝには存在しない』。それで賣れ殘れる商品II。五〇〇は此場合資本家自身の倉庫に入り、消費資料の貯藏となる。此貯藏は一體年度の更り目に無くなるものではなく次年度に持越されるものである。その大きさは時々ちがつて行くがその爲に資本家的生産者は貨幣準備資本を有しなければならぬ（Kapital, II, S. 481–482）。マルクスはしかし、此考へ方を以て一の逃げ路なりと云ふ。

このII。五〇〇は次の年度に於て果して賣れ行くや否や全然分らない點に於て、私の問題としたる一五〇單位と同一の事情に置かれてはゐない。從ひてそれは倉庫に貯藏するから過剰生産に非ずと云ひ得べきに非ずと思ふ。しかしながら、かの五〇〇とこの一五〇とは共に此生産年度に於て買手を見出さゞる點に趣を同じくしてゐる。私があげた論據の中、最後のものはやはり貯藏により次年度に買手をまつものである。然れども、前のII。五〇〇の貯藏を以て一の逃げ路なりとなしたるマルクスの論據によりてそれは否定せらるゝとは考へぬ。マルクスによれば、此貯藏そのものが否定すべ

き事柄ではない、たゞ考へ方の上に於て、かゝる貯藏から離れ見るべしと云ふに過ぎぬ。此三の理由の中、第一のもの貯藏はIIの資本家に於けると等しくIの資本家にもある。後者の貯藏を見ない以上、前者からも離れて考ふべしと云ふこと。第二の理由。今年の賣れ殘りが貯藏されると等しく、前年のも然り、後者を離れて考ふる以上、前者よりまた離れて考ふべしと云ふこと（第三の理由としてあげられたるものは單純複生産の場合に行はるゝ機構では、別の特徴ある擴張複生産のことが說明ができぬと云ふ點であるが、これは今立入る必要がないと思ふ）。このマルクスの見解そのものは明白に貯藏の必然と、貯藏せられたるものゝ將來に於ける賣れ行きの事實とを認めてゐる。而して抽象すると否とはすべて考察者自身の定めうべき事柄である以上、私が之を抽象することなく、かゝる事實を併せ見る立場をとるのも否定せらるべきに非ずと思ふ。一方の貯藏をのみ見るべからずと云ふ見方は當然であるが、次年度への貯藏と等しく今年度へのそれを、IIに於ける貯藏と等しくIに於けるそれを併せ考ふる時はその非難も、私の場合には當るまい。たゞ今の場合、理論的に來年への持ち越しの已むべからずと考ふべきものが一五〇に止まるが故にそれ丈の貯藏を考ふと云ふに止まる。

要するに、私は消費財一五〇單位が來年に入りてはじめて需要者を有すると云ふことは、決して擴張複生産を行き詰らしむるものではないと思ふ。此餘剩價値の一部分を代表する一五〇單位の消費財は、もとより一旦需要せられずしては資本化せらるゝ事が出來ぬ。然れども資本主義組織においては將來の見込まれたる需要が常に現在の購買力を作り、現在の資本を産む。この道行として役立つものは一方に信用制度があり、他方に商人の機能がある。之を離れて考ふるも、次年度に於て賣れゆくに應じて一五〇單位が資本化せられうる。若し此過程を否認するならば、それは單純複生産そのものを否認せざるを得ぬ。例へば單純複生産の一數表を見よ。

I.1000c＋1000v＋1000m＝6000生産手段

II.2000c＋500v＋500m＝3000消費資料

河上博士の論法を用ふれば、IIの資本家は餘剩價値五〇〇を其年度に賣り盡さゞる限り其資本のすべてを生産資本と化し單純複生産を營む事は出來ぬ。然れども、試に現實の消費財に就いて見よ。消費財中の最も重要なる穀物特に米の其生産年度に於ける收穫を如何にして其年度内に需要し盡し得べきか。何人も晩秋の新穀を之に先だつ年頭の新年に餅つく事は出來ない筈である。生産年度を何時より算へ始むるにしても、其中途に醸造を終れる酒は年度末に半分を殘す。實際に於て、消費財のすべてが年度末に賣れ盡すと云ふ事實はない。然らば、單純複生産そのものも當然に不可能事たるべき運命を有する結論に陥る。勿論此際他の考へ方はあらう。生産年度又は生産期間は暦年又は暦月と一致しない、且又資本の回轉を中心として定むるが故に、生産業の部門によりて相異なり得ると云ふ見方は其一。其年度に其年度の生産物の消費の繼續をあてこむと云ふのは考への上の技巧であると云ふのは其二。博士またかゝる論據の上に立たるとせば、私は高説を得たる後に自ら述べたい。今は煩瑣を厭ひて之を省略する。事實に於て、其年度の生産物が其年度内に需要し盡されざるに而も複生産は滯りなく行はる、貯藏の行はるゝことが其事情の一をなしてゐる。マルクス自身明に之を認む。此貯藏によりて單純複生産の場合の商品資本の生産資本化が行はれうるならば、何故に擴張複生産の場合のそれが行はれないか。

此の如く論じ來れば、所謂「資本家的擴張複生産それ自體に内在するところの本來的根本的の矛盾」は何等論證せられてゐないと見なければならぬ。見込の利潤によりて既に資本を準備し得ることは所謂動的發展、即ち擴張複生産に缺くべからざることであると共に、資本主義生産そのものゝ要素をなし、之からして離れざるものである。河上博士は日

常不斷に行はれつゝある事實、營まれつゝある機能を以て不可能であるとなし、勇敢に之を看過することにより、其資本主義生産行詰りの美しき結論を抽き出された。たゞ私は其華やかなる敍述の中に何等の「論理的必然」を見出し得ざるを遺憾とする。

十、私の立場

私は今まで河上博士の資本主義生産行詰まり說の種々なる論證を檢した。而して、その消極的部分についてはツガン數表に對する二の論難共に成立し難きを見、その積極的部分亦到底支持すべからざるを見た。少くとも私の所信としては、此點に關する博士の見解に存立の餘地なしと思ふ。私の批判の仕事は不十分ながら略終つた積りであるがなほ、同一の問題に關する私の立場だけを明にして置きたい。

此立場を先づ、マルクス複生産の數表に關して明にする、私のこゝに說明するまでもなく、資本論第二卷に於て重要なる主張となつてゐる消費過小說又は需要過小說が少くも第二卷複生産の數表には明に表現せられてゐない、その遂行の上に困難あるが如く見えてもそれは解決しうべきものとして考へられてゐると思ふ。こゝに於て、此間の統一をどう立てるかと云ふのが一の仕事となる。消費過小說は資本主義生産の崩壞を說く爲に重要なる一原理をなす、之をすてずして、複生産數表の中にも其意味を見出すと云ふのは一の尤もなる立場である。河上博士の見解は明に之に屬する。複生産數表を以て消費過小を示すものに非ずとなし、之を根據として消費過小に基く資本主義生産の崩壞、其内部に存する自己矛盾を否認するものは他の立場である。福田博士とツガン・バラノウスキとの見解が之に屬することは言を要しない。而して私は前述の如く、複生産の數表から河上博士の如く消費過小說、資本主義生産の行詰まりを讀み出し得ない。謂ふ

に、此所謂讀み出し方に二の方針がある。一は擴張複生産の數表が事實に於て實現せられうるものとしてもその進行の中に消費の過小を暴露するに至るべしとなす方針であり、二は此數表の形式そのものゝ中に實現の不可能性を見る方針である。一體、前者の試みをなさずして先づ後者の試みをなす人は稀であらう、何となればマルクス自身、若しかの擴張複生産の數表を以て全然實現の可能性を藏せぬものとなしたならば、その「外見上の困難さ」を說く筈もなく、また煩瑣なる計算を加へて四五年度に亘る數表の敍述を加へる譯もなからうと信ぜられるから。かくて私共は先づ第一の方針をとりその數表の進行中に所謂消費過小の事實の表現せられざるやを見る、然れども此期待は永久にみたされざる期待である。こゝに於て消費過小說を確信するものは自ら第二の方針に入らざるを得ぬ。此の如く考へ來れば、私は河上博士の立場をよく理解することが出來る、此追感の仕方が博士の思惟の進行と合一するか否かは勿論別の問題である。

然らば、彼の複生産の數表が、私の如く、來るべき需要即ち見込の賣れ行きが資本を作ると見る限り、何故に其進行中需要の過小を暴露する事なきや。これは一見して明白である。今年度の餘剩價値mを二分して一部分を資本家自身の消費にみて、他の部分を可變不變の二資本に振分けるのである。出發點からしてどこかに需要者のある樣の處分の仕方になつてゐる以上、需要の過小は起らむとしても起り得ない仕組である。更に精密に云へば、次年度の不變資本の增加額が丁度今年度の生産手段の生産部門に於ける餘剩價格と一致する樣に仕組まれてゐるから、兩部門の生産額の需給に過不足なき筈である。かくて、私は云ふ。マルクスの複生産數表は次の二條件をみたす。

（一）餘剩價値を資本家の消費にみつるものと然らざるものとに分ち、後者を全部資本化すること（後者は不變可變の二資本に分たれてゐるがこれはどうでもよい）。

（二）次年度に用ひらるゝ生産手段（不變資本）の總計は今年度の生産手段の生産額に等しい。

これがみたされる以上、剰餘價値率を如何に變更しても、又資本家の消費を如何に増減しても、資本の組立を如何に變更しても　少くも形式上――私は事實の需要の伴ふ爲には資本の組立が生産方法によりて、狹く而して粗雜に云へば生産技術によりて要求せられることを要すと信ず、―生産せらるゝに應じて需要伴ひ至る。所謂生産は消費を作る。これは算術的必然を以て明言し得られる。マルクスの擴張複生産の數表を進行せしむること百年に及ぶも、生産過剰の事實は生じ得ない。

然らば此マルクスの數表は事實に存する傾向を表示するものとして見得べきやと云ふに、私は決して然りと答へ得ない。如くマルクス的經濟學說そのものの上に立ちてなほ然りと信じ得ない。此點に於て私はロオザ・ルクセンブルクの複生産數表の訂正を學問的意義深しと思ふ。其見方によれば、他の事柄をしばらく說かずとするもマルクスの數表は資本の組立の變化を顧みてゐない。此組立に伴ひ生産力の變化し、剰餘價値率の變化することを念頭に置いてゐない。かくて彼はマルクスの第二例（Kapital II, S. 491）を基本として複生産の數表を進行せしめる。

第一年	I. 5000c + 1000v + 1000 m = 7000	II. 1430c + 285v + 285 m = 2000	9000
第二年	I. 5417c + 1083v + 1083 m = 7583	II. 1583c + 316v + 316 m = 2215	9798
第三年	I. 5869c + 1173v + 1173 m = 8215	II. 1715c + 342v + 342 m = 2399	10614

I IIともにmの1/2、（初年のIIだけは一〇一蓄積？）を蓄積。増加資本の振分けはI IIを通じてcとvとの比を五と

二との比とする。mは常にvと相等し、云はゞ餘剩價値率一〇〇パアセント。

これに對してロオザ・ルクセンブルクの訂正は資本の組立を變化せしめること、生産力從ひて餘剩價値率を増加せしむることとに存する。可變資本の不變資本に對する割合を第一年度の$\frac{1}{5}$より年々$\frac{1}{6}$ $\frac{1}{7}$に遞下せしむると共に、勞働の生産力の増加によりて、即ちmの増加によりて年々の生産額には前例の數表と差異なきものとする。此の如くするときは、さきの第二條件が充されない。即ち次年度に増加せらるゝ生産手段の總計は今年度の生産手段の生産額に等しくない。

第一年
I. $5000c + 1000v + 1000m = 7000$
II. $1430c + 285v + 285m = 2000$

第二年
I. $5428\frac{4}{7}c + 1071\frac{3}{7}v + 1083m = 7583$
II. $1587\frac{5}{7}c + 311\frac{2}{7}v + 316m = 2215$

第三年
I. $5903c + 1173v + 1173m = 8215$
II. $1726c + 331v + 342m = 2393$

此數表の如き進行によれば、『生産手段に於ける不足額、第二年度に於て一六、第三年度に於て四五であり、『同時に『消費資料に於ける過剩額第二年度に於て一六、第三年度に於て四五』である（Rosa Luxemburg, Akkumulation, S.201）。ロオザ・ルクセンブルクは此生産手段の不足を以て或る程度まで外見上のものである、其理由は生産手段の大さは其價値よりも速に増加するが故であると云ふ、然れどもこれ全然理由なき考である。生産手段の不足はそれだけ餘剩價値の資本化を妨ける。かくて、一六の生産手段不足が假に各生産部門に按分せらるゝことゝとすれば、これに結びつけらるゝ不變資本も亦減少する（假に分數を切捨てる）。

第 二 年

I. $5416c+1069v+1801m=7566$

II. $1583c+310v+315m=2208$

第二年度に於ける消費財の過剰は一九單位に達し、生産手段は生産したる額だけ利用せらるべきである（此命題もなほある前提をまちて成立するが、それはこゝに立入らない。）私はマルクス說の上に立ちて、これ丈のことが少くとも可能であるといふことは十分に云はれ得ると思ふ。第二年度以後に亘る訂正は同樣にして理解し得られよう。

顧りてツガンの複生產の數表を見る（I 生產手段の生產。II 勞働者消費資料の生產。III 資本家消費資料の生產。前揭の表中のpをcに、aをvに、rをmに改む）。

第 一 年 度

I. $1632c+544v+544m=2720$

II. $408c+136c+136m=680$

III. $360c+120v+120m=600$

第 三 年 度

I. $1988c+497,8v+828,1m=3312,3$

II. $372,6c+93,2v+155,2m=621$

III. $360c+90v+150m=600$

福田博士は此數表に對して、『其推算を誤謬なりと斥く可き理由を一も見出す能はざるものだ』と述べられ、河上博士は之を以て紙上の算術演算に過ぎずとなし經濟學の答案としては、『三十五點以上は附けられない』と明言せられる。しかし、河上博士の之を斥けらるる二つの理由は何等の根據なきこと前述の通りである。然らば私が河上博士の論難を以て誤れりと信ずるに拘はらず、ツガンの數表をそのまゝに是認し得ざる理由如何。

ツガンの數表の特徵として次の二點を擧げ得る（各部門の間に於ける資本の融通性即ち移動性を認めたる點を別とし

て云へば）。

（A）マルクスの數表と共通なる點。

1 剩餘價値を資本家の消費にみつるものと否とに二分し、後者を全部資本化すること。

2 次年度に增加せらるゝ生產手段の總計は今年度の生產手段の生產額に等しきこと。

（B）ロオザ・ルクセンブルクのそれと共通なる點。

資本の組立の變化、從ひて餘剩價値率の增加を顧慮したること。

生產せられたる生產物が必ず其需要者を有し得るが爲には先づ少くもAの特徴即ち二の條件を具ふるを要する。然れどもこの條件のみにて十分であらうか。前には叙述の便宜のため、二條件の存すところ、生產物は必ず買手を見出すとなしたれども、それには生產方法の必要が數表の示す所の資本の組立てを要求する限りと云ふ、前提を加へなければならぬと思ふ。これを他の方面から說くことにする。

等しく資本の組立の變動を顧慮しながら、ツガンにありては一見、擴張複生產が順調に行く、即ちI II III何れの生產物も少くも次年度に於て十分の買手を見出し又不足の額もない。ロオザ・ルクセンブルクにありては然らず。消費財に過剩がある。此差異の由りて來る所如何。後者にありては、新しく添加せらるゝ資本の組立の割合を變化しゆく生產方法の要求する所に從ひ、或は $\frac{1}{6}$ $\frac{1}{7}$ となしてゐる。然るに、前者にありては然らず、先づ前年度の生產手段の生產部門に於ける餘剩價値がすべて此年度の不變資本の增加分と相合一する樣に仕組まれてゐる（A(2)の條件）。而して添加資本の殘餘（それは負數である事もある）が可變資本に振り向けらるゝが故に、成程數字の表面にては資本の組立が年々變化し可變資本が絕對的にすら減少してゆく。然れども、各年の資本の組立は生產方法によりて要求せられたる組

立であると見る事は出來ぬ。若し生産方法によりて要求せらるゝ組立に從ふならば、兩資本の割合が或は五分の一となり、或は十五分の二となり、全添加資本を此比によりて振分くる結果は、添加したる不變資本の總計（乙）は必ずしも、前年度の生産手段の餘剩價値（甲）と等しくはない（A(2)の條件の缺乏）。ロオザ・ルクセンブルクの數表にありて過剩生産のあらはれ、ツガンの數表にこれなきは正にかゝる事情に基く。

かくて私はツガンの數表を以て何等の客觀的可能をも示さずとは云はぬ、それはかの數表に於ける資本の組立變化が生産方法の變化から要求せられたるものと年々一致しゆく場合に於てはこれを是認しうべしと信じ生産物は必ず少くも次の年度に共買手を見出すと思ふ。然れども數表に於ける資本の組立が生産方法の要求するところと一致せざる限り、かの數表は次の如きことを示してゐる。即ち、生産手段の生産額だけは先づ各生産部門に配當する、而してそれは消費財の生産部門に減少することを前提とするが故に、特に生産財の生産部門に之を增加する。然れども此の如く、既に生産せられたる生産手段を此の如くにして生産財の生産部門に割り當てると云ふことは、それは資本主義生産に於てあり得べからざることである、かゝる組織にありて資本家は常に生産方法の要求するところに從ひてのみ、不變資本と、可變資本との振分けをなす。これに背いてツガンの數式を成立せしむるが如き資本の振分けをなす結果は如何。數字の上に於てこそ生産せられたる生産財は共買手を見出す樣であるが、試に一歩だけ分析を進めよ。第一年度のI生産部門はマルクスの試みの如く（Kapital, S.472)、例へばI_c、I_vに分つ事を得る。而してI_cの生産物はI_cの生産財でありI_vの生産物はIIの生産財である。生産の擴張は何れにせよ、此兩分門に行はれる。然らば其年度の終りには、I_vの生産額は其價値に於て著しく增加しなければならぬ。然るに、第一年度に於てIIが其價値に於てかへりて減少すとせば、Iの增加したる産額はいづこにはけ口を求むべきか。その生産物は性質上I_cの生産手段たる能はず又I_vの生産財たる能はざるもので

ある。かくてＩの部門を二分して考察する時必ずや、數表の上に賣られざる生産財を見出しうべきである。賣れ行くものとせば其の賣れ行きは、完成したる紡績機械を潰して刃物を作り、仕上げたる機械を薪として機關を運轉せしむると云ふ樣の生産の過程をとらなければならぬ。從ひて其賣れ行きは必ず行き詰まる。

但し此論難は或は一見、私自身に對する反駁の如くにも見えよう。其實は然らず。私はツガンの數表の成立の全然不可能なるにあらず、客觀的可能を示すこと全くなきに非ずとした。此意味は、生産方法の變化の仕樣によりてはツガンの數表が事實を現はす可能全然これなしとせぬと云ふにある。I_aの生産物は今までの生産方法による時重にⅡの生産財たり得るに止まれども（重にと云ふは事實に於ては同一の財にてⅡの生産財たると同時に、I_a又はI_bの生産財たるものもあるから）、生産方法の變化あれば、その著しき部分が有利にI_a又はI_bの生産財として使用せらるゝ可能もあるから、ツガンの數表の示すが如きことも、事象の本質上全然不可能なりとは云ひ難い。かくて私は河上博士の斷定『その手段となるべき物のみ無暗に殖えて、その目的とする所の享樂財の生産が却て減少すると云ふやうなことは、決して在り得ない』と云ふ命題を理論的に成立せずと云ふのである。私がかゝる立場をとるにしても、ツガン數表の示す道行では、需給が相敵はず、賣れ殘りの生ずべき可能ありと云ふことのみは、明白に斷定しうると思ふ。

かくて私はツガンの數表が全然實現の可能なきものを示すとは思はない。然れども蓄積せらるゝ資本は生産の方法の變化が要求する仕方に於て、不變可變の二資本に振分けらるゝ以上、一般的には、ツガンの數表は事實の傾向を示し得ずと云はなければならぬ。生産部門の比例的關係さへ保たれてあれば需要自らにして到る、私は此命題を是認する外なしと信ずるものであるが、たゞツガンの數表に於けるが如く添加する資本の振り分けが、生産方法の要求によりて行はれず、一に生産せられたる生産手段中の剩餘價値が皆必ず次年度に利用せらると云ふことを前提としたる振り分け方に

ては、生産手段の爲に生産手段を作ることとなり、分析を一歩進むれば比例的關係が保たれ得ず、畢竟、生産が市場を作ることは不可能であると云はなければならぬと思ふ。

然らば私はロオザ・ルクセンブルクのマルクス複生産數表の訂正に僅に一歩の訂正を加へて之に滿足なる答解と云ふ封印を貼らむとするものであるか。答へて曰く否。マルクス說の立場の上に、擴張複生産の數表を形成しこれによりて需要不足の傾向を說かむとすれば、かゝる數表を主張する外なしと云ふのみ。第一、私はマルクス的價値並びに價格學說をとらない。第二、假に此學說の立場を許すとしても、訂正せられたる數式は需要の不足、生産の過剩の可能を說くには足りる。然れどもそれは此生産過剩の必然を論證するには力なきものであると思ふ。此必然を論證せむとせば、資本の組立の變化の仕方を、單なる假定の仕方としてではなく、實際の事實から得來れる傾向律として數表の中に組入れねばならぬ。加之、勞銀の變動が單純なる需給の關係によらず、無産階級の團結反抗と共に不斷に增加し行く事實をも顧慮の中に加へねばならぬと信ずる。單なる技術上の必然としては勿論可變資本の全資本に對する割合は減少してゆく。然れども、無産階級の勢力增加は之と反對の方向をもつ傾向である。此傾向にして假に資本の組立を變化せしめさる結果をもつとすれば、マルクスの擴張複生産の數表がそのまゝ事實を表現する。而して、生産の擴張は市場の擴張を伴ひ、過剩の生産は遂に生じ來らない。

然れども、これは他の立場を許しての議論である。私の如く、マルクス的價値及び價格學說をとらさるものゝ眼から見れば、かの擴張複生産の數表そのものが成立し難い。單純複生産、一派の學者の言葉を以て云へば（一種の）經濟靜態に關しては複生産の數表が成立し得る、擴張複生産即ち動態についてはそれが成立し得ない、動態にありては價格の形成の數を一定の數表に推しこむこと不可能なるが故に。此點を詳論することは今の問題の外に出でよう。たゞ以上

のことだけを述ぶれば、私の此點に關する立場は明白となる。かくて私は云ふ。資本主義生産が、非資本主義的外圍をかくと假定するとき、それ自體に內在する必然によりて行きつまるか否か、これを解決するには、マルクスの數表を塗り消し別に新なる白墨を以て黑板に向はなければならぬ。

十一、結論

以上の補論は河上博士の資本主義の必然的行き詰まり說を論駁するを目的とする。然れども、此目的にして到達せられずと假定しても、資本主義が行き詰るから河上博士の議論も亦行き詰る、これはその立論の正しき證據であると云ふ博士の論法は成立しない。例へば支那の政界が行き詰るから自分のそれに關する議論も行きつまる、故に自分の議論が正しいと云ふものあらば何人も其主張の沒論理なるに驚くであらう。議論の行き詰まりは謬誤を意味す、考察の對象が行き詰まる故に謬誤の議論が眞理なりとは不敏なる私の到底理解し得ざる所である。然れども此點については前論既に詳細なる論證を加へた、今玆に反復しない。

私は今まで述べ來れる所を以て、河上博士の第二回の敎示の中に與へられたる論點を盡く吟味し盡し、其上に、初回の敎示中に於ける博士の一主張――資本主義行き詰り說――をも考察し得た、後者は私の遺して置いた唯一の問題である。たゞ私はマルクス說に就いて或る意味の門外漢であるが故に理解極めて膚淺にして思はざる謬誤に陷れる點も多からうと思ふ。此點特に敎示を請はなければならぬ。それはともあれ、私は此一年間双肩に重苦しく感じてゐた學問上の負債を辨濟して、今頗る一身の輕さを覺ゆる。行論の間、筆の趣く所に委せて或は禮を失したる言辭なきを保せず、若し此の如きものあらば、深く博士の寬恕を祈る。それと共に、種々なる問題に關し考察の機緣を與へられたる學恩に對し

て亦博士に謝意を表したいと思ふ。たゞ私の立場を一層明白ならしめ、博士の教示を得易からしむる爲にたゞ一點の附記を許されたい。

河上博士が私の取扱ひし『剩餘價格の成立』を以て當時五年前の舊說なりと せらるゝに拘はらず、其眼目たる獨占論は私が最初の論文『河上博士の剩餘價格論』の起草中に出版せられたる『社會組織と社會革命』（一〇八頁乃至一一二頁）の中に明白に表示せられてゐる。而も其內容に就いて私は前に述べたると同一の疑問を抱かざるを得ぬ。博士は次の如く述べられてゐる『一定の商品 w を買入れ之を生產的に消費することによつて別種の商品 w' となすこと、言ひ換ふれば資本の力によつて商品 w' を生產すること、この事が資本を獨占せる資本家階級の獨占業に屬するから、そこで商品 w を資本家的生產物として一種の獨占價格を有し得るのである。さうして其れは既に獨占價格を有し生產費以上の價格で賣却され得るから、結局、生產費以上の剩餘たる利潤を產むことになるのである』（同上一〇九頁）。生產は資本家の獨占する所なるが故に生產物は資本家的生產物として獨占價格を有す、以前の論文に於けると同一の主張がこゝにも繰り返されてゐる。而して此所謂一種の獨占價格（之を獨占價格と名づくると否とは今問題としない）は何故に餘剩を含み利潤を作ふか。私はそこに何の說明をも見出すことは出來ない。少くとも博士は價格に關する Kostengesetz について如何なる考を有してゐられるか。私はかゝる命題——獨斷的なる命題を經濟學上の中心問題について河上博士から聞く事を頗る意外とする、論據なき素人論の形式よりそこに見出し難いのを遺憾とする。私は此命題の論據の教示を得るに非ざれば依然としてその獨占論を理解し得ざるものである。博士はついで、勞働と云ふ商品のみが利潤を生む力あることを論證せむとせられる。

『ところが商品 w' を賣ることによつて一定の利潤を得るにしても、その商品 w' を生產するための手段たる w（即ち $l+p+$

ム)を買入れる時、矢張り生産費以上の獨占價格で買入れたのでは、その相手方に利潤を拂ふことになるから、前に述べたやうに、損をして得をするので、差引き何等の剰餘も殘らぬ勘定になる。だから自分の賣る所の商品w'は、資本家的生産物として一定の獨占價格を有し得るもので無ければならぬが、それと同時に、之を生産するための手段として買入れる所の商品wも、——少くとも其の一部分が、——資本家的生産物でなくて、從て生産費相當の價格で買入れられ得るもので無くてはならぬ。』『資本家的生産に係らざる商品を市場に供給する者は、自分の勞働力を商品として提供する所の、賃勞働者以外には在り得ない。』かくて、純粹なる資本主義の社會にありては、勞働力を買入れて生産を營むことにより、資本家は其利潤を舉げる（一一〇頁）。私はこの主張にもなほ十分なる理路を見出し得ない。博士の所謂獨占價格に於ける餘剩は各財の價格に應じて一樣なるものであるか。例へば資本家的生産に係る以上、一個の財は何人の提供するものも又如何なる品物にても等しく一割（例へば）即ち十錢の餘剩を含むものであるか。然らずして、品物によりて餘剩の率を異にし、又は提供する人によりて此率を異にするものであるか。假に一方に損をして他方に得をするにしても、此損得相等しからざればそこに利潤なしとは云はれない。獨占價格を以て賣り獨占價格を以て買ふのでは利潤の成立しやうがないと云ふ博士の主張は獨占價格に於ける餘剩が價格に比例すと云ふ前提なき限り成り立ち得ない。而して博士の説明のいづこにも、此前提は述べられてさへゐない、其論證はもとより企てられてゐない（私は此論證が不可能であると信ずるが）。云はゞ論理の筋道を一歩丈け飛び越されたことになると信ずる。かくて河上博士は『だからマルクスは、賃資本家階級の獲得する剰餘價値の成立を説明するに當り、唯一の重點を、資本家による勞働力の賣買に置き、彼れ獨特の剰餘價値説を建設してゐる。論理の必然が吾等を導いて玆にマルクスと此の妙境に會せしむることは、吾等をして飲食を忘れしむるに足るの快事である』（原文の括孤をとる）と述べられたが、私を以て見れば、博士をそこに導けるもの、何ぞ論理の必然ならんや。論理の飛躍の必然のみ。

——一九二四、九、二七、朝七時、電燈既に消えたれども家人の眠りをさまさゞらむとして窓をあけず、孤燭を點じながら筆を擱く。



混沌たる農村問題（其二。完結）

福田徳三

（十三）

資本主義・營利主義が之れを支配する經濟生活の態樣に統一性を與へ、之を合則化し合理化する道は唯一つしかない其れは今日の流通市場の支配是れである。流通市場は無差別の法則（又は一物一價の法則 Low of indifference）のく行はるゝ舞臺である。市場に出入し、其の支配の下に立つ需要者と供給者は、非常に複雑な差別的法則の下に立って居るものである。（之を Law of varying costs; Law of varying utilities 差別的費用の法則、差別的利用の法則と名けて置く。詳くは、近刊拙著『流通經濟講話』を見られたし。）然るに彼等が一度市場の魔術に懸ると其差別性は頓に消へ

失せて、一様に無差別の法則によつて支配せられることとなるのである。從つて市場に於ける、又並びに市場の支配を直接か間接かに被むつて居る諸々の取引は皆マルクスの所謂『等價形式』（エクヰヴアレント・フォルム）によつて劃一せられ、統一せられるのである。等價形式によつて劃一せられつつ、其れ〳〵は非常に複雜な差別則の下に立つが故に、需要者も供給者も其れ〳〵に異なる餘剩を收得するのである。限界需要者と限界供給者とは、限界的平均餘剩を收得するに止るけれども、爾餘の需要者と供給者とは、限界餘剩以上に、其れ〳〵に異なる割合に於ける需要者餘剩か供給者餘剩を收得するもので、而して其の餘剩の收得と云ふことが、今日の營利流通經濟の根本動力たり、又た目的原因となつて居るのである。其れは市場が無差別の法則によつて、一切の市場取引に劃一性を與ふることによつて、之を普遍化し、又た合理化すると云ふことを前提として居るものであつて、此の前提なくば、餘剩收得の經濟生活即ち資本主義的營利經濟は成立し能はぬのである。故に今日現在の經濟生活に合則性を與へ合理性を與へて之を統一するものは、市場を措いて外にないと斷言して差支ないのである。

（十四）

此の合理化は、あらゆる不合理的要素を淘汰し抽象し去るのである。詳しく云へば、經濟生活を支配し影響する他の諸々の要素は、此の絶大なる市場の合理化によつて、全く其力を奪はれて仕舞ふのである。かくて經濟生活の普遍性が、他の何れの時代にも見ること能はざる程度に打ち建てられるのである。リツカートは其の『文化科學と自然科學』第二版一一七頁に於て『文化科學の中經濟生活を研究の對象とするもの（即ち經濟學）に於ては、普遍的概念は最も廣く用ひられるであらう。何となれば、文化生活の中特に經濟的運動の分別せられ得る限り何れも大數に關するものなる可く、從

つて經濟學てふ文化科學の本體は最も多く比較的に普遍的なる概念の內容と一致す可きであるから。例へば一定の國、一定の時代に於ける農民又は工場勞働者の歷史的性質は、凡て他の同種のものに共通のものである可く、從つて自然科學的に、其概念を形成し得可きで、純個別性特性は顯はれず、一般的概念的事情の設定最も廣く行はれ得るであらう。」と云つて居る。此一節に對しては、リツカート崇拜者の中にも異論はあるようである。私も亦農民と工場勞働者とを一律に見ることには、斷じて與みし得ないものであり、又其の理由の說明にも服し難いのであるが、右の言を市場支配の下に於ける經濟主體、殊に營利的餘剩收得行爲に限りて適用することには、全然贊同するものである。今日の營利行爲に、而して營利行爲の經濟學に其の普遍性（リツカートの語によれば自然科學的性質）を附與するものは、歷史的性質の共通よりも、寧ろ遙かに多く其の市場性であり、其の市場被支配性であるのである。

經濟主體、殊に自然人經濟主體は、決して單に經濟的動機によつてのみ活動するものではない、況んや營利的動機のみによつて活動するものではない。彼等は國家的、政治的、家族的宗教的其他幾多の諸種の動機によつて動かされるものである。然るにも拘らず、彼等が一度市場のスペル（魔術）の下に立つや、此等の特種的、個別的にして甚だしく差別的なる諸々の事情は、全く淘汰し去られて、其處に殘るものは、唯だ餘剩獲得の一動機のみとなるのである。從つて凡ての市場被支配者は、殆んど普遍的に、非個別的に無差別的に、統一せられ劃一せられるのである。此事は私が今更事珍らしく論ずるまでもなく、一度でもゾムバルトの諸書に目を通した人には、自明の理と云つても宜しい位になつて居るであらうし、殊にマルクスを若干知つて居る人には釋迦に說法であらう。市場による此の劃一化がなくなるか、又は其れが微弱となるときは、商工業を影響する諸々の事情は七つを七倍したる惡鬼の如く押し寄せて來るのである。

（十五）

農村問題の複雑性は右の原則から消極的に說明せられるのである。今日の農村の經濟は七つを七倍したる惡鬼の纒綿する處なのである。農民の經濟は、リツカートの言ふ所とは反對に之を普遍化し、非個別化す可き一貫の原則を有たぬものである。從つて統一的の經濟的動機のみによつて支配せられず、常に他の複雜なる諸事情の影響を被つて居るのである。其原因は唯一つ、即ち農村農民の經濟は市場の支配を受くること皆無なるか、若くは極めて稀薄なものであることと是れである。

然るに、那須教授は云はれる『かくの如く都會生活に於ては確認することの甚だ困難なる因果關係の糸が、農村生活に於ては明かに認識せられ、而して其糸は經濟、社交、教育、家庭等の各部門を貫いて居る。農村問題の複雜化は此所に發生する』と。先づ私に言葉咎めと誤解されそうな一言を許されたい、教授は農村問題の複雜化と云はれる、乍去農村問題は決して複雜化したものではない、初めから複雜性を有して居るものである。複雜化と云へば複雜ならざりしものが、複雜になつたことを意味する。然るに農村問題は其起る當初から複雜なものであつて、決して、後から複雜に化したるものではない。此れは決して單なる言葉の問題ではない、農村問題の複雜性其ものに關する見方の根本的差違の問題である。教授は都會生活では、確認することの甚だ困難な因果關係の糸が、農村生活では明かに認識せられると云はれる。之を他の言葉に引直すと教授は自家矛盾のことを言つて居られることになる。何故ならば、教授は、前には農業の經營は商工業の其れよりも遙かに複雜であると斷言せられて居るのに、此一段では、都會生活は因果關係の糸が確認されないほど複雜な事情を有するに反し農村生活に於ては其れが明かに認識せられる、即ち其れ程單純だと斷定して

居られるからである。私は教授の眞に言はんとせらるゝ處が那邊にあるかを知るに惑ふなきを得ないものである。

（十六）

若しも因果關係の糸が明かに確認せられ得るならば、其は複雜化又は複雜性を證明するよりも、寧ろ其の單純性を證明すると云つた方が理路は徹底する。乍去、其は事實の反對たるを如何せん。市場によつて統一化合則化せられざる農村の生活は、經濟以外の社交、教育、家庭其他の原因事情が、相錯綜して已がじし其作用を逞くしつゝあるから、複雜なのであつて、其間の因果關係の糸は決して明かに確認せられ得ないのである。何となれば、市場によつて、資本主義によつて、普遍化せられない他の諸々の事情なるものは、一貫的合則性を有せず、偶發的個別的、又はリツカートの所謂一回限り的のものであつて、其作用は實に千差萬別なものである。因果關係の糸は明かに確認せられるどころか其存在さへ殆んど之を認むることが出來ないのである。無いものは確認せられる見込は到底ないのである。殊に傳統・習慣・惰性に基く事情は、極めて不合理的にして、又た非合則的なものである。而して、其れは均しく農村と云つても、農村毎に決して同樣なるものではない。殊に我邦の東北地方と西南地方、關東地方と關西地方とでは非常に徑庭のあるものである。市場の支配を受くる限り、商工業には其樣な差別性はないのである。商慣習と雖も段々資本主義の洗禮を受けて、今や全國劃一的に近きつゝあるのである。小作爭議の起否、其の數、其の激しさが、地方によつて甚だ異なるのを見て、此理は直ぐ理解せらる可きである。又他面に我邦農慣習の千差萬別なることは、小野武夫氏の續々發表せられつゝある各地の慣行調査を見ても、明瞭一點の疑を容れざる所であらう。舊幕時代の各藩は、其れ〴〵に甚だ異つた對農民政策を取つて居て、其れが今日まで影響を及ぼして居ることは、私の言ふを要せない所であらう。而して、其れは獨

り我邦に限られたことではなく、歐洲諸國何れも皆然りである。因果關係の糸の最とも明かに認識せられ得るのは、農村に於てではない、却つて都會生活に於てである。何となれば經濟生活を影響する諸般の事情は、都會生活に於ては、皆市場の大魔力に逢着し其の爲めに悉く一貫永續の統一的のものに合則化せられ普遍化せられ、制約せられるからである。

(十七)

尤も今日の農村農民が市場に出入する場合は尠からずある。乍去、此場合でも、其の市場の支配を受くることは寧ろ微弱である。其原因は種々あるが、重なるものは、近世の資本主義的生産の特徴たる集中化と大經營とは、農業に取つては、工業及商業に於けるとは、同樣の作用を有するものでないからである。工業に於ては、集中化は其の生産能率を高めることは疑のない處である。然るに農業に於ては、必ずしも然りと云ふことは出來ない。從つて集中化せざる農家經濟も、猶對等に集中化した農家經濟と競爭し得る。否集中化せざる農家は、市場に賣出すものを有すること少く、而して其少きものを賣ることは、却つて多くのものを賣るよりも容易な場合が多い。工業に於いては、其反對に集中化すること少き經營は、到底集中化の高度なる經營と對等に競爭することは出來ない。早晩其の爲めに倒されることを覺悟しなくてはならぬ。かく集中化が工業生産の生命たり特徴たる所以は、工業の生産は集中化することによつて、收獲遞增の法則の惠みを受くることが出來る。其反對に集中化せざる工業は其の惠みを受くること全く不可能なるか、若くは甚だ尠いからである。然るに農業に於いては、收獲遞減の法則は偉大なる力を以て支配しつゝあつて、集中化によつても之れを免るゝことは非常に困難であり、況んや遞增法則の惠みを受くることは甚だ六ケ敷いからである。殊に工業に

於ては、經營を大にするときは、遞增法則の惠みを受くること甚だ大であつて、從つて其の生產能率は集中化の度合よりも、更らにより多く增進する場合が多いのである。農業に於いては、寧ろ其反對に過小農を除いては、經營の小なるものと雖も、其生產能率は毫も經營の大なるものに讓らないものが甚だ多いのである。殊に自作農に於いて然ることは私の喋々を要せざることであらう。更らに、工業に於ては集中化は經營の大なるほど之を行ひ易いのであつて、此兩者は殆んど正比例を以て增進するのであるが、農業に於いては決して然らず經營小にして集中化の度を高くすることも出來るし、經營大なるものにして甚だ粗放的に營まれて居るものもあるのである。此一事丈けでも農業經濟に複雜性を帶びしめる。何となれば此等事情の相互作用は甚區々であつて、之を一貫的に因果的に說明することは殆んど不可能であるからである。商工業に於いては經營の大小と、集中化の多少と相伴ひ、而して又た收獲遞增、生產費遞減の法則の作用を一貫的に規則正しく被むるが故に、因果關係のそれは、容易に且つ明かに認識せられ得るのである。那須教授の因果關係論は、全く冠履を顚倒した見方ではあるまいかと疑はざるを得ぬ。かくては複雜なる農村問題を、出來る丈け單純化して考察しようとすることを、全く斷念せしむるの外はないことになるであらう。農村問題は複雜である、乍去現今我邦現在の農村問題論は更らにより複雜なものであると云はねばならぬ。

（十八）

ロドベルトスは、一八六七年に『土地所有の現在の信用缺乏の說明と其救濟』と題する有名の書に於いて、農耕地を資本として取扱ふことを極力攻擊したことは、人の知る所である。彼曰く、今日の法制は、土地の所有を資本として取扱ふてふ根本的誤謬に陷つて居る。然れども土地は決して資本たる可きものではない。何となれば、資本とは一の產物

の謂であつて、其の價値は其の生産に費された生産費に基いて計算せらるゝものである。土地は決して生産ではない、從つて其價値は、決して計算費によつて計算せらる可きものではない。土地は唯一の收益源泉である、一の貸子基本である。故に土地を目的とする一切の法律行爲は、土地所有より生ずる收益率（貸子率）の賣買、又は抵當のみに關す可きである。然るに今日は左樣はされて居ない。今日の法制は、土地所有に人爲的な資本資格を强制し、土地の生ずる純收益を現行利子率を以て還元し、かくして得られたる額を土地所有の資本價値として取扱つて居るのである。此の資本價値なるものは、毫も事實に存せざる單なる擬制である。若し此れが眞正の價値であるならば、此の價値なるものは、常に土地所有の收益に相當し、收益增せば增し、收益減ずれば減ず可き筈のものである。然るに實際は左樣でなく、收益に些の增減なくとも、唯だ利子率の騰落に從つて增減するのである。否とよ、利率が下れば收益減ずる場合に於ても、却つて土地の資本價値は騰り、其の反對に、收益が增しても、利率が上れば、地價は却つて下落するのである。土地所有の資本價値が、斯く變動することは、國民全體に取つても、亦た其所有地を維持せんとする地主に取つても、何の利益をも齎らさいのである。此れに依つて利するものは、土地を賣放たんとする地主のみである。此地主は、之れによつて投機的利益を享くること、恰も取引所に於ける利益收得者と同樣なのである。又父の遺産相續に際して、土地以外の遺産相續を受くる者も、同樣な利益を得る、何となれば彼の相續分は利率なるときは、其價値を增すべきであるから。之れに反し、其所有地なり相續地なりを、依然として所有して居やうと思ふ者は、資本負債を增すことを餘儀なくせられる結果となる。かくして農業進步する程、土地の資本價値は騰り、從つて地主の負債は增進する一方あるのみとなるのである。即ち知る今日の法制が、土地を資本化することが土地負債增加の原因となることをと。

(十九)

ロドベルトスの此の論は、確かに一の誤解であり、速断であることは、今更論ずるまでもない所である。乍去、農業を、一の資本的企業と見る可からずとする其の根本思想は、決して誤れるものではない、否甚だ妥當な見解である。土地を單なる一の資本と見る見方、其様の取扱方は、農業の特質を全然無視するものであつて、資本的企業ならざる農業を強て資本的企業の型に強制するてふ大矛盾に陷るものである。(此點に於て私は、恩師ブレンタノ先生のロドベルトス評論に不遜ながら異存を表明せざるを得ないものである。ブ先生農政學一〇五頁以下)。那須教授も頃日『大阪毎日』に連掲せしめられつゝある其の『公正なる小作料』論に於て、『農地價格に對する或利率を、其儘地代として徴收する主義は、小作料其もの、及びこれに從て農地價格そのものに、變動を來しつゝある、又は來すこと必要なりとする場合に於いては、妥當なる小作料を決定すべき基準となり得ない。(十一月一日 其(四)に於て) と云つて居られる。更らに又教授は『斯く資本々位の見方も、勞働本位の見方も、共に現實の問題として、小作料に關する爭議を解決する力を持たぬものとすれば、吾人は此處に或意味に於いて兩者の妥協たる第三の立場に立つて、此問題の解決を圖らねばならぬ』として、地主、小作人双方の農業經營に關する支出負擔を別々に計算し、これに按分比例して收穫を分配するといふ案の採用を提唱して居られるのである。これを平易なる日本語に飜譯して云へば地主對小作人の關係は資本主對勞働者の關係ではないと云ふ事になるのであつて、其れは誠に正しい妥當にして穩健なる見方であるといふの外はない。地主も、小作人も、共に農業經營に關しては、支出の負擔者であるのである。唯其の異る所は、小作人の負擔する費用中には、自己丼に家族の勞作てふ重要な課目が存するてふ一事である。然し其勞作は決して雇傭勞働者としての勞務給付ではない。

換言すれば商工業勞働者の勞務給付とは、其經濟上並に法律上の性質を全く異にするものである。而して小作人は勞作の支出のみならず物的支出をも負擔するものであり、更らに又た經營の危險をも負擔するものである。

(二十)

小作人は如何なる意味にても、工業勞働者に就て立てられた概念に於ての勞働者ではない。と共に、普通受取られる意味に於ての又た企業者でもないのである。企業者對勞働者てふ概念區別は、我邦多數の小作農には全然適用出來ないことであり、又た適用す可きでない。其故は即ち、我邦の農業は、市場支配の下に立つ一の營利經濟によつて營まれるものでないからである。此れと、企業對勞働者の對立の明白なる工業や商業と比較するときは、其事情は甚だ複雜なることは當然である。其複雜性は、企業者對勞働者てふ辨別が立てられない一事に存するので、決して一人にして此の兩個の資格を兼備することから來るのではない。抑も其樣な辨別を許す可きほどに、我邦の農業は合則化統一化規則化せられて居ないから、事情は複雜なのである。然るに那須教授は云ふ『加ふるに農民自身の複雜なる立場は、農村問題の複雜化を更らに助長する。即ち我邦の如き農村に於ては、農民の大多數は企業者であると同時に、勞働者である。小作細農の如きは、何等企業的利潤を受くることなく（萬一其の生ずる場合には直ちに高められたる地代となりて吸收し去られる）其の得る所は極めて低廉なる勞働報酬に過ぎざるが故に、本質的には之を勞働者と目す可きであるが、併し法律的に觀察すれば、正さに企業者たるの形式を具へてゐる』と。企業者ならざるものが、企業利潤を受く可き理由は毛頭ない。又企業者といふことは、法律上の形式でも何んでもない、經濟的の實質である。我邦の法律には企業者などと云ふ形式とかを、其何れの處にも規定はして居ない。此は如何なる意味にても法律上の問題ではないのである。抑も

我邦の農民に就て企業者對勞働者の區別を施さうとする考へ方其ものが、根本的に間違つて居るものである。恰も我邦の政黨に就て、レパブリカンとデモクラットの區別分けをしようとするやうなものであつて、其れは初から問題とはならないのである。我邦農民は普通受取られた意味に於ての企業者でもなければ、勞働者でもない。從つて此兩資格を兼有することが、農村問題の複雜化を助長するなどと云ふことは、元よりあり得可きことではない。農村問題の複雜性其ものゝ中に、我邦農民が企業者とも勞働者とも區別付け得られないと云ふことが、初から當然に含まれて居るのであつて、後から入り込み來つて、更らに複雜化を助長すると云ふのは、物の見方を誤つて居るものと信ずる。資本主義化せられない處、其處には企業者對勞働者の對立は存しない。其れが複雜性其ものゝ本質なのである。教授は社會主義を篤つて、彼等が農業問題を論ずるときは、水を泳ぐ魚に陸を走らせんとする錯誤に陷ると言つて居られるが、教授自らの陷られた錯誤は、更らに水を泳ぐ魚に空中を飛行せしめんとするが如きものではあるまいか。

(二十一)

複雜性の問題は姑く右に止めて置くことゝし、次に教授が農村問題の中心點とせられるものに就て一瞥を加へて見よう。

教授は云ふ、農村問題の內容の多岐に亘ること、又勞働問題の如く簡單に行かぬことは、以上論述せる所に依り、略明であらう。さりながら幾多の關聯せる問題中、時により、社會により、自ら中心となるべき若干の主要點を摑み得ぬわけではない。かゝる中心點を捉へないで居る事は、農村問題に對して、五里霧中の感をなさしむる所以であり、前揭社會政策學會における如き質疑を發生せしむる所以である。然らば我が邦現下の農村問題を研究するに當りて、此の中

心點は何處に存するかと。此れは如何にも同感であつて、社會政策學會に於ける質疑者の一人（最も大なる疑を懷いた一人）たりし私は、若干の主要點を握ましめて下さらうと云ふ教授の厚意に對して滿腔の感謝を捧げざるを得ない。ソコデ私は細密なる注意を以て、以下の文を熟讀した。然るに何事ぞ教授は『之を述ぶるに先つて、農村問題發生の經過に於て一瞥するを要する』と云はれし『農村問題の今昔』と云ふ一節を挿入して居られる。私は此一節を經過論として姑く措き、さて次の三節以下に向つたが、其處には、何が中心點であるかは一向示されて居ないのに失望せざるを得ない。教授の擧げられて居るものは、經營規模の擴大と農村の工業化、農村計劃と植民政策、農村教育の新理想の三項目であるが、其何れが中心點であるかは少しも示してないのである。教授は「此の解決は之を如何にするか。之は單なる小作問題の解決や、生産及經營技術の改善位で片のつくものではない。經濟、法制、教育、社會生活等百般の方面より、統一的目的を追求して努力することによりて、始めて其の解決を期し得可きものである」と、再其の經過論の末尾に繰返して居られる。然らば其の追求す可き統一的目的とは何であるか、私共は切に之を知らんとするものである。其の統一的目的なるものが明示せられたなら、農村問題は其の混沌裡から救ひ出され得るに相違あるまいと思ふ。然るに教授は二度三度繰返して之を與ふ可きことを示唆し置かれながら、終に何等之れを示すことなくして終られて居るのである。

（二十二）

經營規模の擴大は誠に結構なことである。私は社會政策學會に於てアーサー、ヤングの大農論を紹介して、我邦農業の過小經營の弊を痛論し、主として横井博士の農村論に對立せしむることを努めたのは、今より余程以前のことである。

確か其同じ所に於て高岡博士が我邦過小農の弊を極めて周到な統計的材料の上に立つて明かにせられたと記憶して居る。那須教授の論も其當時よりして引續き同様であることは私共の甚だ意を強くする所である。

農村の工業化に就ては、近頃大河内正敏博士の痛切な意見書の發表を受け、甚多くの暗示を得た。農村計畫と植民政策のことは、私は教授及多くの同論者と其見る所を異にする。農村教育のことは誠に結構千萬なことである。

斯く教授の擧げられた處は、大抵結構づくめの事柄を以て滿されて居つて、其れが實行出來るなら此上ないことは疑を容れない。其れと共に其れは何も農村問題の喧しくなつた今に於て然るのでなく、久しい以前から結構千萬な事として普く知られて居り、而して可なり多數の人々によつて耳にタコの入る程論ぜられて居た事柄である。或は云ふ人ありて『眞理は平凡なりと雖も猶ほ眞理なりと』。私はこれに答へて言ひたい『平凡は眞理なりと雖も猶平凡なりと』。

教授は我國農村問題の解決は、單なる小作問題の解決や、生産及經營技術の改善位で片のつくものではない、經濟、法制、教育、社會生活の百般の方面より統一的目的を追求して努力することによりて、始めて其の解決を期し得可きものであると云はれ、而して余は我が國農村問題の解決の爲めに、（一）農業經營規模の擴張、（二）農村に工業を興すこと、（三）國內及海外移植民の三點を實行するを以て最も緊要事と認むるものである、而して之が前提としては各農村に於て（四）農村計劃を建つることが必要であると云つて居られる。然らば農村計劃を立つることが、所謂統一的目的であるとせらるゝのか、又は（五）國家が此間に措置して、都鄙偏重の弊を矯むることを以て、其れなりとせらるゝのか、教授の其后の所論中には教授の眞意を推定す可き何かが一も與へられてないのである。

論じて茲に到り、私は端なく、レニンが其の『十九世紀末に於ける露國の農業問題』の終りに絶叫した次の一句を憶出さゞるを得ない。曰く『之を要するに、農業問題と農業恐慌の本體は、農業の振興を妨害する一切の事柄を廢止すると云ふことには存しない。此等の妨害を如何にして廢止するかの方法、如何なる階級によつて、又た如何なる方法を用ゐて、此の廢止を實行するかに存する。國の生産力の發達を妨害する事情を廢止すると云ふことは之を辭し得ない。而して其れは主觀的意味のみでなく、客觀的意味に於て然るのである。換言すれば、其の廢止は不可避的であつて、如何なる權力と雖も之を抑止することは出來ないのである』と。（一九二〇刊伯林版七五頁）

私は教授に問ひ度い。教授の主張せられる一切の結構づくめの事柄は、如何なる階級の手によつて、而して其れは何の手段によつて而して如何なる道行を經て、實行せらる可きであるか、實行せらる可き見込があるのであるかと。私は之れが農村問題の中核であると信ずること、レニンと全く同樣である。此れが教へられるにあらざれば、我々の努力を嚮導す可き統一的目的なるものは與へられる見込はないと、私は確信して居るのである。

我邦農業經營の規模過少なることが、農業生産能率の増進を著しく妨害して居ることは、萬人須知の一事實である。從つて規模の擴大化が能率、生産力引上げに多大の效ある可きことは、一切の討論を超越して居る。教授も私も此點に於ては全く同一見解を有つものである。從つて其を希ふことに於て、私は決して教授の後に落つるものではない。唯だ問題は、如何にして其れが實行せられ得るか、如何なる方法手段によつて、而して誰が當面の實行者となつて其れを實行し得るかの一事に存する。唯希しいと云つた丈けでは、何の解決にもならない。如何して實行するかを示して初めて解決が望み得られるのである。然らざる限り、其は單なる願望、露骨に云へば一片の机上の空論たるの外はあるまい。

農村の工業化にしても亦然りである。

(二十四)

那須教授は云ふ、余は農村問題の解決に關する愚意概要を述べた。然かも此等の方策の實行は、畢竟するに農民自身の覺醒に俟たざるを得ない。人間の改良が凡ての改良策の出發點にして又到着點たりと云ふ古くして、而も常に新らしい眞理に吾人は再び逢着する。……此所に於てか農民の教化を高め自覺を促す可き農村教育の問題は我等の技倆に一任せざる可からざるものとなると。此れによつて見ると、教授は農民の自覺てふ一事に一切の解決の鎖鑰を求め、而して其れは農村教育の振興によつて實現せらるとせらるゝが如くである。此れは conclusion in which nothing is concluded（何事も終結せざる結論）である。恰かも今日の人間が根本的に改造せらるゝとき、初めて社會問題は解決せらると云ふと同じである。人間の教育は農村問題や社會問題を超越した重大事である。一部の問題の手段たる可きものではない。其れは姑く措くとして、農村教育を施すこと何十年にして、而して其普及の程度が如何程になると、農村問題が解決せられるのであるか。此は雲をつかむやうな說である。私は繰返して云ひたい『平凡は眞理なりと雖も猶平凡』なりと。

我邦農業經濟の規模の小なること、農家副業の發達せざること、殊に牧畜の發達して居らざること、副業的工業の殆んど皆無なること、農村計劃のなかりしこと、農民教育の普及せざりしこと等は昔から我邦の農業の發達を妨げて居た原因である。農村問題の起つた今日忽如として起つて來た事柄ではない。其等の妨害事情の取り去らるゝことは、農村問題の起る起らざるに關係なく、必ず爲さなければならないことゝである。而して農村問題の起つたには、此等の事情の

在することが最大の原因たることも亦一の疑を容れない。然し何故に此等の原因から農村問題が起つたのであるかに就ては、私は教授と全く其見方を異にするものである。何となれば、教授は此等の原因が一向取去られそうもないから農村問題が起つたと見て居られるやうであるが私を以て見れば、農村問題の起つたのは此等の原因が多少なりとも取去られる見込が付いて來たから、而して其れを取去るに付ては、先づ農村問題を起すことが、其不可避的の道行であるから農村問題が起つて來たと思ふのであるから。例を以て云へば、不消化物を喫して胃を害した人が終に下痢に惱むこゝとなつた。那須教授曰く、下痢を止めることが必要である、其れには胃病を直さねばならぬと。私は曰く胃病を直すことが肝要である、當に下痢が起つたために胃病と云ふことが分つた、胃病さへ直せば、下痢は自然に直るであらうと。即ち私は前にも云つた、農村問題の起つたことは寧ろ幸なことであると。農村問題の勃興は、我邦の農業の根本的病弊治療上の一道行である、一手段である。其れが起らなかつたなら我々は今猶依然として根本病弊のあるに十分氣が付かなかつたであらう。

（二十五）

換言すれば、農村問題の起つたこと其事は病ではない、否却つて病の治療を運進する一手段である。而も今日の狀態では其最も有力有効な手段である。我々は農村問題の勃興を見て、大いに警を與へられたのである。斯く問題の起るは、即ち根本病弊の除却に、一歩は一歩と我々をして近付かしめて與れる所以である。根本的解決の鍵は、實に此農村問題の勃興其事を措いて外にない。教育の振興でもない、都會偏重の弊を矯むることでもなく、況んや内外移殖民による農村人口の稀薄化でもない。農村問題の弊が愈々高り、小作爭議が愈々續發することは、恰かも胃病患者の下痢に於

けるが如く、苦痛には相違ないが、其れが結局根本の病を取去る可き唯一の道行である。我々が正さに解決せざる可からざることは、農村問題其ものではない。農村問題を産み出した我邦農業の根本的病弊是れである。徒らに下り止め藥を投ずるは眞に病を癒す道ではない。唯當局の農村問題の處理に屈託するは、我邦農業と農民とを眞に救ひ出す所以ではないのである。農村問題を根本的に解決するものは、獨り農村問題其れ自らである。農村問題が鎭壓し去らるゝとき、農村問題は却つて濃化するの外はないのである。我々は農村問題を鎭壓することなく、其れをして其行く所まで行かしめることによつてのみ、眞に農村問題は徹底的に解決し得るのである。

此意味からしても、私は那須教授其他多くの農政論者の唱へらるゝ移殖民論殊に海外移殖民論に極力反對せざるを得ないものである。海外移殖民によつて農村人口を稀薄ならしめ得可しとするは、人口學上餘りに幼稚なる考へ方であることは、私は日米問題發生の當初から之を主張して居るが、其事は今論ぜずとして、假りに海外移殖民によつて、一時丈けは農村人口を稀薄化し得るとしても、其れは決して問題の解決とはならない、唯問題の遷延となるのみである。前例を藉りれば、下痢狀態を徒らに延長して、病者の苦しみと其病とを長引かしむるのみである。何となれば、農村人口の稀薄化は、決して教授等の望まれる通りの經濟の擴大を直ちに喚起す力は寸毫も有つて居らぬものである。經濟の擴張は其樣な事では中々實現せられるものではない。況んや農村の工業化をや。況んや農村計劃の樹立をや。其狀は、イクラ移殖民を獎勵しても、都會に於ける失業者其跡を絶ち得ないと同樣であらう。移殖民は社會問題の解決に殆んど何の益する所なきが如く、否其れよりも更らにより多く農村問題の解決に裨益する所ないものと私は確信する。（此點は他日或は再論するであらう、今は簡單に卑見を陳ぶるに止めて置く）。

(二十六)

西洋殊に獨逸にあつては、農耕地の所有主の負債の過大なることが農業問題の最重要點である。我邦に於ては、此點に關して精確なる調査あるを聞かぬが、高岡博士が嘗て社會政策學會に於て報告せられた處によると、我農民の負債額は獨逸に於ける如く過重なものではないようである。(河田博士の『農業經濟學』は千頁に近い大著であるにも拘らず、此點に就ては別に詳しい調査の跡を發見することが出來ない。總じて河田博士の農業論は我邦の實狀に關する實證的調査を輕視して居られるようである。此點に於ては高岡博士の『農政研究』は綿密なる實情調査を滿載して居て、我々門外漢を益すること莫大である)。兎に角我農政の最大問題の一は經營規模の過小、其れより來る生產能率の微小なることと是れであらう。少くとも私は茲に最重大の禍根を認む可しと考へつゝあるものである。而して其擴張に付いては、色々な方法があらう、工夫せらる可き施設は千差萬別であらう。而も其の方法も其の施設も一つの大きな動機があつて、之を鞭韃するにあらざれば、十分に其功を奏せざる可きを思ふものである。而して其の大きな動機なるものこそ、總て一切の妨害を取去り、一切の希はしい改善を可能ならしめるものでなければならぬと私は思ふものである。

其大きな動機は、今や農村問題の勃興と云ふ形態に於いて段々と動き出して居るものと私は見る。是れ私が農村問題の勃興寧ろ喜ぶ可しと言ふ所以である。而して又私が農村問題の發祥地は之を農村に求む可からず、其以外の廣い天地に之を求めなければならぬと言ふ所以である。然らば其大きな動機とは何であるか。答へて曰く資本主義營利經濟の擴張普及それである。

(二十七)

我邦農業經營の規模小であり、從つて其生產能率甚だ低く、農家に副業盛ならず、工業化なども些も問題たらざりし昔に在つて、農村問題の起らなかつたのは、我農民の欲望小に、生きずさりとて死なぬ程度の生活に壓抑せられても、大した不平を起すことなく殆んど醉生夢死して居たからである。而して此を刺激す可き都會の資本主義は未だ起らなかつたからである。故に其小規模農業は甚利益薄いものであり、國として甚希はしからざるものであつたに相違ないにも拘らず、數百年間殆んど其狀態を改めることなくして、終に今日にまで存續し來つたのである。此狀態からの脫出は、他の何の工夫施設によつても、決して十分に行はれ得るものでない。唯一つ資本主義、營利主義の農村への侵來によつてのみ其れは行はれ得るのである。即ち農業が一の資本的企業となり、農耕地が一の資本となることによつてのみ、有力有効なる脫出の刺激が與へられ、農業經營規模の擴大が實現せられ得るのであつて、農村人口の稀薄化などによつては到底十分に行はれ得る見込はないのである。

我邦の資本主義は未だ新しいものである。然し其れは近年長足の進歩をなし、近來に至つて資本主義的心理は段々農村にも入り込むやうになつた、換言すれば河田博士の言はれると反對に我農民心理は段々一般の資本的社會と反りが合ふやうになつて來た、玆に於て農民は簿記的に少なくとも多少計算的に其經濟を顧みるやうにならざるを得なく、なつた、多少なりとも計算的に其經濟狀態を考慮する時、彼等は爭で從來の地主對小作人の狀態に、從來の農村生活に滿足する事が出來よう。小作爭議、農村問題の勃發は其當然の產物である。殊に神戸博士の說法あるにも拘らず自足自給の經濟狀態から脫出す可く努めた農民は、其生產上に非常な不安と不平とを感ずるに至るに當然である。然るを無理に

自足自給の死なず生きざる昔に返れと説法するのは、産れ出つゝある嬰兒に母胎へ返れと命ずるやうな無理である。資本主義化するといふことは、我國農民にとつて今や唯一の解脫の道であるのである。外に脫け道は一本もないのである。事の善惡是非の問題ではない、事物自然の進行即ち斯くの如くなのである。我々は此大勢力を存するが儘に受取つて唯其間に起る可き無用の苦しみ、無用の弊害を可能的に防止するの外はない。此大勢に逆行すると云ふことは全然問題とならないのである。

而して、混沌たる農村問題の單純化の道は、この大事實を事實有るが儘に認めることの外にはないのである。此事實を無視し閑却して、複雜なる農村問題に當面するときは複雜なる問題を更らに其の誤れる取り扱ひ方によりていゝより複雜たらしめることとなる外はない。那須河田兩博士の農村問題論の複雜性は斯くして説明し得られると信ずる。

（二十八）

私は此の論文に於ては今日の農村問題論の混沌たるなるものかを指摘して、其の單純化の唯一の可能の道と信ずることを示せば以て足れりとするものであるから、茲で筆を擱いて然るべきことと思ふが、事の序であるから、最終に一言自分の未熟極る考へを開陳する許を乞いたいと思ふ。

農村論の單純化は、資本主義のアドプエントの儼然なる事實を確認する外に道なきが如く、農村問題そのものゝ單純化も資本主義に『オリエンチーレン』することによつてのみ望み得ると私は信ずるものである。換言すれば農村と農民

とが益々より多く市場化し市場の支配を受くることになれば、市場は其劃一性、其合則性を以て農村と農民とに臨み、必ずや其經濟生活の態様を合理化し、統一化するに相違ない。かくして那須教授が其の『公正なる小作料』論に於て試みられた様な、計算的にして合理的なる複式簿記本位の經濟法が實現し得られるであらうし、企業者にも勞働者にもあらざる農民は、明かに企業者か勞働者かに分別せられ、其處に階級の對立が生じ、階級闘爭が出現することになるであらう。而してそれは、經濟規模の擴大化、農村工業の樹立、農村計畫の確立をも伴ふであらう。乍去、人或は其れは問題の轉置に過ぎぬといふであらう、然り正さに其通りである。今日の農村問題は消滅するであらうと共に、新しい農村問題が必ず起る。即ち農村に於ける階級闘爭の社會問題が其れである。

玆に一つ考へ得ることは、農耕地の國有實行（米穀の國家專賣と混同す可からず）是れである。農耕地を凡て國有とし今日の地主階級なるものを全廢すれば、農村が資本主義に『オリエンチーレン』しても、階級闘爭は起らなくて濟むであらうと云ふ論者がある。たしか河田博士は久しい以前からの土地國有論者であるやうである。殊に此頃重刷された博士の舊著『土地經濟論』は甚有力なる土地國有論を主張したものだと記憶して居る。私は此論に對して簡單に答へて置きたい。土地の國有は決して資本主義の農村への侵染を妨ぐる効はない。唯其の形態を渝へるのみで依然として資本主義は強く（恐らくより多く）其魔術を逞くする。階級闘爭は其形態を變ずるに相違ない、決して消滅することは望まれない。レニン云ふ『土地に對する私有權の全廢は市場的並に資本的にオリエンチーレンされた農業の根底たるブルヂオア主義的基調を一も變ずるものではない。土地の國有が社會主義又は土地均分制と同じものなりと思惟する位間違つた考へ方はない』など。

誠にレニンの言ふ様に、農産物の換價が市場を前提とする以上、農民は今日の價格經濟流通經濟の支配を脱することは出來るものでない。(私はマルタス從てレニンと反對に絞り取りは主として流通生活に於て行はると信ずるものであるから、猶更以て絞り取り經濟の支配を認める、地主の絞り取りは已むとしても、都會商人の農民絞り取りが之れに代つて起ると見るものである)農業と農民の資本主義經濟への入り込みとは、其生産する農産物が市場に於いて換價せられると云ふことを前提することは言ふまでもない。而して又た同時に國有の土地に對する支拂は、今日の價格經濟の原則に準據することを離し能はないものである。(從つて玆にも絞り取りは行はれる)否、其れあるからこそ農民の經濟は今日と異なつた合理化、(ゾムバルトの所謂合理的にして計算的)規則化を見得るのである。レニン故に云ふ『商品市場なるもの存在する限り、社會主義を云々するは笑ふ可きことである』と。絞り取りを生産上にのみ認めるレニンすら斯く言ふ。況んや其主たる舞台を流通上に認める私から見れば猶更のことである。農産物を貨幣に換價する市場、其貨幣を以て農具肥料を買ふ市場の作用は、土地所有の形態が私有であらうと國有であらうと毫も異る所なしと彼が言つたのは彼が意味したよりも遥かにより強く向后の我邦農村に就て言はれなければならないと思ふ。併し私は今土地國有論を評論して居るのではない。唯だ現今の農村問題論の混沌たる有樣を開陳して、之れに對して限りなき煩悶の紛亂に惱みつゝあるものなることを明かにすれば事足りるのである。(十三、十一、七)

此文病中の執筆にかかり、論旨の蕪雜は勿論、提敍せる諸先輩に對し禮を失すること甚し。切に寛恕を祈る。

高田保馬論

蒼白な情熱家

新　明　正　道

學者において學問と人とは元より分つことの出來ないものだ。兩者は有機的に結合してゐる。しかし、重心の置き所如何によつて異つた型が對立して來る。學者でありながら、學問の中に自己を完全に表現し切つてゐない人がある。彼においては、人が學問よりも重要である。彼を能く知るには、學問よりも人に赴かねばならぬ。此れに對照されるのは、學問そのもの丶なかに完全に彼の人が表現せられ、此れが人そのものの興味以上に立つてゐる學者である。人として割合波瀾はない。が、恐らく、學者といへば、かうした型であるべきのが本當である。今私の眺めやうとする高田保馬氏は、正しくこの後の型の代表である。從つて、氏について考へるに當つては、徒らに氏の人となりを詮索するよりも、氏自らの學問に就いて考へる方が反つて氏の本質に肉迫することになるのである。我等は、氏を知るには既にかなり多くの著書を與へられてゐる。蒲柳の質と聞く氏が學問的には極めて精悍であることは、此等の著書の說明する所である。『社會學原理』だけでも堂々數千頁を越える尨大な巨作である『社會學概論、』『社會と國家、』『階級考』其他の著書を總和して見ただけで、既に偉觀たるを失はないのである。此等の大冊を創り出すために、費された勞力は果して如何ばかりだつたであらうか。量的に見ても、氏は充分我等を驚かすに足るのである。しかし、氏は斷じて單たる量の學者以上のものである。量よりも質において、寧ろ氏の獨彩が現はれ

てゐると謂はねばならぬ。氏が實において如何に學者的な精進を怠らないかといふことは、「原理」以後の諸多の著書を閲し來る者の直ちに知るところであつて、氏は決して自らの獲得した體系に苟安しない。更に組織を反省し、此れに改竄を加へ、その間に著しい變化の跡を見る。あらゆる方面の檢討に、この傾向は歴然と現はれてゐる。組織から組織へと精進を重ねて已まない根氣——兎もすると化石化して無味な蠟を嚙むやうな講義に停頓して了ふ學者の多いなかにあつて、氏の如きは實に稀である。眞に學問を愛するの徒でなくては、企及出來ないことだ。氏の研鑽の結果である社會學的諸貢獻が決して模倣や飜譯でなく、社會學界一般の領域に一つの氣高い高峰として峭り立つてゐるのも、當然である。

一つのエポクをなしつゝある現代の社會學において、氏の功績はかなり顯著なものがある。しかし、純學術的に氏の貢獻を研索するのは、今問題でない。學者としての氏を明らかにするには、人といふ方面と接觸した學問の方面、即ち學的態度が最も重大である。學問そのものゝ構造の他に、これを取扱ふ態度こそ我等の第一の問題でなければならぬ。最初に、我等は、氏は極めて開明的な見解の把持者であることを直ちに知るのである。從來我國一般の社會學の正統はアカデミズムの常として保守的な傾向を帶びてゐたものであるが、氏は全然この惡化から遊離してゐる。ある程度まで、これは氏の師米田庄太郎氏の自由主義的な影響に基づくものであらう。しかし、勿論氏にもその質はある。しかも、それは、氏特有の改新的な進取的な色彩を帶びてさへゐることは、氏の學問によつて明らかにされる。

氏に開明的な態度が樞軸をなしてゐることは詳述するまでもない。それは全體社會の觀念と國家の社會における地位の檢討において既に明瞭である。氏はマクイヴアーにおいてさへ猶ほ不明瞭であつた全體社會の觀念を整齊し、此れを以て自足的封鎖的組織に他ならぬとし、その構成要素を精細に說くところがあつた。國家と全體社會との同視は、從來多くの絕對主義的法學者又は社會學者によつて冒されてゐたものであるが、氏は、多くの新見解者と同じく、これを特異の社會とせず、他の社會と全く同一列に置き、以てこれを全體社會における平民的な一部分社會と觀念したものである。此の見解が開明的である所以は說くを須ひない。その論者の多くが、皆な在來の單純な國家偏重の社會觀への反對者であることは、即ちその開明的なる所以をなす。しかも、なほ、氏が全體社會觀の基礎として提唱する競爭說は、從來の聯合說への反對であるが、これは或る意味においてグムプロウイッチの社會鬪爭の觀念にも契合し、又た

團體自主權の要求とも一致し、徒らに連帶と聯合を說いた從來の說に對照しては、著しく分立的であり、反集權的であり、反抗的なものであつて、その基調にある悲痛なる開明的態度の秘せられてゐるのを見ることが出來る。私はこの說を首肯はしないが、氏の態度を特に浮彫にしてみせてゐる點において、この思想を重大なものと考へるのである。氏の態度が開明的であるのは疑ひやうもない。しかし、玆に注目したいのは、それが一般の開明的態度ではないことである。氏においては、この悲痛さが學者的としての氏の態度を冷靜にし、その心境を凍つた湖面の如きものたらしめてゐる。樂觀的ではあるが、何となく諦觀に近い自然に任せやうとする放任的傾向が底層を成してゐるのである。氏の視野には、自然の息が強く吹き込む。氏の社會を見る時、それは一種の價値的結合としてであつた。しかも、普遍化的方法によつて捉へられた社會の形相は、微細な分析を通過して、極めて自然的な光線のもとに映し出されるのである。價値的見地に立つといひながら、或る程度まで氏は自然的な見地に行くのである。かうした自然的な氣持が浸潤して價値的な人間の作爲への認識が蔽はれて了ふ。光彩は消され、灰色の景狀が我等に殘される。ここに、開明的態度に、一枚の蒼白さが現はれる。この自然的な冷靜の基調は、更に氏が自由と個性を論ずる所に最も明らかに發揮されるのだ。氏においては、自由の增進の原因は社會意識の拘束の減退にある。しかも、これは結局人口の增加にあるとされる。人口の增加は社會と個人との距離を擴大させ、從つて特定の個人の社會への價値は塵埃の如き微量に降下し、社會は個人から危險を蒙らなくなり、その結果社會は個人に自由を與へ得るに至るからである。個性の形成の如きも、主として人口の增進の作用であると認めざるを得ぬ。人口の增加による空間的及び職業的な社會の隔離作用、異社會の混和、社會の錯綜等が此の原因をなす。此の說を見るに、人口の增加といふ自然的な營爲が社會の殆ど死命を成し、自由や個性までも支配する原因である。マルサスの悲觀の材料が反つて樂觀への材料とされてゐるやうでもある。しかし、氏の樂觀では、人間的營爲よりも自然的營爲が根抵をなし、それだけ樂觀が人間的な意味では稀薄にされてゐる。氏は、以上の原理に立つ以上、自然的決定論者の俤を有する。氏は必然的な力を信じてゐる。その將來への動向を根底に見詰めてゐる。氏にとつては、直接我等の周圍に迫つてゐる問題も、此の大發展のなかの一つの派生的問題以上には考へられない。氏から見ては、かうした問題は餘り小さく成り終るのである。資本社會の衰滅、勞働の擡頭などの事項は、皆なこの大潮流の泡沫と考へ

らるべき運命にある。かうした自然的發展の上に社會を置いてみる氏は、ある意味では、マルクス學徒よりももつと冷靜で自然的であるのではないか。動かざる自然的確信の上に立つ氏。この傾向は、氏の思想から容易に脫離することはないだらう。此の態度は、アンドレエフの『星の世界へ』に出てくる天文臺長セルゲイのそれを想はしめる。人間の魂の偉大さ、宇宙の内秘への接近の意義を知つてゐても、眼前の個々の人間的事實を藐視し、『わしは過去について考へると同時に未來についても考へる。地面について考へると同時に星についても考へる——總てのものについて考へるのだ。わしは過去の霧のなかに滅びて了つた無數の人を見ると同時に未來の霧のなかに滅びやうとしてゐる無數の人を見るのだ。わしはコスモスを見てゐるのだ。そして勝ち誇る人生を、無限に潮の滿ち溢れる人生をいたるところに見てゐるのだ。だから、わしはたつた一人の人間のために悲しむことはしない』といひ放つ彼の自然的な科學的な態度は、人間事象のなかに恒久と普遍を眺めやうとする人々にも一般のものである。氏は、彼と同じ自然的心境に立つて社會を見る。その眼あまりに自然の高きに座し、氏の觀るところ、人間事象も殆ど自然事象と同じ色彩を以て現はれ來る。それだけ現實の社會や具體的問題への情熱は、如何に進取的であるにせよ、蒼白に冷却されるのである。氏は開明的ではあるが、自然科學者的な比較的超越的なものであることは否まれない。氏の理論を益々澄ましめ細微ならしめるものは、この蒼白の熱情である。しかし、一方その色彩を拭消し、やゝ冷たさを感ぜしめるのも、それである。

開明的ではあるが、それは赫耀たるものでなく、蒼白な自然的心情を基礎としてゐる。此れから必然的に生ずる不滿、氏の著書のよみ難いといふことも、一つはこゝに原因があるのかも知れない。これは、開明的な立場をとる氏にとつて惜しむべき缺陷であるといふ人があらう。しかし、この事實は、實は氏の特徴をなすものではないか。開明的といつても、それは必ずしも灼熱的なるを要しない。自然的傾向の強い人にあつて、このことは不可能である。杉森孝次郎氏の如きは最も人間的見方を強調するところから、開明的な社會學者であると共に、又た熱情家でもある。しかし、蒼白なりとはいへ、氏も亦た開明的情熱家である。自然的な見地に立つ一個の開明的な社會學者である。氏の學的組織の大建築の白堊の肌には、うすく滲み出た熱情がある。氏のは、滲み出てゐる熱情である。しかし、その一種の熱情であることは敢て、異らない。恐らくこれは移して自然科學に用ふれば、最も適當なものではある。しかし、文化現

象の研究においても決して不毛のものであるとは看做すことが出來ぬ。社會を自然的な眼を以て見ることも一つの貢獻である。その態度が透徹し、精到であり、且つ開明的であるならば、氏は竟に自然的見方に立つ人である。從つて、その學問は怪奇なサラセンやビザンチンの殿堂に比すべきでない。それは明晰な技師の睿智に成つたコンクリートの建築である。既に、氏の見方が自然的であり、こゝに限界があるとしても、反つてこゝに氏の特長が窺はれるのである。殊に、氏においては、自然的であるにせよ、熱情はある。人類に對する愛はある。蒼白なる熱情も、人類に對する尊重な熱情である。殊に、學者としては蒼白なる熱情が反つて適當なものであるとさへ思はれるのである。高田氏は最近更に經濟學の分野にまで考察の歩を進められてゐるが、我等はこの方面においても猶ほ氏の冷徹した分析によつて整斉さるべきものの多いことを知る。氏の優れた自然的な眼は、社會學におけるより以上に、經濟學において、有効に働き得るとも思はれる。氏の益々精進されんことを冀ふのは、獨り私だけでないだらう。私は希望としていへば、社會をもつと人間的に見て貰ひたいのであるが、しかし、人間だけが無論宇宙の全部でないことは認めざるを得ぬ。氏の如きは、稍々自然的であり過ぎると思ふが、人間に對し謙虚と自足を知らしめるといふ實踐的効果から見ても、その所説は、我等にとつて極めて尊重なるものである。氏の有する冷靜さは、學者として理知的に近いものである。心操の冷靜とこれを裏づける熱情。加ふるに、精緻を極めたるその論理。これ等は、相聚つて、氏を實に純乎たる學者に創り上げてゐるのである。氏の如きは、蓋し稀である。

高田さんの短歌

與謝野晶子

大正の少壯學者のなかで、殊に指を屈する程しか無い最高第一級の學者の一人として、平生ひそかに私の尊重し敬慕してゐるのは高田保馬さんです。

高田さんは京都や廣島においでになつたことが久しかつた

で、親しくお目にかかつたのは近年のことですが、私共の雜誌である前期の「明星」時代から私共の歌の仲間に加はつてゐて下さるのです。それで只今の「明星」を再興するやうになつても同人として高田さんに加はつて頂きました

只今の「明星」は大正十年の秋に森鷗外先生を中心として再興したのですが、初めに寄稿家としてお願する人人を森先生のお擇みになつた中に高田さんのお名前があつたので、高田君は同人になつて貰ひますと良人が云ひ、それから第一回の編輯會に高田さんも出席して下さつたので、私は其日に初めてお目にかかりました。

私はこの十餘年來「經濟論叢」其他の雜誌の上や、また單行本を通して、久しく高田さんの間接のお敎を受けて居ります。さうして多大の益を受け、私の蒙を啓いて頂いてゐることに對して感謝を捧げてゐる私の心の中では「高田先生」と申上げたいのですが、また一方で私共の仲間として歌をお詠みになつたり「明星」に感想を書いて下さつたりする情味から云ふと、私が他の「明星」同人に用ひてゐるのと同じもつとお親しい呼稱で、即ち「高田さん」と申上げずにはゐられない心持ちが致します。

私は高田さんの學績がその專攻の學問に止まらず、廣い學問の領域に亙つて學徒たるまた細心な研究の結果であるのを想像し、その稀有の篤學に驚くと共に、斷えず一家の新鋭なまた大膽な見識を創造して、明晰と雅醇とを作つた文章で表現されるのに推服して居ります。これだけの事を申上げるのも潛越の至りだと思つて顔が赤くなります。これ以上の批評らしい發言は私の柄でありません。他の諸家の御批評を承りたいと思います。

ただ一言私の書き添へたいのは、高田さんの短歌に就て感じてゐる事です。學者で歌を作られる人人は現に他にも見受けますが、その人人はどう云ふ譯か、言ひ合せたやうに專門歌人臭を帯びて而も專門歌人よりも似て非なる拙いものを作られるやうに思ひます。その人人は自家の專門の學術には苦勞されながら、歌になると、それだけの苦勞が足らないやうです。それだけの苦勞を惜まれるやうです。然るに高田さんのお歌は專門歌人の外に立ち、その流行に超然として、素人の率直清純な感情を基礎としながら、それを放漫に出さうとせず、人知れず自愛して、その表現に刻苦せられるやうに見受けます。高田さんの人一倍謙抑な、處女のやうに優しい性情は、その論文よりも、その短歌と平生の會話の方に際立つて現れてゐると思ひます。

若し「新しい未成品の美」と云ふことが云はれるなら、私は

高田さんの、あの純情の短歌、少しも専門歌人臭を帯びない短歌を讃歎する言葉に之を用ひたいと思ひます。それが高田さん獨自の短歌であるのを有難く思ひます。

高田さんの御健康が回復されつつあることを、最近のお便りで知つて、私共はどんなに喜んだでせう。猶十二分の御静養を祈り上げます。

私話二、三

——高田保馬論——

瀧正雄

嘗て京都に居た時、私は河上博士に對して白隱禪師を激賞したことがあつた。すると博士は徐ろに口を開いて「白隱を知る者は白隱のみである、君の批評と禪師の人格とは別物である」と叱られた事がある。今高田君の人物評を求めらるゝに及んで博士に叱られた昔日の事を思ひ出さずには居られない。高田君とは親友である。一つの釜の飯を食ふた事もあれば、一つの財布の金を使つた事もある。表からも裏からも批評を試みたならば出來ない事はないが、然し批評を行つて見た處で、畢竟皆これ讀者を誤るのみであらう。高田君の行爲の價値は、高田君でなければ理解し能はざるものである。故に私は、彼是批判的の事柄を述べないで唯單に同君について知つて居る事實談をしようと思ふ。

高田君は尋常小學校より大學を卒業するまで、終始首席を占めて居た人で、一回もその席を失はなかつた勉强家である。食事の際にも新聞を見、途を行くにも本を讀みつゝ歩いた人である。同君は常に私の語學の先生であつた。英語でも獨逸語でも、解らぬ事は絶へず同君より教はつたものである。高田君は非常に語學獨修の奇才を持つた人で、英語、獨逸語、佛蘭西語、羅典語等の語學は先生について學んだが、伊太利語其他は皆獨學である。或日「又西班牙語を初めたよ」と云ふから、どうしてそんなに獨學で解るものかと尋ぬると、「外國語は日本語と異つて容易に理解の出來る、先づ不規則動詞を暗記して了へ

ば、辭書を片手に讀書が出來るのだ」と稱して居た。伊太利語は全然獨學であるが、或伊太利語の社會學の本を飜譯して公にして居る所を見ると、兎に角讀み下す事位は出來るのだらうと思ふ。」

或日のクラカウの大學を卒業した一人の獨逸青年が飄然として私の家へやつて來た。家と云つても、まだ大學を出たばかりの頃であつたから、下宿屋の一室の事である。東京大學の友人が此獨逸人を私に紹介して來たのである。英語を知らない獨人で、ゼンツルマンと云ふ字さへ解らなかつた青年である。私は獨逸語の會話は出來ないので、早速高田君の應援を乞ふた。一週間も交際して居る間に、高田君の眉と手がその獨逸人のゼスチユアに酷似して來たから、私は之れによつて、同君の會話の上手さ加減を測量した。

高田君は語學の才があるから、社會學についても多くの參考書を讀み十分の研鑽を積んだことと信ずるが、私は到底同君の著述を批評する智識を持たない。哲學者としての同君は世上既に定評があるから、無用の言を弄する必要はない。然し高田君の事務の才幹を知つて居る者は恐らく尠なからう。余は時々君を行政官にして、その驚くべき事務の才能を發揮させて見たいと思つた事がある。事を處理するの敏捷さは、野呂間な私をして常に舌を卷かして居た。學生時代の無邪氣な話をすると、自分の少し熱の高い風邪にでも罹ると知らぬ間に病院に行つて室を極めて、「君は今日から病院に入るのだぞ」と指圖をする。私の下宿が一寸不便であると、私に一言の相談もなく下宿屋を替へて了つて、君は明日より引越すのだと敎へて吳れた。斯くして私は知らぬ間に入院し、知らぬ間に下宿を移轉した事があつた。

胃腸病院の南博士の診斷によれば、高田君の病氣は過度の勉强から來た胃潰瘍であるさうだ。私は少し精神を安靜にしたらどうかと勸めて居るが、數日前の書翰には矢張り机に親むで居ると書いてあつた。

C・G・T本部を訪ふ

▽佛國勞働運動の概觀

鈴木文治

一

『ヤアようこそ』と許り、彼れはその大きい手をさし出して堅く私の手を握つた。七月某日午前十時、佛蘭西現代勞働界の棟梁レオン・ジユーオー君を、巴里ラフアエット街のC・G・T本部に訪ねた時であつた。

ジユーオー君とは實は初對面ではない。千九百十九年二月より三月にかけて、彼の世界平和會議の一大部門として、國際勞働法制委員會が設けられた時、彼れは佛國の代表委員として、私は日本委員の顧問として、毎日のやうに佛國勞働省内の一室に顏を合せたのであつた。今年ゼネバの第六回國際勞働總會に於て、彼れは佛國勞働代表として、私は日本勞働代表として共に再會を喜んだのであつた。勞働總會は七月五日に終つた。私は其後の一週間を後始末に費し、十二日巴里に出て來た。豫ねて一度彼を事務所に訪ねて、佛國勞働運動の趨勢を聽きたいと思つて居たので、約を履んで定刻彼を訪ねて行つたのであつた、

事務所に宛てられたビルヂングは決して壯大といふことは出來なかつた。又そのビルヂングの全部を使用して居るといふのでもなかつた。多分間借をして居るのでもあらうか、全體六階建の中、その二階三階の十數室を占めて居るに過ぎぬらしい。調度といつた風のものも、格別人目を惹くに足るものがない。たゞ流石に彼れ自身の部屋は、日本流にいへば二十數疊を占むる位の廣さで、南に向いて日を受け、窓にかけたカーテンも氣の利いたレースで飾られ、床はリノリアムで張つてあるが、入口、中央等に濃綠色の絨氈を敷いてある。室の一隅には恰好の

い、二つの大書棚が据えてあつて、兩壁には二つの大肖像畫が對峙するやうに掲げられてある。一つはカール・マルクスので他の一つはジャン・ジョーレスのである。窓際に稍々近く事務用の大テーブルが据えられ、ジユーオー御大はジョーレスの肖像を背にし、マルクスの像に面し、此大テーブルの前に悠然として腰を下して居るのだ。

正確な年齡は聞いてもみないが、彼れは尙ほ五十に間があるであらう。身長五尺七八寸、デップリと太つた、血色のいゝ顏には野羊のやうな顎髯を生やして居る。髮の毛の眞黑な、一體に若々しい元氣が漲つて居るが、さりとてその稍々眼尻の下つた柔和な相貌は、精悍な闘將といふよりは、寧ろ溫情の燃える親分といつた方がより相應しい。全體の風貌が何となく茫洋として東洋人らしいところがある。體量は共にゼネバで話した折に、私よりも二キロ多くて九十八キロ（二十六貫餘）である。先づ何處から見ても堂々たる偉大なる體軀の所有者である。

彼れは演說を度々するせいでもあらうか、其聲は太いしやがれ聲である。ベースといつたやうな、決して朗かではない寧ろ濁聲である。併しそれは非常に强い調子で、廣いところによく透るのであつた。今年の總會に於ても、例の如く伊太利勞働代表の資格が大問題になつたが、彼れは勞働團を代表して、資格審査委員會の少數意見を述べたのであつた。その時彼の力强い濁聲は熱を帶びてヒシ〱と人の肺腑に迫るものがあり、彼れがファシストの憲法を引用して、眞向から伊太利の混合組合を罵倒し來つた時、滿場ために息を潜め、流石傲岸不屈なるロソザニ勞働代表をして顏色を失はしめたのである

今彼れは私に彼の前の皮張りの大安樂椅子を與へ、マドロスパイプを啣へ乍ら、暫らくは世間話に耽つた。やがて彼れはやゝ姿を改めて切り出した。

『君は僕から何を聞きたいのか、何か質問の準備でも定めてあるのかね』

私は言下に答へた。

『勿論、順序を追うて聞きたい考へだ。が、日本には從來英米獨等の勞働運動はいろ〱紹介されて居るが、佛蘭西の勞働運動については實はあまりよく知られて居ないのだ。そこで僕はC・G・T全體の概念を得たいと思ふ。先づC G・Tの發達の歷史から伺ひ度いね。』

二

『面倒なことを尋ねる男だな』といひながら、彼れはやをら身を起して、書架を探り、一部の彼れの著書を與へた。

『これを見て呉れたまへ。此中にはC・G・T運動の歴史も立場も皆書いてあるよ』といふのである。私は今此書の内容について一々紹介する必要を認めない。が、これは纏りよく佛國の勞働運動の概況を説いたものであつて、學界にも相當の價値を認められて居るといふのである。私は其後彼れの言に從つて、友人の助けを得ながら一わたり注意して見た。また二三の他書を渉獵して、自分の貧弱な智識を肥さうと努めた。私は自分の會得した限りに於て、佛國勞働運動の概況を傳へたいと思ふのである。

既に人も知る如く、佛國に勞働運動の起つたのは、これを英國に比すれば、其歴史は決して古くはない。古いといつても先づ十九世紀以來で、それも切り詰めて言へば、此四五十年以來のことゝ言つても不都合はあるまい。

佛國に於ても、勞働者の團結は十五世紀以來既にこれを見るのである。併し此頃の勞働者の團結は、彼のギルド組織の下に發達した『同職組合』であつて、固よりこれを今日の勞働組合と同一視することは出來ない。即ち彼等は今日の如く、階級意識を有する勞働者の集團ではなくて、單に年期上りの獨身勞働者の相互の利便を目的とした集團に過ぎない。言はゞ學校卒業生の同窓會の一寸毛の生えた位のものである。勿論、その後佛國の産業が急激な發達を遂げ、所謂資本主義的病弊が甚しくなるにつれて、彼等の集團の目的もおのづから變化をし、やがて今日の勞働組合の發達の端緒をなしたといふ點はある。これは即ち勞働者の集團的訓練又は習慣を與へたといふ點である。

十九世紀の初めに當りて、雇主に對する勞働者の共通利益擁護の目的を以て、當時到るところに組織せられた『相互組合』は、先づ佛蘭西に於ける第四階級の最初の實例として見るべきものであらう。併しそれとても其階級意識は、尚極めて不鮮明なるものであつた。此點について明瞭なる階級を以て組織せられたものは、右の『相互組合』に次いで組織せられたる『抵抗組合』である。彼の一八三九年に設立された印刷工組合の如きは、其著明なる一例である。

抵抗組合は純然たる經濟上の目的を有する組合であつて、いづれの勞働組合に於ても見るが如く、其要求は、一に勞働時間の短縮、二に賃銀の値上にあつた。併しそれとても彼等は決して積極的攻撃の態度に出でたのではなくて、寧ろ資本家の攻撃に對して防禦、現狀維持のために戰つたのであるといつてよい。けれども其頃非常な勢力を以て進んで來た近代工業の組織は、佛國の全土に普及し、資本主義の特色の一つとしての資本家の飽くなき搾取的要求は、後から〳〵と際限なく起つて來

て、勞働者の陣營は次第に追ひ詰められざるを得なかつた。『抵抗組合』は勢ひ此搾取と究迫とに對して勇敢に鬪かつた。それ寧ろ資本制度の主義や精神に對する戰にあらずして、彼等が窮乏のどん底に押し陷されたる結果、實に已むに已まれざる血と汗との生存の戰であつた。併し乍らかゝる際に先づ最も『睨まれる』ものは勞働者の集團でなければならない。果せる哉、佛國に於ても十九世紀の初葉より中葉にかけて、此種の組合に對する資本家の迫害に次ぐに、政府の壓迫あり、金力と權力との二段構を以て、勞働組合員の身邊に迫つて來た。是に於て乎、罰金、禁錮、追放等の刑罰は相次いで科せられ、勞働者の階級戰は、眞に白熱化したる必死の戰とならざるを得なかつたのである。

一體佛蘭西は革命の多い國である。佛蘭西最近世の歷史は、實に革命の歷史なりといふも不可なきもの〻如くである。併し乍らその革命は常に所謂第三階級の革命であつて、プロレタリヤの革命ではない。第四階級はいつもの革命の勢力として道具として、驅り出され引出されて、お附合はして居るもの〻、隨つて多くの犧牲は拂つて居るが、これが得るところのものはなかつた。一時その革命の好餌を投げ與へらる〻如くであつても、それは一時の幻影として消え去つて、後に殘るものは多くは苦い殘滓のみであつた。勞働者の集團運動に對してもさうである。革命の結果、集會結社の自由が稍々廣く認められるやうになつたかと思へば、又忽ち奪はれる。

殊に一七九一年に制定された有名なる惡法シャプリエ法は其後十九世紀に入つて益々其範圍を擴大し、又は其刑罰を重くするのみであつて、殆んど何等の改良が加へられない。勞働者は遂に肉彈を以て迫害に對抗するの外途はなきに至つた。一八六八年の法律は集會に對する取締を餘程緩にしたものであつた。此際起り來つたものは十八人の組合員——二十人以上は政府の許可を要す——を以て構成するところの『組合會議』である。併しこれとても法人の資格を認められたのでなく、委員たる個人の名儀に於て貯金の預入をなし勞働者を集合したのである。それでも此機會に於て勞働者の團體は續々として起つて來た。一八八〇年の頃には既に會員六萬を有する五百の勞働組合が存在してゐたといふ。

如何なる法律も事實の前には打ち勝つことが出來ない。一八八一年の頃から政府は更に勞働者の集會取締に手加減し、かくて一八八四年に至つて、勞働者の結社に法律上の保障を與へたる有名なる『勞働組合法』が發布されるに至つたのである。

三

一八六八年の勞働組合法發布は、佛蘭西の勞働運動にとつて正しく劃時代的のものであつた。佛蘭西の勞働界より暗黑を拂つて光明を投じたものである。宜なる哉本法の發布を見るや春一度來つて百花の一時に繚亂するが如く、幾十百の組合が全國至るところに續々として發生するに至つたのである。

尤も此頃の勞働組合はいづれも小規模のもので、其組織に於ても今日の如く完備したものではなかつた。併し同六八年巴里に於ける二百人の大工組合を初め、四百五十人の木挽職組合、千六百人の鑄物師組合、三百五十人の金箔職組合、其他彫刻師組合、漆畫工組合、車畫工組合、煙突職工組合、建築畫工組合、石工組合、パン製造人組合、鉛細工職組合、車職工組合、工夫組合、泥工組合、會計人組合等相並んで起り、地方に於ては絹布織物の中心地セン・エレエンに於ては六千人織物職工組合、リオンに於ては一萬人の織物職工組合が設立されたのである。而して佛國全體に於ては明かに六萬人を越えて居たといはれて居る。此後逐年勞働組合並に組合員の數は激增の勢を示した。佛國勞働局公表の統計に依るも、一九〇五年に於て勞働組合の總數四・六六五、組合員數七八一・三四四人と報ぜられて居るのである。

其後五年即ち一九一〇年の統計の公表するところに依れば、組合數五千二百六十、組合員數九十七萬七千に達して居る。現在ではいくらあるか知りたいと思つて私は、態々勞働省に勞働局長を訪問して尋ねたが、戰爭中より財政の關係で一切調査を中止して居るといふのでこれを詳知することが出來なかつた。併し乍ら少くとも二百萬人以上ではあるに相違ない。何となれば千九百二十一年、アムステルダム國際勞働同盟の年報に依れば、此同盟に加盟せる佛國C、G、Tの組合員丈けでも百五十萬人と報ぜられて居るからである。而して千九百十年に於けるC、G、T及びこれに屬せざる組合員との比率はC、G、T、所屬組合員數は全組合員數の約三十六パーセントと報ぜられて居るからである。

惜しいことには此C、G、Tは千九百二十二年に於て遂に分裂するに至つたことである。世界大戰は世界の經濟及社會生活の上に大なる影響を齎らした。就中、ロシヤ革命の成功の如きは、言ふまでもなくその最も大なる影響の一つである。此大きい波浪は又佛國勞働運動界にも押寄せて來た。千九百二十年十月二日C、G、Tがオルレアンに大會を開いた折、フロサールは二つの提案を出した。此提案は更に千九百二十一年四月

及五月に亘りて無政府主義新聞リベルテエル紙上に右ソロサール並にコロメール連名の下に掲載された。右提案の趣旨は要するにC、G、Tをソビエットの原理に改鑄することにあつた。是に於てC、G、Tの内部には非常な論爭が起つたのであるが、結局C、G、Tの容るゝところとならず、アナキスト、コムミユニストの群は全然C、G、Tより脱離し、別に同年七月C、G、T、U（統一勞働總同盟）を設立するに至つた。而して利害の全く相反する資本階級との協議乃至妥協は之を絶對に拒絶することを宣言したのである。此内部的紛爭の結果として、C、G、T全體の組合員も自づから減少せざるを得なかつた。今日のC、G、Tがどれ丈けの組合員を包容するかは甚だ不明であるが、C、G、Tでは約七十萬と稱して居る。然らばこれと相分離したC、G、T、Uの方はどうかといふに、これも同じく不明ではあるが、約三十萬と稱せられて居る。而してC、G、Tは其日刊の機關紙『人民の聲（ヴオア・ドプウプル）』に據り、C、G、T・Uは同じくジヨーレスの創立にかゝる『人道（リユマニテー）』に據り、互に論陣を張つて兩々相下らない。C、G、T・Uは佛國に於けるコムミユニスト、パーテイー（共産主義政黨）と常に相結び遙かにモスコウの聲援を得て、猛烈なる宣傳活躍をして居る。或はためにC、G、Tが切崩れつゝあるやにも傳へらるゝが、併し乍らC、G、Tがその依然たる佛國勞働運動史上に有する位置は容易に動かすべからざるものゝ如くである。

右の兩勞働團體の外には、恒星を圍る遊星の如く、幾十幾萬かの多くの地方的小組合がある譯である。而してこれ等の組合は名目こそ公簿に登録されてあるものゝ、その中には資本家の保護の下にある所謂黄色組合もあれば、又は勞資混淆の組合もある、又一種の共濟組合に一寸毛の生えたに過ぎない位のものもあつて、其社會的勢力は固よりいふに足らない。要するに佛國勞働運動の現況は、七十萬の組合員を有するC、G、Tと、三十萬の組合員を有するC、G、T、Uとが相拮抗の勢を以て進んで行つて居るのであつて、而して前者の背景にアムステルダムのインターナショナルがあり、後者の背景にモスコウの赤色インターナショナルのあるは、既に人の知るが如くである。

四

然らば則ちC、G、Tの組織は如何。

C、G、Tは二大團體によつて構成されて居る。其一は一地方（一都市又は一縣若しくは數縣に亘る）の各種の勞働組合

を打つて一丸としたる地方同盟である。其二は同一職業又は同一産業を中心として集團されたる全國同盟である。C、G、Tは此二本の柱によつて組み立てられ、支へられて居るのであつて、一つの勞働組合は必ず右の二團體に加盟せなければならぬ。即ち一個の勞働組合は右の二大團體を通してC、G、Tに加盟することを認められるので、右のいづれにも加盟せぬか、又は一つのみに加盟せる組合が、單獨直接にC、G、Tに加盟することは、會則上絶對に認められないのである。

茲にいふ地方同盟とは從來所謂（Bourses de Travail）として知られて來たものであつて、其起原は一八八七年巴里に始まる。これはその名の示す如く、本來巴里自治團體より補助金を受けて組織された職業紹介所、圖書館、會議等の事務所兼集會所であつた。然るに其後勞働組合の基礎が漸く鞏固になり、此中ば公行の機關が階級鬪爭の本部のやうな形を取るに至つて補助金は全然絶たれて仕まつた。勞働組合の發達が最初自治團體より補助金を受けたといふのは、一寸妙にも聞えるが、當時勞働組合の搖籃時代にあつては、彼等に十分階級意識の目覺めもなく、又それ丈けの實力もなかつたのである。巴里の此ブールスが見事な成功を收めたので、其後マルセーユに、ツウロンに、トウルウズに、ボルドオに續々として起つた、而して一九〇四年までには全國に此種の地方同盟の設立せられたもの一〇九、その會員の數實に三十七萬五千四百四十八人に達したといふのである。此地方同盟は其後更に全國的なる『地方同盟聯合』を組織して居る。

次に全國同盟といふのは、其內容が二つより成つて居る。即ち其一は同一産業に依る組合聯合、其二は同一職業に依る組合、これである。而して其目的は、要するに職業を同じうし、又産業を同じうするところから、其利害關係が最も緊密であるので、賃銀、勞働時間其他同一の待遇を要求し、相一致して其勞働條件の低下を防ぎ又はこれが向上を計るにある。一旦罷業等の起る際には、飽くまで協力して之を援助し、場合によつては同情罷業の擧にも出づる丈けの用意を以て居るのである。

C、G、Tは要するに右の二團體から成立つのであるが、其行政組織の大様を伺ふに、第一に其全體の最高機關ともいふべきものは、前述の地方同盟並に全國同盟より其組合員の多少に拘らず各一名づゝの代表者（任期二年）によつて組織さるゝ同盟委員會である。これは二年毎に開かるゝC、G、T大會の次に位すべきか或はこれに代るべき重要なる委員會であつてC、G、Tの大方針、豫算の編成等に重大なる關係をもつのである。此委員會は四月より六月、十月より十二月迄、毎年二回

づゝ會合し其任務を行ふのである。第二は右の同盟委員會によつて選任される執行委員會である。これは同盟委員會の委員數が各地より集まるのみならず、其員數も自然多數に上るので、いはゞ其小委員會とでもいふべきものである。從つて其委員も亦同盟委員中、總本部所在地たる巴里に近いセイヌ、オアーズ、マルヌの三縣より三十五人を選び、執行委員會を組織せしめて居るのである。其任務は次に述ぶる同盟事務局のおさへになる點にある。此執行委員は凡ての政黨政派に超越すべきを嚴密に要求されて居る。

第三は同盟事務局の組織である。これはC、G、Tの事務執行の機關であつて、其最も重要なる地位を占むるものなることはいふまでもない。即ち二年毎に開かるゝ大會の直後に於て、前述の同盟委員中より總主事一名、主事三名、會計一名を選任し、これに若干の終身代表者が加つてこゝに同盟事務局を組織することになる。此當事者は政治上の職務につき、又は代議士候補等になることは一切相成らないのである。

第四に監査委員會といふのがある。これは右同盟委員より選ばれた六人の委員より成り、主として財政監査の役目をする。從つて大會開始前一ヶ月には、凡ての事務を報告すべき責任があるのである。

C、G、Tを維持する爲めに必要なる費用は、其組合員の數に應じて、地方同盟並に全國同盟より支拂はれる。其金額は毎大會の定むる所に依る。現在いくらであるかは不明であるが、戰前までは全國同盟より百人毎に一ヶ月六十サンチーム、地方同盟から各人一ヶ月五十サンチームを徴收して居た。いづれにしても極めて小額である。

C、G、Tの組織は地方分權に失して居た傾があつたが、それは千九百十八年の大會に於て修正され、中央執行機關の權力が餘程擴大されて來た。(セル教授著「勞働法制」)。かくなつてはC、G、Tとしての活躍が尾大振はさるの憾みがあるからであらう。

五

最後に、然らばC・G・Tの思想上の立場は如何。

C・G・Tがサンヂカリズムの立場に立つことは今更絮說を須ひない。而してサンヂカリズムの何ものなるかは、あまり廣く我國に紹介されて居る。一言以て之を蔽へば、勞働組合中心主義とでも言はんか。集團的勞働者の組織的實力を以て、幾多の不義と不正とに滿つる現代社會制度に根本的革新を施し、自由主義と聯盟制度の上に基礎を置く、新社會を實現せんことを期

するにある。随つてC・G・Tは勞働組合の總同盟ではあるが、それは彼の英國流の勞働組合が、主として勞働條件其他の勞働者の經濟的境遇の改善を欲求するに反し、(今日に於ては必ずしも然らざるも)更に其依つて來る根源に遡りて、徹底的の解決を期せんとするところに、其特色ありといふべきであらう。畢竟彼れは實利主義に即し、此れは理想主義の上に立つとでも評すべきか。

——(C G T 本 部 を 訪 ふ)——

思想の問題を取扱ふことは、頗る興味多いことである。殊にグラブ、プーチエ、グリフーレ、フオル、プルチエ、ソレル等諸學者の思想及び行動と相照して、サンヂカリズムの歴史的發達の迹を尋ね、更に其現代及び將來の影響を究索することは、一層有意義にして興趣深き業(わざ)である。併し夫れは私の力の及ぶところでもなければ、私が本記事を草する目的でもない。私は唯だ端的に今日のC・G・Tが公表せるプログラム・ミニマムに依つて彼等が現に何を思ひ、何をなさんとしつゝあるかを報道するの自由を得たいのである。

プログラム・ミニマムは其前文に於ていふ——

『先例なき戰爭は世界を荒した。今正に再建の秋であり、物心兩方面から努力鋭意せねば休戰の此時に際し、勞働階級は平和實現のために不可分の地位に立つ。如此重大なる地位にあるが故に、こゝにC・G・Tの最小限度のプログラムを知らせる』

『斯くの如き悲慘(戰爭の)は、犬儒的愛國主義の搾取、財閥によつて支配さるゝ政府の無定見から來る。而して此政治的破滅は政府が資本家に阿れり、勞働者の組織と抗爭をなしたに基くといふことを、C・G・Tは戰爭に參加することなく宣言する權利がある……此經驗に基きC・G・Tは自由、正義及進歩の思想を引離さない。……凡ての力を以て勞働者を餓死的賃銀の下に置き、一方何人(なにびと)かを富ますことを許して居る制度と戰ふであらう。今は決定的に政治的民主々義を語る丈けではならぬ……夫れは社會正義を含ます、若し自由市民即ち、資本家の優越を許すことであり、反動及獨裁に對する我等の戰鬪プログラムは、一時的な單なる成功をのみ語ることになるであらう……』

斯くて彼等は何を要求するか。それは左の三大要求に示さるる諸項目に依つて知ることが出來る。

(一)、勞働取戻の要求

(一)一般的に掠奪されたるものゝ凡てを取戻すこと(二)社會保險の實行(三)兒童及婦人の保護(四)八時間勞働制

の主張（五）勞働者の勞働管理（六）住宅難は兒童の死亡率を增加する原因となるべきを思ふが故に、近代衛生の諸規則に基き、勞働者の負擔に堪ふる大規模なる住宅建築政策の實行。

（二）、社會革新

（一）生活費の騰貴防止（二）機械事業の廢止（三）極端なる保護政策の反對。同時に一九一六年以來肯定された國際聯盟の基礎の上に屈伸自在なる條件を以て自由貿易を主張す（四）指導者等の四年間忘却したる財政的努力の必要（五）消費税の廢止、直接税の一般化及嚴格なる適用（六）資本課税の主張（七）石油製造所、砂糖製造所及保險の獨占（但し現在の如き搾取の形を以てゞはなく）（八）產業の國有（九）國民生活を條件づけ、支配する經濟政治の凡ての大問題を討究する眞の權利を有し、一部決定權を有する生產消費兩者の組織より成る勞働經濟顧問會設立の主張（十）教育は世界平和のために必要なるが故に、貧富を問はず一般にこれを解放すること。

（三）、永久的にして且つ正しき平和のために

（一）國家主義を排斥し理解と道理との上に立つ政治（二）無秩序及財政經濟の不安を一掃するため永久努力する國民間の提携、國際的平和及好意の政治（三）軍備撤廢に依る平和の效果多き組織。

以上揭ぐるところに依つて、我等はC・G・Tの立場綱領を伺ふことが出來る。即ち彼等は（一）資本制度を否定し（二）軍國主義に反對し、且つ（三）既成國家組織を否定し、勞働組合を以て之に代へ、自由主義と聯盟制度の上に新國家を建設せんとするものである。然らば彼等は以上の抱負經綸を實現せんがために如何なる手段を採らんとするか。

六

凡そ勞働運動は生きた運動であり、又動く運動である。從つて實行の手段の方法の如き實際問題は、主義や主張を決めるやうに、判で押したやうにいへるものではない。實地の場合に臨んで種々變化すべきはいふまでもないのである。C、G、Tといへども同樣であるといへやう。併し大綱は定まつて居る。之れは即ち

一、ゼネラル・ストライキ・サボクーデユ・ボイコツト。

二、組合ラベルの使用。

三、直接行動。

サンヂカリズムのストライキは、彼の社會主義の政治的目的

を達するための政治的ストライキでもなく、組合主義の戰なる產業的ストライキでもなく、實に經濟組織を變革する目的のために行ふそれなのである。それには此ストライキは、人の革命的衝動を燃やす火であると主張し、所謂『神話』を創造して、宗教戰爭の神聖と同樣に、プロレタリヤ解放の戰爭に奮鬪する神聖を說き、プロレタリヤのヘロイズムを高調したことは有名な話である。こゝにサンヂカリズムの特色も亦存すといふべきである。組合主義の戰なる產業的ストライキでもなく、

――（C G T 本 部 を 訪 ふ）――

サボタージユ、ボイコツトのことは茲に之を說かず。組合ラベルの問題は英米流の組合運動のそれと異なり、個々のサンヂカが會費その他組合の義務を完了したるものに對し、同盟本部より交付する一種の證票の樣である。即ち之によりて常に階級意識を鮮明にし、鬪爭氣分を濃厚にせんとするの所以であらう。

『直接行動』の問題は、日本に於て既に廣く論議され、研究されて居るが、C、G、Tの本領も亦こゝにあるのであつて、所謂『議會主義』又は『議會政策』によつてプロレタリヤの最終目的を達せんことを希はず、一にサンヂカ（勞働組合）の團結の力によつて『直接』に目的の實現を期せんとするのである。故にC、G、Tは政治、政黨に超越し、その役員は如何なる政黨にも、乃至如何なる政府部內の役員にも關係することを嚴禁されて居るのである。之に反し先に述べたる分離の一派たるC、G、TUは戰後に於て最近著しく發達せる佛國の共產黨と相結び、異體同心の形を以て、常に政權獲得の方向に進まんとするものゝ如くである。C、G、Tと雖も、勿論組合員個人の行動は何等束縛はしない。實に組合員個人は政治運動に關係するも全く自由である。加之、佛國現內閣の中心たる社會黨とは、一脈の聲息相通ずるものゝ如く、選擧に當りてもC、G、T側は團體としてゞはないが、明かに之を支持して居る。現勞働大臣ゴダール氏が先般ゼネバの勞働會議に數日出席したる折の如き、ジユオー氏の名を以て、各國勞働代表を招待し、ゴダール氏のためにレセプシヨンを行つた位である。

上述の如く、C、G、Tの標傍する所を見れば、一見極端猛烈にして、我國一部の人士をして、或は驚倒するに足るものがあらう。けれども今日のC、G、Tは學者が以てサンヂカリズム・レフオーミスト（改良主義サンヂカリズム）の範疇內に入れるところであつて、決して猛烈でも過激でもない。其目的とするところは革命的サンヂカリズムと同じく、資本制度並に賃銀制度の廢止を主張するが、たゞ實行の手段に於て區別を生ずる。C、G、Tは社會轉換のために進步的乃至平和的階級を經て到らんことを希望し、かゝる手段による『意思』を持たんこ

とを要求する。勿論これがために、戰鬪的プロレタリヤに提出された革命的諸武器を拒絶はしない。此意味に於て今日のC、G、Tは改良主義であると同時に革命的でもある。此二方面を有することは特に注意を要すると云つてある。此ためにジュオー君は屢々外間より妥協屋だの微温的だの灰色だのといふ嘲罵を浴びる。併し彼れの確信はために微動だも感ぜざるもの丶如く泰然として嘯いて居る。彼の率ゐる七十萬の組合員も亦多くこれを意に介せざるもの丶如くである。

最後に私はC、G、Tの行ひつ丶ある勞働教育並に宣傳方法について一言して本篇の終結を急がう。

七

勞働者教育といつても、C、G、Tのそれは決して、一般勞働者の補習教育もなく、亦技術教育もない。それはC、G、Tそれ自身のための、否、勞働階級解放のための鬪士養成の機關なのである。

C、G、Tでは毎年十月より四月迄、パリー、ラファエット街の本部をはじめ、リオンボルドー、レイム其他全國有數の都會に於て夜學校を組織し、運動の第一線に立つ鬪士の養成訓練を計る。學校の名も從つて普通の勞働學校といはず、明白に『鬪士の學校』と稱して居る。此等の學生は各その所屬の組合より選拔されて送られるので、勿論晝間は勞働に從事し、夜間勞働の餘暇を以て就學するのである。

さて此學校に於ては先づ第一に『サンヂカリズムの研究のためには如何なる態度を以てすべきか』を教へ、こ丶にサンヂカリズムの理論的研究の門を開くのである。第二には『行動のために學ぶべき必要』を說き、除々に勞働運動の核心に觸れんとして居る。即ち第三には『努力の美』を教へ、虐げられたる自己及階級のために奮鬪する精神美を歌ふのである。第四に『社會實想の前の思想』の題下に思想問題に關する指導を試み、第五に『歷史的觀察』を說いて舊ローマの職業的組合から、中世のコオポラション及び今日のサンヂカに及び、現代勞働階級の位置の何たるかを示し、第六に、勞働者の變らざる堅き連帶の概念、及び階級意識に革命的精神の欠くべからざるを說きつ丶あるのである。かくして養成されたものが、やがて運動の中心となる。右に揭げたる教科の題目丈けを見ても、如何にも佛蘭西のサンヂカリズムの運動らしい氣持ちが現はれて居るやうに思はれる。

C、G、Tは二つの機關紙を出して居る。一つは日刊の『民衆の聲』で今一つは週間の『民衆』である。前者は勞働運動の立

場を社會一般に諒解させるために役立つもので一般に廣く販賣し、後者は組合内部の機關紙、主としてC、G、T本部の消息と、聯盟内の地方同盟、全國同盟、地方同盟全國聯盟等に報導するためのものである。私は勞働者日刊新聞の經營難を說き、佛蘭西ではうまく行つて居るかとジュオー君に尋ねたら、君はウスラ笑を漏し乍ら『勞働新聞の經營といふものはどこの國でも似たやうなものと見えるね』と唯一言答へた。蓋し『民衆の聲』は財政難に陷つて、屢々廢刊の議がC、G・Tの中よりして起つて居るのである。

右二つの機關紙の外には、時宜に應じて各種のパンフレットを刊行して宣傳につとめる外、屢々演說班を組織して、全國を遊說に廻る等の仕組を有し、極力機會を利用して、宣傳に從事して居る。

面白い事には佛蘭西の智識勞働者の組合がC、G、Tに加盟して居ることである。智識勞働者といつても、その中心は學校の先生達であつて、小學校から大學の教授まで、總數七萬に達するといふのである。現在ソルボン大學社會學教授ブークレー博士によつて指導せられて居るといふが、大學教授を組合長とする智識勞働者が、純然たる所謂筋肉勞働者の一團に加盟して、これと行動を共にして居るが如きは、日本流の考へ方からすれば、以て珍とするに足ると思ふ。勞働階級に對する智識階級としての特殊の優越感を持つことなしに、同一階級智識の下に、共同動作を取つてゐるなど、流石に先進國だと思つたのであつた。

彼れ一語、我一語、時は遠慮なく過ぎて十二時に近い。私は最後にジュオー君に對して何か日本勞働者に挨拶の辭でもないかと注文した。同君は言下に『ウイ』と應じて直ちにペンを走らして曰く——

日本のプロレタリアへ

CGTの中に集まるフランスのプロレタリアの名を以て、私は我等の連帶的友愛の感情の表現を、日本のプロレタリアに告ぐることは幸福である。勞働者の國際的連帶は世界進步の大なる力である。此勞働者の提携によつて、全勞働の解放が實現されるであらう。而して平和は之によつて世界に設定されるであらう。

民衆の連帶萬歲

プロレタリアの國際的連帶萬歲

レオン・ジュオー

私は右の言葉を土産としてやがて暇を告げた。ジュオー君は再びその大きい手を差出して私の手を握つた。先刻以來、此京

洋の勞働者の來訪に、多少好奇心を以て、我等の會談に注意して居たらしかつたCGTの本部に働いて居る同僚諸君も此時俄かに方々から顏を出した。そしていづれも私の手を握つて口々に曰く『アウルヴオア、スズキ』『アウソヴアオア、カメラード、また來たまへ』といひ知れぬ友愛の情が私の全身を通じて流れた。さても強き勞働連帶の感念よ。

私は今、ソルボン大學直近のホテルの一室に居を占めて、靜かに窓外の街路樹の葉が音もなくして散る樣を眺めて居る。巴里には早くも秋が來た。明月を天に見ず、鴻雁の空を亘るあるにあらざれども、流石に旅愁の胸に迫るもののあるを感ぜざるを得ない。此旅愁を通して、遙かに一萬哩外の祖國を顧みる。萬感交々湧き來るを禁じないのである。今、歐洲には共産黨あり社會黨あり、勞働黨あり、ファスチスチあり、動と反動と、保守と急進と相搏ち相鬪ふ間に、國運は怒濤を押切つて行く船の如く進航をつゞけて居る。我國勞働運動將來の方向や如何。東すべきか、將た西すべきか。（八月十二日）

支那時局の前途の收拾は如何

太田宇之助

『今回の支那の戰爭は新舊思想の爭ひであつて、專制に反抗して民意に基く政治に建直さんとした第一革命の遣直しである、又中央集權主義に對する地方分權主義の抗爭でありそして又軍閥及び官僚政治打破の戰ひだ』と王正廷氏は語つてゐるが、我等はそのやうな主義の戰爭とは見ることが出來なかつた。やはり直隷派と稱せられる軍閥と之と利害關係を異にした軍閥と政派の聯合たる所謂反直隷派との私鬪としか解されなかつた。併しながら中央集權主義の下に武力統一を期してゐた吳佩孚氏を覇權者とする直隷派に反對する反直隷派を結局は王正廷氏のいふやうに地方分權派であり、民主々義派であると強いて言へないことはなかつた。そうして今回の奉直戰の最中に於て馮玉祥氏が突如北京に入城して行つたクーデターは、從來の全く行詰つてゐた支那政局にあつて自ら革命的の性質を帶びるに至つたもので、馮玉祥氏も兎に角民意に從つてこの際支那の根本的改革を斷行する意志を有してゐるやうである、我等は玆に至つて始めて軍閥の私鬪が支那一般民衆と交渉を生じたものと見るのであつて、今回の政變が從來屢々行はれたクーデターに比して遙かに重要視させる所以であつて、我等は現下の支那の腐敗の政局革命的方法を以て一快刀の下に改造を行ひ新政治を創め得る絶好機會に逢着してゐることを認めるのであつて、支那にとつては正に第一革命に比すべき重大の時機であると信ずる。

十月二十三日馮玉祥氏が吳佩孚氏を裏切り、張作霖、段祺瑞氏等と通じて馬首を北京に返してクーデターを行つた結果は、吳佩孚氏は急遽山海關の戰線から天津に引返し來て、新たに馮氏と戰場に見みえること丶なつたのであるが、山海關の戰線は脆くも崩れて吳氏の立場は愈々困難となつたので遂に十一月三日天津から地方に落ちてしまひ、一方クーデターと同時に幽閉同樣になつてゐた大總統曹錕氏は黃郛氏の過渡內閣が成立するや之に總統の職權を攝行せしむること丶なりその前日既に退位して總統府を出てしまつたのである。そこで馮氏のクーデター

の目的は一先づ達せられたことになつた。直隷派の大軍閥はこの時と共に崩壞して終つたのである。我等は之を北洋軍閥が終焉を告げたものとして支那のために喜ぶ。民國以來十三年の間袁世凱氏が殘した北洋軍閥は常に武力を以て政權を私して來たものであるが內訌と分裂を繰返して來て吳佩孚氏に至つて遂に滅んだのである、さうして支那には最早之に代るべき新軍閥が生れないことは諸種の事情から明らかだ。けれども之で支那の戰爭が全く後を斷つといふのではない。それどころではなく長江地方の直隷派督軍中にはまだ〳〵吳佩孚氏を援助して馮玉祥、張作霖氏等に楯つかうとする氣配が見えるのであるが、吳氏自身は勿論江蘇の齊燮元、浙江の孫傳芳氏等の敢爲の材と見られる人々ももう再び强大な兵權を握ることは不可能となつたのは明かだ。支那では「出る杭」は必らず打たれた、離合集散が絕えず行はれて强き一人は亡んで行つた、その度每に一步づつ軍閥は民意に降つて來た。袁世凱――安徽派――奉天派――直隷派、もう直隷派に續く何派の軍閥もなくなつた、そして倘將くは閥栗の督軍等が辛くも聯合によつて地位の維持に努めるに過ぎないだらう、それも大勢には逆行出來ないでいよいよ民衆の力に押流されやうとしてゐるのだ。我等はこの大勢を知るが故に今日最も注目されてゐる段祺瑞氏の行動に大なる誤りがあらうとは考へられない、何となれば段氏自身が既に一度失敗して五年間の沈思と反省によつて覺醒した人だからである、然るに我國に於て曩に直隷派が滿洲に侵入し來るなら我特殊利益が侵害されるとて山王臺邊りで騷いだやうな人々は、曹錕、吳佩孚氏等の失脚と共に直ちに段祺瑞氏が之にとつて代るものとして喜んだものだ。しかしながら段氏は先年の苦い經驗を忘れて再び曹錕氏の二の舞をするやうなヘマをせぬ筈だ、第一時局はもつと〳〵嚴肅になつてゐて何人にしてもこの際輕擧を許さないのである。段氏出廬の意味は差當り時局收拾の中心人物となつて斡旋に努力することにあつて、段氏は斯くして徐ろに展開し來る次の局面を待つことであらう。

併し時局收拾までに少なからぬ日子を要することであるから或ひは各省の軍民長官に推擧された形式を以て臨時的の榮位に就くかも知れぬ。だがそれは飽まで臨時的であつて今回の革命的の性質を滅却するものであり得ない。兎に角段祺瑞氏は吳佩孚氏の失脚と共に今や奉天の張作霖、北京の馮玉祥氏に推擧されて時局收拾の爲めに乘出して來た。僅に少數の閣員より成る黃代理內閣の總統職權代行の形式で一時維持されたまゝで全く泥沌たる狀態にある支那時局を收拾して革命的の一生面を打開して支那の平和統一の基礎を定めんとするに當つて、クーデタ

ーの斷行者たる馮玉祥氏自身に於ても前者の失敗の跡と大勢とに鑑みて相當に徹底して民意に副ふ改革意見を有して居て、例へば國民會議を召集して萬機公論に決すべしとする如きがそれであるが、取り敢えず段祺瑞氏を國民軍大元帥として推戴して時局收拾の局に當らせやうとしてゐる、それに張作霖氏も內面では具體的の意見もあるやうだが之も段氏を各省聯合軍統帥の名義で推擧してゐて、その目的は馮氏と同樣であるから段氏が今後の責任は極めて重大であり、その政見は大いに注目されてゐるわけである。段氏は未だ正式に意見を發表するに至らないが平素の主義と最近なされた談片を綜合する時は略想像され得る、即ち今日支那に於ける輿論である所の「聯省自治」を目標として、現下の時局收拾として所謂元老會議及び各省の代表的人物を網羅する國是會議を催してすべての根本策を樹てるであらう。段氏は往年南方に對する武力統一政策に失敗した結果飜然として悟り爾來野にあつて「聯省自治」を唱へて來たが今回の吳佩孚氏失脚を見て益々その信念を强うするに至つたことゝ思はれる、そうして現國會や、從つて現國會が制定して曹總統が昨年公布した中華民國憲法を承認しないで來た反直隸派としては戰敗後の今日に於て直ちに之等を承認するものではない、それよりも國會は旣に國民に信を失い事實上認められなくなつてしまつてゐるのであるから此際國會を經ず合法的手段を顧みず既存のすべての機關を一先づ廢棄して改て全國的の會議の決議に待つといふ更始一新の革命的方法に依るのでなければ實際としても時局を解決することは出來ないのである。

時局解決策として先づ國民會議を召集すべしとの主張は、今回も馮玉祥氏がクーデター實行後に唱へた所であるが、實は今日に始まつたものではない、最初に國民大會說を唱へて天下の注意を喚起したものは實に吳佩孚氏であつた、民國六年段祺瑞氏が國會の不法解散を行つて以來西南諸省は「護法」の名の下に團結して南北の抗爭を續けてゐたのが、民國八年上海に平和會議が開かれるに至つたのであるが遂に會議は破裂してしまつた。そこで吳佩孚氏は九年安直戰に勝利を得て大いに得意となるや突然時局解決策として國民大會召集を主張する宣言を發表したのであつた、その趣旨は「民國以來變亂の原因をなしたものは軍閥の政客である、禍ひなる安福派が倒潰して改革の機會は到來した、舊國會旣に國民の齒いせざる所、新國會亦依るべき法規はない、故に積年の紛糾を解決し眞正の民意を發揚するためには國民大會を召集するの外はない」といふにあつて、具體的方法として正式內閣成立まで軍政を行ふこと、國民大會に於て憲法を制定し其他善後策一切を自決して他より干渉を許さ

ざること、會員に全國各縣農工商教育の各會より代表者一人を選擧して初選とし、更に全省よりその五分一を合選して複選とし、複選終るを待つて上海又は天津で開會すること等の辨法を擧げた。この說は一時天下の議論の中心となつた觀があつたが當時の吳氏はまだ左程認められてゐなかつたのを時機尙熟せなかつたので全國を動かすに至らなかつた、吳氏は更に張紹曾氏に意を含め、張紹曾氏は次で同じ趣旨からして廬山に國是會議を開くべしとの所謂「廬山會議」の運動を始めたが之も大して問題とならなかつた。その吳佩孚氏が更に奉直戰に勝つに及んで武力統一主義の信者に變り遂に今日の末路を見るに至つたことは大なる皮肉でないか。この國民大會說は其後も民間に於て常に論ぜられ、機會ある每に形を變へて運動となつた、昨年內には曹錕氏一派のクーデターあり外には臨城事件發生して英米に於る支那共同管理論を生じた際にも民黨の徐謙氏等は國民救國大會を發起し、全國各方面の代表者を網羅して和平會議を開き和平統一問題を議決し裁兵を實行することと中央委員會を設けて總統、國務院の職權を行使することを主張した、支那で總統制を廢して勞農露國の如き委員制を採用すべしとの議論は此前後に主として民黨の間に大分論ぜられた、唐紹儀氏も此有力な主張者である。實際袁世凱氏の總統を始めとして國民が現在のやうな總統制のために禍ひされたことは著しい事實であつて、第一段內閣時代に責任內閣制が確立されたやうに見えたがやはり駄目で、馮國璋、徐世昌等の總統の小細工の政略が如何に支那の和平統一に累を及ぼしたかは說くまでもない。故に今回に於ても逸早く委員制の聲が上つたのは當然であつて、殊に將來聯省自治を實行するに當つては各省より一人の委員を擧げ委員の互選によつて一年一回に委員長一人の選擧を行ふことは最も合理的で而も時代に適した方法と謂はねばならぬ。さすれば各省議會ある以上國會は最早必要としなくなるだらう。併し段氏はやはり議會主義を捨てず新國會の召集に務むることであらう。

聯省自治が既に支那の一般輿論であることは既に述べた、この主張は各省に於て各省の地理人情文化の程度等の特別の事情に應じた省憲法を制定して各省にて自治を行ひ、而して各省の聯合によつて中央政府を設けやうとするもので恰かも米國の聯邦制と內容を殆ど一にせんとするものである。元來支那は各省で地理、風俗習慣言語を異にし、帝國時代に各省に總督を置いて一種の委任統治が行はれてゐたのであるが、民國成立するや是等の歷史が無視されて中央集權制が實施せられたもので、民國以來の禍ひのこれに基くものが多い。民國八年の上海和平會議が決裂に終つて和平統一の望みが消えて政局が行詰つてしま

つた時、右の歷史的要求と時代思潮の合致とが合して南方に自治の運動が漸く熾んになつて來たのである。「湖南人の湖南」「四川人の四川」「廣東人の廣東」「浙江人の浙江」等の標語が新たに盛んに使はれるやうになつた。斯くて民國九年六月唐繼堯氏は初めて雲南の自治を宣言するに至り同年省憲法制定の準備に着手し、自治の事實上の先驅を爲した湖南省も翌年に至つて之にならい、四川、貴州、廣東、浙江から殆んど全國の大半は自治の準備を爲し始めた。右の內湖南省は最も早く省憲法を議定し浙江省は之を公布し得た最初の省であるが種々の事情で實施されるに至らず、やはり湖南省が公布實施の先驅となり、湖南省は兎も角十一年より省憲法を實施して自治を行つて現在に至つた唯一の省である。民治運動は十一年に入つて益々盛んとなり各省民治運動會が各省の總商會を始め民間諸團體によつて組織され「聯省自治」と「裁兵」の運動とを行つた、同年湖南の趙恒惕、雲南の唐繼堯、廣東の陳炯明、四川の劉湘の諸氏は聯省自治の主張を明かにしたが、この時吳佩孚氏は奉直戰に於て再び勝つて直隷派の天下となつたので、漸く武力統一を夢みるやうになつたので曹錕氏と共同して中央統一を主張して之に反對する通電を發した。之より先吳佩孚氏は奉直戰に勝つや徐總統驅逐と南方一部の歡心を求むるの目的で同年六月南北間の長い間の抗爭の種であつた。舊國會を回復し黎元洪氏を復位せしめたのであるが、黎總統は就職と共に和平統一令を出してこの機會に統一問題を解決すべく努力した。がこの結果は却つて吳佩孚氏等の意に反する聯省自治の風潮が激成さるゝに至つたが右の如く吳佩孚氏の中央集權主義からその反對に遭い直隷派の協力によつて この運動は 表面一時 衰ふるやうになつた。しかし支那の大多數の國民は勿論重なる軍人政客も賛意を有して居りたゞ明かに反對してゐる者は吳佩孚氏とそれから廣東の孫文氏の二人であつた。孫文氏は吳佩孚氏と全く異つた思想から出發した中央集權論者であつて孫氏は「縣」を單位とし之に「民治」を許し而して中央政府に強力な權力を以て之れを統一しなくてはならないといふ趣旨で、この主張は露國のレーニン氏の政治に影響されたことが少なくないやうで、孫氏は實に社會主義國家として充分機能を發揮せしめんとして中央集權主義を奉ずるものだ。併しながら氏の主張も最近漸次變化して今ではまだ明かにしてゐないが「聯省自治」に反對でもないやうな態度が見える、吳佩孚氏失脚し孫氏に變化を來たしたとすれば「聯省自治」の大潮を阻む力は極めて微力となつたと云へる。そこで今回の時局收拾に當つて、この實現の可能性が更に加つて來たわけである。

今回の時局收拾に當つても段祺瑞氏が各省代表會議を開くか否かは尙不明であるが、兎も角元老會議とでも稱せられる一會議を開いて之等の方針に就ても協議せんとするやうで、孫文氏は早くも北伐の出征先から引返して北上することとなつた。この際國會が無視されんとするは最も皮肉の現象である。南北は長く國會問題を中心として爭つて來たものであるが折角吳佩孚氏によつて舊國會が回復されても議員は私利のための私闘を續け、軍閥の手先となつて働き賄賂によつて曹錕氏を選出すると云つた有様で全く信を天下に失ひ、本年一月國會改選會に遭ふたが改選の不可能なのを奇貨として依然議場を利權の爭奪場として鬪爭を續けてゐるが今や國民に唾棄されたか、又はその存在をすら忘れられた形であつて、先に「護法」を唱へた政客も最早之を口にしない、廣東政府も何時の間にやら革命政府の名に看板を塗換へた程であるから、今日北京國會が潰されてしまつても議員の外に反對する者もないやうである、議員中でも林長民氏の如きは既に「現國會は民心の趨勢と一致しないから今回の動亂を革命と看做し民國根本の改造を圖るべきだ」と主張してゐる程である。であるから段祺瑞氏が元老會議を開いて國會を無視して根本問題を議したとて左程問題とならぬ筈だ、「護法」か革命かの岐路に立つて「護法」は既に問題ではない。そこで所謂元老會議に參加する者は、段祺瑞、孫文、張作霖、盧永祥等の反直隷派首領又はその代表者の少數に限られるかその邊は不明であるが、之は公平なる措置として各方面の人物を網羅しなければ所期の目的は達し難い、上海平和會議の末期に於て唐紹儀氏と王揖唐氏との南北總代表間に密約として傳へられた和議條約の草案中に最高聯席會議といふのがある。之に參加の資格ある者は曾て大總統、副總統、國務總理、廣東軍政府總裁、國會正副議長たりし者等の規定があつたが今回の元老會議も右のやうな標準を設けるかも知れぬが實行が事實困難ならば段孫氏等相談の上直ちに全國各省の代表者を召集するが最も妥當であるまいか。この場合直隷派に屬してなほ吳佩孚氏を擁護して今回の政變に反對する地方や政情混沌として代表を正當に出し得ない省もあることであるから全國一致といふことは到底望み得ない事であり、戰事さへ全く熄むとは容易に想像されないが、段氏等指導者たるものは出來得る限り廣く公正に輿論に從ひて可及的に全國的の効果を期することに努めねばならぬ。さうして民國の最大の禍根を除く爲め第一着手として「廢督裁」の實行にとりかゝる要がある。支那の將軍制と之に伴ふ軍隊の過剩とが支那の行政財政兩方面に亘つて最も大きく禍ひしつゝある事實は列國も夙に認むる所で、華府會議に於ても十年一月

三日の極東分化會で支那に對する裁兵勸告を八ヶ國決議として通過し、支那側は之に對し「政府國民共に切望する所」と答へ華府會議後梁士詒内閣は之が實行を企圖し、華府會議善後委員會中裁兵分科會を設け十一月十日裁兵辦法大綱を作成したが、一方裁兵運動は新國民運動として國民裁兵促進會が中心團體となつて各地に運動が始まり黎總統も熱心な主張者で同年十月十日の國慶日には各地に國民大會を開いて空前の裁兵示威運動を行つた黎總統は十二年一月裁兵の通電を發するに至つた。斯る機運の醸成されるや浙江督軍の盧永祥氏は機敏にも輿論に鑑み眞先に督軍廢止の主張を通電したが、次いで南方の督軍等は督軍の名を自ら廢し軍總司令の名を用ゐるやうになり、北京政府でも督軍の更迭ある毎にこの名を廢して軍務督理の名に變へるやうになつたがいづれも實質に變りはなく支那の軍隊約百二十萬國費二億には依然として變りはなかつた。併しながら今回の支那大動亂によつて大軍閥の滅亡と共に督軍の危機が招來した。從つて「裁兵」實行の好機會は到來した。段祺瑞が馮玉祥氏等より國民軍大元帥に推戴され全國民の輿論を負ふて起つならば此際督軍制廢止は最早困難ではなくなつた。次では「裁兵」であるが之には當然外國との大借款によらなければならぬと同時に列強の援助を仰ぐ必要をも生ずるだらう。支那の識者の多くが主張する軍隊處分の方法は軍隊をそのまゝ土工の團體として、この多數の新勞働團を以て蒙古その他の邊境地方にも屯田せしめて開墾事業に從事せしめ又一方では支那に甚だしく不足してゐる大道路の築造、運河河江の修築に使用することが軍隊の土匪化をも豫防し得て一擧兩得であるとし中でも孫文氏は熱心なこの主張者であるが、段氏も勿論贊成のやうで、この方法による時は軍隊の解散費も多額を要しないのであるから最も實行の可能性がある。斯くして「廢督裁兵」が實行し得られたとすれば所謂「民治」は自由にその發達の途に向ひ玆に聯省統一の機運が大いに促進されること疑ひない。時局收拾策が若し右のやうな要求を全く裏切ることとなるならば平和は依然として來ることなくこの絕好の機會は空しく去つてしまふであらう。

我等は繰返していふ、今日の大動亂の結果により支那は今日第一革命に次ぐ革命期に直面してゐる、そして支那には久り振りに平和と希望の曙光がさし初めた。我等が隣邦の友として大いに歡びを感ずると共にこの重要時機に當り異常の注視を拂はさるを得ない所以である。滅ぶべきものは既に滅びつゝある、そうして之に代つて新たに生れんとするものゝ爲めに産着は整へられつゝあるのだ、今支那國民は新生の希望に滿ちてゐる。

勿論巨人の生れる陣痛の苦しみはさう手取り早くは濟まぬ。我等は努めて支那に對して樂觀と好意とを以て四億の民衆を激勵したいと思ふ。

併しながら支那民衆も亦ヨリよき時代を創造する爲めにやはり爭鬪が續けられねばならぬであらう。我等は眼を轉じて更に次の時代を見やうとする。

支那は由來軍閥といふ特殊な階級が存在して有產無產の兩階級を搾取して來た、だから支那では從來ブルジョアとプロレタリアとが屢々軍閥に對する共同戰線に立たねばならなかつた。梁啓超氏はこの事實からして支那に於ける階級を有爵階級と無爵階級とに分つた。然るに近年支那に於る外國並びに內國の資本主義が勃興するに及んで階級戰は漸く開始され玆に三角戰を演ずるに至つたのであるが、軍閥は先づ滅ぶことになつた。即ち軍閥は兵力を擁して表面强さうに構えてゐたが、主としてブルジョア階級の隱れたる努力で漸次壓迫され軍閥は巧妙なる彼等の策戰に遭つて同士討から同士討を繰返して自ら滅んで行つた、軍閥は「民意」といふ枷に縛られてはどうすることも出來なくなつのである。直隸派の大軍閥が崩壞したのを期として、假令なほ小軍閥が餘生を保つても今後は有產階級の番犬に甘ぜざるを得なくなるだらう、即ち地位は顚倒することゝなり後には他の資本國家と同樣に二階級が愈々儼然として對立することゝなる。孫文氏を總理とする中華國民黨は組織を改正して昨年一月一日宣告を發表して新たなる活動を開始したが、その主張は土地その他の所有權を制限するため法定限度を作ること、社會經濟の均等の發展を期して重なる工場の國營主義をとることが特色となつてゐるが、國民黨の勞農主義は益々色彩を發揮しつゝあつて他日國民黨から更に新なる無產政黨が生れ或ひはその間から社會革命が萌芽して來るものと思はれる。要するに今後は政治革命に次で既に擡頭せる社會革命を目的とする運動が愈々盛んとなつて來ることも豫期しなければならぬ。かく觀來る時は我等は又支那の平和に就ては別な一種の不安を感ずるのであるが兎に角差當つては有產無產兩階級が協力して飽まで軍閥と共に不生產的なる爭鬪の絕滅を期しなければならない。

(一一、五)

英國勞働黨の治績を顧みて

——殊に內政諸問題に就いて——

蠟山政道

一

諺に、英國の皇帝は君臨すれども統治せず、と言はれてゐる。統治するものは議會と其の母胎より生れてゐる內閣となのである。ところが、近頃着いた『ネーション』(米)を見ると、英國の勞働黨政府を評して、管理すれども統治せず(govern never rule)と言つてゐる。面白い文句だと思ふ，君臨と統治と管理，さながらに政治の進化を、その三語が表現してゐるではないか。

しかし、現代社會に於いて未だ君臨なき政治を考へ得ざると共に、統治なき政治は一層考へ得ない。政治に於ける權威と支配との要素は、歷史的必然である。管理のみの政治!!それは一種のユートピアである。而して、そのユートピアを目がけて進みつゝあるのが現代の社會主義者なのである。

さて千九二四年といふ年に、如何なる運命の惡戲か、このユトピストの一團が、英國に於いて、政府を組織する事になつた。敢て政權を把つたと言はない。六百十五名の下院議員中僅かに一九二名の與黨と從來の行掛りから保守黨と提携し得ない一五八名の自由黨の不本意の援助によつて、辛うじて臺閣に上つたに過ぎぬ。勞働黨自らも絕對多數を得ずして政府を組織する事の不安定と無意義とを充分に知つてゐた，なぜなら・現代の政治は力の政治であり、數の政治であるからである。權力政治であつて職能政治でないからである。從つて彼等も一意專心この權力を握り、多數を制することに努めて來た，この意味に於て、彼等は古き型のユートピストではない。しかし乍ら・彼等は，權力は政治のアルフアであることを知つてゐるけれども・それが政治のオメガアでないことも知つてゐる。政治のオメガアは公共の營務である。營務としての經營である。權力なき管

理である。

英國の勞働黨が、少數黨の身を以て、敢然として政府を組織した事實の合理的な意義を、私はかう解する。時代の要求する公共の營務を果すこと之れ彼等が多年天下に聲名し來れる約束の手前からも、將又、世人一般から、その統治能力を疑はれてゐる迷盲を霽らす爲めにも、逸すべからざる好機である。況してや、偶然の事情によりて、自由黨の援助を期待し得られる點多きに於てをや、即ち外交、財政、關稅、その他の諸政策に於いて自由黨の支持を得らるべきは明白であり、內外の事情は何等かの解決を要すべく切迫せるものあり、旁々外相その他の臺閣の椅子は、假令、多數黨の味方なくとも相等の仕事を爲し得る傳統的な力があることを思へば、彼等が組閣の決意の迅速なりしことも決して無謀ではない。

宜なる哉、組閣の三日目一月二十五日にシンガポール要塞案の放棄聲明、二月一日勞農ロシアの正式承認、三月二日對佛商議提唱、五月十三日マッケナ關稅廢止、八月八日英露協定調印、八月十九日倫敦賠償會議假調印、九月六日國際聯盟軍縮決議案通過、十月九日愛蘭境界決定の修正案通過、等數へ來れば相當の成績と言はねばならぬ。斯くの如く對外政策と對自治領政策とは、比較的無難にその主張を實現することが出來た。尤も對自治領政策の成績は、印度及び埃及の問題に於いて何等の積極的成績を見るを得なかつた。

しかし乍ら、翻つて內政を見れば何うであらう。そこには前保守黨內閣以來の諸懸案が山積してゐる。新に解決を要すべき問題が續出してゐるのである。失業問題、住宅問題、農村問題殊に農業勞働者賃金問題、恩給問題、貿易振興問題、稅制問題殊に減稅問題等その主たるものである。若し夫れ、勞働黨が一九一八年の綱領改正以來殊に一九二二年及び二三年の總選擧に於いて聲明せし對內諸政策に至つては、枚擧に遑ない程である。而して、これらの諸問題の解決に向つて大斧を振はんとせば、反對黨たる保守黨は勿論、好意的中立の自由黨が見て以て社會組織の基礎とするものに觸るるに至るべきは、火を見るより明かである。問題の種類の豐富な點に於いて又問題の性質の重大な點に於いて、內政問題は我々にとつて甚だ興味があるのである。殊に前陳せし如く、少數黨の身を以て、この重大なる任務につけろ彼等が、如何なる思慮と方法とを以て之れに臨みたるかは、政治の研究に從事する者にとつて見逃すべからざる好題目であり、得難き活資料と言はねばならぬ。

政治は、殊に今日の政治は、何を以てその動因となし條件としてゐるのであらうか。權力の支配か、營務の遂行か、將又そ

の兩者を包含せしものか。現代政治の下に於いて、所謂社會政策の如きは如何なる程度まで實現され得べきものであらうか。及社會主義とは、それが實際に適用される場合には如何なる内容と機能とを有するものであらうか。惟ふに、之等の問題は、政治及び行政の學徒にとつては、寔に解釋に困難を感ずる問題である。それは決して學校の教科書や宣傳用の文書や理論を說明せる書物によつてのみ會得できるものでない。この意味に於いて、勞農ロシアの革命後の經驗と今年その第一次内閣を組織せる英國勞働黨の今回及び今後の治績とは、これらの諸問題に對する生ける參考書を提供してゐるものと考へる。將來の社會主義は、これらの新經驗に基いて、新なる理論的構成が爲されるのではなからうか。現に勞働黨右翼の機關紙『ニユーステーツマン』は、『一九二四年の社會主義』と題して、勞働黨の中堅たるI・L・Pの諸政策が、僅かなる實際的經驗に遭逢してすら、多大の變革を餘儀なくせしめつゝある事實を指摘したことがある。マグドナルドは、最近彼の『社會主義、批判的及び建設的』の再版を出し、それに長文の序文を附して、あらゆる方面に對して、社會主義運動の現狀と將來とに關する意見を發表して、一種の警告を發してゐる。恐らくは、今回の短かりし執政の經驗も、その將來に對しては多大の意義を有するものではなからうか。

かやうな氣持から、左に簡單乍ら、彼等勞働黨の政治家が、その執政十個月の治績を顧み、殊に專ら内政諸問題に就いて記錄を殘して見たいと思ふ。ただ一言お斷りして置きたいのは、その材料が主として新聞雜誌に現れた所に據れるものであるから、必ずしも正確を期し難いことである。勞働黨は、院内總理クラインスの名に於いて、その事業報告の如きをパンフレットにして、既に九月發表してゐるそうであるが、これが未だ手に入らないので、甚だ殘念であるが、不正確を豫期しつゝ發表するのである。讀書の諒承を乞ふ次第である。

二

（イ）豫算に現れたる財政策

勞働黨は、一九一八年の大會決議に基いて發表せる所謂『新社會制度』に於ける四本柱の一として『財政制度の革命』を要望した。それを解剖すると、消費稅の廢止若しくは減少、直接稅の擴張殊に所得稅、附加所得稅の加重、及び相續稅の增徵、土地增價稅の改正及び資本課稅等の手段に據らんとするものであつて、租稅は生活の最少限を侵さないことを原則とし、富の合理的再分配を目的とすべきものと云ふにある。藏相スノーデ

ンの屬する勞働黨の中堅分子I.L.P.は、租税を以て『國民生活保險のプレミアム』だと言つてゐる。一句以て彼等の課税に對する見解を知るべきではないか。

かやうな政策を有する彼等が、今やその當局に立つたのである。多年財政通を以てきこえて來たスノーデンが藏相の椅子に坐つたのである。四月二十九日、暫く休會してゐた議會が再會され、この日内閣の運命の長否に係はる豫算案の說明が行はれたのである。『余が始めて議會に入りて豫算演說を聽くの機會に接したるは、アスクイス氏がその始めての豫算演說を試みられた時であつた。その時氏はその就任日尚淺きの故を以て議會に對して、同情と恩惠とを持たれんことを要求した。老練アスクイス氏の如きに於て、且つ當時の財政今日の五分の一にも足らざる場合に於いてすら尚且つ斯くの如き訴へを必要とされたのである。況んや余に於ては尚一層の同情を議會に求むるの資格を有するであらう』。開口かく述べたスノーデンは續いて言ふ。『顧みれば今より十五年以前、恰も丁度此の四月二十九日であつた。ロイドジョージ氏が、かの有名な人民豫算—「何たる悲劇ぞや」と云ふ者ありを提し出されたのは。しかもそは國民の判斷を仰ぐこととなりて、法律となりたるは翌年の四月二十九日であつた。願くは、かやうな不思議な一致が、余の前途に横る障碍の惡しき兆候たらざらんことを』。かう、前置きをして、彼は愈その豫算案の說明に入つたのであつた。スノーデンのこの序言を聽いて、多少の感慨を催すもの豈獨り英國人のみではあるまい。

スノーデンの豫算演說は、大體三部に分たれる。その第一は、前年度の決算報告である。歲入では酒類、煙草及び自動車等の輸入税の增加、相續税、印紙税、所得税、特別所得税、會社利得税等の内地税の增收により、歲出では陸海空軍費の支出減少(合計一七、〇七〇、〇〇〇磅)、一般行政費の支出減縮(一二、二五〇、〇〇〇磅)によりて、總計四八、三二九、〇〇〇磅の剩餘金を出したこと。この剩餘金の中二千萬磅を軍事公債の償還に、千五百七十五萬磅を大藏證劵の償却に宛てること。一轉して公債の現狀を說明して、七、六八〇、〇〇〇、〇〇〇磅及びそれに對する利子年額三〇五、〇〇〇、〇〇〇磅なること、及び一九一九年以降の公債償還額が戰前公債の全額に等しき六五〇、〇〇〇、〇〇〇磅に上りたること、その結果として利子年額を四〇、〇〇〇、〇〇〇だけ減少せしめ得た成功を語り、最後に尚ほ莫大なる負債を有することを諷したのである。

第二は本年度の豫算である。この時彼は一老臣よりの書簡を

則讀した。それから、先づ數學の說明に入りて、歳出總額は七九〇、〇二六、〇〇〇磅であること、歳入見込に就いては、樂觀的態度を示し、現制の下に於いて、八二八、一〇〇、〇〇〇磅に上り、三八、〇七四、〇〇〇磅の餘剩を見るであらうと語つた。そして、進んで前內閣の提示した特惠關稅に就いては、かくの如き關稅政策によつて大英帝國の利益を增らし得ざる旨を語り、ただ現行の特惠關稅の廢止に就いてはその、意志なきこと、しかも必要に應じてその改正を企つるの自由を留保した。これらの提議に關する帝國議會の決議に就いても議會に對して自由なる討議の機會を與ふべきことを約したのである。

第三は稅制に關する新提議である。自動車稅の改正に就いては、その免許の讓渡及び附加稅率に就いて、所得稅の酌量事情に關する改正に就いては一般に試みるではなく、ただ鰥夫及び寡婦が所帶主であつて子供を有する場合に就いてのみ、及び不在住民の所得稅免除に關する改正等である。郵便稅に就いては、目下改正の意思なく、近き將來に於いて改正案提出するであらうと言つた。

次に述ぶる所が、この豫算案の骨子となれる改正である。先づ、砂糖、茶、コヒー、ココア、チョコレート、乾果物等に對する關稅率の低下によつて、一般民衆の消費殊に朝食の上に課せられたる稅を節減しようといふのである。砂糖と茶とに就いて、その低下の割合とそれによる收入減額とを左に示さう。

品目	量目單位	低下率		收入減額(全一ケ年)
		舊	新	
砂糖	一封	二片四分三	一片二分一	一八、四〇〇、〇〇〇磅
茶	同	八片	四片	五、四〇〇〇、〇〇〇磅

この外の品目に就いても夫に半分以上の低下を斷行する結果として、全額で二四、八九三、〇〇〇磅の食物稅の減縮が行はれることとなつたのである。これが全部消費者に達するや否やに就いてスノーデンは樂觀的豫想を表明したのである。この外、種々なる飲料水に關する關稅の廢止によつて三〇〇、〇〇〇磅を、又所謂マツケナ關稅と稱する戰時課稅を八月一日以後廢止することによつて、二、二五〇、〇〇〇磅を、觀覽稅を部分的に改正し、即ち六片以下の料金額に對するものは之を廢止し、一志三片以下のものには低下を行ふことによつて、四、〇〇〇、〇〇〇磅の減稅を行ふことになつたのである。次に、所得稅及び附加所得稅には改正を行はず、しかし住居稅は之を廢止し二二、〇〇〇、〇〇〇磅を、會計利得稅を七月一日より

廢止して、五、〇〇〇、〇〇〇磅を減少するといふのである。以上その減稅總額は四〇、四四三、〇〇〇磅である。尙其後に土地の評價及び課稅に就いては、調査が進行中であるから、近い中に法案として提出するつもりであるとも述べた。かくて、スノーデンは、その說明を結んで曰く、『以上の諸提案は稅金のかからない朝食といふ長い間待望させて來たラヂカルな理想の實現へ向つて爲されたる今日までの中最も偉大なる一步であると言ひ得ると。』

この自由貿易的な且つ消費者保護に向つて社會政策的色彩をかなり濃厚に加へた勞働內閣第一の豫算が、下院の第二讀會を通過したのは五月二十七日であつた。保守黨は、自動車、樂器、時計、活動寫眞ヒルム等への關稅であるマツケナ關稅の廢止に極力反對したけれども、自由黨の政府支持によつて敗れた。その外多くの修正案が提出されたが、多くは容れられずにしまつたのである。

かくて、勞働黨第一次の豫算は上院へ送られたのである。

(ロ)　失業救濟策

失業救濟問題は、前內閣の倒壞原因ともなつた緊急な重大問題である。しかも、それは現在の社會組織に於ては必然的に生じ來る問題であるから、その根本的解決は到底期し得られぬことは明白である。戰前の英國に於いても平均二十萬人の失業者は存在してゐたのである。しかし乍ら、百萬を越えた失業者を以て、四年以上も經過し來り、何等減少の樣子も見えないといふことは未曾有のことである。勞働黨がこれに對して、如何なる方策と施設とを試みたかは、彼等の經世的頭腦と行政的手腕とを窺ふて好箇の問題である。

勞働黨は、既に一九二一年の正月に該問題の調査會を勞働組合會議と聯合して開催し、詳細なる報告を發表してゐる。それによれば、緊急施設として左の三箇の對策に據るの外はないのである。第一は、失業者の生計維持である。漸次に饑餓に瀕しつゝある數十萬の失業者に最も急を要するは、その生計の維持である。しかし、勞働運動は、この生計維持を以て、飽くまで仕事に代るべき補ひと見なければならぬ。第一に必要なるは仕事である。從つて、第二に、仕事の供給が根本的に重大となる。その爲めには、少年勞働の勞働市場よりの退去、賃銀の低下を伴はざる勞働時間の短縮、政府事業の起工、住宅建築、地方團體の募債制限の撤去による公營事業の振策、農地の開拓等の諸事業である。しかしながら、是等の事業の失業者の吸收能力には制限がある。故に第三に根本的な問題としては海外貿易

の恢復振興策である。戰爭の絶滅、露國通商の再開、賠償問題の解決、歐洲諸國の經濟恢復等これである。

保守黨も昨年政府に在りたるとき、失業救濟策を立てたのである。そして、それを實行する爲めには一〇〇、〇〇〇、〇〇〇磅が必要であると豪語した位大げさな計畫を立てたのであつた。しかし、マクドナルドが批評する所に據れば、保守黨政府は昨年の十二月までに、僅かに二五〇、〇〇〇磅を費したに過ぎなかつたといふ。そこで、問題は、單なる計畫の樹立ではなくして、それを行ふ誠意と熱情と實行に要する技術的能力の有無と云ふことにならう。

しからば、勞働黨の勞働大臣トム、ショウは如何なる活動を試みたであらうか。一言にして言へば、新機軸を出さうと試みるよりも、長年の計畫を立つることを勉め、現在與へられてゐる行政權の範圍に於て可能なことと、新な權力を賦與される爲めて立法を要することとを區別して、この問題の處理に當つたと評すべきである。

先づ彼は現行失業保險法などその他の法律の許す範圍に於いて、救濟の實を擧げることに努めた。五月二十二日の議會に於いて、彼はかう言つてゐる。前内閣によつて始められた姑息な手段が存續してゐる。政府はこれらを再査して、もし可能な場合にはそれを擴張することに努めた。例へば貿易促進法への補助金を五〇、〇〇〇、〇〇〇磅から六五、〇〇〇、〇〇〇磅に增加し、又失業補助金委員會に對して、三月三十一日までに二、〇〇〇、〇〇〇磅を支出し、更に二〇、〇〇〇、〇〇〇磅を本年度分として追加してゐる。又道路修築の爲めには、前内閣によりて計畫されて實行されなかつたものに更らに三三、五〇〇、〇〇〇磅を加へたのである。森林補助に對しては一〇、〇〇〇磅を增加し、尚その計畫を專門委員會の調査に附してある。又倫敦ドツクの改造も進行中である。かくの如く、余はその短き就任期間に於いてその全力を盡しつゝあるのである。この外電化問題、幹線道路問題に就いても種々畫策實行中であるし、住宅政策に就いては、近くホイートレー案が議會に提出されるであらうがそれによつて一層失業者の緩和が期待される。海外貿易の振興や國際平和の促進もその問題も關係があるから、總て平行して解決に歩が進められてゐる。總て現政府は、その爲し得ることのみを聲明するのであつて、徒に約束だけを試みるのではない。現に政府就任以來一九%の失業者の減少を見たではないか』と。しかるに、之れに對して保守黨の前閣員ジョンソン、ヒイツクから勞働大臣の無能を懲罰する意味で、百磅の減俸案を出し、勞働政府が在野當時の主張にも拘らず、無爲無策であ

あつたことを非難した。自由黨も之に和して、勞働黨に積極策の無きことを責めた。それから、交々討論が行はれたが、結局この日の保守黨の動議は通過しなかつた。が、再び五月二十九日勞働大臣不信案となつて現れ、マクドナルドその他の奮鬪によつて辛うじて踏み止つた。

何故に勞働黨はその積極案を未だ提出しなかつたのであるか。案が無い筈はない。しかし、この問題は少し積極的に入れば、現行法律に於いて許さない範圍となるので、新な立法を要するのである。しかるに、反對黨がそれに對して反對することは必定である。案が愼重を要するのは當然である。勞働黨議員が議場でその少數黨であることを切齒扼腕したのも無理はない。

しかし乍ら、既に五月二十一日その第二讀會を通過した失業保險法改正案に含まれた要點は、一見少なるが如くして考へ樣によつては極めて重大な改革なのである。(イ)失業繼續中支給の方法を採用したこと、(ロ)同盟罷業によつて失業し、しかも罷業には直接關係なき者への支給、(ハ)十四歳以上十六歳以下の少年少女も被保險者たらしむること、救濟金額を男子一週一八志、女子一五志に增額すること、從來一定の人例へば生活の餘融ある人、外國人等に除外例を設けてゐた救濟金の別を撤して、等しく被保險者の權利とすること等、これである。失業を以て國家の責任とする思想的立場に立つ勞働黨から見れば、從來の如く失業救濟を以て貧民救濟法と同一視するが如き色彩を殘し、救濟金の支出を以て恩惠と見做す傾向存してゐたことは甚だ遺憾とすべき所である。トム・ショウがこの立場より失業保險法の全體に亘つて精查し、右の諸點に就いて改正を求めたのは、蓋し當然のことであり、社會立法の歷史的意義の上に於いて重大な時期を劃せるものと言ふべきである。果せる哉、反對黨はこの改革案に對して、國庫の金を徒に濫費するものであり、總罷業誘發の虞あり兒童の教育上弊害あり等の種々なる理由を擧げて攻擊したのである。五月二十六日の委員會に於て政府は、兒童の强制保險條項を撤回した。七月九日の本會議に於いて種々なる修正案が提出され、トム・ショウは頑强に反對した。兒童の强制保險に代ふるに、一般に十四歳以上十六歳以下の兒童の教育方法を考ふべしとする案には、ボンドヒイールドが反對して、そは文部省の取扱ふべき問題であつて、勞働者としては失業兒童のことのみを考ふれば足る、と主張した。罷業による失業者が、その罷業に關係あるか無いかを說明する手段として、適當の條項を加ふべしとする自由黨のシモン案には、トム・ショウは讓步しさうであつたが、勞働黨議院の反對によつて阻止され、その日の會議は休會された。七月十九日に本會

議が開かれて、再び右の修正案が現れ、『罷業に資金を出したり又は直接に關與したりしてゐない』こと、及び『上の如きに關係を有する、同種類の職業又は組合に屬してゐないこと』を證明する必要があるといふことになつたのである。その他若干の修正が行はれ、政府案は下院を通過したのである。百萬の失業者に如何なる利益を與へるに至つたか、は詳細に說くを得ない。要するに、勞働政府の失業對策に奇異はない。何人も考へ及ぶ所を誠意を以て行へるに過ぎないかも知れぬ。しかし、失業保險の歷史を書く人は、必ずやこの勞働黨第一次內閣の立法を以てその社會化の第一步と見るであらう。

八　住宅供給問題

住宅問題が今日やかましく言はれてゐる理由を研究すると、何人もそれが現代の資本制經濟組織に原因を有することに氣がつく。資本制經濟組織の改造に熱心な政黨が、この問題を重要視するのは理論上當然である。しかも、英國に於いてこの問題が特に痛切に解決を要求されてゐる所以のものは、七拾五萬戸が現に不足してゐるといふ事實に基くのである。加之、八萬五千の建築工が失業してゐて、一年三百萬磅の金が空しくこの失業職工に與へられてゐるのである。仕事第一、救濟第二といふモットーから、この救濟金は先づ仕事を與へる爲めに費さるべきであるといふ主張が導かれるであらう。不衞生な家屋、乳兒の死亡率の高いスラムがある。住宅問題は都市計畫の中核なのである。一千四百萬磅の結核療養費は、經濟の點から見ても、納稅者の注意を要すべきものである。住宅問題なるものも、見來れば種々なる面相を有する。

保健大臣ホイートレーは、この難問題を如何に解決せんとしたか。彼は、先づ資本制生產の下に於いて最大可能の家屋製作を實現し得る條件を考へ、建築工、請負者及び材料製造業者との協調更らに地方團體の協調を期待し得る方法を執つた。それが爲め、彼は幾度かこれら關係團體との商議を重ね、徐ろにその案を作り上ぐるに努めたのである。そして各團體の責任を確保すると共に事業に對する熱心を喚起する方法を講じたのである。即ち營利を目的とする團體に對して、彼等に採算の執れるといふ確信を失はしめずに、責任を以て事業の繼續に當らしめることである。

しからば、次ぎに彼は如何なる方針を以てこの立案に當つたか。第一に、彼は十五年間に長き年月を見透して、この事業計畫を立てたのである。かうして、その十五年間の繼續事業として二百五十萬戸の家屋を作らうと云ふのである。規模の雄大な

點に於いて、何れの内閣に於ける計畫よりも遙に勝つてゐる。第二に、その造られたる家屋は一般勞働者階級に賃貸する爲めであつて、中流階級の爲めに賣却するのではない。これが保守黨内閣のネヴィル・チエンバーレンの計畫と根本的に異る所なのである。第三に、その財政方針は、毎年一戸に國庫より九磅、地方團體より四磅を四十年間の期限を以て補助する。一戸の建築費豫定は五〇〇磅である。その内譯は略さう。それで、この全體の補助額は、本會計年度は、國庫に二七八、〇〇〇磅で、四十年間の總額二三、五一一、〇〇〇磅である。地方費を併せても三五、〇〇〇、〇〇〇磅に上らぬのである。況んや、殊に地方支出の分の如きは、それによつて地價その他のもの〻増價により結局地方税の増加の原因を成すものなのである。

かやうな案が、五月の末議會に提出された時、英國の公衆は驚嘆したのであつた。流石の反對黨の新聞紙すら、ホイートレーの用意の周到なるとその計畫の雄大なるを賞讃せざるを得なかつたのである。六月二十四日その第二讀會を通過するまでは無難であつた。しかし、委員會の手に渡つてから、度々難礁に行當つた。十五年間の保障といふことが、反對黨の大きい反對理由であつた。ホイートレーは、議會の解散をも辭さないとまで頑張つた。それは經濟界の安定を懸念する請負者側の要求で、政府が同意したものである。その他補助家屋の形態、構造等に關する自由黨の修正案が通過した。その他經濟界殊に物價の變動により補助金額の酬酌を爲すや否や等の問題に就き討議が行はれた。勞働者殊に幼年工の問題についても、又材料の投機思惑の取締等に就いて議論された後、更に細目の修正又は追加ありて、遂に七月二十五日第三讀會を通過し、上院に送附されたのである。

曾つてアジソンが一萬戸の計畫を立てた時その計畫の大なるに驚いた世人は、更に二百五十萬戸の計畫が實現されんとする機運に際會したわけである。英國勞働黨の業蹟の一つに數へねばなるまい。

三

右の三大政策の外、數ふべき多くの施設がある。恩給法の人道化がその一つである。農業賃銀制度の改正がその一つである。從來存してゐた賃銀調停法の無力が證明され、全國的最低賃銀法の實施の第一着として中央の監督機關を設くる地方的最低賃銀法を設けんとしたのであつた。ノーエル・バックストンの新國は、彼が多年蓄えたる英國農村に關する智識によつて、大に見るべきものがあつたが・會期不足であつたのと全國農業

組合の猛烈な反對によつて案は通過されなかつた。

文部大臣トレヴエアンの國民大學案は、自由黨の文相ヒイッシヤアの繼續教育案より更に遠大の計畫である。しかし、實際に行ひ得たる所は、小學校及び繼續學校の教場增加その他設備の改善に過ぎない。英國に於ける教育は、國家の手にあるものは極めて少い。教育が國家化されるとは、英國に於ては社會主義化することである。

この外勞働黨として全然行ひ得なかつたものに資本課税と炭坑國有とがある。前者が放棄を聲明されて、再び近い將來に取り上げられる見込のないことは明かである。後者は今次の議會に於て、炭坑組合代表の議員によりて熱心に主張され、私案として議案に提出されたが、政府は原則としてこれに贊成するといつて、その範圍に於いて熱心に支持されたに過ぎぬ。

最後に一言して置きたい。右の業蹟を概觀し來つて感ずることは、小數黨の勞働黨としては、せい一杯であつたといふ氣がすることである。若干の過誤と失策とがあつたであらう。しかし、個人の智慧と協同の行動とによつて爲され得る限りのものが爲されたやうに思はれる。されば、英露協定に對する自由黨の離反が明かとなるや、彼等の運命は決せられたのである。總選擧の題目となつたキヤンベル事件がなくても、總選擧は必ず來た。しかし、キヤンベル事件が發生して、それを保守黨と自由黨との蹂躙に委せずして、總選擧に望んだ勞働黨の行動からは、我々をして考へさせしむるものがある。英國勞働黨は議會に於いて小數黨であるばかりでなく、國民の間にも小數黨なのである。否、同じ社會改造の目的を抱く者をも未だ自己の中に抱容し得ぬのである。

即ち、共産黨を味方にしたくとも出來ない彼等の立場に弱味がある。この小數者の惡戯の爲めに、三百萬の浮動投票を敵に奪はれるといふ無能を如何とも出來ない事情にある。この事情が何れかに展開しない時、英國勞働黨の前途には新な難關が横つてゐる。それが共産黨自身の中から來るか、恰もニユーボルトのやうに。又中産階級の社會主義化にあるか。これは英國政界の全體の情勢によつて定められねばならぬ。管理と營務の地位を去つて、再びこの術策と宣傳との立場に歸つた彼等英國勞働黨の前途には、この意味に於て又新なる視野が展開されてゐると云ふべきではあるまいか。

知識階級の失業と其對策

失業者對策

堀江歸一

現在の失業者は俸給衣食者の失業した者と勞働者の失業した者と二種類のものを包括する。之を大局から云へば、兩者共に數年來我國經濟社會に吹き荒びつゝある不景氣風の爲めに、生ずるに至つたものであるが、前者に對して、近頃特に世間の注意を惹くに至つたのは、行政整理の進行と共に、諸官廳を通じて、多數官吏に罷免者を生ずることゝ爲つた結果である。

行政整理が經費縮小を眼目として、行はれなければならない、經費を縮小する場合には、人件費の減少を必要とし、人件費を減少するには、官吏を淘汰しなければならないと云ふことは、世間公知の事實であるが、實際問題として、官吏の罷免者に對して、如何にして就職の道を講ずるかと云ふ一事に爲れば、何人も其對策に窮せざるを得ない。然しながら今回の罷者たる、要するに行政整理の犧牲と爲つたのであつて、本人には何等の過失懈怠を存しないのである。然らば彼等の罷免に對しては、國家に於て特に同情ある處置に出づることを以つて、至當とする。何を以つて、同情ある處置とするかと云へば、

第一、官吏中在職期間永く、隨つて退官後高額の恩給を支給される者から第一に罷免すること、

第二、右の罷免者に對しては、一時給與の金額を豐にし、此金額から生ずる利子と恩給金とを合せたものを以つて、生活を營む程度に至らしめること、

の二點を擧げなければならない。斯の如くして罷免者をして生

活を營む工風あらしめ、取急いで、如何なる職業にも就かうとする窮迫の狀態を免かれしめることは、自ら失業者の續出する傾向や、失業に伴ふ弊害を緩和する所以と爲るのである。

民間俸給衣食者の失業は今日の如く數年間引續いて經濟社會の不景氣の狀態に沈淪する場合に、已むを得ざる所であつて、畢竟事業主が事業經營の費用を減縮する必要に會するや、人件費の削減を以つて、最も行ひ易き所であるとし、自己の使役する被傭者を解雇するが爲めに生ずる結果である。而して、我國に於て銀行會社等の傭者側と銀行員會社員等の被傭者側との間に、締結される契約は頗る不完全なるものであつて、傭者は何時に於ても事業經營上の都合と云ふことに藉口して、被傭者を馘首するに憚らず、之を馘首する場合にも、所謂涙金に類する手當を以つて、解決を付けようとする。然も雇傭契約に於て、傭者の有する解傭の權利が絕對無限のものである以上は、斯る結果を生ずるのも、亦實際上已むを得ないのであつて、斯くて失業者は失業と同時に直に其生活に困惑し、如何なる仕事にも低廉を忍んで、從はなければならないことゝ爲る。所謂知識階級の失業者の取扱の困難は此一事に存する。私が年來雇傭契約の改正を必要とし、本人の過失懈怠に依らずして、解雇される場合には、一年なり半年前なりに於て、解雇の豫告を受け、解雇の際、勤務年限の長短に依り、定額の手當金の給與される制度を設けることを必要とする所以である。然も此事は今日まで行はれて居らない、之を行ふの前提たる俸給衣食者の團結と云ふことも亦行はれて居らず、却つて早くも慘憺たる失業を俸給衣食者の階級に生じたことは、私は甚だ遺憾とする所である。現に俸給に依賴して、衣食する人々が今日他人の身の上に起りつゝある不幸が明日は或は自分の身の上に廻り來る道理を會得し、自家の地位を防衛する手段を講ずるの必要は一點の疑を存しない位、明瞭である。

民間の經濟社會が不景氣であり、加ふるに國家財政に緊縮が行はれ此國家財政の方針に步調を一にする爲めに、地方財政にも亦緊縮が行はれ、到る所の方面から、勞働者階級に失業者を生ずる今日に於て、對策を攻究することは、甚だ困難である。外國に於て行はれるやうに、失業者の一部分を殖民地に送遣するが如き、或は正規の勞働時間を短縮し、短縮された時間の下に、多數の勞働者をして就業せしめるが如き政策は共に、我國の國情に於て、行はれることを許さない。隨つて失業者對策としては國家に於て速に景氣恢復の勢を促進する經濟政策を講ずるより外に、何等の道を見出すを得ないのである。左るにても失業者が所屬勞働組合の支給する失業填與金に依

つて、保護される道もなく、國家の强制的に經營する失業保險制度に依つて、保護される便も與へられて居らず、更に失業者中の老齢者に對して、老癈保險の制度もなければ、養老年金の制度もなく、一旦失業すれば、自己一身以外に、何等の賴る所を知らしめざる社會組織が作爲されて居り、多數の國民は平生之に對して平然たる態度を示しながら、失業者の聊か增加するや、遽に狼狽を極めるが如き、我國民の不用意を極めることの甚だしきものと云はざるを得ない。私は現下の失業問題に對して、遠き慮りなき者に近き憂ありと云ふ古言の吾人を欺かざることを知る。斯の如きは畢竟我國が經濟政策を立案するに當り、資本主義に偏倚して、他に何ものゝ利害あるを辨せず、資本家をして各自の利益とする所を發揚せしめ、之に對して制限を加へなければ以つて、社會全體の利益に適ふと云ふ考へを持し、露骨なる金權政治を施して、憚らなかつた結果である。今日於て、社會の治安に關係を及ぼす程度の失業が起り、然も對策の案出に困難であるのは、資本主義的政治の餘映に外ならないものである。

資本家本位の財經整理と失業及其對策

高橋龜吉

一

最近に於ける我が失業者の激增、就職難の加重には、二つの基本原因がある。(一)は我國の資本主義經濟が根本的に已に行詰つたことであり、(二)は一般資本主義經濟の周期的疾患たる不景氣の來襲である。(一)の我が資本主義經濟が行詰つたとは、之を他の言葉に碎いて云へば、日本の經濟力(資本主義經濟制度の下に於ける)が最早日本現在の人口を支へ得ざるに至つたことである。宛も、德川時代の末期に於て、當時の封建制度が、一定數以上の人口、就中武士階級を支へ得ざるに至

るや、武士の二男以下の人口の多くが、當時の浪人、今日云ふ所の失業、就職難に苦しみ、それが明治維新後資本主義經濟の展開する迄永く續いたと同じ事情である。更に之を現在に例を採れば、英國の失業者永續の事情である。周知の如く、英國は戰後已に六ケ年に垂んとする今日、尚ほ引續いて百數十萬人の失業者を有してゐる。一時四百萬人にも達した時代に比せば少からぬ減少であるが、併しその反面に於て、この失業者の少からぬ部分が、根本的に英國經濟力の支へ得ざるに至れる人口たることを語つてゐる。之れ戰後の英國經濟が國際競爭上戰前の繁榮を失墜せる結果であつて、英國爲政家の已に認めてゐる事實である。例へばロイドジョーヂの如き、その首相たる時代に於て、英國現在の人口の到底支へ難きを言明し、以て殖民地に本國人殖民の交渉を開き種々の施設を試みた程である。要するにこの（一）に基因する失業及就職難はわれ〲が現在の制度に依存する限り根本的であり永久的である。勢ひ、之れの對策も根本的政策を必要とする。それは玆に單に失業問題として取扱ふ以上の重大問題である。

然るに（二）の不景氣の襲來に基く失業及就職難は、假令それが如何に激烈であらうとも、其の性質は周期的ではあるが併し一時的である。一定期間（永くて數ケ年）を經過しさへすれば、再びその經濟は繁榮に復して失業も就職難も大體に再び解決せられる。勢ひ、この種の失業に對しては、一時の應急救濟策を施す餘地も効果も豐かに存するわけである。斯様のわけであるから、玆には專ら、（二）の不景氣に基く我が失業及就職難に關する對策について概述することとし、（一）の我が資本主義經濟の根本的行詰に基因する失業及就職難に關する對策については全く觸れないことにする。（一）に對しては（二）に對するとは全く別な根本的な考慮を必要とするからである。

二

資本主義經濟に依存する限り、不景氣の周期的襲來は避け得ず、從つて、不景氣に伴ふ失業も免がれ得ない運命である。さり乍ら、然らば斯様な失業に對しては、政府は之を自然に放任するより外に策はないかと云ふに無論さうではない。就中、今日の我が失業については政府に多大の責任がある。元來、不景氣の資本主義的機能は、好景氣時代に醸されたる經濟的疾患を、外科的に整理回復することにある。然るに、我政府は、大正九年春の恐慌後、不景氣の存在、理由であるこの外科的財界の整理を、資本家保護のために極力阻止する政策を採つたのだ。例へば、或る預金部乃至日本銀行の資金を利用して物價及

生活費の低下を計止し、或は關稅保護其他によつて事業の整理を怠らしめ、或は依然財政の膨脹を繼續して不自然の消費を維持せしが如きである。このため、我が財界の切開手術は、好景氣直後、財界の健康尙ほ多大の抵抗力を有する時に行はれずして、爾後最近迄も肺患的病體を續けて來たのだ。この間に於て我が經濟力は衰弱し、就中、大衆の抵抗力は、好景氣時代の蓄積殆んど費消され盡したるため極度に削減せらるゝに至つた。この時に於て、政府の彌縫策遂に破綻し、加ふるに震災の打擊も手傳つて、周知の如く失業者の續出することゝなつたのであるが、しかも此際、政府自らも亦行詰り、所謂財政整理によつて、數萬人の官吏を馘首し、事業の中止乃至繰延によつて無數の勞働者を市場に擲げ出し、以て益々失業の苦艱を加重し、又は加重しつゝあるのだ。

若しも政府にして、これ迄、已述の如き資本家本位の財界整理政策を行はず、九年春の恐慌直後に於て、自然のまゝに今日の失業を來たらしめてゐたならば、なる程失業は等しく襲ひ來つたに違ひはないが、併しそのため蒙る大衆の苦痛は、正しく、今日のそれよりも尠からず輕微のものであつたに違ひない。それだけに、現在の失業に對する政府の責任は尙更ら重大である。

三

しかも、加藤聯立內閣の所謂財政整理は、要するに之迄に於ける資本家本位の不景氣對應政策が、變裝せられて繼續せられたものに外ならぬ。今日の不景氣に際して、我が資本家の最も苦痛とする所は、資金難と貸銀高との二つである。更に之を銀行家から云へば手持公債の下落による大損失を免がれるため、この上政府に公債を發行せしめざることが必要である。所謂今次の財政整理は、かうした資本家の苦痛や損失を除去する最有力な方法として採用せられた政策である。この資本家の利益のために、大衆の利益は弊履の如く捨てられた。それが即ち事業の中止又は繰延である。官吏の馘首にしても、冗員陶汰の必要は無論あるが、之を有用に使用する仕方もないではないのだ。

兎に角、斯樣な財政整理のために、一方に於ては、銀行家手持の公債の値段は上り、資本家に必要な資金はリザーブせられ、他方に於ては失業者の壓迫によつて賃銀及び給料の引下げは强行せらるゝこととなつた。之れ、今次の資本家本位の財政整理の目的であり、結果である。之に反し若しも政府にして、大衆本位の財政整理を試みたりとせば、資金の利用を増進し、以て國民勞力利用の効率――一人としての勞力の効率ではなくて、

全體としての勞力利用の効率――を擧ぐることを財政整理の目的とすべきであつたのだ。詳言せば、國に失業遊食の勞力をなくすることに經濟政策の目的を置き、之を中心にして財政及行政の立直しを行ふべきであつたのだ。

併し乍ら、國民の生活が資本主義制度に依存する限り、而して國民の大多數が之れを支持しつゝある限り、所詮、すべての財政經濟政策は、資本家本位たらざるを得ない。少くとも資本家の利益を無視することは出來ない。何となれば、資本主義制度の下に於ける大衆は、謂はゞ資本家と云ふ船主と船長との操縱力に依賴してゐる一の水夫又は乘合客に過ぎないからだ。自然、さうした船に乘合はしてゐる限り、水夫や乘合客は、自己の目的に反して、自己の利益が如何に無視せられようとも生活の海を渡るためには、結局、船長の便宜と船主の利益とを尊重せざるを得ないからだ。

斯樣な事情の下に於て、徹底的に大衆本位の財經整理を行へと云ふことは一個の啓蒙運動乃至は宣傳としてなら兎に角、現實の實行問題としては殆んど不可能である。英國の勞働黨が政權を取りながら、尙ほその失業問題を解決し得なかつた主因の一は之れであつた。而して英國勞働黨が議會に絕對多數を擁せずしてなし得た唯一の失業對策は、外交政策と財經政策とによつて、同國財界の景氣を囘復することにあつた所以も茲に在る。

四

さり乍ら、此際、大衆本位の財經整理乃至政策を實行し得る余地絕無であるかと云ふに無論さうではない。如何に絕大の勢力を有する船長と雖、水夫乘合客が總立ちとなつて騷ぎ出せば、或る程度の不便と不利とを忍んでも水夫や乘合客の利益と妥協するであらう如く、資本家と雖、大衆の運動と壓迫の如何によつては、尠からぬ犧牲を支拂つても、尙ほ大衆の要求と妥協しつゝ、船を目的地に進むる役目を果すものである。が併し、この衰弱せる日本現在の經濟狀態から云ひ、又無產階級の勢力極めて微弱な日本今日の政治關係から云つて、この際さうした大衆の要求の容れらるゝ余地極めて限られてゐる。しかも尙ほ、相當効果ある失業對策を政府に採らしむるには、出來るだけ資本家の利益を害さずして、失業勞力を有益に利用し得る方法に出らねば成功は期し難い。思ふに、此際、右の條件に最もよく合する實行可能の、しかも効果ある方策は二つある。第一は復興事業の作業年度を繰上げて、急に事業を進むることである。第二は金利を引下げて資本の負擔を輕減し、間接に勢力

へ(頭腦及筋肉)需要の刺戟を與へることである。

五

元來、無産階級の政治勢力の相當にある國に於ては、不景氣にて失業者續出せる場合には、不急の土木其他の工事を起してすら、職業を與ふるために努力するものである。然るに、宛もよし我國に於ては、いま、極めて急を要する大工事を持つてゐる。即ち、震災の復興事業がそれである。この事業を中心に失業勞力を多く吸收することが出來る。然るに、周知の如く、政府の復興計畫に從ふと、この事業は大正十七年度迄に完成せらるゝ豫定である。併し、此際失業者を救濟するために、この年度を一二年繰上げて、作業を急施すれば、それだけ勞力と物資の需要起り、直接間接に失業者の多くに職を與へ得るわけである。しかも、この事業に必要の資金は、已に豫定せられ、その償還の方法も已に大體見當のついてゐる金であるから、一國の經濟にとつても資本家に對しても、何等の重荷を新に負はすわけでない。問題は單に所要資金の調達法だけであるが、しかし、その資金の調達は公債を募集すればよいのである。若しも民間にその公債應募力がなければ、日本銀行をして引受けしめ所謂通貨の膨脹を覺悟すればよいのだ。

なる程、通貨の膨脹は物價を騰貴せしめ、それだけ賃銀給料**等の實收入(即ち物資を購買し得る力)を減少し、實質上一般の賃銀及給料の引下げを結果することになる。**併しながら、元來失業者の多數生ずべき場合には、若し勞働者(頭腦及筋肉)の團結が組織的に出來てゐれば、所謂ショートタイム制(各人の就業日數乃至時間を均分に減少して均分に收入を減ず)によつて、一部の人々のみが失業して不當の犧牲を負擔することを防ぐ筈である。この意味に於て、多くの失業者に職を與ふるために、他の一般の實收入を減少し、以て失業の負擔を一般化する政策をとることは、他によりよき實行方法のない限り、現在の制度に於ては寧ろ望ましきことである。

之に反し、通貨の膨脹は、資本家にとつては一般に少からぬ利益であるから、資本家は喜んで此の政策を支持するであらう。併し乍ら、此際資本家のみに、不當の利益を與ふるを防ぐ政策をとる必要があること云ふ迄もない。それには、一種の戰時利得税に似た租税を、地主、家主、及び一般の資本家に課する方法がある。

因に、通貨の膨脹によつて、此際、復興計畫を急設し、以て失業者を救濟することは、物價騰貴の結果輸出不振となり、結局再び我が財界を不景氣に導く矛盾に陷ると考へる人があるか

も知れぬ。併し、さうした憂慮は我が爲替相場をそれだけ下落するに委すればよいわけである。無論、爲替をこの上手放しに下落動搖せしむることは決して望ましきことではない。併し多くの失業勞力を遊ばし、之を貧困と飢餓とに彷徨せしむるよりは此際一定限度の爲替の下落を覺悟で通貨を膨脹し、以て復興事業を急施し一國の失業勞力を有益に利用する方が、遙かに國家經濟のために有利である。なる程、歐洲大陸諸國の如く戰爭其他の不生產的費用のために、無制限に通貨を膨脹し爲替の下落を導く如きは愼むべきであるが、今日の我が復興計畫急施のためのこれは、それと丸きり事情も性質も異なる統制ある通貨膨脹であつてその弊害は極めて限られてゐるものである。併しこの弊害を更に少化するためには、爲替を或る一定限度に下落せる點に於て安定せしむることである。それには、その爲替相場で無制限に日本銀行所有の正貨を拂下げればよいわけであるから、一度びこの政策の意味にして正解せらるれば、之を實行するに些の憂慮を要せないわけだ。しかも多くの素人の考へる如く、之によつて日本は一厘も損をするわけではなく、依然金貨一匁は五圓の値打で外國に通用するわけで、變つたのは內地に於ける紙幣の金に對する値段が下落するに過ぎない。

若し、此際、以上の如く、復興計畫急施せられんか、これは單に、之に直接從事する一部の頭腦及筋肉勞働者に多くの職を與ふるに止まらず、之を中心に、多くの物資の需要起り、事業家の資產關係改善せられ、國を擧げて所謂景氣を出すに至るわけであるから、間接には一般の頭腦及筋肉勞働者に職を與へることとなるのである。思ふに我が失業問題にして、いよ／＼社會の重大問題とならば、必ずや、政府の採るべき道は、この復興計畫の急施であらう。就中、この冬の議會に於て、普選案通過せば、この失業問題を中心に政府の財經政策を動かし得る可能力は增大する。無產階級は此際失業對策としてこの復興計畫の急施運動を起すべきである。

六

此際に於ける第二の失業對策は、已述の金利引下げである。今日の如く英米が年五分以下の金利の時、我國は年一割以上の金利を支拂はねばならない事情の下に於ては、事業會社の外國との競爭が非常に困難であること云ふ迄もない。而してこの困難が今日の事業不振、景氣沈衰の一大主因であり、又この資本家の困難が、直接間接に無產階級に轉嫁せられたものが今日の失業であり、就職難である。(行財政整理も亦、この資本家の困難が政府を壓迫した結果であること已述の如くである)。

然るに、今日に於けるこの高金利は、日本に於ける資金關係から云つて、避くべからざる現象であるかと云ふに決してさうではなく、銀行がいろ〳〵の意味に於て、高金利を有利とするから起つた結果であると見てよいのである。これは、銀行が金利引下げ政策に之れ迄反對して來たことによつても窺ひ得ることだ。

成る程、高金利でも借手があるから利子は騰貴したことに間違はない。所で、その借手は、さうした金利を支拂つても尚ほ事業の引合ふ見込があつて借りるのであるかと云ふにさうではない。事實は反對に、それでは損をするが、併し過去の借金を返濟するために、仕方なしに泣く〳〵高利貸から借金したのに過ぎないのである。換言せば、今日の我が金利は、銀行が高利貸化した結果に外ならないのだ。

元來、一國の金融政策は、投機熱勃興の惧なき限り、出來るだけ金利を安くすることを目標とすべきである。それは、利子で生活する遊食階級に不利なるだけで、實際活動しつゝある資本家にとつても、無産階級にとつても、望ましき狀態である。若しも、我が政府と日本銀行とが、斯の如き金融政策を實行してゐるならば、金利は已に少からず低下し、直接には資本家の蒙る壓迫、間接には無産階級に轉嫁せられる負擔は、少からず輕減せられてゐた筈である。蓋し、若し、金利の低下を圖らんとせば、日本銀行が低利で、優良手形に對しドシ〳〵貸出す政策を採れば、此際何等云ふに足る弊害を伴はずして、市中金利をも一般に低下せしめ得るからだ。現に、市中銀行の手許にはいま資金横溢して、コールロン乃至有價證券に投資せられてゐる遊資、去る八月に於て約二十二億六千七百萬圓の巨額に達し前年同月より多きこと約五億五千萬圓である。この現象を碎いて云へば、銀行は一方に昨年よりも約五億五千萬圓多くの資金を遊ばしておきながら、而してそれに對しては極めて低率の利子を得るに滿足しながら、他方に於ては、さうすることによつて市中の資金供給を制限し、得意先に對しては人爲的に高金利を負つてゐるのである。斯様のわけであるから、此際政府が金利引下政策をとることに、銀行は陰に陽に反對するのである。然るに、政府は、銀行家から反感を購つては、その財政經濟政策を遂行するに多くの不便を感ずるのみでなく、人事關係からも銀行家の權力に從ふの位地にある。

併し乍ら、この際、輿論の力を以て銀行のこの貪婪を抑壓し、金利引下げ政策を實行せしむることを得んか、財界は資金の苛重なる壓迫から脫して、競爭力を增進し、工業商業共に、その復活を少からず促進せらるゝであらう。云ふまでもなく、

それは、今日の失業を緩和し、救済する有力なる方法である。

しかも、この方法は、銀行家を除くいまの商工資本家からも双手を擧げて賛成せられ、實行極めて容易である。

七

以上の二つの失業救済策は、或は極めて生温いとの非難があるかも知れぬ。或は余りに間接的であるとの苦情があるかも知れぬ。成る程、之を單に無産階級の立場からのみ云へば、いま少し効果の顯著な、いま少し影響の直接な方法がないではない。併し乍ら、現在に於ける我が資本主義經濟の實力から云つて、又今日に於ける我が無産階級の政治的勢力から云つて、この際、實行可能力の最も多くして、しかもその効果多く且つ一般的である方法は、蓋し、以上の二つの方策を外にしてはないであらう。

併し、云ふ迄もなく、これ等の方法は一時の應急策である。之によつて、我が失業問題が全部永久に解決せられるわけでは無論ない。併し乍ら、これ等の方法によつて一時的ながら、いま頭上に降りかゝつてゐる不景氣（行財政整理も要するに不景氣の一現象である）に基因せる當面の失業問題を緩和し、救済する中には、世界の景氣の輪廻は回轉して、再び好景氣に近づくであらう。それ迄の橋渡しを、已述の失業對策が果して呉れれば、それで目的は達せられたのである。それ以上に、この際、失業を救ふ方法はないのだ。われ／＼が資本主義經濟の下に生活を續ける限りは。

× × × ×

不景氣は再びめぐり來るであらう。失業問題は蓋しその度に今日以上に甚しくなるであらう。應急手當の余地は益々限られるであらう。その曉に於て、必ずや國民は、失業の苦悶を永久的に廢滅する工夫を試みるに至らう。その方法が、資本家の立場と勞働者の立場とによつて、大なり小なり異なるには違ひないが、それは要するに、一歩一歩、今日の資本主義經濟の原則を社會主義經濟の原則に變革することである。

近代世相を通して見たる失業脅威

遊佐敏彦

一

近代人の體驗した諸種の脅威と苦痛の新しい感覺がある。其の最も深刻にして廣汎なものは貧乏である。更に現代の世相を睇めて、勞働階級をして前途に不安を抱かしめたものは、勞働の能力あり、勞働の意志を有し、且自分一個の獨立した生計を立つべき職分と技量を有するに拘らず、其の就職の機會を得られない事である。此れは如何に深刻な不安と生存の脅威であるかは、失業の體驗のない人には思も及ばないものである。この苦痛は家族の苦惱であり、社會一般の苦痛であらねばならない。その不安は國家、社會のあらゆる問題の中心であり、其の影響は頗る重大なものである。實にこの失業にこそ資本主義經濟制度中に喰込んだ結核か、又は癌とも云ふべき疾患である。産業革命後の無産者が、脅威と苦痛とに戰く源因は、全くこれに外ならない。

生理學者の研究によれば、苦痛によつて、血壓が高まり、その局部に充血が起る。この興奮が高ければ高い程、その血管中にアドリナリンの量の多くある事を發見する。其して其の苦痛の興奮を鎭靜せんがためには、アドリナリンが驚くべき効果のある事を知つたと云つて居る。人間の肉體的苦痛の救濟のためには、痲痺法の化學的方法として、サア ジエームス・シンプソン博士(一八一一—七〇)の發見したるコロ、ホルムによる痲痺法で、十九世紀の醫術進歩上最も大なる貢献であると稱せられてゐる。身體自身の苦痛の救治には痲醉藥が研究せられて、人間の科學的知識はある程度まで救濟された。肉體の苦痛は化學で止まる。然し人類は肉體苦から精神苦にまで深刻に感覺するのである。殊に近代人には科學から來た文明が、更に新しい苦惱を感覺せしめずには止まない。即ち今日の文化は、原始人が味はらなかつた、社會生活の苦痛と脅威とを齎らし來たのである。現代社會組織の研究の結果、有機體たる社會の生理學及び

病理學によつて、十八世紀後半より産業革命の加速度の變遷のため、貧困と生活脅威のどん底に陷し入れられて居る事に氣付いたのである。

玆に社會問題が研究せられ、社會組織の科學的研究の結果恐るべき疾患たる事が發見さるるに至つた。これぞ今日の勞働階級が經驗せねばならぬ終極の脅威、即ち職業問題である、而もこれは内科的療法か外科的療法か、其の療法の學說は諸種あるけれども、一つとして對症療法が臨床實驗の報告に接しない。經驗と歸納を敎へて呉れた近世科學も、試驗濟ではない。苦痛の研究者は曰ふ。「變遷期過度期は必ず苦痛を伴ふ」と。成長する青年に惱がある、進化せんとする時代に苦痛がある。近代人が痛感する生活苦も惟ふにその苦痛に屬する乎。

失業保險の研究者ギボン氏曰く、「失業は現代經濟社會の根本問題の一である。多年の鬪爭に依りて勞働者は自由を贏ち得た。併し自由のみで彼等は生存し得るものでない。如何にして、多年の努力の結果達成したる自由を犧牲とする事なしに、生活の保障を得べきであるか。これが現在彼等の遭遇してゐる問題である」と。失業は貧困の母であり、失業は社會不安の煽動者である。歐洲大戰の終局に際してロイド・ジョーヂ氏議會にて叫んで曰く、「準備無くして戰爭に入るよりも、準備無くして平和に入るのは最も危險である」と。英國戰後經濟の難局は失業問題である。否英國のみならず、不況と疲勞とを被れる戰後の歐米の經濟界と社會問題の中心は、勿論失業問題である。一九二〇年から一九二一年に於ける失業の危機の最高潮は、世界未曾有の難關であつた。人類運命や社會平和の希望のみでは如何とも致し方無く、失業の問題は各國の國境の狹い範圍を飛越して、國際政治の主要なる要素となつた事は今更說明を待たない。

英國に於いて戰前の最后の危機の絕頂點は、一九〇八年十月の勞働組合の失業者のパーセンテージは九・五％に達し、一九二一年六月には二三％を超した。白耳義の恐慌期一九〇八年には失業率五・九％であつたが一九二一年五月には一四・四％となり、丁抹は一九〇九年の平均率は一三・三％で、一九二一年前半期に於ては二二・五％となり、ノルウェーは一九〇九年に平均五％であり、一九二一年后半から一九二二年前半期に平均二〇％となり、米國に於ては、大統領ハーヂングが懷刀のフーバーをして、失業の危機に全國失業調査委員會をして米國の勞働市場の恐慌に對する對策を講じた時に、當局の算定では、失業者數實に三百五十萬乃至五百七十萬の間を上下したと云つて居

る。保國の孤立、諸國家の新設による經濟系統の破壞、荒廢地方の破滅、賠償問題による困難、通貨濫發の影響、爲替相場の激動等は、復員と恐慌により失業の危機を一層險惡ならしめたのである。失業を擊退する經濟生活の規律と、勞働の安定を確保する事を可能ならしむるために、學者や研究家、亦は生產の責任を負ふ政府も資本家も方策を發見せんと苦し覓めた。然し經濟界動搖によつて資本家も學者も、勞働者も昏醉に氣分を惡くして居るのである。果して職業紹介、失業保險、失業手當、移殖民、其の他の失業保護等によつて周期的經濟的不況の循環運行の浪を乘切る事が出來る事であらうか。

「世界を蔽ふ恐るべき暗雲」たる根本問題の經濟變動により、雇傭の不安により雇主の「威脅の斧」は振はれるのである。今日の勞働階級は斯樣御苑の制度の下に呻いて居る。失業は個人的の源因でなく、社會的經濟的源因であるが故に、失業者自身の責任は寧ろ僅かな部分で、全體の社會とし、又各種產業とし失業責任を分擔すべきである。

然るに失業に對する觀念の誤から失業者自身は社會に顏向けが出來ない、世も失業者を劣敗者の如く見做すは洵に遺憾である。今や失業救濟は社會的、產業的責任を基調とすべき問題である。然も此の問題は現社會の結核であり、癌である。その初期に於て相當の治療を怠り放任して顧みざれば其の結果たるや實に恐るべきものであらう。

凡そ國家の國力、思想、國民の風紀、及び消費力は勞働階級の勞働の安定、不安定の狀況を觀察すれば知られると云ふ事が發見された。

失業問題の世界的權威たる、サー、ビバアリツチ氏の名著「產業問題としての失業問題」の中に國民の脈搏として圖表の上に、一八五六年より一九〇七年の五十年間に亘る統計的研究の結果、銀行割引歩合、外國貿易、物價指數、賃金、新設會社資本金、鐵道收入、結婚率、ビール消費高、犯罪、貧民の狀況は勞働者の就職率と比較し、その波動か、浮沈の同一を見るので、國民の思想と、經濟生活と、就職狀態に及ぼす影響の如何に直接であるかを示して居る。勞働の安定と正規とを確保するに非ざれば、それは社會一般の苦惱であり、國力の營養も、國民の徳性も、教養も、能率も、進歩もないのである。

二

不景氣と失業の脅威は我國の勞働界に旋風の如くに襲來した。大戰中の好景氣中勞働成金も一朝にして失業のどん底に投込まれた。相次いで戰爭中好況を呈した產業を先鋒として、大

正九年以來各所に多數の集團解雇が行はれ、殊に造船界に於ける失業者續出は悲慘なものであつた。失業の脅威は直ちに各地の勞働爭議に表はれ、失業防止、解雇手當法規の制定などが多數に上つた。

馘首とは何たる悲慘な言葉があらう?。首の價は最上僅に十四日分の日給である。この馘首の斧は不況につれて振り廻され、一時に數千人を馘る恐ろしい奴だ。それは氷の刄ではなく、「四日より出社に及ばず」と簡單な紙片一本で濟むのだ。工場に掲げられる告示でよいのだ。好況時代には爭奪戰で誘惑せられ、不況に勞働不安に戰くのだ。この失業不安から解雇手當の要求となり、失業防止の爭議が頻發した。

東京府に於ける爭議の趨勢を見れば、

	大正四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年	合計
賃銀增率	六	一	三三	四五	二三一	七七	四一	三二	一七	[illegible]八三
人員[illegible]其他	二	五	一	四	六	三二	三九	三五	五〇	一七四
解雇反對	―	二	五	三	一五	九	五	八	六	五三
待遇改善	―	一	一	―	一〇	一四	一六	八	九	五九
[illegible]	―	―	―	一	三	七	二一	六	一四	[illegible]二
計	八	九	四〇	五三	二六五	一三九	一二二	八九	九六	八二一

全國的に見ても爭議原因は、失業不安を前提としたものが如何に多いかを知る事が出來る。而して大正九年以來激增傾向を示せるは、好況時代の整理と見て止むを得ざる失業狀態である。

大正十一年華盛頓に於ける軍縮會議は更に我國の失業問題を濃厚にした。陸海軍の二回に亙る大解雇が官營工場に於て行はれた。一工場に一回四千五百名の大集團解雇は我國失業史のレコードである。其れに次いで行政整理が行はれ、陸海軍人、官公吏等の智識階級、俸給生活者の失業を見た。民間會社からも多數の失業者を出した。失業統計のない我國はその失業者總數の計算さへも推定出來ない。まして失業者の歸趨の適確なものの如きは勿論である。

政府の整理に於いては高率の解雇轉職手當を支出し恩給もあるのであつて、失業の不安の中にも彼等の一時的歸國、又は歸農、職業轉換の資となり、今日までには相當の時機に於いてそれぞれ沈澱したものである。我國の家族制度、農家立身者の多數である點は餘程失業を緩和はしたが、都會生活に馴れた人には歸農は一時的現象である事は事實である。

更に最も悲劇的な失業を目のあたり見せつけられたのは昨年の大震災であつて五十五億の富の消え、十幾萬の死傷者が出た

と共に約二十萬の直接間接の失業者が出た。我國に於ける失業の深刻にして且悲慘な事。あの時より大なるものはないであらう。應急救護事業の第一次救濟に次いで。失業救濟は全國の職業紹介所に於いて大なる活動をなした。九月より十二月までに東京地方職業紹介事務局管內のみに於いても。約七十萬の紹介をなしたのである。紹介所の門前は求業者で堵列をなし甚だしきは前夜より露營する者さへあつた。かかる凄慘に堪えさせる光景は未曾有の事である。第一線に立つた紹介所現業員の奮勵努力は洵に英雄的な挿話がある。

併し職業紹介所は職業の創造所ではない。從つて無限に押寄せて來る失業者の群に。全部滿足を與へる事は出來ない。

今や再び警鐘は亂打され。財政整理緊縮に依る官吏の失職者は二萬余なるべしと報じつゝある。

三

現代に於いて最も勢力ある社會階級は資產階級と勞働階級である。一は財產の力により。社會的政治的勢力の基礎とし。他は、財產なく勞働所得を生活の基礎としつゝ勞働の力を以て社會的政治的勢力の基礎とせんとして居る。孰れの階級も其の支配階級の位地を得とし。又は確保せんと要求する。

然るにその理論、その哲學に宗教に藝術の必要を充たすための知識階級なるものがある。知識階級とは知識や技能により通資がられるものである。然し其れは極めて小數である。今日まで資產階級に保護せられて安樂な生活を續けて來。勞働運動には參加せずして唯同情を寄せるに過ぎなかつたが。漸次勞働階級に接近し。其の生活狀態が徐々勞働階級化し。大戰はその傾向を助長し。英國勞働黨の組織の變革の如きはそれである。彼等の生活難は强烈であり。失業は彼等も體驗し。而も就職は勞働者よりも一層困難を感じて來る。勞働階級と智識階級の合同は社會狀態のバランスを失ふことになる。國家の中堅たるべき知識階級俸給生活者の失業率は漸次高まつて來た。軈ては思想上に影響する處頗大である。其の就職難が日に日に甚だしく。現今職業紹介統計の職業分類は五十九種あるが。本年一月以來求職者數に於て。事務員數は每月最高位を示して居る。その就職狀態は左の通である。

大正十三年東京地方職業紹介事務局管內

事務員級の需給狀態

	求人數			求職者數			就職者數			求職者の就職率
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
一月	一〇六八	四六五	一、五三三	四七〇	四四四	四、九一四	七五二	一五一	九〇三	二〇・二〇

二月	二二一	六六三	一七三三	三四四	五六	四〇七	九六八	一六三	一三〇	一〇・六%
三月	一〇〇	四四四	一四四	二六〇二	六六八	四〇八	七六六	二六六	九九	二・五%
四月	六七七	四九	一一五	四二五	一〇五六	五三七六	六三七	四六	一〇六六	一〇・二%
五月	八〇六	九一五	一七三	四四二〇	九八八	五八八	六〇三	三六	九九八	八・五%
六月	九六六	四四八	一四一	三八〇六	七五五	四六	五九〇	二八七	八七一	九・〇%
七月	五〇〇	四三	九三三	三五〇六	六二	四三四	九二	一五八	七六〇	九・〇%
八月	四七六	四〇〇	九〇五	二五三三	五六八	三〇七	三七	三三三	六一	九・八%
九月	五八九	五三〇	一〇〇五	三八八四	七三五	四六三	五四	一九六	八四	八・二%
合計	七三〇	四八二一	一二〇八	三三七八	六三九	一九五七	七六四	五九三	八三五	

の對岸の火災ではない。我國の勞働市場が動きが取れぬ。加ふるに年々人口は五十萬づゝ殖える。

四

また本年も冬が來た。冬期は失業問題の鬼門である。自由勞働者の慢性的失業者も默する事が出來ない時機だ。ロンドンは毎冬トラフアルガル・スクエヤは失業者の示威運動の中心として年中行事の一つとなつて居る。一九〇五年統一黨のバルフオアは「失業勞働者保護法」を通過せしめたが、救濟委員と地方廳と協力して失業者に勞働を與へる組織であるが實績が大した事は無かつた。

忘れもしない一九〇六年キヤアメル・バナーマン内閣が組織せられ、最初の勞働者出身のジヨン・バーンスも閣員となつた年の十二月十三日、南柯戰爭の英國は不況續きで失業者が無慮五萬人テームス河畔に集合し「我に勞働を與へよ」「吾人は慈善に生くるを欲せず」「我等は餓死するを欲せず」の旗を押立ててベルグレーヴスクエヤーの首相を訪れ、指導者クエルチ氏をして「失業勞働者法」の不徹底を論じ、速に國庫の金を以て事業を起すべきを陳べた。

過般市内某大百貨店で都下六大新聞に店員募集の廣告を一日試みた結果僅か二三十名の募集のために履歴書送附應募せる者

失業者　一、一〇三名
就職自營中の者　五三六名
新求職　一〇五名
合計　一、七四四名

某大學に於て寫字生募集を都下四新聞の五行欄になした所が應募者五百四名を算し、履歴、前職に於て高等專門及び中等程度卒業生なるを見ても、經濟界不況のため、生活苦と求職難の脅威にある世相を察知する事が出來るではないか。而も其の失業期の調査に到つて、失業一ケ年以上の者の多いことはその深刻さを思はしむるものである。失業者の悲哀は何所からとなく響く。

失業問題は敎育事業か[illegible]

當局者へ一、「[illegible]

力を盡すべく、失業者諸君の信頼せられんことを」と、傍のシヨン・バーンスも言明して此のデモンストレーションは首相邸よりハイド公園に到り無事解散した。同月十一日、諾威の首都クリスチャニアに於いて失業者運動が國王に失業の窮狀を陳述した。

先年ボナーロー内閣には失業者の暴動化を見た。失業者社會運動史は毎年冬になると活氣付く。季節的失業原因の然らしむる處であるばかりでなく、生活苦は冬に痛烈に感ずるからである。我國の失業運動は大正十年失業者大會を大阪に行ひ、神戸に於て浪人會の示威運動があり、一昨年の冬富川町邊の失業者が東京市役所に押寄せた騷ぎがあつた。

五

失業は慈善救濟の問題でない。經濟問題であり、勞働市場の問題である。それと共に社會不安、思想の問題である。今や失業問題は世界的條件である。失業の防止は國際關係に迄で根柢を置くので、一國の雜經策で盡しきるものでないから何等かの應急策として、國家が考慮すべきである。

産業的原因は産業を以て救治すべきである。今や我國は擧國一致で此問題に當らねばならぬ。物價の高い事、勞銀の高い事、利子の高いことは内の産業の振興せざる原因である。これがための財政の整理が失業を見るであらう。併し嗚て來らんとする振興の爲めには暫くの苦は忍ばねばなるまい。産業の復興に國民的大緊張を要する。米國の大機危に擧國一致ソイデラルレガーブ・ボード・システムによつた如く、我國も節約、勤儉力行、享樂的行動を抑制し、來らんとする新時期を望むべきだ。受難者の時代として覺悟を要する。

人口問題は失業問題と不然關係を絕つわけには行かない。失業の先陣として人口問題を解決するを要する。移殖民は八方敵證の日本は何等かの血路を開くべきだ。これが我國の將來否直に解決すべき事である。用務規性は捨てる。共して廣く世界を覗めよ。もう一度我國の創業の時代の人たれ。海外に移住する前に内國に眞の開拓者たれ。

自然の富源の乏しい我國は立國方針を將へなければならぬ。農業立國か、工業立國か、確然たる國是を立てゝ而往邁進せねばならぬ。生存に脅威を感ずる狹い國は何時かけずに一方に進むべきだ。目前の第一は强いものである。先づ目標を樹てよ。

頭惱勞働者は我が國に於て過剩である。知的活動よりも、俸給生活よりも、技能によつて生きる事である。我國の山村が寂漠する原因は多種あるべしと雖も、全く原始的作業にて何等進

歩たく、創作勞働の興味を失つた基因する。文化を農村に入れよ、筆力を鋤に更へよ、農村の指導者たれ、陸海軍人は宜しく農藝を修得して農民の指導者たれ、而して農村より都會集中を防ぐは目下の都市失業問題の上に益する處頗る大なるべしと思はる。

國家失業保險、職業紹介、勞働市場の國營を計畫する前に、此社會の重大問題たる失業防止の民間の有力なる團體を組織すべきを提唱するものである。失業防止協會は失業の調査と、失業防止救濟、その原因影響の對策を講究し、これを民間の事業として經營し、勞資問題に嚴正にして輿論を喚起する機關たらしむる事は、我國の現狀から鑑みて最も重要な使命を帶びて居る事と、信ずる。

救濟の爲め産業の上の復活を俟つて、世界の貿易市場に雄飛すべきで以前に國家が臨時事業を起すこともその一つである。勞働殖民地（コロニー）を大都市の程遠からぬ處に設置するを要す、失業者の收容と都市失業者精神のリクリエーションを要する職業紹介、社會保險、授産制度、内地海外移住もある。公共事業の按排可である。

失業者の存在は常に對する惡根となり、生活の苦惱は社會の呪詛となる。要するに失業の主因は勞力需給關係の不調和と、

世界勞働市場狀勢から可及的急速不況圏外より脱却するにある。事業界に隆替盛衰の歴史がある。其建設的な努力を傾注して難關を突破するにある。米國の全國調度制が有効であつた樣に、在來の調査會を排し擧國一致、産業平和のため雇主勞働者を代表議員として全國産業「評議會」を起し、責任を共同に實現せしむる好機である。

今や國際主義が政治上、經濟上、はた亦社會上の活動に重要なる位置を占めて來た。進化的、合法的、立憲的手段によつて社會の理想を達成せんとしてゐる。近代生活の脅威たる、社會的疾患たる失業のない世界出現のために共力一致すべきである。

國際的統一運動が二十世紀の大事業であらねばならぬ。

失業問題に關する我國政治家の理解

永井亨

一、

時代の政治家が、始めて失業問題の對策を講究するやうになつたのは、一九〇五年英國に失業勞働法が立法された以後のことである。世の經濟學者が、始めて失業問題を産業上の問題として研究するやうになつたのは、一九〇八年英國のベヴアーリッヂが『産業問題としての失業論』を發表した以降のことである。學者の所謂産業の周期的變動から財界の恐慌が生じ、それから起る失業の脅威が勞働者やその家族の一團を襲ひ、それが政治家の眼前に展開さるゝやうになつたのは、現代の資本主義經濟組織を産んだ所謂産業革命完成以來の事である。失業問題が失業者としての個人的問題でなく、寧ろ失業そのものゝ社會的問題であり、失業問題が貧民問題でなく、寧ろ産業問題又は勞働問題であるといふことが、學者の腦裏に刻まるゝやうになつたのは、現代の資本主義産業制度が産んだ社會主義思想の發達以後の事である。

嘗て十八世紀末の頃米國の或る州で、窃盗者の右腕と失業者―浮浪者―の肩部に烙印が燒きつけられた當時のことは、今暫く問はない。嘗て十七世紀の當初エリザベス女王の救貧法の下に、又爾來久しきに亙つて、失業者が貧民として取扱はれた時代のことは、今措いて論じない。近く一九二一年の十月、ハーヂング大統領の招集にかゝる失業調査會議の報告書中に、次の數句が掲げられてゐる。『我米國民の社會意識は今や漸く失業の何たるかを理解しかけたばかりである。過去に於ては我社會は常に失業問題に對して最少の抵抗線を辿つてきた。現代の社會に反復さるゝ失業問題に手を觸るゝことは一種の冒瀆であるかの如く看過されてきた。從來、失業問題の原因を究めてこれが解決を要すべきものとしたり、或は少くもこれを放任し得ないものとしたのは、僅かに少數の社會學者か産業界の專門家位に過ぎなかつた』と。或る米國の社會學者が『貧困そのものに

對する米國人の特徴的態度はこれに干與せんとするよりは寧ろ嫌な堪へ難いもの、一であつた。この堪へ難い感情が、十九世紀の末に至るまで、貧困に對する無感覺、冷淡、怠慢となつて現はれた」と説いたその米國人の社會に、失業そのものも亦閑却されてゐたといふことは、寧ろ當然の事であらう。上述の失業調査會議の際、失業保險の制度さへ正式に論議されなかつたといふことも、それがためであらう。失業問題に最も經驗の深い英國でさへ、或る學者が戰後の失業問題を論じた中に、左の數句が述べられてゐる。「失業なる現象はあらゆる時代を通じて存在してゐた。唯だ工業文明の發達した近代の國家では單にそれが貧困を生ずるに止まるけれども、過去の農業本位の國々ではこれがために餓死さへ生じた。農業の不作とそれに伴ふ失業狀態がいかに恐ろしきかは今日の露西亞を見ても明かである。英國に既往數十年間饑饉の起らなかつたのは近代資本主義產業組織の發達の賜である」と。天災不可抗力の原因から生ずる失業は昨秋我國に於ても發生した。戰後の伊太利には農業上の失業者が續出した。英國のやうな輸出工業國では十年乃至十一年毎に規則正しく周期的失業が行はれた筈である。資本主義經濟組織の特徴と見るべき失業は、產業の周期的變動から發生するもので、自然の不可抗力から發生するものではない。失業そのものとその結果たる貧困とを混同したり、文明時代の貧困と未開時代の餓死とを比較したりして、資本主義を擁護しようとする愚かさは、嘗てレーニンが『資本主義が惡いといふのは社會主義に比べてのことであつて、中世時代に較ぶれば資本主義は遙かに幸福のものである』と説いた賢さに若くまい。

兎も角も、失業問題を餓死に對する貧困の問題の如く考へたり、或は不可抗、不可避の問題かの如く考へたりすることは、實は今日と雖も必ずしも昔日と異なつてゐるのではない。今日でも一般に世人は失業問題を、失業者個人の問題、或は失業者の責任自衞の問題、或は失業者の過失罪科の問題、或は又不幸者不運者の慈善救濟の問題かの如く思ふのである。獨逸の學者でさへ、失業保險の制度を非難して、勞働者として產業に從事してゐる間の保護救濟でないこと、勞働者の責に歸すべき事由をも救濟する關係から勞働者の責任心觀を薄からしむること、國家や產業の保護救助を恃んで勞働者の獨立情操を弱からしむること、等を擧げてゐるものが決して稀ではない。斯くて貧困、飢餓に對する救恤の問題や、疾病、不具その他の就業不適、不能者に對する扶助の問題や、怠惰、墮落その他の不就業者に對する感化の問題か、今も猶ほ我國の政治家の眼底には失業問題かの如く映ずるのである。失業問題を、主として貧

事業や社會事業――即ち福利事業――の取扱ふべき問題であるかのやうに、我國の政治家が誤信するといふのも、恐らくそれがためであらう。

我國今日の政治家は、一般に失業問題を個人的失業者の問題の如くに決めてしまひ、失業問題が産業的、經濟的、社會的失業そのもの丶問題であることを容易に理解しようとしない。少くも失業問題と謂へば、救貧事業による救助の恩典か、授産事業による救濟の準備か、職業紹介による就職の發見か、移植民による移動の奬勵か、によつて解決するの外ないもの丶如く、我國今日の心ある政治家は一般に理解してゐる。恰かもそれは今から二十年前の英國に失業勞働者法の立法が試みられた當時と毫も異なるところはない。しかしその英國でも、十九世紀を通じて屢々失業問題に惱まされたに拘らず、『失業者』といふ語の別に『失業』といふ文字さへ漸く使用さる丶やうになつたのは、實に前世紀末の頃からである。されば、世界の大戰時を機會として産業革命の完成を見たと謂はれ得る我國に、戰後の財界不況から起つた産業界の失業問題が、始めて我國の政治家をして失業問題そのもの丶存在に目覺めしむるやうにさせたといふのも、そこに何等の不思議はない。然るに時恰かも我國の政治家は、華府の國際會議から餘儀なくされた軍縮のための失業問題に注意を拂はなければならず、更に圖らずも昨秋の大震火災の際禍害を蒙むつた罹災者の失業問題に當面しなければならず、今や又財政行政整理のためにその犧牲となりつ丶ゐる勤人の失業問題に考慮を施さなければならぬこと丶なつた。そこでその結果は却つて、失業問題を見ること動もすれば國際上、政治上、將た又天然上、いかんともなし難き不可抗、不可避の問題であるかのやうになり、失業犧牲者に對する個人的救濟の途を講ずることがさも失業問題それ自身であるかの如くなつた觀さへある。それよりも我國一般政治家の腦裡には、必然失業問題を輕視するやう、資本主義的經濟思想が根强く横はつてゐる。何故に斯かる經濟思想が、失業問題を看過するやうさせたかの理由に就ては、最近英國の或る經濟學者が說いた要旨を、左に摘示して見よう。

二、

謂ふまでもなく失業問題はアダム、スミス以來の舊經濟學者によつて久しく看過され輕視されて來た。それは當時の四圍の情勢と環境とから、一國經濟なるものが『國富全體としての增進』に外ならないといふことに、着眼したためである。國家の維持も生産の增加も、その實『總體の富の分配』と俟たなけれ

ばその目的を達し得ないといふことを、闡明したからである。

アダム、スミスの時代やその後多年に亘つて有識階級を捉へた問題は『國家間の競爭』といふことである。他國と爭つてこれを制し得る『國家の權力』さへ大なれば、他の一切の事は多く顧みて問ふ必要がないと感じたのである。時代の經濟學者が、富の生産と集積を『國富の死活的要因』と見てゐたことは、寧ろ當然の歸結である。『國家を組織する各個人の幸福繁榮』といふことは、少くも時代の政治家にとつては、一小些事の如くに考へられたのである。固より當時にあつても勞働は富の生産に絶對必要のものと思はれてゐた。勞働者が勞働力を十二分に使用することは必然缺くべからざる要件であるとした。然しながら同時に又、勞働者が『絶對的生活最少限以上の消費』をなすといふことは『國家の死活問題たる國富の消失』であるかの如く信じられてゐた。當時の政治家は所謂政治家(ポリチシアン)であつて『博愛者』ではない。當時の政治家は全然特支配階級から出て國家の利益と彼等の利益とは全く合致してゐた。一般民衆に對する政治家の考慮といふものは『飢餓を以ては動かし難い社會的危險を避くることに必要な最少限度』以上には及ばなかつた。政治家の眼前に、憐れむべき不幸が注意を餘儀なくすべく現はれてきたとき、時として彼等は失業の原因を考究した。しかし考究の結果は常に『失業は人生の避くべからざる禍害の一である。たゞ最悪の苦痛を和ぐることの外には他の施すべきものがない』といふ結論に歸着したのである。一般に當時の政治家は、日常直接の急迫必要といふこと以外には何物にも關係しようとはせず、又それで少しも恥づるところはなかつた。當時の政治家には、吾人の全力を盡すべき最大の努力は『國家の複雜なる機關』を『運轉』することであり・その『調節』をこそ計れ、その『改造』の如きは各人の『職域以外、權限以上』のものと信じられたのである。

以上學者の論じたやうに、舊經濟學者は少くも失業者を國富の犠牲者なりと考へてゐた。舊政治家は少くも失業者を國民の犠牲者なりと信じてゐた。富國強兵の標語こそ時代の經濟學者や政治家を支配したものに相違ない。恐らく舊經濟學者は失業は經濟組織から生ずる必然避くべからざる産物と考へたのであらう。恐らく舊政治家は失業は社會秩序を維持せんがため勞働者當然の運命なりと信じたのであらう。自由競爭の標語こそ時代の經濟學者や政治家を支配したものに相違ない。否、我國今日の一部の經濟學者や一般の政治家は、斯る理解の下にのみ失業問題を觀察してゐるのではなからうか。

失業問題が現代資本主義經濟組織の必然の産物であること

も、又その最惡の副産物であることも、今日世界の識者の一般に疑はざるところである。米國の或る學者の言に、一切の社會主義的思想は皆資本主義が職業の保障に任じないところに攻撃の出發點を求めてゐる、と說いた。若し將來資本主義が、獨り資本家のための投資の保障ばかりでなく、勞働者のための職業の保障にも任ずるやうになつたなら、同じ學者の所謂有働的資本主義ではなくなるばかりでなく、資本主義そのものでなくなるやも知れない。兎も角も前述の英國の學者が論じたにやう「若しそこに救濟の途が存するなら、いかにしても救濟しなければならぬ輪害」の原因は明かに資本主義そのものゝ中に包藏されてゐる。されぱとて資本主義に代らんとする社會主義乃至共産主義そのものゝ中にも、假りに斯かる輪害に對して救濟の途を存する『形態』制度が行はれ得るとしても、國民全體の『精神』がこの制度に合しない以上到底輪害を救濟するに足らないといふ、最大の弱點が潜存してゐる。果して然らば、歸するところ、現行制度組織の改良改造といふこと——即ち社會政策——の外に、そこに斯かる輪害を救濟すべき途は見出し得られまい。果して我國の政治家は、斯かる理解の下に、失業問題の對策を論じつゝゐるのであらうか。

三、

由來、我國當時の工業界は勞働の不足、就中熟練勞働の不足を感じつゝゐる。之に反して我國の農業界は動もすれば人口の過剩を呈しつゝゐる。英國が農業人口に不足して農業のそれよりも約二倍の工業人口を有するとは全然事情を異にしてゐる。それよりは獨逸の農業人口と工業人口との割合が三と二の比率を示してゐるのと、或は寧ろ佛國の農業人口が工業のそれの約二倍に及んでゐるのと類似してゐる。斯かる半農半工の我國に工業輸出國たる英國のやうな失業問題が發生しないといふことは、餘り當然の歸結である。さりながら旣に産業革命の過程を經て、資本主義經濟組織の確立を見た我國に、失業問題の發生せざる筈はない。果然、戰後の財界不況から起つた失業問題は、その程度こそ低けれ、大正十年の頃から出現した。曾て自分は當時に於ける工業界の失業者を大約二十萬人と概算して置いた（拙著『勞働問題と失業問題』參照）。爾來今も猶ほ財界の恢復を呈するに至らない間に、不幸にして大震火災に基づく失業問題が、昨秋帝都を中心として突發した。近く福田博士は當時に於ける帝都の失業者（博士の所謂準失業者を含む）を約二十萬と推算された（福田博士著『復興經濟の原理及若干問題』參

照)。今や更に政府は行政整理に着手して新なる失業問題が近き將來に於て發生せんとしてゐる。果してその整理人員が何程の數に達すべきかは未だ詳かでないけれども、假りに少くも文官の現在數を約十三萬人(大正十年度統計年鑑による十六萬二千人の二割減と見て)と推定し少くも雇傭人の現在數を約二十四萬人(同年鑑による三十萬人の二割減と見て)と推定するなら、今この現在數(戰後の好況時より既に二割を減じてゐるものとした)の二割を整理するとして約七萬人、二割五分を整理するとして約九萬人の失業者を生ずる譯である。

失業者といふことが、勞働の意思と勞働の能力とを有しながら相當の職業を見出し得ないものであることは、今更論議するまでもない。任意氣儘の不就業者や怠惰のための不勞者が失業者でなく、癈疾不具の就業不能者や病弱のための就業不適者が失業者でないことは、彼此說明するまでもない。同時に又或人か、假令何等かの職業を有し何等かの業務に就いてゐるとしても、それがその人の力量や能力や從來の職業などを參酌して、普通一般報酬率の下で適當の職業に就き得たものと見られない以上、斯かる人々が失業者であることは、學說立法例の略ぼ一致するところである。然るに我國の社會組織の現狀では、一般民衆の生活程度が甚だ低くて、舊家族制度の美風も弊習も共に行はれ、工業文明の發達程度が未だ低くて、職業專門の文化は充分に行はれず、加ふるに、職業紹介の機關が能く整はないで、失業保險の制度は未だ行はれてゐないといふ關係から、一言にして謂へば、我國は、いかに失業者を生じてもそれが社會の場面に現はれて來ない。換言すれば社會の奧底にそれが潛んだまゝでゐる。そこで我國の政治家の眼にはそれが容易に映じて來ない。謂はゞ政界の視野の圈外にそれが留まつてゐる。更に我國近時の傾向を見ると、幸にも勞働者又は使用人、失業者の場合に、一定の解雇手當を支給する慣例が漸次に普及しつゝゐる。我國の失業問題が今も猶ほ深刻性を帶びてゐない所以のものも一はそれがためであらう。加ふるに今日までの我國失業者の一大多數は、中產者又はその子弟と見るべき精神勞働者又は不生產勞働者、就中團結力の乏しい使用人階級乃至知識階級のそれである。このことが我國の失業問題を甚だしい程度に至らしめてゐない一因とも謂ひ得よう。

然しながら、我國の社會階級に一大多數者の使用人階級乃至知識階級の存するといふことは、必ずしも喜ぶべき現象ではなく、寧ろ憂ふべき事實である。恐らく斯かる事象の生じたことは、我國傳統の民族性が然らしめた結果からでもあらうし、同時に又因襲的、封建的社會組織が然らしめた遺習のためでもあ

らう。維新後の教育方針が與大に與て力あつたことと謂ふまでもない。嘗て維新前には浪人が續出し、維新後には壯士が續出した。今や我國の帝都の眞中にいかなる世相を呈しつゝゐるか。何人も憂慮の念を懷かざるものはなからう。それはさへ措いて、我國の今日に、官公職その他に從事する所謂勤人階級はあまりにその數が多い。一般に所謂不成産的勞働者の數があまりに多い。恐らく斯かる事象は官尊民卑と事大思想、勞働卑下と封建思想が産んだ一大産物であらう。ソヴィエト露西亜では、使用人階級――ソヴィエト官憲を中心とする――が勞働者階級の六十三パーセントにも達したことから、ソブイエト政府は驚いてその整理に着手したと聞いてゐる。この點に就いては寧ろ米國の自由職業者が國内全職業人の五パーセント、事務員階級がその七パーセントに過ぎないといふ職業的分布に鑑みなければなるまい。失業問題の生ずる一大主因も畢竟するに一國内に不生産者の一大多數が存するからである。換言すれば一國の社會そのものが眞に生産的でないからである。我國の産業が今日一般に未だ不生産的であり、更に社會全體が極めて不生産的である以上、益々將來に失業問題を發生して、愈々問題の解決に苦しむようになるであらう。それ故に、若し我國の現政府が、一方吏員を減少して能率的に公共の業務を行ふことに務め、他方の産業を奬勵して生産的に業務の機會を與ふることを期さうといふのなら、斯かる政治目標に對しては何等批議すべき理由がない。果して現政府が斯かる積極的政策を採り得るや否、整理の犧牲者を失業者として遺憾なく處理し得るや否、進んで從來の教育方針をも一變し得るや否は疑問である。

我國の政治家は、一般に社會問題や勞働問題の何たるをも多く理解しない。從つて失業問題に關する理解をも甚だしく缺いてゐる。職業紹介に關する一定の主義の下にこれを普及活動せしめようとはしない。失業保險に關する法制さへ一定の政策の下に立法を試みやうとはしない。却つて我國の政治家が失業の對策として常に最も力を致さんと無効に苦心しつゝゐる問題は移殖民である。然しながら海外の移民は大體に於て何等失業の救濟とはならない。若し不生産的勞働者を海外の生産事業に移殖しやうとするのなら、それは確かに一策であらう。然るに不幸な不熟練勞働者を、彼等自らの負擔の下に、資本企業の背景もなく、海外に移殖しやうとしても、それは、恐らく何等の甲斐がなからう。今の世に僅かの不熟練の勞働者を海外に移送しても我身の自衛すら出來ない。熟練勞働者に至つては、海外に需要もなく、國内には寧ろ不足を感じてゐる。斯く移民が單に失業の一部的、一時的救濟たるに止まることは、今日に於て

は、何れの國もよくこれを知つてゐる。英國ですら既往五十年間の沿革はこれを實證して餘りあると謂はれてゐる。或は又移民は將來に禍根を胎すものであり、失業生産者の移民は一時的には失業の救濟の如くであるが、將來に不生産者の割合を増すのみだと論ずるものさへある。前掲の英國の經濟學者が「世界の未開地に生産を増加することは望ましいことであるが、もつと容易な自國の資源の發展が忘られてゐる間は、計畫すべきものではない」と說いた一言こそ、我國の今日に最も適切なる鐵言であらう。恰かも勞働問題が貧民問題によつて少しも解決されないやうに、失業問題は移民問題によつて毫も解決さるゝものではない。

失業問題は産業制度その者に關する産業問題である。勞働組織そのものに關する勞働問題である。社會秩序そのものに關する社會問題である。恐らく失業問題に關する我國政治家の理解の程度は、その點それによつて産業問題解決の針路は、産業の社會化勞働の組織化、社會の生活化といふ三標的を外にしては、何れの方向にも求め得られない。しかもこの三目標は必ずしも現代の資本主義舊社會を社會主義新社會に變革する所以のものではない。敢て我國の政治家にこの三標語を獻する。我國の政治家は安じてこれを納るべきである。（大正一三・一一・五。）

話の種

長谷川是如閑氏の隨筆集「犬、猫、人間」がよく賣れるといふわけからばかりでもあるまいが氏の家族は全く犬、猫、人間で出來上つてゐる◇人間の次ぎに數の多いのは犬で、この頃では那須の松方農場から來たアイリッシュ・コリーの「栃」（とち）大將に土佐犬とテリヤの雜種「チビ」の三匹が印税の分配を受けてゐる形である◇猫は昔からゐる「茶目」君一匹であるが、これは上座に構へて相變らず御主人の御機嫌を伺つてゐる◇何のことはない氏が大阪は住吉にゐた頃の生活が復活したやうなものだ◇從つて犬猫共盛んに書き立てられるだらうがこのモデル料、税金、食料を入れると中々に安いもではない（十一月七日讀賣）

雜誌を選ぶは今!!

◇新年からお薦めしたい雜誌◇

◇生活の必需品 として我國でも雜誌が新聞と同じ樣に誰にも讀まれて來たことは、最も喜ぶべき事實であるが、その善惡の影響に就いては、識者の間の話題となつてゐる樣だ。雜誌の持つ美點、効果に就ては今更言ふ迄もないが、多く讀まれゝば讀まれるだけに、如何はしい營利本位のものも自然現れて來ることは何時も變らぬことで、現在では雜誌の選擇がまた重要なるものとなつて來た程である。

雜誌は新年號から讀み初めることが讀者にとつて最も利便が多い、從つて來年からは何を讀まうかと迷つて居られる方も多いことであらう。

◇少年少女讀物 としては、何と言つても、澄宮殿下台覽の光榮を荷ひし、同種類中第一の大部數を有する「少年倶樂部」少女向としては、國母陛下皇太子妃殿下台覽の雜誌「少女倶樂部」と定評がある。何しろ兩誌共現代一流の教育家數十名が贊助員として編輯されるものだけに愛する御子弟方の讀物としては絕好のものである。

◇婦人雜誌の中 では上品で實用的との評判が高い「婦人倶樂部」が第一に數へられる。同誌が最も親切な婦人の味方として、堅實な道を歩み今日の大發展を見た事は實に感嘆に値する。小說、料理、育兒、裁縫、美容の記事說話、評論、研究等婦人に關する一切の讀物は、各專門大家が責任を以つて記述してゐる。御婦人方が雜誌選擇の絕好期に際し「婦人倶樂部」を手にせられる事を記者は切にお薦めしたい。

◇萬人向の雜誌 では「講談倶樂部」が第一に數へられる。德富蘇峯氏、上杉愼吉博士が極力推奬されてゐる所から見ても、滑稽愉快な雜誌「面白倶樂部」と共に我國の娯樂雜誌を代表してゐるものと言へやう。

高級ものでは現社會百般の記事を網羅し、高級知識の民衆化を標榜し、國民必須の知識を平易に誰が讀んでも面白く、判る樣に記述した雜誌「現代」が名實共に日本一、是非お薦めしたい雜誌の一つ。

◇面白くて爲に なる事を其標語として編輯される大日本雄辯會、講談社發行のものは各方面から代表的な雜誌として好評を受けてゐる。例へば講談倶樂部、現代、面白倶樂部、或は雄辯、婦人倶樂部、少年倶樂部、少女倶樂部と云つた樣に何れもその方面々々で評判發行共に誌界第一位を占めてゐる。

この新年號から創刊される同社の「キング」も豫告や、諸方面の名士の評判から見ても、これ又推奬すべき良雜誌の樣に見られる。

◇日本一を標榜 し發行部數も現在日本の最大部數を發行する雜誌より三倍で、面白いこと、爲になること、安いこと、何から何まで日本一、然も同社が過去二ケ年に亙る研究の結果發刊されるものだけに、一躍世界有數の名雜誌として日本の誇りともなるやに考へられる。

今は雜誌の選び時、此期に以上の樣な良雜誌を選擇されることが最も肝要である。何故ならば種々な大讀物や面白い讀物などは、何れも新年號から掲載されるし又種々な特典もあるからである。

新年特別號 現

一冊はれお社會の

見よ此の新陣容！新春誌界の最高權威として

愈々十二月十八日發賣

堂々六百五十餘頁！今から書店へ御申込を乞ふ

◉時勢と共に進まんと欲する者は讀め！樂しみながら物識りになれる

◇全國民に告ぐ（國民覺醒の箴言　句々肺腑に徹す）……澁澤榮一

◇黎明期の思想界（思想界を縱横に說破し　一路の光明紙上に躍如）……吉野作造

◇學校の試驗と社會の試驗（出世榮達の難關を突破する秘法）中島德藏

◆素敵に賣れる斬新奇拔の販賣術……井關十二郎

◆人間の働盛りと之を延長する工夫……高野六郎

◆我社の三大綱領……野間清治

◇伸び行く力（小林一郎）◇滿鐵を切つて廻す人々

◇世界の大勢（記者）◇本年度財界の豫想

巻頭言　▼三上參次

◇汝自身の運命を拓け……（藤山雷太　内藤久寛）

□大地のリズム（自然と人生の變妙不思議を抉り得て痛快）……小酒井不木

◇政界縱横記…◇（革命小說）人獸相鬪　三上於菟吉

◇民衆大學講座…◇（戀愛小說）焦土に哭く　野村愛正

時事問

▼北澤新次郎　▼中島德藏　▼帆足理一郎　▼土田杏村　▼塚本はま子

特大號につき　金壹圓五拾錢（送料五錢）

東京本

代

大號！

一と何でもわかる

題批判

▼蜷川新
▼水野廣德
▼加藤千幹
▼井澤宏
▼石井滿

此の外猶は數十篇滿載！

◇無線電話の話
◇濱尾新（傳記）
◇本年世相豫斷
◇新知識新研究
▼新時代の第一線に立つ人々（二十七名）
□余が心を許し合った親友（四十名家）

◇（海外小說）脫線……窪田十一
◇（探偵小說）死の寶庫……紀潮雀
◇（實業講談）三井王國……大瀬較馬
◇（世界奇譚）大金脈　伊藤銀月
◇（武勇講談）柳川庄八　小金井蘆洲

特別四大附錄

（第一附錄）名士文豪 處世修養實訓

一世の師表と仰がるゝ諸先生體驗の結晶！悉く處世の要道修養の心髓を示されたるもの何人も見逃し得ぬ金文字也。

（第二附錄）波瀾萬丈 戀・名・富 勝利者物語

稀代の幸運兒が白刃の下を潜るが如き大冒險！濃艶凄絶痛快壯美眞に太高潮の大場面を展開せる驚嘆的大讀物揃ひ！

（第三附錄）投資利殖の研究並に實例

土地建物の新研究株式債券の安全利殖金融貯蓄の新案各種有利の商賣其他に就理論と實際を詳說す應用自在絶好指針

（第四附錄）滑稽百出 大福ニコ〳〵大會

上品な滑稽と輕い諷刺！漫畫漫文滑稽小說浪花節落語講談一口噺隅から隅まで面白づくめで誰が讀んでも大ニコ〳〵

大日本雄辯會發行　振替東京三九三〇

菊池寛著

戀愛病患者

八版

定價壹圓五拾錢
郵税拾五錢

菊地寛氏は、現文壇に活躍せる勢威盛んなる活火山である。その天に冲せる噴煙は、あらゆる讀書人の注目を惹かずにはいないだらう。本集は、氏が最近の創作中より、小説の粋と戯曲の精とを蒐めたもので、就中「戀愛病患者」の如きは、氏が戀愛至上に對する猛烈なる否定を主題とし、戀愛至上主義者に對する一大痛棒をなすものだらう。小説「羽衣」の如きは、その奔放なる構想と大膽なる落筆と相俟つて、天人共に揶揄し去つたものだらう。その他小説戯曲十數篇、悉く快刀人の肺腑を抉ぐるが如き、痛快味を藏してゐる。

信康母子
愛慾餘譚（戯曲）
浦の苫屋（戯曲）
戀愛病患者（戯曲）
ある記録
頸縊り上人
微苦笑
羽衣
世評（戯曲）
丸橋忠彌（戯曲）

東京市愛宕下町
振替東京八四〇二

改造社

電話高輪四九九三

懸賞寫眞募集

當商會は素人「アマチユア」娯樂寫眞を奬勵するの目的を以て當社製(カメラ)の愛購者より懸賞寫眞を募集す而して最も優秀なる映畫に對し左の懸賞を呈す。

第一の最上映畫三種に對し

一等・三百圓　二等・二百圓　三等・百圓

但シ右應募映畫ハ左記ノ「カメラ」ヲ以テ撮影シタルモノニ限ル

クラウス製「アクチスカメラ」手札名刺 カビネ　F4.5「テツサア」「コンプア」附
同「テイクタカメラ」同　F4.「テツサア」「コンプア」附
同「リリプト」「アトム型」ヴエスト型　F4.5「テツサア」「コンプア」附
同「ロオレツト」ロールフイルム用　F4.5「テツサア」「コンプア」附

第二の最上映畫三種に對し

一等・二百圓　二等・百圓　三等・五十圓

但シ右應募映畫ハ左記ノ「カメラ」ヲ以テ撮影シタルモノニ限ル

クラウス製「テイクタカメラ」手札　F6.3「トリアナ」「イブソシヤター」附
同　同　手札名刺　F6.3「トリアナ」「ヴアリオシヤター」附
同「ローレツトカメラ」ヴエスト型 ロールフイルム　F4.5「トリアナ」「ブロントシヤター」附

應募者ハ素人(アマチア)ニ限リ専業家ヲ除ク映畫ノ審査ハ(アマチア)寫眞界ニ有名ナル三氏ニ囑託シ嚴正ナル考査ヲナシタル結果ニ待ツ

應募期間(大正十四年五月三十日迄トス)應募各映畫ニハ當方ヨリ渡シタル「レンズ」番號記入ノ符紙ヲ添附スルヲ要ス此符紙ナキ映畫ハ無効ナリ。且應募者ハ「タラウス製」「カメラ」ヲ購入シタル販賣店ノ名ヲ記入スルヲ要ス

詳細ハ全國各地寫眞機材料店ニ御照會相成リ度候猶不明ノ點ハ直接當店ヘ御照會

東京市麴町區有樂町壹丁目壹番地
ヱー・クラウス
電話大手五二四八

文學博士 新村出著（新刊）

南蠻更紗

定價貳圓參拾錢
送料十九錢

趣味の名著出づ

美文家として、南蠻研究の第一人者として知らるる新村博士の近業である。博士が珠玉の如き麗文、斷想にて幾多面白き題材を捉へ來りて明治以前の奇しき文化の跡を訪ねた近來類稀な文献にて、讀み去り讀み來りて身は其の時代にあるが如く、卷を掩ふ能はざるのものである。近來の好史家のみならず家庭、學校の必ず一本を備ふべき參考書であり、趣味の讀み物である。

（1）雪のサンタマリヤ（2）切利支丹文學斷片（3）遊主聖範の舊譯本（4）切支丹宗の遺物（5）日本最古の銅版畫（6）南蠻趣味と和歌其他（三百年前の回顧）（7）南蠻に關する俚諺その他（8）眞宗と切支丹（9）煙草と煙管（10）時計傳來の歴史（11）歴史と地理（12）加留多の將來と流行（13）近世輸入服飾品と其の稱（14）ちやるめる（15）日本美術史上の新研究（16）日本文學の海洋趣味（17）海賊の話（18）大西洋上より（19）長崎再遊（20）日本人の眼に映じたる星（21）星に關する二三の傳說（22）里昂讃仰（23）星夜讃美の女性歌人（24）花の名三つ四つ（25）「ふれふれ粉雪」（26）徒然草とその口譯（27）北原白秋の『思ひ出』（28）圖書館の一隅より（29）地獄小話（30）鷹狩（31）錫燒物語（32）語原雜話（33）エスペラントの好習（34）ベクーニン來航の事など（35）去來一家の事

東京芝愛宕下町 振替東京八四〇二 **改造社** 電話高輪四九九三

內外財政經濟時評

對露借款と英國內閣の瓦解

××生

十月二十九日に行はれた英國の總選擧は愈勞働黨の敗北に歸した、首相マクドナルド氏はたとひ總選擧に敗れても內閣は投げ出さないといふやうな口吻を選擧前に洩らしたと新聞紙上に傳へられるけれども、英國政界の道義上マクドナルド氏は挂冠して、內閣組織の大命は保守黨首領、スタンレイ、ボルドウイン氏に降ることを信ずる。本年一月に成立した英國勞働黨內閣が斯くの如く短命に終つた原因を考へると、それは矢張り一の財政經濟問題であつた、對露新借款の問題即是れである。

英國勞働黨が內閣を組織した當時に於て、勞働黨は衆議院に於ける最大多數黨ではなく第二黨であつた。然し從來政權を握つて居た保守黨が總選擧の結果第一黨とはなつたけれども、過半數を失つた故に內閣を投げ出さなければならなかつた。即勞働黨と自由黨とが合すれば保守黨よりも多數であつたのである。而してアスキス氏及ロイドジョウジ氏の率ゐる自由黨は勞働黨の內閣を支持する方針を取つたから、勞働黨は內閣を組織することが出來たのである。故に勞働黨が政權を維持するのは自由黨が後援を與へる間に限られる狀態であつた、而して自由黨の後援は對露新借款問題に逢着して撤回せられたのである。

勞働黨內閣は其の成立後間もなく即本年二月一日露國政府を正式承認した。それは勞働黨內閣としては實に當然の事であつたが、その正式承認を通告した公文の中に、英國政府は露國政府に對し現在條約、英露政府及國民相互の間の債權、露國の信用恢復等の問題を討議し、兩國間の一切の懸案を解決すべき完全な條約の豫備的基礎を作成する全權を持つて居る代表者を成るべく早く倫敦に派遣せんことを招請するといふ文言があつた。それでラコブスキ氏の一行が倫敦に來着して四月十日から英露會議が開催せられた。而して五月二十日の會議に於てラ氏は英國市場に於ける露國信用の解決に關する覺書を英國代表ポンソンビイ氏に交付し、次で英國政府の援助に依り長期公債を起し得るに於ては、英國民に對する露國の戰前債務を辨濟する爲、一定の取極を爲すに同意するだらうと述べた。之に對し英國代表は勞農側提案を更に綿密に研究した上でなければ、之に對し何等意見を開陳し得ないが、公債募集に付英國政府の與へ得べき援助は、極めて局限せられて居る事、政府の保證を與へることは全然問題にならないことは、今から了解を得て置かなければならぬと告げたが、勞農代表は更に露國の戰前債務解決を可能ならしめ、露國の經濟組織を恢復し、英露通商の發展を計り、延いては英國自身の失業救濟に資すべき公債成立の爲、英國政府に於て出來得る限りの援助をなすべきことを力說し、露國國立銀行の參加は公債に對し安全な保證を與へるものであることを指摘した。英國代表は之に對し英國政府の保證は問題外であることを繰返し、勞農政府が其の入用な金額調達に困難を見ないことを希望し、此の點に關しては獨り露國國立銀行の信用が公債の背後に存在するのみではなく、露國の經濟的復活の有望な狀況、並に此の英

露會議に於て政治上の諸懸案の解決を見ること等も、公債の成功に關係あるであらう、尤も英國政府としては露國の起債に對し其の權限内に於て出來得る限り同情的態度を執ることを辭せないであらうと答へた。

英國政府は五月二十七日の會議以來、會議の經過を公表しなかつたので、幾多の揣摩臆測が行はれ、或る時機には會議の決裂を傳へられたが、八月六日に至つて形勢は急轉直下し遂に英露條約の調印を見た、此の條約は一般條約十八箇條通商條約及附屬議定書竝に宣言書から成つて居るが、その一般條約の第十二條に於て英國政府は議會に對し勞農政府の發行する公債の利子及償還基金に保證を與へる權限を要求するといふ規定がある。前述五月二十日の會議に於て英國代表が政府保證は全然問題にならないことを極力主張したことは、英國外務省の公表文書に明瞭であるに係らず、條約文に此の如き規定を包含するに至つたことは、聊か意外の感に打たれるのであるが、此の條約は議會の許諾を要するものであつて、而かも第十二條の規定は保證を與へる權限を議會に對して要求するといふのであるから、若し議會が承諾を與へないときには、英國政府は露國公債に對して保證を與へることは出來ないのであるから、言はゞ保證文のやうなものであるけれども、之れあるが爲に勞農政府が一般條約の第六條に於て一九一八年一月二十八日の布告(舊露國政府債務拋棄の宣言)の例外として、舊帝政政府又は現露國領内の公債の發行を引繼き、又は保證した外國貨幣拂公債を所有する英國債權者に對し、本條約規定の條件に依り其の要求を滿足せしむべきことを約したのを思へば、此の保證文を與へたのも無意義ではない、のみならず、勞働黨內閣が國內輿論の反對をも顧みず、露國公債保證に關する條項を含む英露條約に調印した眞意も亦、推察せられるやうに思ふのである。

英國首相の英露條約調印が八月八日のタイムスの論じたやうに、單に交涉の任に當つた兩國當事者の顏を立てる爲であつたかどうかは輕卒に論斷することが出來ないが、英露條約成立當時保守自由兩黨の之に對する論難攻擊は激甚痛烈を極めたのであつた。尤も保守黨は條約調印前から英露會議其の者に向つて攻擊を加へて居たので、五月二十日プリムローズリーグ支部の臨時大會で、座長、ロード、カーゾン前外相はボルドウイン氏(前首相)紹介の演說內に勞働黨內閣の外交政策を批評し英露交涉を以て、露國革命以來比類のない虐殺を極め、過去五年間常に英國民の急所を刺して來た政府と、友好的會議を開くものであると罵倒し、露國の求むる所は舊時代の追剝が旅人を要して金を強請するに異ならないので、之に金を與へる時は遂に命をも失ふに至るであらうと難じて、語氣頗る激烈を極めたといふことである。五月二十八日上院に於て保守黨のロード、メイヨーは勞農代表が公債成立を條件として戰前債務償還を約しても、其の實戰前債務を名として公債に有り付き、而かも債權者には僅少の支拂を爲して事濟みにしようとする魂膽であると論じて「上院は英露會議を即時打切るべし」との意見を有す」といふ決議案を提出した、然るにロードカーゾンは會議打切の動議には直に贊成し得ないが、徒らに協定の成立を待つのは愚である。唯此の際憂ふべきは勞働黨內閣が既に何等の代償なしに勞農政府を承認した關係上今回の會議が不成立に終れば世界の物笑となるべきことを恐れて、眞正の協定でないカムフラージュの協定を結ぶ惧あることであると述べて、「上院は英露會議を出來得る限り速に終結せしむべしとの意見を有す。」と修正するなど、[illegible]

メイヨーは改めて右の文句の決議案を提出したので、樞密院議長ロード、パーモーアの熱烈な反對論があつたにも係らず、決議案は可決せられたのであつた。

英國保守黨の英露協約殊に英國政府の露國公債保證に關する態度は以上の事實に依つて明瞭に表示せられたが、自由黨の態度は最近に至る迄必しも鮮明ではなかつた。唯ロイドジョウジ氏は此の露國公債の政府保證に大反對であつて、九月十日ヘンメンモウアに於ける演說中、氏一流の最犀利な論法を以て之を痛罵した、即日く、問題は金融逼迫の此の際大部分を勝手な使途に充つべき共產主義者に大金を貸すべきや否やに在る、我が金融界に餘裕ありとせば、先づ之を國內及帝國內通商の發展、資源の開發に向けなければならぬ時に當り、正當な事業に有害な主義を抱く時外國に對し、政府が巨額の公債を保證するが如きは、罪惡に値する無思慮の行爲であると攻擊を加へ、若し政府が之を總選擧に訴へるやうな爆擧に出づるに於ては、失敗を蒙るべきことを明言して憚らないと述べた。然るにアスキス氏一派の態度は最近迄明瞭を缺き、同氏系といはれる倫敦の夕刊新聞ウエストミンスター、ガゼットは同條約の價値如何は勞働政府の業蹟如何、又は其の締結事情の如何とは別に考へるべき問題であつて、兎に角相當額の債務を承認せしめたのは、從來の交涉に比し一段の進歩である、公債に對する保證の如きも新に條約に於てそのことを明にせるならば、反對論者の心配する樣な結果を來さないで濟むであらうと論じて居たが、最近九月二十日に至つて漸くアスキス氏の書翰が新聞紙に公表せられて、始めて氏の態度が明になつた、即同氏は英國政府が條件の特記も無く金額の定めも無い露國公債を保證することに就き、假令豫備的承認なりとも議會に求むることは至當でないと述べた。

今回の英國議會解散はキヤンベル事件に端を發して居るけれども、英露協約に對する自由黨の反對に依つて其の後援を失つた勞働黨內閣は早晩議會を解散せねばならぬ運命に在つたのである。即露國公債保證の問題が英國勞働黨內閣を瓦解せしめたと云つても、決して過言ではない。

今夕の夕刊新聞は英國總選擧の結果が保守黨の大勝に歸したことを報じて居る。所謂オープアーホエルミング、マジョリテイである。而して同時にアスキス氏の落選を報じて居る保守黨が大勝を得たのは、英國民が共產主義の英國に擴ることを恐れた結果であるといひ得る、然るにアスキス氏の落選は英露協約殊に露國公債保證問題に關する態度が最近迄明瞭を缺いた爲ではあるまいか、それにしてもアングロサクソンは遂に保守的の國民である共產主義者に對して其の裕資を融通することを惜んだ、之れによつて露西亞大陸の經濟的開發は更に又一頓挫を來すのであらう。

濱口藏相の財政整理

行財政の根本的整理緊縮を行はねばならぬといふことは、憲政會が在野當時多年主張し來つた所であつた。從てたとひ政友革新の聯立內閣であるとはいへ、一旦政權を握つた以上、殊に在野當時衆議院第一の財政通として、每期議會・大藏大臣の財政演說に對する劈頭第一の質問者として、其の得意の雄辯を揮つた濱口雄幸氏が藏相の印綬を帶びた以上は、憲政會が天下の公黨たる體面の上からも又濱口雄幸氏が公人としての責任の上からも

どうしても行政財政の一大整理をやらねばならぬ關係に在つた。故に濱口雄幸氏は去る七月の特別議會に於て大正十四年度の豫算に就いては一大整理緊縮を行ふべきことを明確に聲明した、而して議會閉會後直に新に大藏省に迎へられた早速政務次官、三木參與官、田新事務次官　河田新主計局長等を督勵して財政整理案の決定に努力した。

一方江木內閣書記官長は內閣內に行政整理に關する委員會を設けて、自己及塚本法制局長官其他內閣書記官法制局參事官等を督勵して、主として制度法規の整理緊縮に關する立案に從事した。而して後に至つて大藏省側の財政整理委員會と內閣側の行政整理委員會とは聯合會議を開いて一の行政財政整理案を確定し、之を閣議に提出するに至つた。

此の行政財政整理案が如何なるものであつたかは、世間に發表せられないから、之を知るに由ないが、その閣議に提出せらるゝに及んで政友會及革新俱樂部出身大臣並に陸海軍大臣から激烈な反對論が起つて、議論紛糾、遂に新聞紙は濱口藏相の辭職說さへも傳ふるに至つた。吾曹は此の風評を耳にして日本の財政の爲に濱口藏相の如き眞摯なる政治家の閣外に去ることを頗る憂慮としたが、幸にして濱口藏相の讓步に依つて他の閣員の主張が或る程度迄認容せられ、遂に一億五千百五十一萬餘圓と云ふ大正十四年度一般會計歲出整理額が決定公表せらるゝに至つた。

以上は今回の財政整理の經過の大要であつたが、其の結果たる一億五千萬圓を見て吾曹は其の整理額の餘りに少きを感ぜずには居られない。況んや其の一億五千萬圓の中八千六百九十八萬圓は繰延額であつて純粹の整理額即削減額は六千四百五十二萬圓に過ぎないに於てをや。嘗て加藤友三郞內閣の藏相市來乙彥氏（現日本銀行總裁）は一億九千五百萬圓の財政整理を行つた、尤も其の內一億三千萬圓は華盛頓會議の結果當然削減しなければならぬ金額であつたから、純粹の整理額は六千五百萬圓で、其の中には繰延額も含まれて居つたのであるが、しかし兎も角も金額は一億九千五百萬圓であつた。然るに今回の整理額は之に及ばざること四千萬圓である。成程濱口藏相の云ふ如く今回の財政整理は前數回の財政整理の後を承け殊に大正十一年市來藏相の財政整理後未だ幾干もないのであるから、特に整理に困難を感ずる次第ではあらうけれども、市來藏相の如く聲を大にしないで一億九千萬の整理を行つたのと、濱口藏相のやうに在野當時又朝に立つた後も根本的財政整理を絕叫して一億五千萬の整理を行つたのとを比較すると、聊か物足りない感じがするのである。

然し乍ら翻つて考へて見ると、濱口藏相は此の一億五千萬といふ金額に滿足して居るであらうかどうであらうか、吾曹は直ちに無論滿足して居らないと斷言することが出來る。即一億五千萬は濱口藏相の滿足しない金額である、其の滿足しない金額に落ち付いたのは何故であるか、それは閣內の圓滿を保持する爲であつたに違ない。玆に至つて吾曹は何故に高橋、橫田、犬養、宇垣財部の諸相が濱口藏相の原案に反對したであらうかといふことを考察しなければならない。

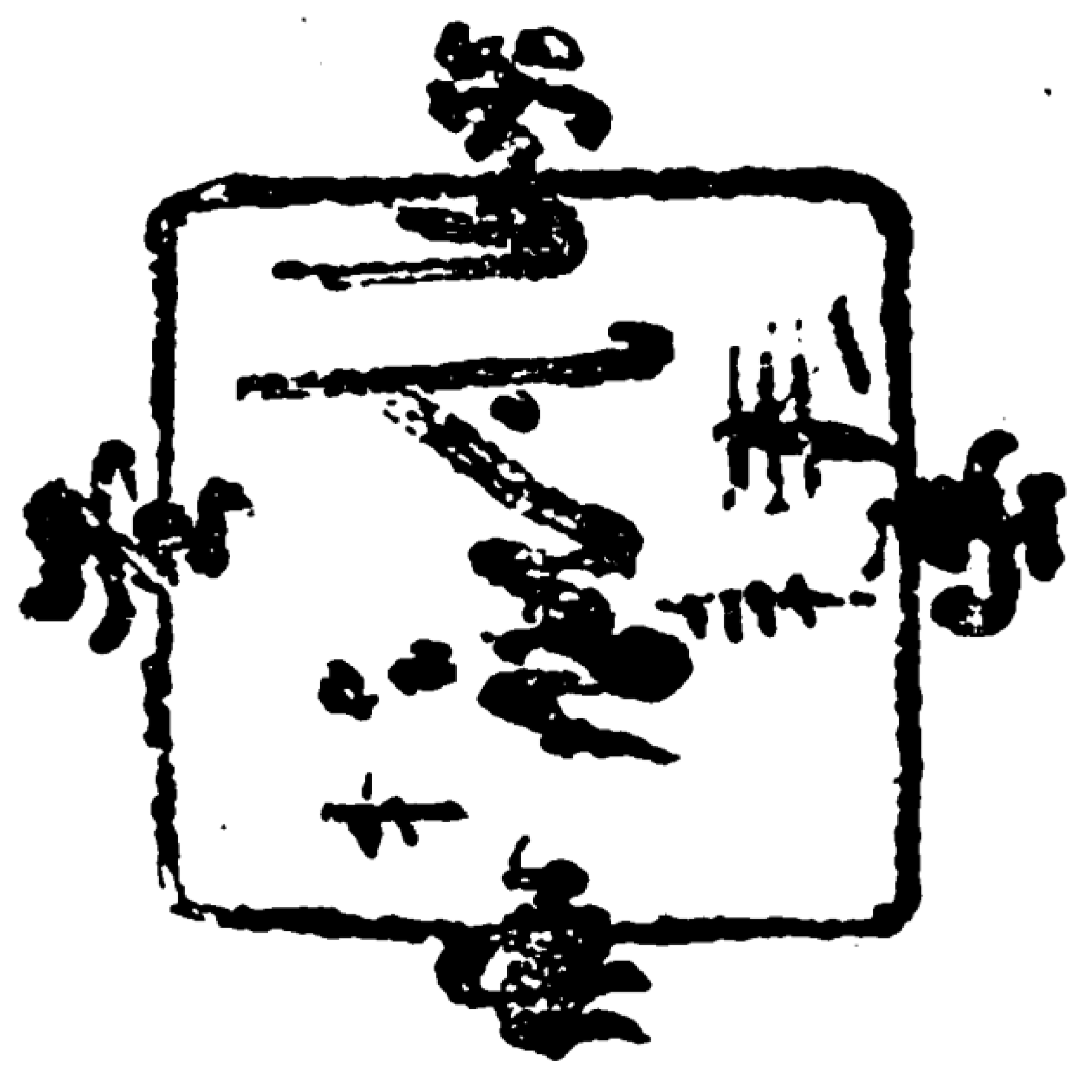
道路或は傳へて云ふ。濱口雄幸氏は至誠ある政治家として眞摯なる人格者として敵も味方も推服して措かない人である。然し乍ら江木翼氏に至つては其の頭腦明晰にして極めて敏腕な事務家であることは何人も之を認め、貴族院議員として其の精細緻密なる研究を資料として閣僚に質問を試るときには、實に天馬空を行くの慨が在つて、貴族院中第一人者を以て目せらるけれども、其の政治家として人材を包擁する德望に至つては未た濱口氏

に及ばざること遠きものがある。今回の財政行政整理の原案は適々濱口江木兩氏の立案であつた故に前述のやうな閣僚の反對に逢つた、若し濱口氏一人の案であつたならば、左迄の反對を受けなかつたであらうと。或は又いふ今回の財政行政整理原案は憲政會出身者のみの作つたものであつたから、政友革新兩派出の大臣の激烈な反對を買つた若し始から濱口藏相の外に横田法相犬養逓相等を加へて原案を作つたならば原案を貫徹することが容『であつたであらうと。此等の諸説は一應尤と聞える節があるけれども、苟くも一國の閣臣の重任にある政治家が單に江木書記官長に對する反感から根本的行政財政整理に反對したとは考へられないし、又犬養横田兩相を參加せしめて原案を作つても、二億以上の整理額を捻出することが出來たであらうとも考へられぬ。何となれば由來政友會は積極主義を標榜して立つて居り、治水港灣鐵道等の爲に國費を投ずることは國利民福の上から必要缺くべからざるものと考へて居るからである。況んや今回の整理金額の一億五千萬に減少せられたのは陸海軍殊に海軍の整理額の少額なることが重大なる原因の一をなして居るに於てをや。即ち海軍省の整理額は千七百九十五萬餘圓であつて、之を陸軍の三千百五十七萬餘圓に比べると半額を超えること幾干もない。殊に之を大正十三年度の實行豫算額に對照すると、陸軍は經常部一億八千百萬圓に對し千九百四十四萬即一割以上の整理であるに反し、海軍に經常部一億二千六百萬圓に對し僅に九百四十九萬圓の整理に過ぎない。臨時部に至つては殊に甚しく、陸軍は二千三百四十萬圓に對し半額以上の千三百十三萬圓を整理して居るに反し、海軍は一億一千八百萬圓に對し僅かに八百四十五萬圓の整理額を出して居る。經常部臨時部を通計すると陸軍は二億四百四十九　圓に對し三千百萬を整理し海軍は二億四千四百七十七萬圓に對し僅に千七百九十五萬圓を整理して居る。故に横田犬養兩氏が濱口藏相と共に立案者となつて、二億以上の整理案を立てゝも、我邦の歳計十六億中約四億五千萬は陸海軍費であるから、陸海兩相の同意がなければ、之を貫徹することが出來なかつたに違ない、而して宇垣財部兩相は立案者が憲政會出身者であるか、三派聯合の立案であるかに因つて主張を異にしないことは確實であるから、之を要するに今回の行政財政整理が一億五千萬の程度に止つたのは、藏相以外の諸閣僚が此の以上の整ゝを爲すの必要なしと認めたに基因するものと謂はねばならぬ　玆　於て吾曹は財政行政根本的整理を爲す必要何處にありやといふ根本問題に論及しなければならぬ。

新聞紙の傳ふる所に依れば、閣議に於て財政行政整理の根本義に就いて、議論があつたといふことである。濱口藏相が議會其の他公開の席上に於て從來言明した所に依ると、藏相が根本的整理を必要とする理由は、日本の經濟界が大正九年の恐慌に依つて大なる打撃を受けたにも係らず　未だ根本的の整理を遂げて居らぬ。之が整理するには先づ政府と民間とが共に大に消費を節約せねばならぬ、而して政府は最大の消費者であるから最根本的に消費を節約せねばならぬ。それには行政財政の根本的整理緊縮を必要とするといふのであるらしい、又他の理由は此の際財政の整理を行はねば大正十四年度に於ては三億數千萬圓の國債を發行せねばならぬ。而して斯の如き巨額の國債を發行するときは、勢ひ其の一部は一般金融市場に於て募集せねばならぬことになつて、民間經濟を壓迫するが故に不可であるといふのであるらしい。

吾曹は行政財政整理の根本義に就いて今少し深刻な説明を聽き度いと思ふ、所謂經濟界

の根本的整理を行ふ必要ありと云ひ、或は民間の經濟界を壓迫するのは不可であるといふ其の根本的理由を聽き度い。更に一歩を進めて言へば一國政治の目的は何處にあるか、領土を擴張することであるか、資本家を利益することであるか、内閣の生命を一日も長からしめることであるか。勿論左樣なことではない、吾曹の見る所を以てすれば、政治の目的は矢張ベンサムの所謂最大多數の最大幸福である。勿論現代の社會組織に於て總ての人間が同一樣の生活をすることは出來ないけれども、總ての階級の國民をして其の貧富の程度に應じて滿足せる生活を營ましむることが政治の最終の目的であると信ずる。領土の擴張も海外利權の獲得も輸出貿易の伸張も總て此の點より出發してこそ始めて意義があるのである。然らば今回の行政整理も亦此の點から出發せねばならぬ。從つて行政財政の整理が物價の低落又は金利の降下を促す原因たるに於ては國民生活に對して實に意義のあることである。而して日本の今日の物價が高過ぎると認むるや否やに就いては濱口藏相其他現内閣諸公より未だ責任ある言明を聽かないけれども、吾曹は日本の物價を今日より更に低落せしめる必要ありと信ずる、それは七千萬同胞の生活を更に一層安易ならしめる所以であると信ずる。金利の降下も亦略同樣の意味に於て國民生活の爲に必要であると信ずる。從て政府が消費を節約することは物價を低落せしめる所以であり、國債の公募を差控えることが金利の降下を促す所以である故に行政財政の整理を必要とするといふ主張であるならば吾曹は濱口藏相の整理論に贊成するに躊躇しない、然し既に最大多數の最大幸福を出發點として居る以上は、行政財政整理に因つて國民の生活上に及ぼす利益と不利益とは愼重に比較研究したければならぬ。此の點に於て河川港灣の改修鐵道の建設の如き問題は大に愼重に考慮する必要がある。斯樣に考へて來ると閣議に於ける濱口藏相の讓歩は濱口藏相の面目の爲には聊氣の毒な感があるけれども七千萬同胞の幸福の爲には必しも悲むべき事柄ではないやうに思はれる、蓋行政財政の整理は終極の目的ではなくして、國民の生活を幸福ならしめんとする手段である、吾曹は一部の政黨者流の說くが如く整理の爲の整理には決して贊成することが出來ないからである。（一三、一〇、三〇）



名園の落水

室生犀星

曇つた十月の或る日、

いつか見て置きたいと思つてゐた前田の家老であつた本多さんの庭を見に行つた。誰かに紹介をして貰ふつもりだつたが、それよりも直接にお庭拝見といふふうに名刺を通じた。五萬石を領してゐた本多家はいまは男爵である。暫く取次ぎが出て來て大變荒れて居りますが御案内いたしませうと言つて先きに立つてくれた。

門番の塀のところに玄徳杵が二本と樫の六尺棒が、埃まみれにむかしのまゝに立てかけてあつた。近ごろ經費を縮め手入れをしないので荒れてゐるからと取次ぎが言つた。奥庭へ廻ると雨つづきの、たつぷりした池の水が曇つた明るみをうかべ、不意にわたしどもが庭へ出たのに驚いたのか、灰いろをした大きな鳥が古い椎の木の茂みからふうはりと翅つて、池の上をななめに淡々しく掠めた。五位鷺だなと思つた。池の向ふは松と椎と楓とで暗くじめじめと繁つてゐた。老俳友の南圃さんが何日か金澤の庭のなかできじの啼くのは、本多さんのお庭だけだ一度見てをきたまへと言つたことを思ひ出した。そのきじの啼くだけをことさらにわたしにすいせんした南圃さんの心は、すぐわたしに入りかれたが、このごろになつて古色蒼然の悠大を知つたわたしは、南圃さんのその心もちを意得して成程なあ南圃さんくらゐの

[illegible]になれば古色蒼然の悠大をひとりでに解るのだと思つた。兼六公園にさへきじの聲は聞かれなかつた。しかも本多家はいま此の屋敷に住んでゐないので、池の捌け口のさらさら流れるあたりにも、芝生や苔のある樹の下にも落葉だらけであつた。右手寄りの池の椎の暗みを土塀へ通じて藪があつた。その青い竹の肌だけが仄白い土塀をうしろにして、葉や枝を椎の茂みに護はれてゐる姿が風雅だつた。

「あの藪から池のうしろへ廻れますか?」

「このとほり打つちやつてありますから、それに路でたいへんでせう。」

それでもわたしは藪の中の小徑から廻つて見ることにした。池が曲つた楓のかげに十一重の岡笠の石塔があつた。なる彫らしいのが十一重の明暗を塔ごとに苔ぐろくしきつて、寂かに露をあびて立つた姿が落着いてよかつた。あたりの小徑は見分けがたいほどの落葉に埋れて、じめじめと柔らかくわたしの下駄を浮かした。

老ひた樹が多く奥の方は暗かつたので、池の前へ取つてかへし、三太夫に池の正面の棟の高い屋敷を見せて貰ふことにした。前田から本多家へ二度も嫁入りしたことがあつたので、この屋敷をそつくり嫁入道具として持つて来たのであると言つて、百疊ばかりの部屋を見て廻つた。床の間のある部屋には御簾の釘跡があり、閾の中壺に楔を飲み込んであつた。凡てが總檜の建物で中々美事であつた。わけてふしぎなのは、襖の手かけに五分四方くらゐの穴があいてゐて、鍵のやうにかつちりと開いたり塞いだりできる覗きがあつた。むかしはその穴から次の間に立聞きなどしてゐはせぬかといふ用意のために、それを拵へたものらしかつた。十六瓣の菊の紋章がその取つ手の中に、小さく塗金色に鍍ばみてあつた。

「これが厠でございます。」

間は二疊敷でむかしは疊が敷いてあつたさうだが今は板じきで、次の間がついてゐる、――壺には蓋がしてあつて止り木のやうな取手がついてあつた。三尺障子が二枚、うす曇りの明るみを靜かにはらんでゐる。――わたしは當然想像すべきことをわたしの頭から追ひ拂ふことにした。

この部屋からは先刻の庭が一望される……奥ほど大木の茂りを見せ、前ひろがりに明るみを引き樹を低くして池を中心にした庭は、兼六公園のところどころにあるかなめに似てゐた。それゆゑ同じ庭つくりの系統をひいてゐることが分つた。流れには土に食はれた石にもいゝ姿をしてゐるのがあつたが、大したものがなかつた。成程古い、しかもその古さは荒れてゐる、荒れかゝつてゐるのは人工を加へないで、自然に荒れてゐるのが氣もちよいと思つた。

本多邸を出て兼六公園へ行つて見る氣がした。いつも東京からの客の案内役をしてゐて一人でゆつくり行つたことがないからである。翠り瀧の洲にある夕顔亭に李白の臥像を彫り出した石臼があつた。水はくされてゐて蟲が浮いてゐる。お取り止めの石ださうであるが、蒼黑い肌をしてゐて一丈くらゐ廻りのある大椎の立木のかげにあつた。

瀧壺のすぐわきにお亭があつた。お亭の下は池の水が瀧の餘勢で弛く動いてゐる。お茶をのむためにむしろ冷爽すぎるお亭の中へ這入つて見た。十年前に一度這入つたらいまが初めてゞある。池の中洲に海底石の箱塔が葉を落した枝垂櫻を挿んで立つてゐる。それを見ながら横になつてゐると、瀧の音とは違ふ落ち水のしたゝりがお亭の入口の方でした。小さい崖になつてゐて丸胴の埋め石へ苔からしぼられた清水が垂れる些やかな音だ。そこは四尺とない下駄をぬぐところである。よく見ると白い寂しい茸が五六本生えてゐて、うすぐもりの日かげが何時の間にか薄いひかりとなり、

玻璃子のあたまを染めてゐる。これはいゝなと思ひ、わたしは瀧壺の方へ向けたからだを落水の方へゐなほした。そのとき一丈三尺の龜塔の頂上の一室に何だか小さい石像のほどけさんが坐つてゐるやうな氣がして、また首をねぢむけたが、そんなものがゐる筈がない。寂然と四方開いてゐて、松の緑を透した空明りが見えた。秋おそく落ち水聽くや心冴ゆ……でたらめを一句つくり茶をのんで、けふは實に悠々たる日がらだなと思つた。

瀧の落ち口のお亭の前に通つたときに、この春芥川君が來て泊つたお亭を覗いてみたが、秋深く楓葉が散らばり二三本の梓竹の青い色を見られる格子戸に、人のけはひすらしなかつた。亭々たる松の樹にある飼箱に群れる小鳥の聲がするばかりであつた。このお亭にこのごろ泊つたら寒からうと思つた。

曲水のほとりは水も美しくながれ、玉石の敷かれた間を尋んで上る目高が、群れて或ひは雁行してゐた。わたしはむかし歌合せなどの催しのあつたらしい此の曲水が好きだつた。しやがんで猗狗たる石の姿や、その石をつゝんでゐるつゝじを眺めてゐるうち、石のしたに敷島のからが流れてゐるのを悲しく見た。が、つつじの拔き枝や間物づくりの姿のくづれたのが、氣になつて何故手入れをしないのかと考へた。そしてこれが自分の庭だとしたら、終日あほらしい顏をして此庭に佇つて、水の動いて流れるのに倦きることはないだらう。水の流れるのは淺いほど美しく表情も複雜であどけなく思はれるが、深い水は何か暗澹として搔き曇る、心におしつける重りかかるものがあつた。それにくらべると曲水は古いがその感情は新鮮である。手を入れて掬ひたいやうだつた。石と石との間に決して同じい姿をしない水のながれに、いい着物のひだなどにみる媚びた美しさがあつた。古い言葉で飛んでもない思ひつきだが、水はいまさら美しいと思つた。

卯辰山の見える廣場のベンチに近在のものらしい小娘と老母とが、鹽せんべいを嚙つてゐる。そのあたりに紙屑や吸

がらなどが散らばり、芝は剥げ落ちそこだけ新開地のやうな荒れてゐる風致であつた。それも小汚なく東京くさく荒れてゐた。――そこから霞ケ池への道路、だだつ廣い空地の芝草もあとかたもなくなつてゐた。しかもその荒れた有さまを取り止めやうとしてゐない、名園を守るに市役所や縣廳のともがらに委せてをけないやうな氣がしたが、しかしわたくしはそれを嘆くだけである。わたしの役目を嘆くより外にはない。――霞ケ池は老松にかこまれ、蒼ぐろく鱗波を播き立てながら曇天の下にあつた。だが五位鷺やきじの啼く聲はなかつた。あるは水すましが水の面をすべるくらゐである。わたしだちの子供のときよりか松も大きくなつたらうが、景色はこのあたりが一番古びて行つてゐるやうに思はれた。龍のひげが一さう青々と池のまはりを幾段にも縁取つてゐる。その藍いろの實を拾ふために子供が二三人群れてゐる外、池のまはりには人がゐなかつた。松と苔の公園は至るところに荒廢の跡が著しかつた。

池に面した傘山といふのは、もう危岩怪石の跡はあつても、苔はむしられ石は亂れた姿のままであつた。そのまわりの松や楓の大木、その木の間を透く池の面のどんよりした冷たさはよかつた。幼時の折、何の仕草もなくこの山の頂にある傘の形をした友待風なお亭で、ぐるぐる廻る傘を廻したものであつたが、あたりの皮のむけた赤土を見ただけでやはり荒れてゐると思つた。

そこを下りて噴水のある小さい流れへ出たが、その小流れはつつじの茂りで隠されて了つて、音だけが配石の間から潺乎として聞えた。或ひは少しの音すらないところがあつたりした。石は苔でつつまれ指さきでも掻けぬほどになつてゐた。――もとの翠瀧のほとりへ出て、夕顔亭の落水を餘處目に見ながら公園の坂を下りかけたが、

「あの落水は公園で一番いいところぢやないか。」

さう思ふと、名園を背景にしたせいであらうが、あんな下らない落水が自分の心を惹くのも、おのづから自分にふさはしい好きなところを撰んだのだと思つた。しかもそれは古くからあるのでなく、恐らく夕顔亭の主人が、こさへたものであらうと思つた。わたしはもう一度行つて其處の小さい崖と、落水の音を聞いた。

春秋

島木赤彦

大正十三年暮春平福百穗畫伯老母に隨ひて信濃善光寺甲斐身延山に詣づる途次わが郷を訪ふことあり

母を奉じて信濃の寺に來ましつる命尊く思ほゆるかも

老ゆるもの子に從ひて尊けれ信濃の寺に遠く來ませり

御佛のみ庭に花の散るひまも母に隨ひて心惜しまむ

行く春の光惜しけれ年老いし母に隨ひてまた遊ばめや

母堂と畫伯とを誘なひて諏訪湖に遊ぶ

老母は尊くいまし給ひけれ默(もだ)に安らかに君がまに／＼

春雨は晴れても寒し老母を舟にのらしめて下思ふらむ

諏訪上社に詣づ

先に歩み後より歩みかにかくに老いたる母に心盡きざらむ

木曾の秋

谷寒み紅葉すがれし岩が根に色深みたる龍膽(りんだう)の花

岩が根に早旦(あした)ありける霜とけて紫深しりんだうの花

霜とけてぬれたる岩の光寒し根をからみ咲くりんだうの花

りんだうの花の紫深くなりて朝な／＼に霜おく岩むら

岩が根に小指(をゆび)もて引く龍膽は根さへもろくて土をこぼせり

馬場辰猪自傳

馬場孤蝶

外遊

（一）

千八百七十年七月、辰猪は太平洋郵便船（パシフイツク・メエル）に乗つて、サンフランシスコに向けて、横濱を發した。日本を出る時に、一行はラウダアと呼ばるゝ英人に托された。ラウダア氏は歸國するのであつたので、一行の世話と共に、金錢も皆同氏に托されて、費用は一切同氏の手から賄ふことになつてゐたのであるが、同氏に托された金が何ういふやうに支拂はれたのであるか、誰も知つてゐる者はなかつた。二十八日經てから、一行はサンフランシスコへ着したのであるが、普佛戰爭、即ち佛國皇帝が獨逸に向つて宣戰したといふ報を聞いたのは その航海中でのことであつた。一行は鐵道に依つて、紐育へと向かつた。一行は汽車に乗つての旅は生れてからそれが初めてゞあつたのだが、一同は汽車なるものが、それまでに想像した程には速いものでないことを知つたのである。一行はその途中、ソオルト・レエク・シテイとか、オーバアンとか、ナイヤガラの瀧とか、アルバニイとかいふところで、泊まつた。紐育では六日滯在して、博物館その他の見物すべき場所を觀て廻はつた。一同が街々の有樣や、旅館の內部などを見て、その宏壯なのに驚いたことは、こゝに言ふに及ばぬことであらう。

十一日經てから、一行は倫敦へ着いて、チエーリング・クロツス・ホテルに泊まつた。其所へ牧師ダニエル氏がやつて來て、一行をラングレエといふ小さい村へつれて行くことになつた。ダニエル氏はその邊の教區牧師であつたのである。ところが、ラングレエの村での一行の居るべき部屋の準備がまだ出來てゐ

ないので、それが出來るまでといふので、一同はチペンハムへ行つた。やがて、部屋の準備もできたので、若い辰猪は、チペンハムからは三哩位なところに在るのであつたラングレエへ行つて、英語を學び始めた。一行の他の日本人等は、日本文に於ても英文に於てもまるで無學な者どもであつたので、それ等の者どもを教へる仕事を辰猪が引受けなければならなくなつた。辰猪はその仕事が最もいやなものであることを知つた。進歩の見込み更にない者どもを教へる仕事であつたのだから、實に張り合ひのないものであつたのだ。けれども、それ等四人の學生を英國へ留學させた板垣はそれ等の者どもがやがては大人物になるものと思つてゐたのであつて、その後英國から日本へ歸つた人々から、それ等の學生が學才その他何れの點に於ても劣等な者どもであるといふ報告を聞いても、不適任な者どもを留學生に選んだことの自己の過誤を覺ることができなかつたのだ。

それ等の四人のうちで、最も愚鈍であつた眞邊と岡澤の二人が、政治學即ち直譯すれば政治の科學を學ぶことを命ぜられてゐたのであるが、その政治科學なるものは一體何んなものであるのか誰も知つてゐる者はなかつたことをこゝに附言して置いてよからうと思ふ。その外の少つと若い二人の青年は海軍の教育を受けることになつてゐた。それ等の者どものその後の行動によつて見る時は、彼等は不幸にも最も不適任なる位置に向つて選ばれたものであつたことが明になつたのだ。彼等は各自の腦力に取つては高尚過ぎ六づかし過ぎる教育を受けるために、歐洲へなど留學させられなかつたら、日本で幸福な生涯を送くることができて、甚だ宜しいのであつたと云つたところで、決して彼等の能力に對しての酷評にはなるまいと思ふ。それ等の者どもを歐洲へ留學させた過ちは、その責任者たる板垣に全く歸すべきものであるのだ。

けれども、その當時にあつては、眞邊は自分が大人物であると思ひ、又自分は何事でも知らないことはないと自負してゐた。彼は何時も誰かと喧嘩して居る、何時も極めて馬鹿な事を云つて居るのであつた。さういふ風で、一同はラングレエに六ケ月ゐて、ウイルツのリオーミンスタアといふ小さい町へ移つたが、後になつて共所へ東伏見宮が來られたのであつた。辰猪は他の者どもよりずつと英語が進んでゐたので、他の教師に就くことができたのであつた。即ち、ウオーミンスタアのグラマア・スタールへ行つて、幾何、地理、歴史等を學ぶことができたのであつた。一年經つと、即ちリオーミンスタアに六ケ月ゐてからのことなのだが、一同は倫敦へ行くことを許るされた。皆それ〴〵專門の事を共所で學ぶことになつたのだ。

辰猪はガワアー・スツリイト一〇三のタウ、パアー氏のところに宿を取つて、倫敦のユニヴアーシテイ・カレエヂで物理學の級へ出席した。此の頃ほひに、岩倉の一行が倫敦へ來て、辰猪は英語の知識が進んでゐるといふので、法律學を學ぶことを命ぜられた。それで、彼はテンプルやロオヤアス・チエンバアへ通つて、羅馬法、實産法その他を讀みはじめた。彼は英國法の組織や、法律家を教育する方法などを見て、その根底の深いことに驚かされた。

此の時分に、辰猪は米國で發行された日本人の教育を論じた書を見た。米國駐劄公使の森が『あらゆる理由から見て廢すべきもの』だと云つて、自國の語を排斥したのであつた。若き辰猪は日本語文典を公刊して森氏を攻撃しようと決心した。辰猪はロオヤアス・チエンバアからハアリントン・スクエアー二〇の自分の宿へ歸ると、毎晩一頁づゝ日本語文典を書いた。

辰猪が社會學促進會の會合に出席して、ヴアーノン・ハアコオト、フイッツ・ジエームス・ステイーヴン、サア・エドワアド・タリイジイ、ヘステイング、ロオド・ナピアー、ジヨオゼフ・ブラソン、下院議員コオルマン氏、テイ・ブラッセ エなどの多くの英國の名士の演説を聞いたのも、此の頃ほひのことである。辰猪は言論の自由は國民の生活の諸方面に非常な利澤をもたらすものなることを思ひ、その會の如きものを日本學生間にも設けることが得策であると考へたのであつた。

（二）

此の時分、倫敦には日本の學生が百人程ゐたので、辰猪は街へ出る度毎、誰か知らん同國人に行きあはないことはなかつた。二人の日本人が倫敦の街で出會つたとするならば、互に親情を以て手を握り合ひ、互の身上その他を尋ね合うであらうと誰でも想像するであらうと思ふ。ところが、實際の事實は吾々の豫期とは全く反對のものであつた。彼等は互に何處の國の者だか知らなかつたかのやうに通り過ぎてしまうのであつた。それは、それ等の者どもの腦裡には大抵封建時代の強い感情がまだ十分に存るがためであつた。さういふ風で、彼等はまださまざまな大名に支配されてゐるさま〴〵なる國の侍であつたのだ。少くとも彼等の心の狹い偏見では、彼等は自分と同じ藩に屬してゐる者でない限りは、何の留學生をも自分等の敵として取り扱はなければならんものだと思つてゐるのであつたのだ。英國では封建制度は五百年程以前に廢滅してしまつたのに、日本人がその英國で封建制度を立てようといふのだから、唯だ驚くより外はなかつたのだ。或る土佐の學生などは、薩摩の學た

生等を見ると腹が立つてしかたがないと、何時も云つてゐるのであつた。辰猪が倫敦へ勉學の爲めに出て來た時の、その都での日本學生の有様といふのは、さういふ風のものであつた。

學生全般の行爲の馬鹿らしさに、辰猪の氣が着いたのは、寧ろ當然のことであつた。けれども、日本の留學生の一般の狀態を改善しようと試みるものは誰もなかつた。辰猪は他の人々よりもずつと若くもあり、倫敦へ來てからの年數も他の人々よりはずつと少なかつたけれども、辰猪はそれ等の狹量な無智な學生等を合同させて、一つの會を起さうと試みたのであつた。最初の會合はゴルデン・クロッス・ホテルで開かれ、萬里氏(萬里小路通房)が議長席に就き、辰猪が會の目的を說明した。これが辰猪が日本語でした最初の演說であつた。會長即ちプレシデントの選擧に就て議論が起つた。一方の人々はプレシデントはこれを日本語に譯すれば大統領であるのだから、そんなエライ名稱をば此んな小さい會合で用ゐるべきではないと主張した。集會はそのまゝで流會した。その後になつても、その問題で學生間には度々論議があつたのであるが、それでも到頭、日本學生會といふ名稱の會が立てられて、辰猪はその會合で、日本語に關する講演をなし、日本語文典を會衆に示めしたのであるが、その書はその時丁度公刊して、ホオトン卿に公獻したものであつたのだ。これは千八百七十三年の九月のことであつた。

此の少し前に、ノオウイッチで社會學協會の大會―年總會と云つてゐた―が開かれたのであるが、辰猪は其處で會長ホオトン卿に紹介された。辰猪がその著書を同卿に公獻したのは、それが爲めであつたのだ。辰猪はノオウイッチに三週間滯在したのだが、その間に多くの人々と知り合ひになつた。そのなかで、彼はミッス・ハリエット・マルティノオの家で、その女主人に紹介された。マルティノオ孃は極く靜な老婦人であつた。辰猪が茶の後で、歸らうとすると、孃は『おやすみなさい』と云つた、孃が口をきいたのは唯それだけであつた。

此の時分、政治界一般に大に物議が起つてゐて、グラッドストオン內閣は可なり不人望であつて、その施政に對して多くの嘲笑が投げかけられた。『幸福な國』といふ劇では、俳優がグラッドストオン氏、ロバアト・ロオその他の人々の容貌、擧作などを模して、舞台へ現はれるのであつた。

ディスレエリ氏は、下院の內外で數回演說した。辰猪は度々下院の討議を傍聽に行つたが、それによつて、彼は代議政體の利益を觀察する機會を得たのであつた。グラッドストオン內閣は愛蘭大學法案で三票の多數で敗られてしまつた。總選擧が千八百七十四年に行はれた。ディスレエリ氏が總理大臣になつ

て、下院で數回面白い演説をした。

此の時分、ジョン・スチユアート・ミルが死んだ。新聞は皆彼の才能のことを書いた。スペンサア、ホオセツトその他の人々がミルの學問や行狀などに就いて書いた。此れが辰猪に深い印象を與へた。人に取つて死後へその著作を遺して行くのは偉大なることであると、辰猪は思つたのだ。人の命は何れ程短かからうとも、その人の爲したるところのものは後世の記憶に永く遺るであらう。辰猪はジョン・スチユアート・ミルが社會の偏見に對して直截なる忌憚なき攻擊を加へたその態度に大に敬服したのであつた。

歸朝

日本政府が歐洲へ留學させてゐた學生を悉く呼び返しだしたのは、大凡此頃ほひであつた。それ故に、辰猪はライ・イー・ムウンといふ私人所有船に乘つて歸朝の途に就いたが、日本に就くまでに八十日かゝつた。歸朝してみると、何も彼もが變つてゐた。辰猪が英國に向けて日本を出て以來僅に五六年たつてゐるに過ぎなかつたのであるが、事物の變り方は實に驚くべきものがあつた。前には、自分は勿論、あらゆる侍が兩刀をさして居り、東京の街も將軍時代と全く同じであつた。ところが、今は兩刀などを帶して居る者は誰もなく、重なる街衢の家々は煉瓦造りになつてゐて、街は瓦斯で照明されてゐるのであつた。鐵道が東京横濱間に開通してゐた。

日本の政治狀態はあまり面白くはなかつた。台灣問題から起つた支那問題があつたが、これは何うにか大久保によつて解決された。財政上の難關が此の時分からそろ／＼その萌芽を見せだしてゐた。

一部の人々、就中板垣が下院を開設する爲めの民間運動のやうなものを起し、その問題には大反對であつた政府へ意見書を送つた。辰猪は丁度その時分に歸朝したので、此の黨派に加はつて、此の運動の主唱者等の勢力と庇護の下で役員になるやうにと勸められた。けれども、辰猪は此の運動に與かつてゐる人々が無條件に信頼せられ得る人々ではないことゝ、さういふ運動に取つてはまだ時が熟してゐないことゝを、直ちに看破した。その後の實驗によるといふと、辰猪のその時の考は間違つてゐなかつたことが分るのだ。それ故に、辰猪はもう一度英國へ留學し、英國法の研究に身を委ねようと決心した。華族山内家が、何分かの金を支出して、辰猪を英國に留學させてくれることになつた。此の時分、共存同衆が設立されたのだが、辰猪

はその會での講演を頼まれた。辰猪は日本婦人の状態に關する論文を讀んで、それがその倶樂部の會報中へ表はれた。

辰猪の歸朝してゐたのは三ケ月間であつたのだが、彼はその間に東海道を經て、その生國土佐へ歸つて、教育するために妹と弟とを東京へつれて來た。これは、辰猪の家政が留守の間に非常に亂脈に陷つて、不動産その他の總ての物が皆賣り拂はれてゐたからであつたのだ。

再度の外遊

辰猪は千八百七十五年の三月に、佛國郵便船で、もう一度歐洲へ向け出發し、航海に五十日を費して英國に達した。彼は又英國法の研究を始めて、毎日ロオヤァス・チェンバァへ通つたのであるが、さういふ勉學中に、二つの小冊子を書いた。一つは『日本に在る英人——日本人が彼等に就て何う思つてゐたか、又今は何う思つてゐるか』といふのと、今一つは『日本と英國との條約』といふのであつた。辰猪がこれ等の小冊子を書いたのは、千八百七十五年から同じく六年に亘つてのことであつた。

此の留學の間、辰猪は巴里へ三度行つて、佛蘭西の政況を觀察した。彼はヴェルサイユの下院へ傍聽に行つて、討議の實況と、議場の混亂とを見た。即ち、その模樣は、各黨互に議員の掛論を妨げ合つて、議長がそれを靜める爲に鈴を鳴らすといふ體たらくであつた。これは共和黨が那翁黨に對して苦鬪して居る時分のことであつたのだ。後者の方は、大頭領マァシャル・マクマホンを自黨から選擧してゐるのであつた。ガンベッタは、後になつて達したやうな勢力のある位置にはまだその時には達してゐなかつた、勿論その時分でも知名の士には相違なかつたのだが、佛蘭西の上流社會ではまだ彼に對しては大して尊敬を拂つてはゐなかつたのだ。けれども、ガンベッタの勢力は急速に強く有力になりつゝあつた。彼は間もなく、佛蘭西共和國の大頭領攻擊の『服從か、さらずば辭職か』といふあの名高い演説をしたのであるが、此の演説は那翁黨に大打擊を與へたのである。辰猪はそれ等の事件を皆新聞で讀んで、名たゝる共和黨の領袖ガンベッタの勇敢不撓の行動に大に嘆服した。

辰猪は（巴里で）兼ねて書物のなかで讀んだ歷史的由來のある多くの場所をば觀て廻はつたのであるが、殊にプラァス・コンコルドなどは彼をして佛蘭西大革命のことを追想せしめたのであつた。

英國に居る間に、辰猪は古事記を翻譯したが、エドワァド・ク

イラア氏がチエーリング・クロッスの人類學協會で此の題目に就ての論文を讀み、辰猪が一場の演說をした。それから又、ブライトンで開かれた社會學協會の總會では、辰猪は、日本に於ける治外法權と日本國民に及ぼすそれの弊害に就ての演說をしたが、サア・エドワァド・クリイジイ氏がその時の議長であつたので、氏が辰猪の演說に答辯した。

ところで、これは英國に於て政治上の大事件の續々として起つた時代であつた。戰爭が露西亞と土耳古との間に起つた。國民間の利害に關係があつたことは勿論であつたので、朝野兩黨の名たゝる政客等が下院の內外で演說した。實にこれは英國の大政客等がその才能を十分に發揮した時であつた。ディスレエリ氏は此の時に際して、彼の特異の才能を發揮したのだ。彼は、時には、極めて面白い演說を爲して、敵黨の士に可笑しい綽名をつけた、例へば、ロバアト・ロオをば『眞の預言者』などと呼んだのである。けれども、又時には全く默り込んでしまつて、敵黨の議員からの外交政策に關する質問に一言も答へないといふやうなこともあつた。ディスエリ氏は不可解で、不可思議であるといふのでスフィンクスに喩へられたのであつた。グラットストオンはディスレエリ自身が元氣な外交政策と呼んでゐたその外交政策を攻擊する力强き演說を數回した。自由黨の公會が諸所で開かれて、保守黨政府の政策を痛擊する聲が高かつた。グラッドストオンはそれ等の會合へ手書を寄せたり、小冊子を公刊したり、演說をしたりといふ風で、官方政府を攻擊した。辰猪はそれ等の集合へ行つて名たゝる政客等の演說を聽いた。彼は民衆に取つて代議士政體を有することの利益であることを觀察するあらゆる機會を持つたのであつた。

辰猪は英國法の研究の正課を修了したので、專心日本學生會の仕事に盡くすことになつた。その會では度々演說した。東京大學から派遣された新留學生等が着したので、それ等の人々を英國の社交界へ紹介することに就ては可なりの勞を執つた。千八百七十七年の一月に、辰猪は彼と同じ留學者の一人と喧嘩した。その相手の留學生の品性に就ては、その人のそれ以前の及びその後の行爲で、その人が何ういふ人間であつたかといふことは明白に知れるのであるし、又殊にその人はもう既に故人であり、且その死ざまも傷ましいものであつたのであるから、此所には何も云ふ要はないのである。死者に對して寛大であるべきは誰でもの義務である。唯此所で云つて置いて宜からうと思ふのは、眞邊戒作は馬場辰猪が提言した決鬪の申込みを拒絕すべきではなかつたといふことである。眞邊は辰猪に此の滿足を與へる義務が正義上有つたのだ。眞邊が決鬪の申込みに應じなか

つたこととの結果は、双方が心苦しいさん〴〵な面倒な事件に遭遇しことのみであつたのだ。ミドルセックス刑事法庭で審問を受け、處罰猶豫の宣告を受けて後、辰猪は千八百七十八年三月にフオクストンを經て、歸朝の途に上ぼり、佛國郵便船で、五月に横濱に着した。

註ノ一――辰猪の日記が少しばかり殘つてゐる。英語で極く短く用事だけを記したものであつて、單獨には讀み物にはならぬものだと思うけれども、此の自傳などと對照すると、それ〴〵の時代に於ける辰猪の行動が大凡窺はれ得て、僕に取つては甚だ面白いものである。辰猪の再度の洋行中彼の仕事のうちで最も重要なのは、英文での著作であるのだが、『日本に在る英人』といふ小冊子は明治六年の九月十五日に脱稿して、同十七日には英人ハム氏の批正を請うたとある。その外、その時分のところには一寸面白い記入がある。

『二十日（月曜）印刷者より手紙來る五百部印刷すべき旨返事。四磅……』

『ツルウブチア商會（書肆）より手紙來る。曰く小冊子なるもの丶出版は、著者に取りては金錢上の損失、出版者に取りては唯の手數にのみ終はるものなりと。されども尙予は出版せんとす』

十月の一日と二日には校正をした。十五日のところには左の如き記入がある。

『出版者より手紙來る。曰く、ツルブナア氏旅行中故、歸京の上同氏に意見を求めたる上にせんと……』

『二十一日（木曜）出版者に手紙を出す。小冊子の著者は一日本人とせずして、予の名を署すべき旨を云ひやる』

ところで、二十七日にはもう本が出來てゐたものと見へて、左の如くある。

『二十七日（木曜）キング・ヘンリイス・ロオドにて佛語の稽古。友人等へ我小冊子を送くる』

『二十八日（金曜）日本へ向け我小冊子を送くる……』

それから『日英條約論』の方は、明治九年の六月五日のところに左の如くある。

『六月五日（月曜）治外法權及び關稅に關する論文を書かんと思ひ立つ』

『九月二十八日（木曜）「日英條約論」出版、印刷者より送り來る。』

『二十九日（金曜）我小冊子を福澤、萬里、小室に送る』

『十月十日（火曜）ベカンスフイルド、ダアビイ、グラッドス

トォン、フォセット、ブライトに宛て丶送くる』

註ノ二——明治九年から、辰猪の健康は大分衰へかけてゐたらしく、十年の日記の諸所に風を引いたことが書いてある。二月二十六日（月曜）のところには、『文房具舗にて迷ひ犬を見る。犬は飢へ死なんとして居るに主人も困じ果て居るを見たれば、犬を我宿につれ來る』とあり、同二十八日のところには『犬をつれて晩食す。一志九片』とあり、四月九日のところには『犬騒ぐこと甚し、犬をつれて散歩す』とあるのであるが、辰猪がその犬をつれて度々運動に出たことは、日記の諸所に出てゐる。で、夏になると辰猪はブライトンへ行き、年の末近くなると、クロイドンに移つたことなども日記で知り得られる。

日本からの送金も十分でなかつたのであらうし、さればと云つて、日本へ歸つたところで、面白いこともなささうに思はれたので、辰猪は、さま〴〵に思ひ惱んでゐたらしい。四月三十日のところには『誰に對しても不平なり。戰爭に出でたることなければ、土耳古へ行きて戰爭に加はらんかとも思ふ』といふ記事がある。

註の三——眞邊戒作との爭鬪事件といふのは、十一年の一月の五日か六日に眞邊と辰猪とが學問に關することで何か爭論を始めたのであるが、その時の眞邊の擧作が甚だ無禮だといふので、辰猪は七日に眞邊のところへ行つて、決鬪する爲め佛蘭西へ同行を求め、そこで又爭論が激しくなつて、組討ちが始まり、辰猪がナイフで眞邊を刺したのであつた。日記には左の如く書いてある。

『一月七日（月曜）クロイドンへ行き、又戻り來る。不幸なる事件。ノッテイングヒル警察署にて眠る』

『八日（火曜）ハマアスミス警察法廷に於て、裁判官の審問を受く。クラアクンウエルの未決監に送らる。』

『九日（水曜）伊賀（陽太郎）へ手紙を出す。ジョン・オーネエル氏來る。未決監の四十一番』

『十日（木曜）伊賀監獄に予を訪ひ來り、十分間談話す』

『十二日（土曜）入江（註——穂積陳重氏であらう）來り訪ひ、十志を呉れ行く』

『十四日（月曜）南來る（註——南氏名は保、當時領事であつたといふ）』

『十五日（火曜）裁判官の前へ呼び出さる。セエムウル氏予の爲めに辯護す。予は公判まで留置さる丶こと丶なる。南氏によつて保釋となる……』

『二十八日（金曜）再び裁判所に召喚さる。公判に附せらる

ゝことゝ思ふ……ウエストミンスタア・ギルドホオルのミドルセックス・セッションの公判に附せらるゝことゝなる』
『二月四日（月曜）ウエストミンスタア・ギルドホオルに於て、判事の前にて審問さるべし。多分は少くとも一年は禁獄さるゝならんと思ふ……』
『八日（金曜）公判を受く。五十磅の保證金にて、處罰猶豫となる』

それで、辰猪は三月の十六日にフォークストオンから出立して、二十一日に巴里に達し、二十二日の六時二十分にマルセエユに着き、二十五日に船に乘つた。横濱へ着いたのは五月十一日であつた。

註ノ四――國澤新九郎氏は留學中肺患に罹つたので、洋畫を學んで直きに歸朝した。氏は正式に洋畫を學んだ最も古き人の一人であらうと思はれるのだが、洋畫を學ぶことを國澤に主として勸めたのは辰猪であつたといふ説がある。國澤氏は明治七年にはもう歸朝してゐた。

再度の歸朝　共存同衆との關係

辰猪が日本へ着いてから三日經つと、大久保が島田一郎の爲めに暗殺されて、日本の將來の狀態が少し形をなし始めた。辰猪は、自然の法則から次のやうなことを見、いや寧ろ知つたのであつた。日本は總ての文明國民の歷史には表はれてゐるところの危機にだん／＼近づきつゝあるのであつた。即ち、人民が次第に政治上の一要素をなしつゝあつて、政治家等は、その國を治めようとする場合には人民の向背をば考慮のなかへ入れざるを得ないやうになりつゝあつたのだ。辰猪は民衆を教育することを試みることゝ、彼等の輿論に訴へる機關を見附けることゝが必要であると考へた。それ故に、辰猪は、世事の狀態があらゆる點に於て退歩的になりつゝあつたので、共存同衆をして公開の講演を開かしめることにした。共存同衆はさういふ講演會を開いて、それが極めて面白い集團になつた。會員のうちには、此の公開講演には反對する者もあつたのだが、それ等の異議に拘らず、講演の日が極められた。けれども、講演をしようといふ者が誰もなかつたので、辰猪と小野梓が講演をした。辰猪は法律史を講演したのだが、それを十分に解し得る者は聽衆のなかには殆どなかつた位であつた。その集會が成功したので、始め異議を唱へた者のうちにも講演をやつてみたいといふ者ができて來て、暫時はその倶樂部が極めて有力なものになつ

た。さういふ風で、辰猪は公開講演に努力して、社會上、法律上、政治上の諸問題といふが如き諸種の主題に就いて講演したことが合せて五十回に上ぼつた。就中、辰猪は羅馬法に就いて十七回連續の講演をしたのであるが、それはその題目に關する日本での最初の講演であつたのだ。大集會が東京大學や、その頃新築した共存同衆の講演室で催された。これは、日本で社會の進歩を計るのに最も好時機であつて、公開演説が一種の流行になつたのであつた。日本の官吏等も時代精神に感染して、演説をし始めた。けれども、不幸にして、彼等は各自が職を奉じてゐるその政府に反對の演説を何時もしてゐるといふことになつた。大臣も次官も、誰も彼も自分等の政府に反對の意見を述べてゐるのであつた。政府及び政府に忠實な官吏等がこれに驚いたのは、當然過ぎる程當然なことであつた。さういふ狀態の下では、政府の執り得るみちは二つしきやなかつた。即ち、講演に於て不平を公々然と述べるやうな官吏を滿足せしめるまでに、政府とその政策とを改革するか、或は又、何等かの規則を設けてそれ等の官吏を取締るか、その孰れかに出づるより外はなかつたのだ。ところで、政府は後揭の方法に出た。そして、それ等の官吏をことごとく罷免してしまう譯には行かなかつたので、政府はあらゆる官吏の公開演説を禁ずるといふ内規的同章を選はした。これが共存同衆に取つては致命的の打撃であつた、何となれば、其所での講演者は、辰猪を除いての外は、皆官吏であつて、彼等は如上の政府の同章によつて、さながらに虚言者が死後地獄で受けると云はれてゐる刑罰のやうに、全く舌を切り取られてしまつた形になつたからなのだ。さういふ風で、公開講演を續ける任務が何時も辰猪の肩上に落ちて、彼は共存同衆で講演をすることを續けたのであつた。けれども、彼は、政治に關する講演をする場合には、會員の多數は官吏であつたので、それを好まないのを見て取つた外に、政府が何人と雖も先づ警察署から許可を得るにあらざれば政治に關する講演をなすを得ずといふのや、官吏は一切政治的結社に加はることを禁ずるといふ法令を出したのだ。其所で、辰猪は共存同衆でよりずつと自由に政治講演をすることのできるやうな政治的結社を設立することの必要を直きに認めた。それ故に、彼は人民の友即ち國友會といふ會を起したのだが、その名は『人民の友』といふ佛蘭西大革命時代の新聞の名から採つたもので、辰猪はその會で數回講演した。

註——此所に記するところは、明治十一年から同十四年までの事件である。國友會に加はつた重な人々は大石正巳、末廣重恭、田口卯吉、波多野承五郎等であつたといふのだ。

辰猪自傳はまだもう少しあるのであるが、雜誌の方の編輯の都合もあるので、一時こゝで擱筆して置て、そのうち機會を見て、後の分を載せて貰らうことにしようと思ふ。



支那劇の盛衰と其技術の變遷

梅蘭芳

梅蘭芳は大名を瀾といひ北京生れであるが原籍は江蘇で祖父は巧玲と云つて亂に遭ふて北京に避難して來て劇界に入りそして陣菜の娘を娶つた（今年八十五歳で死去）ものであるが、巧玲は清廷の伶官として仕へ、一方慈善事業にも盡したので社會間に大いに認められてゐた、巧玲は崑曲が最も得意であつたが、崑曲より現代の戲曲音調たる西皮二黄の音調を發明し、脚本を創作したもので、確かに一代の先覺である。門人數十名中には名優を十二人まで出してゐる。巧玲に二男があつたが、その次男の竹芬といふのが蘭芳の父で長男の雨田も胡琴で有名となつたが竹芬は小生（男役）の名優であつたが中年に死んだ。それで蘭芳は祖母の手で育てられたのである。今支那劇壇の巨人蘭芳の優れた點は、演藝に專心であることと、悪い道樂を持合さぬことで、文人墨士を友とし劇の改善に就ては熱心に研究するので其藝も年と共に進んだ。又舞踊劇を創作し、前代の技藝の長所を採つて劇界を改革した。「天女散花」「黛玉葬花」「麻姑獻壽」「洛神」「紅線盜盒」「廉錦楓」等がそれである。又人情劇をも作つた。即ち「一縷麻」「童女斬蛇」「千金一笑」等が夫だ。それから史劇「西施」「木蘭從軍」等をも創作してゐる。是等によつて觀ても梅蘭芳は支那劇改造の功勞者であることが判る。

梅蘭芳に道樂のないことは先に述べたが、たゞ美術趣味を有し畫、佛像、花卉が得意で、又朝顏、菊、盆栽等が好きでそれから鴿も飼ふ、梅氏は二度の渡日で日本趣味も大分出來たやうである、昨年日本の震災を聞いて梅氏は卒先して、有志者と慈善演藝會を催し約一萬元の全利益金を日本の救災事業に寄附してゐる。（春柳舊主筆述）

我支那の戯曲は五帝の時代に始つたもので、虞舜の時代には既に樂器があつた。「卿雲の歌」は今日まで傳はり、採用されて中華民國の國歌となつてゐるのである。周時代に至つて優施、優孟（俳優の優の字はこれから始つたもので、周以前にはたゞ一種の神樂のみであつた）が出た秦、漢、晉、魏、を經て唐朝に至つて劇界は大いに盛んとなり、唐の明皇は俳優と共演した位いで今日梨園で祀る神は即ち唐の明皇なのである。一時梨園の子弟は文と藝と共に大いに長じたので、伶官（宮中に仕へる俳優）も何々大夫と稱した。日本で義大夫といふのは或はこれから來たものかも知れぬ。「霓裳羽衣の曲」は唐の舞であるが、今日、日本に「羽衣の舞」があるのは或は之を飜譯したものかも知れない。

唐の明皇薨じ、その後亂離相次ぎ時代は幾變遷を遂げた。我國の古代には舞臺に背景があつたが、民間の劇は振はずはるかに宮中に及ばなかつたものである。それは第一資本家が之を經營するといふことがなかつた。第二には君主專制時代で君后が薨ずれば常に三年間音曲を禁止したからである。故に演劇は年中の營業ではなかつた。梨園は皆一つの茶肆（日本の客席）を借り演戯を餘興にやつたものである。清朝の乾隆帝時代に至つて所謂劇界の中興時代となり、宮中に昇平署などが設けられた。これは丁度唐の教坊のやうなものである。宮中の舞臺は異常に完備し、神話劇中には天から地に降る者、地上より昇天する者等があり、且つ舞臺の下には建築の際に水甕が蔵められてあつて、舞踏の時共音響を助けたもので、之は今日に傳はつてゐるのである。

前清の道光時代に斯界は一變して、崑曲より現代の劇となり即ち今の湖戯、徽、秦の各派を生じた。一時京戯即北京の劇界で最も聞えたものは張二奎、程長庚、余三勝、梅巧玲（蘭芳の祖父）徐小香、楊三等の名で共當時の中堅人物で

ある、民國になつて以後譚金培、何九、黄三、金秀山、羅百歳等は皆過去の人となり、繼で起つた者は現在の余叔岩（右に述べた余三勝の孫）揚小樓（揚月樓の子）氏や私である。以上の諸氏は皆俳優の子弟で皆世繼ぎである。で技術には皆家傳がある。陳德霖は私の師で、今六十四歳の老人だが現に尚舞臺に出てゐる。

上海で今日流行してゐる劇は初め舊劇を改良したものであるが、まだ文人の指導を經ないのが短所である、「鐵公雞」「左公平西」に繼いで近頃では「諸葛亮招親」「狸猫換太子」「濟公活佛」「七擒孟獲」等は派は同じではないが、何れも歡迎されてゐるものであるが、しかし眞の愛曲家には喜ばれてゐない。

日本劇と支那劇とは相似た點が甚だ多い。技術上に就て云へば、先日見た菊五郎の「鷺娘」「漁師」「供奴」三幕中の舞踊の姿勢と節奏に似たものが甚だ多い。「鷺娘」の照水式（水に姿を寫して見る）や又衣裳の着換は支那劇中に皆あるもので、漁師の捕鯆、捕鰒、捕蛸、といつた劇は大抵支那劇と同じで、支那劇中にも精怪例へば獅子、龍、虎、蛤、鼈、蛇、蟒、蜈蚣、蜘蛛、蝎、（外にも蛇蟒蝎等の劇がある）牛、蛟、蟹、豹等の如き劇がある。支那劇と日本劇と異つてゐる點は支那劇では俳優が臺辭と歌舞を兼るが日本劇では台辭と舞とが二に分れてゐる。故に支那劇では一俳優でたゞ一幕か二幕約一時間乃至二時間を演ずるに對し、日本劇では一人が常に數種の人に出演する、右の劇で菊五郎が一日に九人に變る如きが夫である。その化粧の速妙に至つては實に感心の外ない。

支那劇では生、旦、淨、末、丑の五役に分れる。生は男で、その内老生は帝王で、小生は若者、色男、貧乏男などで武生は武士である。淨は面附の男、末は年寄の男、丑は三日役。旦は正旦又は青衣ともいひ女形である。その内花旦は色女、武旦又は刀馬旦は武の女、閨門旦はお姫様老旦は老婆である。大概一人一藝であるが、老生が老旦を兼ねたり、小生が文武小生を兼ねたり、老生が淨役を兼ねたりすることがある。私の演ずる本角色（本役）は青衣（女形）で刀馬旦、

花旦、閨門旦（何れをも演ずるが又小生、武生等の男役をも兼ねる）

現代の支那劇と日本劇を比較すれば我々の觀る所ではその技術は大同小異だ。即ち支那劇の中にも省によつて地方的に相異がある。湖北の芝居（漢調）は湖廣戯劇の正系で即ち京戯も多くは湖廣調から採つてゐる、三國志の劇に此類が甚だ多い。湖廣調は安徽省に入つて徽班となり、北京に入つて京調となつたもので、徽班と京調とは漢調に近いけれど相違の點も甚だ少なく、京調を漢調と較べると實に進歩したものだ。又漢調は湖南省に入つて一變してゐる、更に湖南から廣東省に入つては即ち粤となつてゐる。普通の觀客は粤劇と京調と全く別物としてゐるが、實は源は同じである。漢調は多く勇壯で、京調は悠揚である。

漢調は成るべく長たらしく演じられるが京調の方は簡單を求める。そこで同じ演劇にしても例へば「打金枝」劇でも、京戯では一時間足らずであるが、漢調では三時間もかかる。郭子儀の壽辰誕生日の意に於ても、郭子儀に七兒八婿の十五組の夫婦があるが、之が一夫一婦互に拜跪して各祝詞を述べ酒杯を執つて酒を獻ずると云つたやうに甚だ煩瑣なもので、之が京戯では三組の夫婦が一同を代表し且つ祝詞獻酒をしない。即ち時間上大分省略されてゐる。粤劇の煩瑣なことは漢調と同樣だから粤劇の「打金枝」ではやはり三時間以上はかかる。事實に就て云ふなら十五組の夫婦が拜跪するのは千遍一律で京戯で精神に重きを置くに如かない。たゞ京戯はあまりに簡單なのが短所で、外國人が觀ればその前後の事實を了解するに苦しむだらう。粤劇は男女を論ぜず、冬夏を分たず、人々皆扇を持つてゐるのは漢調に似てゐる、京戯では扇を使ふ劇は甚だ少い。又粤劇で例へば數人の人を見送る場合に一人々々に皆挨拶する、漢調もさうであるが、京戯では極めて簡單である、此等が大體の相違點である。

一座の俳優中には立役者があつて、其他は皆配役である。ファンは立役者に注意するが配役の伎劣にはあまりに注意

しない、だから配役は甚だぞんざいになり。簡單にすればする程精神が拔けてしまふ。之は一大欠點で。それがため二三流の俳優が一流に上るには頗る困難だ。あながち階級が出來てゐるためではない。

秦腔一名梆子腔といふのは山西省に源を發してゐるが、多く悲しい聲を出すもので、之を好むものも尠くない。

女優劇に至つては發達が最も遲れてゐる、それは昔女の舞樂を禁じたからで、春秋時代にはさうで、清朝の光緒初年(明治十年頃)に至つて初めて上海九畝園の小舞臺で女優劇をやつた。俗に髦兒戲又は猫兒戲と稱したが、女優劇は二三人での小劇に過ぎなかつた。即ち「三娘教子(サンニヤンチヤオツ)」「小放牛(シヤオフアンニユー)」「桑園會(サンエンホイ)」の類であつて、其後女優劇は上海四馬路の群仙茶園で一部の勢力を占めるやうになつた、金月梅、郭少娥、小蘭英、金處等の女優は皆群仙茶園の出身である。(金は金少、梅の後で、小蘭英及び其娘の姚玉蘭、姚玉英等は皆北京、天津、上海、漢口等で出演してゐる)

民國初年になつて北京にも女優劇が現はれ、鮮靈芝、張小仙、金玉蘭、李桂芳、劉喜奎等は皆一座の勢力を占めた名優で、男優はこれがため頗る影響を受け北京十一個所の劇場中、女優劇は過半數を占めるに至つた。(北京の男女俳優は合演をしない。天津以外は大抵は男女優共演である)それから數年後にたつて女優劇の勢力は漸く降り初めた、その原因は女優は貧家の子女の職業で、その目的が三四年も舞臺に出てゐる間に人を選んで嫁入りするのにあるから、藝が粗末で眞のフアンは女優劇を論じなかつたからである。然し廣東の女優劇は甚だ發達したもので、李雪芳、蘇州妹等は嫁入りに十萬元以上の持參金附であつた、廣東といふ土地が富豪が多くて金使いを惜まぬからで、女優の評判も富豪が作つてやるのである。しかし李雪芳の如きは北梅南雪と稱へられた、北方の梅蘭芳(自分のことを云ふのも可笑しいが に對して南方の李雪芳といふ程に藝がうまいといふことであるがたゞ李雪芳は既に上海の富豪に嫁して再び舞臺上に見ることが出來なくなつたのに支那戲界の爲め殘念である。以前廣東の某が私と李雪芳の共演を計劃したことがあつたが、許

調と劇の組織が違つてゐるのが主なる原因で私は其不可を主張し終に實現を見ることが出來なかつた。之と同じ意味で日支俳優の共演も到底不可能のことである、

更に廣東の樂器と北京の樂器とを左の如く表で示して見れば兩者の相違點が分るだらう

廣東劇樂器	北京劇樂器	異同
大鼓	堂鼓	同
沙鼓	單皮	類似
卜魚	板	類似(たゞ手で打つと打たぬの相違)
饅頭鼓	無	
大鑼	無	
文鑼	大鑼	同
小鑼	小鑼	同
大鈸	大鈸	同
小鈸	小鈸	
簫	笛	同
大笛	大瑣㖓	同
小笛	小瑣㖓	同
三絃	南絃子	類似

二絃	胡琴類似
提琴	胡胡類似
月琴	月琴同
單打	無

樂器の奏法に廣東では三絃を主とし、京戲では胡琴を以て主とする有様で既に主要の樂器が同じでない。他の一切の樂器も隨つて異つてゐる。其他の各省の劇は皆京調でそれに多少の變化を加へたものであるから樂器も京戲と同じである。要するに支那劇は廣東劇と各省劇とに二大別することが出來る、そして樂器に於ても同樣である。

冬の女

御高祖頭巾の記憶

今東光

十七歳のスタンダルは頰に桃色の面胞が吹き出した。そろ〳〵風邪をひいたやうな聲を出しはじめ、聲帶のあさましい變調に吾ながら愛想をつかしかけてゐる時に、監督者のロメン、ガノン叔父さんが言つたもんだ。

『ベェルよ。お前は頭が良いと思ひ込んでゐる。數學學校で成績がよかつたといふので仲々威張つてゐる。がそんなものは三文の價値もないんだぜ。世の中に出ようといふには、どうしても女だ。といつてみたところで貴樣は御覽の如き醜男だ。取柄といつちや、その醜い御面相にも少しばかり特徴があるといふだけだ。女をつくつても直ぐ捨てられるだらう。女に捨てられると兎角、向ふ見ずの馬鹿をやりがちなもんだ。が其所を一つ踏張るんだぞ。捨てられたら、さツさとそんな女のことは忘れて、二十四時間内に他の女に言ひ寄つてみるんだ。格好なのが見つからなかつたら、小間使だつて好いサ。そこの要領が大切なんだぞ。忘れるな』

スタンダアルは此の言葉を大事に胸にしまひ込んでパリーに出て來たのだ。さうしてガノン叔父さんの言葉は死ぬまで忘れなかつた。彼は兎も角素晴らしく立派な教育をされたのである。

とにかく斯ふいふ處世の秘訣を教へてくれたる保護者といふものは、さうさらに世の中にあるものではない。思ひ切つた眞實、若しくはがむしやらな公正、けれども何處かにエスプリの

ある教訓。

ところが私の賢明なる母は、多感な、幾分か無頼なところのある私のために、全然女性とは席を同うしてはならないとは教へなかつた。却て

『一人の婦人をも完全に愛することの出來ない男は、女を愛する資格のないものだ』

と言つたもんだ。實際、私共が齗やかしい徳性と呼ぶところのものは、本能的生物を立派に訓練してからのことである。しかしながら誰が春の外套を脱ぐやうにして、直ちに爽々しい高い生活を營むことが出來やう。その上に私は特に「女嫌ひ」ではないのだ。

ラ・ヰ・エ・ル・タン。それに私は若い。獵人のやうに力强い。さうして縞馬のやうに野蠻である。とろけるやうな愛撫を拒絶するほど不可思議な意志と理性とに欠けてゐた。感觸の細やかさゆゑに娼妓も、人なつかしげゆゑに女郎も、淫逸な艶やかさゆゑに洋妾も、さまで悪いものだと思はない。けれども本當は、これ等の數々の情事は、畢竟するに自分の羚羊のやうな愛妻の面影を覓めてめぐる道程（オ・ミリウ・デ・シュマン）に過ぎなかつた……………

大地震のあつた年の東京は、殆んど私には町がガラ空きになつたのではないかと思はれた。私が湯島の常夜燈にのぼつて瞰瞰した蜘蛛の巣のやうな電線、鉛筆のやうな電信柱、壊れた白磁の洋館、女の髮毛、下駄、痩せた黒猫、跛の赤犬、汚れた夏服の巡査、さうして幾分か自制を失つた兵隊は靴の底にブリキの板を張りつけて歩き、血迷ふた女は鉛色の目を剝き出しにしてゐた。さうして子を連れた老婆、浴衣の男、荷物を背負ふた老人、それ等の異様な風俗をした何萬といふ行列が、道幅一杯に溢れ、これらの人間共の洪水が陸續と何日も／＼もつゞいたのである——それからだん／＼寒くなつた。

さういふお玩具箱をひつくり返したやうな混雜の中で、もう何年にも會つたことのない、さうして人妻になつてゐる彼女にひよつこりと會つた。

駒込橋といふのは水のない空橋であるが、その橋の袂で、武藏野の野分が黄色い塵を吹きまくつて、多血質な女はみんな裾を注意するやうな日、冷めたい風のために鼻の先を赤くした私の目の前に、これはまた古風な、紫縮緬の御高祖頭巾をかぶり、御召のコートを着て、黒い絹の手袋を穿めた女が、しよんぼりと立つてゐた。

『とうさんぢやなくッて』

聲をかけられて、ひよいと眞向に此の異様な風俗の女を見つめた。

『おう。貴女が…………』

と私は答へたが、恐ろしく智慧のない話だつた。紫縮緬の御高祖頭巾（今時の女はこんなものを被りやしない）の中から、きらりと燿いてゐる彼女の目なざしに瞬間、私は折れ〳〵になつてゐた魂をどつぷりと浸したのであつた。

それから私達は殆んど機會ある毎に逢つた。さうして逢はない時は、お互に私達は自分自身の午後をさびしく過したのである。

『何事も可能だ。私は自分の膽力を信じてゐる』

と言つた。

『暫らく待つて頂戴ネ。さうしたなら』

『さうしたなら』

『さうしたなら乾度その時が來るでせうから。神様の』

『思召しと貴女は言ひたいだらう。しかし私が可能だといふのは、何事もそれ自身の裡にその反對の芽生を待つてゐるからだ。その證據には貴女は、却つて私と逃げたいのだ』

『かもしれないのヨ』

彼女は、さう答へながら深潭のやうな瞳の色をいよ〳〵濃くして見せた。しかしこれは彼女が驅使して完成しようとする母型の片鱗だつた。そのくせ彼女は自分の氣に入らないことは何一つ出來ないやうな女だつたのに。

吾々はもう、陰影の深い、さびしい小路を余り歩き過ぎてしまつた。彼女は自分の體面を萬全なものだと過信してゐた。けれども實は彼女が、すつぽり。紫の縮緬で小さい顔を包んでゐる方が、どれだけ行人の注意を惹いたかわからない。

間もなく私は、羚羊のやうな此の「冬の女」を連れて秩父の山奥に逃げた。渡り鳥の一群が私達の目指す方角に向つて同じ旅行をした。落葉を卷く木枯がそのさびしい飯能の町外れの半鐘を搔き鳴らした。暗い夜道を辿つて溪流にのぞんだ商人宿に憩つた私は、二階の四疊半に通されて、酌婦のやうに咽喉をハンカチーフで卷いた汚い女中達の好奇の眼に射すくめられて仕舞つた。彼女は先づ御高祖頭巾を脱いだ。彼女は鬘下地に髮を結つてゐる。棒縞の御納戸色をした御召コートを脱ぐと、唐棧柄の縮紗の羽織をきて、派手な御召の着物に更紗の丸帶をしめてゐる。白い小さな顔が濃紫の半襟から痛々しく浮いて、玉蟲色の口唇は冷たく光つて見へた。さうしてから彼女は、二の腕までも來るほど長い手袋を、海皮を剝ぐやうにしてくる〳〵と脱ぎ、白く、細く、長い手をぐつと私の目の前に突き出して弱々しく笑つたのである。

『何といふ奇嬌な彼女だらう。寡默で、ちつとも笑はない、卅

ツたれで、寂しがり屋の彼女――――』

私は今ではさう述懐しよう。けれども私は幸に小間使にまで窮したのではなかつた。たゞ賢明な母親の教訓通りにしたまではあるが、不幸なことには彼女が單に人妻であつたことで、更にいぶかしく困つたことは、私が死ぬほど惚れたのが即ち彼女であつたことだ。しかしながら果して私は、彼女によつて世の中に出たのであつたらうか。

それから、それから……………。

思ひ出す冬の女

富ノ澤麟太郎

雪から生れる女――

ラフカヂオ・ヘルンは、これについて、「ユキオンナ」といふベスト・ショウト・ストーリーを書いてゐる。これと同じく葛西氏にも亦「雪女」といふすばらしい短篇があつたと記憶する。これは雪國に限られて昔から物語られる傳説である。これはちよつと凄みのこもつた物語である。單に神秘的な話としては受けいれられない。雪明の野の末をたゞひとり夜みちをすると、彼女をひよつくり思ひ出して軀を顫はしながらも、歔欷は聞えぬか、ものゝ影は見えぬかと、かなり緊張する。吹雪の夜でなければ、荒野で赤子を抱いた「雪女」には逢へないのだが。

雪國の女――

生國仙臺は別として、冬の山形より外は知らない。くゝり袴のやうなモンペイといふものをはく。聞けば大へんに寒氣を妨ぐものだといふ。これは決して腰を痛めないばかりでなく、深い雪の上などを行くためには必要缺くべからざるものだと。それにこの國の女たちは、かなり樸訥でもある。深い雪の下の水をとつて、水仕事をする。話に聞く綺麗好きな朝鮮女のやうな感じが湧く。雪沓などは勿論つけるが、もつとおかしいのになると、普通の下駄へ五寸釘を打ちとほして、足早に途上を過ぎ

る。何處の土地でゞもいゝが、まだ見ない橇へ乘つた女を見たい。

仙臺の童女たちは、ただらかなスロープの頂から、俵ボッチへ腰を据ゑて雪の上を滑り降るのが無上の樂みらしい。そして少年たちの所謂タンペイ滑り（氷滑のやうなものだが、これは雪を踏みかためて磨きをかけたもの）を威嚇して嬉々としてゐる。

——（女の冬）——

氷上の女——

彼女たちの姿は勇壯活潑そのものだ。スケートもよし、氷！とは限らないが、スキーもよし。容子のいゝのがものものしくスポーツマンスタイルに裝ふたなどはなほよし。後ろへ襞のやうに張り切つて飛びしきる頸卷を見給へ。なんと清澄なポーズではないか。誰か彫刻でもつくり給へ。彼女たちの一人が、新な旋回運動でもやらうものなら、スヰーデン・ノールエーの女たちと比敵するであらう。そしてもしかしたならノラみたいな近代的の女らしさが一層よく現はれはしまいか。文部省が何と言はふとも。或科學者の一人は言ふであらう、「立派な子孫を求めよ」と。

都の女——

細君らしいのが大通りを、これも年末などに買物を手提にして仰々しく通るのは愉快ではない。躓づいて泥へはまれと叫びたい。彼女らの心中は察するに難くはないが、色艶のいい爪ほどの風情も湧かない。やはり胸を張つて濶歩して通るのがいい——冬期でさいも——洋裝でも和裝でもいいが、これは容子のいいひとでなければ見せられない業だ。

日本娘らしく、つつましやかに、呉服屋の前に立竦んでゐる冬の娘を見ると、別に意味はないが好ましくなる。コスモポリタンなる故にエキゾーチックな情緒を持つてゐるからだらう。「あれが日本の女だ」と感銘を深くする。

正月近くなつて、髮結ひの女が、青白い顏に結ひこぼれた髮を風になびかせながら結髮道具を手提げて通るのを見ると、何故か同情したくなる。同時に尊敬に似た感じが湧く。これは或年の或街での一瞥見の情趣であつたが。

十五六の少女たちが、髮を二股に分け後ろ頸すぢから胸の前へ垂れてゐるその學校歸りの姿を見るのはうれしくも樂しい。それが冷氣に頬を赤くして、物をも言はずに三四人かたまり、暮れやすい薄暮の途上を足早に通るのはなほいい。そして時々どつと笑ひ崩れて一緒に駈け出し笑ひをするなどは、無邪氣な

シインだ。學ぶべくして學べない少女らの可哀らしさだ。
自動車の窓のなかにちらりと見る狐の頸巻を背負ふた婦人に就いての感想を、街角にかぢかみながら鈴を振つてゐる新聞賣りの娘に聞いてみたい。果して何と言ふか。

いつもよく見かけるひとで、須田町や銀座尾張町の角に花束を賣つてゐるロシアの母娘(?)がゐる。先きのロシア大帝國の貴族のなれのはてとかきいてゐるが、非常に目立つて見える。そして冬の日は特に目立つて繪畫的である。ひと足も緩くなく、ポストや電柱とともに冷たい風のなかに突き立つてゐる彼女たち。彼女たちには譯もなく大きな敬禮を拂ふ。大多數の日本人は、こんなものへは目もくれないかも知れないが。この頃はこの親子を見かけない。この冬は見られることであるか、どうか。

雪國の女

金子洋文

一

子供の時の話――。

私は戸口に立つて暮れて行く雪の町をぼんやり眺めてゐた。すぐ前の井戸端で鳥が雪をつついてゐた。

からす
雪くふ
雪婆に知らせる
雪婆ゐねえと
鬼婆に知らせる

私が大きな聲で歌つたら、鳥が何も言はず飛んで行つた。お石さんがひきぞり(女の子が雪路をすべる下駄)をはいて出て來た。手に酒罎を持つてゐた。

「酒こ買ふに行くのけ。」

私が言つた。

『あ、俺(おら)の家さ人こ來るもの。』

『何處の人……。』

『船の人……』

『何(なに)しに……』

『姉ちやさ……』

私はお石さんが好きであつた。そこでお石さんと一緒に酒屋へ出かけて行つた。

私はお石さんの腰に手をかけて押した

お石さんは兩足を前に投げ出して、ひきぞりですべつた。

私はどん／＼駈けた。耳をきる北風よりも早く駈けた。お石さんはきやつ／＼聲あげて笑つた。

土藏がならんでゐるところで吹雪溜が出來てゐて滑ることが出來なかつた。

私は雪をこんで先にまはつた。

それから

『さあ、抱いてやら』

と言つて手をのべた。

お石さんが兩手を私の肩になげた。酒臭が私の肩をうつた。

『どつこいしよ。』

と、聲がけして私はお石さんを抱きあげた。

向がかはつた。私は東に顏を向け、お石さんは西に顏を向けた。その時私はお石さんの丸い兩頰が眞紅になつてゐるのを見た。

『おや。』

と、私は叫んだ。

『なにけ。』

『お石さんの頰ぺた眞紅だ。』

『…………。』

お石さんは笑つた。

『眞紅な林檎のやうだ。』

『本當け。』

お石さんは片方の手を頰に持つて行つた。

『噛(かぢ)つたら何ぼ美味べ……』

『噛(かぢ)らせるすか……』

『本當け……』

『ほら、』

お石さんは笑つて私の口先にその眞紅な二つの林檎をのべた。

テトウ、テトウ……

と、口で鐵道馬車の喇叭を眞似ながら、私は再びお行さんの腰を押しながら驅けた。冷たい風が私の脣をさした。そして背の上にのこされた甘い奇怪な感觸を胸に吹きつけた。

二

それから十數年たつた今年の夏——。

私は秋田市のある料理屋で彼女と會つた。

彼女はことごとく變つてゐた

彼女は名の知れた藝者であつた。

彼女は美しいうすものを着てゐた。

彼女の形はみがかれてゐた。

『いらつしやい。』

と、彼女は言つた。

『まあ、しばらく。』

と、彼女は笑つた。

しかし、彼女の頰には赤い二つの林檎がなかつた。頰が少しやせて、人をひきつけるある寂しみが白粉の上にうかんでゐた。が、都への夏の美しい女を見なれてゐる私の眼には、彼女はそれほど美しくうつらなかつた。

三

そこで私はこう言ひたいのだ——。

美しい秋田（くに）女を見たい人は、夏行つて藝者を呼んではいけない。

冬に行つて道をとほる白粉をつけてゐない娘を見てほしい。

頰に二つの眞赤な林檎をもつてゐる娘を。——

藝者でも、雪の日の湯歸りなら、ひよつこりその寶を顔に見ないものでもない。

冬女三題

佐々木味津三

煙草

ふとのぞくと、その朝に限つて垣一つ隔てた隣りの別荘の庭先に、いつもは見馴れぬ若い女のうしろ姿が目についたので、

「おや……？」

いぶかり乍らどてらのまゝで、すぐと私も好奇心から庭下駄をつッかけた。

垣根は眞竹の新らしい四ツ目垣である。松籟の音ははげしかつたが、庭は南を受けてそれ程でもなかつた。私はまた新らしく煙草を吸付け乍ら、見るやうに見ないやうにそつとその四ツ垣際へ歩みよつた。

女はまだはたちとはいつてゐなかつた。くるくると輕さうな束髪に髪をたばねて、毛糸の白いお手製らしい肩掛をふんはりと巻き乍ら、こころもち體を右ななめに崩して、そこはかとなく海づらに眺め入つてゐるらしかつた。

が、膝の上に置かれた兩手の色は、なぜか臘石のやうにほつそりと白く冷たかつた。顔も、顔はしかし頬にほんのりとあるかなきかのべにがあつた。それからすつきりと氣高い鼻も、――とにかく横顔であるのがひどく殘念であつた。

「こつち向かないかな……」

思ひ乍ら、私は意識してわざと煙草の煙をすうと大きく女の鼻先へ送つてやつた。

しかし、その次の瞬間である。煙がその鼻先を通るか通らないに、突然女が苦しげにごほ、ごほと咳出した。

「ゆうちやん、駄目ですよそんな風のあたるところにいたんぢや……」

續いてうちの中から母親らしい聲があつた。

突然、私ははつとなつた。同時に、肺病患者お斷り、と言ふ看板を賣物に客を呼んでゐるこの土地とこの宿屋のことがちらりと胸さきをかすめ去つた。途端に私は何か大きな罪悪を犯したやうにかんじて、慌て乍ら吸ひかけの煙草を下駄の下に踏みにぢつた。

海――海は南國の冬である。

切符

車内の人の顔にはどれにもこれにも年ノ瀬の色があつた。

無論、電車も身動きならない程の混雑であつた。

が、私は嬉しい事に天下晴れての獨身者である。だからひと

り豪然とふところ手をしな乍ら、並居る人々を尻目にかけて、悠々座席を占領してゐたからとて、誰に遠慮も要らう筈はなかつた。多分、お出入りの「奥様」から頼まれてひと走り質屋へでも行く途中らしい大きな包を持つた仲居のおかみさん風なのが、恨みがましく私の方をぢろぢろとやつてゐたが、そのお隣りにボーナスのあてでもはずれたやうな顔つきで、萎れた茶つ葉のやうな感じの官員様が、市場ものの鮭のやうに悄然と吊り下つてゐたが、元より私は平然と嘯いて、席を譲らうなぞと言ふ考へは起らなかつた。

――心なき慈善は詐欺よりも重罪である。とにかく車外はひゆうひゆうと黄昏頃の空ッ風であつた。

信濃町！信濃町！そしてまもなく四谷！――四谷見付！といふ驛夫の聲がきこえた。と、いつの間に、仲居のおかみさんと入れ替つたものか、前には二十二三の女が立ちふさがつてゐるのに氣がついた。

女は私の好きな中肉細おもての素顔である。糸切り齒の邊に一寸難があつたが、上から下まで、あまり目立たないところは一層頼母しかつた。

無論私は、仲居のおかみさんを擊退する勇氣をも持つてゐるが、それかと言つて久米の仙人になれないとは限らなかつた。

「おかけなさい！」

だから私は忽ちに通力を失つたのも當り前である。

「いゝえけつこうですの……」

「どうぞ遠慮なく……僕はぢき降りるんですから……」

「ぢや失禮しますわ……」

――とにかく私は大變に滿足を覺えた。その上に幸ひなことには誰に遠慮も要らない獨り者である。

「こふ云ふのが縁になつて、いつか戀人同志になるなんて、奴がよく新聞の小説にあるんだが……」

と、その時、突然女に私の横から、

「おい、お前さつきの切符をお見せ！」

無禮な口の利き方をした者があつた。彈かれるやうに顏をのぞくと、先程から鮭のやうに吊り下つてゐた萎れ茶ッ葉であつた。

「……國府津へつて言つたのに小田原迄買つたな……」

「だつて今度の休暇は……ボーナスだつて私の自由にするつて約束ぢやないの……」

「チェッ！このめん鳥めが！」

私は無闇と腹を立てながら、やけた人込みを押しわけて、いきなり市ケ谷へ飛びおりた。そして夜の筑波颪に脳迄も冷たく

吹きさら世乍ら、いたづらに獨身者の氣を挟ませる以外には何の役にも立たない日本の女の束髪と言ふやつを勇敢に呪はれないではゐられなかつた。

靴

眷秋が近州との國境にさしかゝつた時はまだ陽の入りに大分間があつた。峠から見下した時には、ほんの五六丁先のやうな近くに、川面がきらきらと陽に輝いてゐるのが見えたので、安神し乍ら降りて來たが、しかしその川べりに辿りついた時は、いつ暮れるともなく冬の陽は落ち切つて、あたりはもう薄暮に近かつた。

が、別に先きを急がねばならぬ旅ではなかつた。元元が身まゝ氣まゝの納行脚だつたので、暮れると知ればどこに風流を求めてもさしつかへないからであつた。

だから彼は格別慌てる容子もなしに、ともかくも川に沿つて、人ごころのありそうな方へ漫然と木履を鳴らしていつた。やがて行く手にちらちらと灯影があつた。それを目あてに飛び石を拾ひ乍ら、小川を向ふへ渡り越へた。

と、その時その川べりの柳の影で、ふと彼は何かをぢやぶぢやぶと、洗つてゐるやうな人音をきゝつけた。すかして見ると、十五六ばかりの少女である。ちんまりと亦ゐまつちげなからだ付であつたが、夜目にもくつきり中高なかんばせであつた。

「ご精が出ますね」

すぐと彼は風流の心を起こして話しかけた。が少女はその聲をきくと急に驚ろいたもののやうに、なぜか慌て乍ら洗ひ物を包みかくした。

いぶかり乍らよく見ると、なんとすばらしい情景だつたらう。女はこの寒いのに小肥りの眞白なふくらはぎをあらはにさらし乍ら、しかも氷のやうな石の上に意外にも素足であつた。

「冷たいでしよ。私の木履おかししませうか」

彼の風流心は早くも女に狎れかゝる恰好な機會を見つけ出した。

しかし少女はそれを聞くと、いきなり嫣然と媚のある流し目を投げかけ乍ら、慌てて裾をおろして、かくしたものを鳩のやうなかわいらしい素足にはいて、あとをも見ずにちよこちよことかけ出した。

――洗つてゐたのは靴である。ぎうぎうときしむやうな音から判斷すると、多分上等なめし皮らしかつた。

が、晉枕は寂しげに舌鼓を打ち乍ら、決してそのあとを追はうともしなかつた。たわむれかけたら、無論拒まないとも知り乍ら、靴を洗はねばならない程の油足を想像すると、さすがな風流心もそれ以上の勇氣を呼び起さなかつた。
默つて彼は星を仰ぐと、寒さうに肩をすぼめ乍ら、南へ南へとあてもなくまたさまよひ出した。

冬の女

横光利一

女が一人籬を越してぼんやりと隣家の庭を眺めてゐる。庭には數輪の寒菊が地の上を這ひながら亂れてゐた。掃き寄せられた朽葉の下からは煙が空に昇つてゐる。
「何を考へていらつしやるんです。」と彼女に一言訊ねてみるが良い。
彼女は袖口を胸に重ねて、
「秋の歌。」
もし彼女がそのやうに答へたなら止めねばならぬ。靜に彼女の手を曳いて、
「あなたは春の來るのを考へねばなりません。家へ歸つてお茶でもお煎れになつてはどうですか。春の着物の御用意はいかゞです。湯のしん〳〵と湧き立つた銅壺の傍で縫物をして下さい。あなたの良人は間もなく手先を赤くして歸つて來るでせう。それまであなたは過ぎ去つた秋の物思ひに耽つてはいけません。秋には幸福がありません。さア家の中へ這入らうではありませんか。もし炭箱へ手を入れることがお嫌ひなら手袋を借しませう。水は冷めたくとも間もなく歸る良人の手先を考へておやりなさい。花々はまだ花屋の窓の中で凋んではをりません。暖爐の上の花瓶から埃りをとつて先づ一輪の水仙を差し給へ。椽の上では暖く日光が猫を眠らせ、小犬は明るい自分の影に戯れてゐる筈です。だが、あなたはあの山茶花を見てはなりません。あの花はあれは淋しい。物置の影で默然と咲きながら

散つて行きます。あなたは快活に白い息をお吐きなさい。あの散り行く花瓣に驚いて飛び立つ鳥のやうに。眼をくる〳〵むいて白い大根をかゝへて勝手元でお笑ひなさい。良人の持つて歸つた包からはあなたの新らしいショールが飛び出るでせう。しかし、春は間もなく來るのです。手水鉢の柄杓の周圍で蜜蜂の羽音が聞えます。村から街へ登る車の數が日増しに増して參ります。百舌は遠い國へ歸つて行き、枯枝からは芽が生々と吹き出します。あなたは、愛人の手をとつて郊外を漫歩する二人の若い人達を見るでせう。そのときあなたは良人の手をとつて、「まア、春が來ましたね。ね、ね。」と云ひ給へ。だが、あなたの良人のスプリングコートは黴の匂ひがしてゐてはいけません。』

アンチ・ミリタリストの孫

長谷川如是閑

生れてから四五歳に達するまでの私の生活の、乏しい記憶のうちに、今も思ひ出すと一種の執着を感ずる二つの玩具がある。

その一つは、掛矢と稱する、杭などうちこむ大きい木槌を、四五寸ほどに大きさに作つたのと、他の一は小さな大八車とである。二つとも、私の五歳の折に沒した祖父が作つてくれたのであつた。車の方は、たゞ漠然と、車輪の縁が山車の車の車輪のやうに大さう幅の廣いものだつたことを記憶してゐるのみであるが、槌の方は、大きい掛矢の雛形が極めて巧妙に出來てゐて、その槌の胴の膨らみの工合などまで、はつきりと今も眼に見へるやうに鮮やかに記憶されてゐる。さうして、祖父は、近年まで玩具屋に見へてゐた金板を列べた玩具の木琴を叩く爲めに、私と兄とに一つづゝその小槌を作つてくれたのだといふことまで覺へてゐる。

私の家は、その祖父の代まで大工の棟梁だつたといふことだが、祖父は無論大工の仕事などが出來た譯ではない。けれども、私の覺へてゐる祖父は木屑のうちに坐り込んで何かしら作つてゐたのであつた。さうして祖父の死んだ後も永く、祖父が作つたといふいろ〳〵の器具が家に殘つてゐたのを覺へてゐる。狹い土間のやうな所の木屑の裡にあぐらを

かいて、大きい鼈甲眼鏡をかけて、木片をいぢくつて何か作つてゐる祖父の姿と、例の木槌をこしらへあげて私達兄弟の遊んでゐる所に持つて來てくれた時の祖父の姿とが、私に殘つてゐるたゞ二つの祖父の幻像である。

その後二十年近く經つて、私は、私の爲めに車を作つてくれた祖父を突然思ひ出す機會にぶつかつた。それは始めて淮南子を讀んだ時に、『桓公書を堂に讀み、輪人輪を堂下に斲る』といふ一節を見出した時だつた。讀んで行くと『其の椎鑿をすて、桓公に問ふて曰く、君の讀む所のものは何の書ぞ。桓公曰く、聖人の書なり。輪扁曰く、其の人いづくに在る。桓公曰く、已に死せり。輪扁曰く、是れ直に聖人の糟粕のみ。桓公勃然として色を作して怒て曰く寡人書を讀む、工人焉んぞ得てこれ譏らんや。說あらば則ち可、說なければ則死さん。輪扁曰く、然り說あり、臣試みに臣の斲輪を以てこれを語らん。はなはだ疾ければ則ち苦(シブ)つて入らず、はなはだ徐なれば則ち甘(クツロ)いで固ならず。不甘不苦、手に應じ心に厭て以て妙に至るは、臣以て臣が子に敎ふる能はず、臣が子も亦これを臣に得ること能はず、これを以て行年七十老いて輪をつくる……』とある。私は漢籍を讀んで――無論澤山は讀まぬが――これほど實感にぶつかつたためしはなかつた。私には、その輪扁なる老人が、私の祖父のやうな老爺であるやうに思はれてならなかつたのである。私は、その時、何度も、何度も、此一節を繰りかへしてゐるうちに、涙に眼が曇つて字が見えなくなつてしまつた。

その後も折にふれて此一節を胸のうちにくりかへす度に、玩具の車を作つてゐる祖父の姿が眼さきにちらついてならなかつた。さうして、此の文句が、支那民族の軍國文化否定の理を詩的に表現したものであると同時に、生産階級の意識を極めて具體的に說明したものであることを知つて私は、私の祖父の生活に一種の誇りさへ感ずるのであつた。

子供の時に十八史略の素讀を習つて、『耕して喰い井を鑿りて飲む帝力何んぞ我れにあらんや』といふ句を讀ませられた時には、何のこととも合點が行かなかつたが、桓公と輪扁との對話を讀んで、さうして鼈甲眼鏡の私の祖父の幻像を

思ひ浮べると、私は、永い間失くしてゐたものを見つけ出したやうな喜びを覺へるのであつた。私は、私の祖父の幻影と一緒に、私達の生活そのものの意識を取り戻したのであつた。

今でも私は、講演などに、桓公の一節を引用することがあるが、その時はいつも、私に玩具の車をくれてゐるしなびたサンタクロースのやうな私の祖父の姿が――私の祖父は人並外づれて小さなお爺さんだつたといふことだ――眼前にちらつくのである。

一體、私は、生れにもよつたのであらうが、子供の時分に誰れも好くやうな軍國主義的玩具に興味をもたなかつた。無論、軍國主義的の遊戲なんぞは、全くやらなかつた。相當いたづら盛の年頃になつても、友達なんぞがそんな遊びをする時には、私はいつも、超然としてそれを見物してゐた。で『高見の見物』などゝ冷かされたことを覺へてゐる。從つて私の玩具のうちには、誰れの玩具箱にもあるやうな、刀だの鉾だの鐵砲だのといふものは一つもなかつたやうに記憶してゐる。不思議にも――實は當然のことだが――私の兄弟達の玩具箱には揃つてそんなものが無かつたやうである。

たゞ今にでもさうだが、私達男の子は、何れも五月人形を飾る習慣があるので、その年中行事で、私達は、軍國文化の産んだ極めて高級の玩具をもたせられたのである

實際、五月人形といふものほど、子供の生活に於て許されてゐる贅澤はない。平生可なり貧弱な家庭でも、此の儀式では、驚くべき浪費が、その家の小さな子供の玩具の爲めに費やされる。如何なる家庭に於ても、五月人形だけは、その家庭の生活の常識を超越して、貴族的存在を保つてゐる。

勤儉質素を四民の生活の道德とする封建時代に、何うしてそんなタブー破りが公認されてゐたかといふに、それは全

く、軍國々家の軍國生活に立脚する敎化の手段に外ならなかつたのである。即ち軍國主義の理想を、たゞに空虚な理智の上に成り立たゝしめるに止まらないでそれを生活の興味そのものゝ上に成り立たしめるには、軍國主義的現象を文化現象に變態せしめる必要がある。人を殺す武器を文化的に完成せしめて、刀劍藝術なるものにまで發達せしめると、そこに、所謂人斬り庖丁は、高級な藝術品となる。と同時に、その同じ方法は、軍國主義的行動を最高の人間的行動として意識せしめることが出來る。生活の興味がさう顚倒すれば、生活の哲學は、その顚倒した生活興味の上に立派に構成される。五月人形は、さういふ生活の哲學を構成せしめるやうな生活興味を起させる爲めに、軍國的産物を藝術化した玩具によつて、人間をその白紙の時代に於て變造する方法なのである。人間の本心が何うあらうとも、その本心に任かせることをせずに、軍國的偶像に陶酔する心理を人工的に構成せしめねばならぬのである。それは軍國々家の生活にとつて何よりも大切のことなのである。五月人形は、この人間改――變造の目的の爲めに、國家的に仕組まれた敎化の道具に外ならない。

五月人形の制度は、軍國々家が、如何に此の目的の敎化に努力したかを思はせる例證の一である。五月といへばおやめの季節である。おやめは菖蒲である、菖蒲は尚武に通ずるといふので、五月を軍國男子の祝月とする。といふのは嘘か眞實か分らないが、とにかくそれは、軍國々家が何も軍國的敎化を宣傳する機會あれば決してそれを逸しないことの證據である。

尤も五月人形といふものが、われ〳〵平民の間にまで行はれたといふことは、少くとも封建時代に於ては、錯誤だつたのである。軍國階級の精神と形態とは、その階級だけのもので、決して他の階級の襲用を許されなかつた。百姓町人の輩は、軍國的精神を所有すべきものではなく、その精神の犠牲となるべきものだつたのである。それは丁度、鴨や雁が、鐵砲

を所有すべき生物ではなく、鐵砲によつて打たるべき生物であるのと異らない。だから、百姓町人は、弓矢刀槍の類な攜帶することすら許されなかつたのである。況んやそれらの武器を使用する術を學ぶことは、叛逆者と見られる危險を冒してゞなければ不可能であつた。その筈である。百姓町人は、一揆でも起す時でなければ、竹槍をすら所持し、操縦する必要を有たなかつたのである。だから彼等が刀劍を振り廻はせば、それだけで立派な叛逆者だつたのである。その結果すべての人間的修養まで百姓町人には禁じられたのである。何となれば、その頃は人間といへば、殺人器具を操縦する資格のある階級の人間に限られ、生產器具を操縦するものは、農工商とも一律に人間以下に屬し、狩鴨の場で鐵砲を所持する方でなく、打たれる方なのだから、百姓町人が人間的修養をするのは、つまり鴨の癖に英語を學ばうとするやうなもので、その精神に於て立派な叛逆なのである。百姓町人にして所謂靑表紙をひねくつたものは特殊な最後を遂げないのは、猫が人語を語つて退治されるのと同じなのである。

その意味からいふと、武士階級の生活興味を中心とする五月人形が、百姓町人の間に行はれるといふのは、猫の仲間に漢語が流行するのと同じく、間違である。

然しさういふ間違を生じたのも、つまりは、軍國々家の敎化が、如何に完全に行き亘つてゐたかを示す一例なのである。五月人形といふものは、軍國階級の生活興味を與件とするものであるが、百姓町人までが、自己の階級的生活の興味と全く異つてゐる軍國的生活の興味に感染したといふのは、軍國々家の敎化が、何も知らぬ鴨や猫の間にまで行き亘つた爲めに外ならない。

人間は、歷史の示す通り、その經濟力の伸張に應じて、文化的欲求を生ずるものであるが、その要求は、事實彼等の生活を本位として、その興味の上に成立する筈のものである。だから百姓や大工の文化的要求は、當然生產階級的であら

ねばならぬ。然るに、此等の階級は、長年の間奴隷的生活に押しつけられてゐたので、自分達の生活を本位とした文化的自信を持つことは出來ない。より好い生活とは、彼等にとつては、彼等の生活の向上ではなく、彼等の生活とは全く範疇を異にする軍閥階級の生活であるとしか思へないのである。哲學でも、藝術でも、道徳でも、宗教でも、彼等は、自分自らのものがあると信ずるには餘りに牛馬に近い生活を强いられて來たのであつた。しかも彼等は、不幸にして人間であつた爲め、牛馬が、いつまで考へても、自分達牛馬の生活を本位とする範疇を出られないに反し、百姓町人が少し考へると直ぐと自分達の生活を離れて、軍閥階級のそれを目的とするに至るのである。米を作り、家を作る農夫や大工でありながら、より好い生活とは、それらの生産の生活の向上したものとは考へないで、そんなものを全く棄て去つて、そんなことをしてゐる人間の頭の上に、殺人器具を振り廻す階級の生活のことだと考へる。彼等は自己を完成せしめやうと思ふと自己を否定する外はないといふデイレムマに陷る。

それはつまり、軍閥階級の教化の廣く深く滲み亘つた證據である。「人間とは何ぞや」といふ問ひに對し、五月人形であると答へる軍閥階級の生活興味が、軍閥階級自からを支配してゐると同時に、その階級に虐げられてゐる奴隷階級にまで浸染してゐるのである。奴隷が主人の意識に同化した時は、奴隷制度が最も完全に最も安泰に行はれた時である。

百姓町人が五月人形を飾るのは、奴隷が完全に奴隷になつた時の、儀式である。彼等は五月人形を飾ることによつて、自己の生活を否定して、軍閥階級の生活理想に思想的に同化してしまつてゐるのである。從つて、百姓町人は、自分自からは五月人形そのものにはなり得ないといふ階級的制限をも、思想的に承認してしまつてゐるのである。

されば五月人形は、百姓町人にとつては、彼等の階級的悲劇の表現に外ならない。彼等は五月人形に於て、自分達を虐げる階級の夢を空しく追ひかけてゐるのである。自分達を切捨御免にする槍や刀劍を崇拜する彼等の氣持は、徹底し

た奴隷根性である。それほど、支配する階級は、支配される階級の身體と一緒に精神をも奴隷にしてしまつたのである。

その奴隷の家に産れた私は、やつぱり、生れていくばくもなく、その五月人形を通して軍國主義の教化に浴したのである。私が始めて覺へた歴史的人物の名は、加藤清正であつた。それから久しい年月の間、私の人間に關する知識は、その清正や、牛若や、辨慶や、武内宿禰やに限られてゐた。それは單純に、それらの人形が、私の家にあつたことによつたので、私の家にそれがあつたといふことは、即ち、軍國々家の教化奴隷の家たる私の家にまで及んでゐたことである。

威かめしい清正の顏、その後ろに樹つてゐる高い幟、赤坊を抱いた武内宿禰の白髪の首、鎧の上に直衣のやうなものを着た、時代錯誤のその扮裝、……そんなものゝ幻像が、今でも髣髴と私の眼の底に殘つてゐる。

産れた子供が、何の知識をも獲ないさきに、先づさういふ幻像を通じて具體的な軍國的知識を摑ませ軍國生活の意味を味得させる。これは全く、軍國主義の教化の成功である。ペスタロッヂが何うの、ヘルバルトが何うの、モンテッソリーが何うの、ゲーリーシステムの、ダルトン式のと、新舊いろ／＼の教化の學理は、それ／＼能書きだけは振つてゐるが、實際『利いた』といふ點では、この軍國主義の教化に及ぶものがあつたらうか。

かうして育てられた人間が、生活とは軍國生活のことだと心得てしまつたつて、それを心得違ひだと誰れがいひ得るだらう。子供の私が人間らしい人間といへば清正や辨慶のことゝ心得たのは、さう心得させやうとした努力した教化に從順だつたに過ぎない。もしその私が、私自身、清正や辨慶のやうな發達を遂げて、世の中に出て見ると、そんな人間は全く無用の廢物だといふことを知らされて大に面喰つた所で、それに私の罪ではない。私はたゞ誰れかの罪の被害者

なのである。

が幸か不幸か、私はそんな風に發達はしなかつた。父母、祖父の次ぎに、私の知つた人間が淸正であつたに拘らず、私は淸正の風采にも持物にも生活にも同情しなかつた。尤も淸正が何んな生活をしたか、私はちつとも知らなかつたのだが、その風采と持物とで、子供の私にもそれが想像されたのであつた。朝鮮で虎と戰つたために一本の刃が折れたといふ長い鎌鎗を小脇に抱ひ込んで、烏帽子巾のシルクハットともいふべき馬鹿高い奴を頭にのせて鎧陣羽織に身を固めた姿の人間が何をする人間であるかは、子供の私も直覺的に悟らせられたのであつた。つまりそれは『人殺し』のいでたちであるといふことを、遺傳的にすべての子供は知つてゐるのである。(かういふ扮裝で敵を威嚇することの出來たのも、つまりさういふ遺傳的の知識が相手方にあるからである。)

そんな文化的殺人者を偶像として與へられ、それが、私の知覺の少しでも備はると同時に、第一に與へられた幻像であつたに拘らず、私がその淸正の風采にも持物にも生活にも同情しなかつたといふことは、即ち、私が淸正として成長しなかつた所以であつて、それは、殆んどすべての子供が五月人形を與へられてゐるに拘らず、大抵五月人形にならずにしまうのと同じ理由に因つたに相違ない。

人間は社會生活そのものに於て生きやうとする傾向を持つものである。(その筈である。さうでなかつたら、人間は社會を作ることも、生存をつゞけることも出來ない譯である。)この傾向は、人間が或る時代、或る場合に於て殘忍に、社會的生活それ自身に反する生活を强ひられることはあつても、結局、彼等をその本來の生活に立ち戻らしめるものである。軍國々家の敎化は、即ち、人間をその社會的生活そのものから完全に超越せしめる力を持つてゐたのであるが、それでも拘らず、多くの人間は、依然として社會的生活そのものに執着して、互に殺し合ふことよりは、互に生きること

を助け合ふ生活に沒頭してゐたのであつた。

さういふ不心得の人間の一人として、子供の私に、錦襴羅綾のいでたち、キラ〳〵ひかる鎧鍄、ヒラ〳〵ひらめく旗差し物……そんなものに、左様の興味を持たなかつた。第一、その清正の人形の面相——太い眞黒な眉を怒らして、精神病者が荒れ出す前のやうな眼付をして、顎一杯に口を結んで、毛蟲のやうな八字髯を生やして、子供の私の知る限りでは、生きた人間のうちには到底比較を見出すことの出來ないやうな不自然の面構に、子供の私は到底同情すること出來なかつたのは當然である。軍國主義の美學によれば、あゝいふ相貌は、人間的威嚴の極度を示してゐるのであらうか、無論、子供の私には、そんなことはわからないし、そんな顔を見れば、たゞ人間の本性に從つて、やつぱり、人でも殺ろし相な恐しい顔だと感ずる——といふよりは、顔だと感ずることが出來ないほど、いやな恐ろしい何かだと思ふ——に過ぎないのである。軍國主義の教化に從へば、さういふ首に對しては、威嚴を感じ、尊敬の念を起し、畏服の心理を生む筈であるが、子供の私は、その首を、その人形が壞はれた後に、極端に侮辱した方法で玩弄物にしたことを覺へてゐる位、そんな軍國主義的美學に反抗したのである。

前にもいつたやうに、私の玩具箱には、軍國主義的玩具は一つもなかつたが、たゞ例の清正の持つてゐた長いキラキラと光つた一本缺けた鎗鉾だけは、清正の首が、侮辱されるには餘りに原形を失つた後までそこらにころがつてゐたやうに記憶する。一本の鎗がそんなに長く保存されてゐたといふことも、私達がそんなものに興味を持たなかつた證據である。子供に興味を持たれた玩具は、そんなに長い壽命を與へられるものではない。

とはいふもの、軍國文化は、子供にとつても大人にとつても確に一種の魅惑である。第一に軍國文化を根柢づける軍

國的行動そのものが、人間や動物の本能的傾向に投合した行動の組織的連續そのものなのである。

人間は元來戰鬪的生物である。胎内にあつては母體と戰ひ、胎外に出れば父母、兄弟、乳母、子守と戰ふのみでなく、手にふれるものを悉くその敵のやうに掴み取り打ち壞はさうとする。もし社會的生存の組織が彼れに何にも教へなかつたら、彼れは、徹頭徹尾戰を事とするタンクのやうな生物と發達するであらう。社會的生存の組織のうちに、彼れのあらゆる行爲は自然的に又人爲的に選擇され、漸次に闘戰的のそれが淘汰されることによつて、彼れは、現にあるやうな、臆病にして平和な生物と發達したのである。

然るに、その淘汰をあべこべに行ふのが即ち軍國的組織である。人間の行動から、漸次に、その平和的なものを淘汰して行つてそこに戰鬪的行動だけが選擇され、排列され、調節され、訓練され、昇華されたのが即ち軍國的生活である。

普通の人間が軍隊に收容されると、先づそれまで彼れの生きてゐた娑婆の生活を一切すて去れと命令される。それまで着用してゐた着物が、兵營の外でぬぎ捨てられなければならないやうに、すべてのものが兵營の塀を境として取り代へられる。立派に適用してゐた言語までがその塀の内では、全く通用しないと宣告される。それらのものが、悉く切りすてられるのは、それが戰鬪の生活そのものの様式又は戰鬪の生活に立脚する文化様式に反するからといふのである。それは常人にとつて確かに苦しい人爲淘汰である。けれども、さうして築き上げられた軍國的様式は、それが終局目的とする軍國的行動そのものと共に、一種の魅力を以て極めて單純にさうして幼稚な人間に迫るものがある。

この魅力は、人間的性質の弱點を、社會的生存が矯正するのとは正反對に、その弱點から出立する行動并に文化の建設に人間を導く力である。社會的生存は、みだりに戰鬪行動を挑發するやうな心理的傾向を防遏して、人間に、殺人器

具を恐怖する心を起さしめる。然るに、軍國組織は、その反對に、殺人器具を文化的に發展せしめることによつて、その殺人器具に對する恐怖心を没却せしめるのみならず、それと同時に、その殺人具に對する文化的憧憬を起さしめ、その結果、殺人行爲に對する禮讃を誘發するのである。刀を文化的に發展させて、終ひに、その刀にのみ人間的精神――大和魂――が潜在するといふやうな思惟を起させ、その結果、人間的精神――大和魂――を發揮しやうとするには、その刀を振つて、刀の能力を發揮せしめる外にないといふやうな危險思想――抽象的に危險なのではなく、外科的に危險な――に導くのである。村正が作つた刀は、それを持つ人間をして、人を斬らしめなければやまないといふ傳説は、即ち軍國主義の眞實を自白してゐるものに外ならない。精神が人間に宿らずに、殺人の武器に宿り、人間がその精神に隷屬することによつてその武器に隷屬するに至るといふことは、その『武器』といふ言葉の代りに『組織』といふ言葉を用ゐれば、そのまゝ軍國主義の眞實に該當するのである。

人間が自分の生活の用具を神化するのは、その用具がない時には、自分の生活が成立しないほど、その用具の地位の重大なる爲めである。農夫は、生產用具を神聖視し、武士は殺人用具を神聖視する。

それが逆に働いて、用具を神聖視することの爲めに、その用具の作用する行動を神聖視するのも亦當然である。百姓は鋤や鍬を神聖視することのために、農事を神聖視する。武士は刀劍を神聖視することの爲めに關聯して戰闘を神聖視する。

たゞ戰闘階級は、支配する階級であるために、自分の神をどこまでも向上發展させる精神力と經濟力とをもつが、生產階級は、支配される階級である爲めに、自分の神も亦、自分と同じ慘めな生活程度に停滯せしめる外はない。軍國階級は、戰闘行爲並びにそれに立脚する生活組織の哲學、宗教、科學、藝術を無上に發展せしめることを得るが、生產階

級は、彼れ自身のそれらのものを何一つもつことは出來ない。軍國階級の戰鬪用具の如きは、金銀珠玉を自由に使用して、高級な文化的創作たらしめるが、百姓の鋤鍬や肥桶には、金銀珠玉は愚か、漆蒔繪を用ゐたものさへない。同時に、軍國階級の生活は、それを高調する堂々たる哲學を有つが、百姓や工匠の生活は、それに加擔する何の哲學も持つてゐない。

が要するに戰鬪行爲は、人間的行動といふよりは、寧ろ動物的行動といつた方が當つてゐる程、單純で、一本調子の行動である。人間をあらゆる社會生活の生活から引離して、全く無智蒙昧の生物たらしめても、彼れは戰鬪することだけは間違ひなく出來る。(反之、生物を、社會的生活に引入れゝば入れるほど、戰鬪的衝動と能力とは失はれて、恐怖心と憶病心とが養はれ、彼れを平和的生活に執着せしめる。それほど一本調子の生活なので、軍國生活の興味も亦甚だ原始的である。

それは、軍國階級の好む色彩を見てもわかる。軍人の服裝でも明かだが、金ピカや眞赤や眞青や、眞黄色や、われ〳〵が日常の生活の趣味では、到底採用されない色彩が、不遠慮に、臆面もなく使はれてゐる。野蠻人や赤坊が好む單純な、刺激の強い、原始的色彩が、軍人の服裝に用ゐられることは昔も今も少しも變りはない。色彩の然る如く、線も輪郭も、軍人のそれは古今を通じて一貫した原始的典型を保つてゐる。野蠻人が色土を裸體に塗つて描き出す裝飾のやうな裝飾が、軍國階級の服裝の飾裝である。軍人の兜は、昔のも今のも、アメリカインデイアンやアフリカ人の、羽毛を飾つた兜の傳統を引いてゐるのである。

諏訪法性の兜とかいふのが、今を去る事四百年前の日本にあつたといふのを、芝居などで見ると、金色燦爛として、そ

れを飾るに房々とした純白の毛をもつてしてゐる。ところが、今もロンドンには、全くその四百年前の日本の軍人の兜と同じ要領の、金色さんらんとして純白の毛が房々とそれを蔽ふてゐる兜を被つた馬上の兵隊がホースガードといふ兵營の門の左右に、作り物のやうに身じろぎもせずに控てゐるのである。全く舶來の五月人形である。それを以て見ても、軍國主義なるものが時代を超越し、——又は錯誤し——國境を無視し、古今東西を通じて同じ典型のものであることがわかる。

人間の感覺が進歩して、色彩の趣味が發達し、單純な黄とか赤とか青とかをそのまゝ採用することが出來なくなつてゐるにも拘らず、軍人と赤坊と野蠻人とだけが、依然として、眞赤、眞青、眞黄色ですまし込んでゐる。もし軍人でなく、赤坊でなく、野蠻人でなくて、あゝいふ色彩と輪廓と意匠とをもつ服裝で往來を歩いたら、恐らく精神病者と思はれるであろう、普通人は、正氣であつて、軍人でなかつたら、決して繪の具皿のやうな色彩を呈するものではなく、かぶと蟲のやうな輪廓をもつものではない。

軍國組織が最高調に達した時代には、その階級の人々は、悉く何等かの殺人器具の文化的に發達したのを帶同する習慣であつたことも世界共通であつたが、軍國々家の最盛期が過ぎると共に、その習慣の廢たれたことも世界共通である。その世界共通の心理を無視して、今も尙ほ、同じ危險器具を文化的によりは寧ろ實用的に帶同してゐるのが軍國階級である。今日、大小を手挾んで大道を濶歩したら、これ亦、精神病者と鑑定されるであらうが、それを健全な精神狀態の下に斷乎としてやつてゐる勇氣が即ち軍國的勇氣である。この勇氣を造形美術で表現したのが五月人形である。

五月人形の軍國主義的色彩が子供や野蠻人や精神病者の原始的感覺にとつて蠱惑的であることは、即ち、軍國主義が、子供らしい、又野蠻人らしい、又精神病者らしい單純な民族的集團にとつて蠱惑的である所以である。

子供の私がその誘惑に陥らないで、高價な五月人形——人間にとつて軍國主義が高價であると同じ意味で高價な——よりも、木槌や大八車の玩具を好んだのは、それを作つてくれた老爺が階級的にアンチ・ミリタリストに屬してゐて、私はその孫だからでもあらう。（をはり）

吉田絃二郎著

十二版

芭蕉

四六判上製

定價壹圓六十錢

送料十七錢

俳聖芭蕉の晩年を流れた思想は何故もつと人間らしき生涯を送らなかつたかの悔恨の涙であつた。吉田氏はその風格にあこがれて彼が臨終の胸を掠めた淋しき人生觀に筆を及ぼし、そしてその弟子「路通」を配して傾向的に二人のニヒリストを描く、芭蕉研究の盛なる今日、先づ第一に奬めたきは氏が感激にあふれた本書である。「芭蕉」篇以外氏の近作中の特に秀れたる數篇を附す。

吉田絃二郎著

タビテと子たち

（十版）

定價壹圓八十錢

送料十七錢

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

福田徳三著

社會運動と勞銀制度

（定價參圓九拾錢
送料貳拾壹錢）

改訂版漸出來

社會運動は近來やゝ下火になつたやうな觀あれど、なか〳〵さうではない、頃者社會運動の戰術は愈々辛辣となり、勞働戰術が花々しき戰より贅實なる功果を擧ぐることに努力するやうになつた。本書は博士多年の研讃たる、社會運動と勞銀制度の基調をなす根本論を一書に纏めたる有益無二の文献だ。

福田徳三著 **社會政策と階級鬪爭**（二十七版）定價參圓 送料廿壹錢

東京芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二

研究社

英文學叢書

東京高等師範學校教授 岡倉由三郎先生
東京帝國大學文學部教授 市河三喜先生
主幹

豫約締切期日
十一月卅日限

第三輯

豫約會員募集

不肖研究社、我文化が英米に負ふ處多年而も其の精華にして魂の糧たる文學を閑却するを遺憾とし岡倉・市河兩先生主幹の下に「研究社英文學叢書」を行ひ發表するや、忽ち江湖の視聽を集め、學界及出版界空前の壯擧させられ、我が文化史上の大金字塔を以て擬せられたり。爾來、兩主幹及執筆各大家が學殖を傾けらるゝ献身的努力と、弊社が此の光榮に酬はんとする犧牲的努力と、全社會的識認と讃辭との中に叢に第一輯廿四卷成り近く第二輯十五卷畢れり、而も弊社は更に兩主幹に請うて、玆に第三次事業に邁進す。讀者諸賢、冀くは弊社の微意を諒とし、更に前兩輯に倍するの高顧と堅援とを賜へ。

贈呈！ 本叢書總索引（約五百頁）

體・裁・清・雅・ 四六新形池田畫伯裝幀、上等クロース優麗典雅、新鑄ポイント式活字を用ひ印刷鮮明英米版を凌ぐ。

會・期・一ヶ年・ 自大正十三年十二月至十四年十二月完結毎月二册（九回）又は一册（四回）宛配本

會・費・低・廉・ 一時拂金六拾圓、每月拂最初申込金五圓五拾錢（終會費に充つ）以後每月五圓五拾錢宛十一ケ月拂込

內容見本 本叢書の內容見本及規定を詳記せる美麗なる册子御申込次第進呈す

研究社英文學叢書部

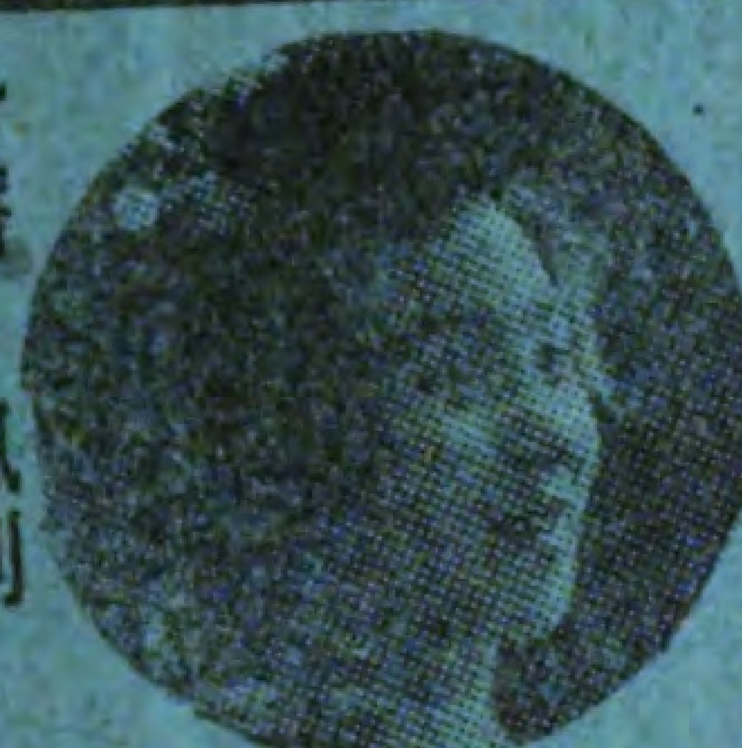
東京市麹町區富士見町六丁目 電話四谷二九五五 振替二八六〇一

愉快の親玉!! 滑稽の大

面白

面白倶楽部の新年號を、是非誰方も御讀み下さい！
今から到る處で大評判お待兼！【十二月五日發賣】

新年號は増大號で附録つき



滑稽小説、漫畫物語、人情美談、滑稽落語、新小説、歴史小説、
武俠小説、戀愛小説、奇談、怪談、探偵小説、武勇講談、
その他……面白いものは何でもあります。

……その中の大表的選り抜き七代傑作……

滑稽—諷刺◆坂東俠客陣【武俠小説】……吉川英治

武勇—戀愛◆戀にらふす貴族の娘【革命哀話】……益田甫

◆夜寒讀本【[illegible]小説】……門脇陽一郎

探偵—怪奇◆飛模樣五人女【滑稽小説】……中條仙太郎

人情—痛快◆殺人魔【探偵小説】……大瀧邦夫

面白いこと◆薄田森之助【新作講談】……鹿島魯山

天下無比！◆妖婦秘事記【謎新異聞】……大倉桃郎

阿部次郎著

北郊雜記

◆定價壹圓九拾錢 菊半截◆
◆送料十五錢 天金美本◆

十六版

著者が折にふれ、感興に應じて執筆した水晶の如き透徹した氣品ある評論と隨筆だ。氏が論壇に於て第一人者なるが如くそのスッキリした文章を通して氏の人格主義乃至藝術觀、人生觀を知ることの出來る高雅な隨筆だ。

東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

村松梢風著

近世名匠列傳

定價貳圓參拾錢

送料十七錢

四六判上製

美術に志有る者の必讀書

本書は明治年代の美術界各方面に活躍して最も傑出せる柴田是眞、島村俊明、狩野芳崖、橋本雅邦、木内喜八、竹内久一、森寛齋、旭玉山、田崎草雲、海野勝珉の十大家の評傳書家あり、彫刻家あり、彫金家あり、細工人あり、何れも一代の巨匠にして、其の多くは未だ完全なる傳記を有せざる人々である、著者數年來爰に着眼し、殆んど寢食を忘れて材料蒐集に努力し爰に始めて本書は生れたのである。材料正確、興味豐かにして而も藝術的匂ひの高き筆致は、忽ち人を魅了し、天才藝術家の性格及び生涯を寫し得て遺憾がない、世の美術研究家は論を俟たず、美術の愛好者たると否とを問はず、社會の各方面の人々に推奬すべき名著である。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

ストリンドベリイと正宗白鳥

私は遂に恐るべきものを見た。現代の日本に我々と共に生ける天才を見た。正宗白鳥氏の戯曲「人生の幸福」は、ホテル演劇場で新劇協會に演ぜられて、異常な舞臺效果を收めた。この戯曲の上演によつて、天才白鳥氏は凡百の能才作者との間に實に明らかな一線を劃して見せた。根底的な本質的な段違ひを實に明らかに示した。從來白鳥氏の小説に漂つてゐた心理的な妖氣をまざ／＼と見せつけた。私には數年前の白樺演劇團の「稻妻」以來の感激である。勿論私は直ぐストリンドベリイを聯想した。實際日本は勿論世界の何處を捜取しても、白鳥氏に比類すべき戯曲家はストリドベリイの外にはないと思はれるからである。その天才的なる點に於て。深く冷い點に於て病的心理の驚くべき取扱ひ方に於て。殘虐なる人生の見方に於て。しかし白鳥氏はストリンドベリイより更にねと／＼無氣味な粘つた空氣を持ち彼よりも『救ひ』がない、何處までが正氣で何處からが狂氣なのか。何處までが現實で何處からが夢幻なのか何と驚くべき心理の凝視であらう。正しく白鳥氏は邪神の眼鏡をかけてゐる。天才の業と云ふ外はない。

この「人生の幸福」が現代日本文壇の作品なら、私は日本文壇に失望することを止めよう。これが既成文壇の作品なら、私は既成文壇に礫を放つことを止めよう。とにかく私は鞭で打たれて動けない氣持だ。苦しい、そして喜ばしい感動だ。私が文藝に志を立てゝゐない男なら、人生が厭になり、正氣と狂氣の間の妖雲にとざされたゞけで、すむだらう。しかし私はそれに加へた苦しみを味はねばならないのだ。首を下げて白鳥を禮拜するのはいゝ。しかし自分はどうなるのだ。顧みて自分に絶望を感じ、自分の仕事が厭になり、打挫かれた氣持で動きがとれない。矢張天才を身近かに見ない方が幸福らしい。目前に天才を見るよりは「かよ子」のやうに絞殺されるのが「人生の幸福」らしい。そして見た以上は「かよ子」が豐次郎を殺したやうに、天才を殺すのが「人生の幸福」らしい。正宗白鳥氏は實に憎むべき男だ。（川端康成氏評）「人生の幸福は」正宗白鳥氏著「或る心の影」の書中に收められている、「或る心の影」は定價壹圓六拾錢送料十五錢改造社發行

法學博士 穂積重遠著（新刊）

定價金拾圓　送料參拾六錢

離婚制度の研究

廿年の苦心に成る一大名著

斯界の一人者たる穂積博士が大學生時代より現在に至るまで廿年の久しきに亘りて研究された比較離婚制度論で、世界的に權威ある一大名著です。我國往昔より現在に至る迄の離婚法、慣習法は勿論、基督教の婚姻並解消主義、英吉利、佛蘭西等の離婚法、其他勞農ロシアの離婚法、諸威の新婚姻法を詳細に研究して、婦人の社會的地位の進化の徑路を示す。蓋し著者は離婚制度の研究によりて社會問題及婦人問題解決の基本を見出さん爲めに、其研究法を從來學徒の取りたる軌道と異にせり。本書は總ての意味に於て「ベーベルの婦人論」と東西の双璧と稱さるべき意義ある大著であるばかりでなく、離婚法の判例の大多數を舉げたれば司法官、辯護士に於て無二の伴侶たるばかりでなく、小は一村役場より學生、會社、大學、官衙に至るまで必備の良著です。加之、行文の流麗なるは全く類書に其比がない。

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

熊谷一彌著

テニス

(改造社運動叢書第壹篇)

改訂拾九版

今回のオリンピック競技は勿論、世界の男女競技のすべてが硬球式になりました、日本でも軟球を用ゆる人は時代後れです、新に興りて全世界の球界を征服したる此硬球式を斯界の世界的名選手が心血を濺いで書いた名著です、今後の庭球は本書なくしては語れません本書なくしては競技も出來ないだらうと思はれる我國に唯一の硬球式テニスの權威ある著書です。

定價貳圓參拾錢
送料拾七錢

(四六判上製天金
口繪拾三葉挿入)

發行所 東京芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 電話高輪四九九三 改造社

改造社隨筆叢書

(最新刊)

武者小路實篤著

筆の向くまゝ

(第五篇)

定價壹圓拾錢
送料拾壹錢

深き人類愛に徹せる其の思想、理想の實現の爲めに絶えざる精進の其の生活、吾が武者小路氏の詩、文、創作が人を動かすのは當然である。本書收むる「アンリ・ルーソーの畫を見て」「詩十二」「詩と感想」雜感」「舞臺監督に就て」時事雜感その他」「舟木重雄君」武郎さんについて」ある對話「詩二十五」「新らしき村小品」「筆のむくまゝ」「記憶のきれ〴〵」の十三篇。論ずる所他方面に亘り、詩、論文、感想と形式もいろ〳〵である。それだけ氏の最近の眞面目を髣髴するものである。

第壹篇 長谷川如是閑著 **犬・猫・人間** 四六判並製 定價壹圓八拾錢 送料拾參錢

第貳篇 堺利彦著 **野外劇の一幕** 四六判並製 定價壹圓五拾錢 送料拾參錢

第三篇 中澤臨川著 **嵐の前** 四六判並製 定價壹圓四拾錢 送料拾參錢

第四篇 高濱虚子著 **朝の庭** 四六判並製 定價壹圓七拾錢 送料拾參錢

第六篇 河東碧梧桐著 **二重の生活** 四六判並製 定價壹圓貳拾錢 送料拾參錢

發行所 東京市芝愛宕下町 振替東京八四〇二 電話高輪四九九三 改造社

メレジュコーフスキイ著
昇曙夢譯

トルストイとドストエーフスキイ

其生活と藝術

（四六判六百頁 函入洋布特裝）

定價三圓 送料十八錢

出づべくして出でざりし世界的大批評文學の完全譯!!

現代の最大批評家最大の思想家として世界的に名聲高きメレジュコーフスキイが、畢生の努力を傾倒したものは本書である。近代ロシヤ文學の二大巨人の生活と藝術とを批判解剖して此書程深刻に達したものは未だ世界を通じて絕對に無い・また著者の主觀的心理批評がこの書くらい最高の詩美を帶びて現はれたものは他に見ないところである。然もその透徹した藝術批評の底に全人類の運命に對する豫言的暗示を以て、東方精神と西歐精神の矛盾を解決し來るべき「第三の聖靈の王國」を教へてゐる。批評にして批評を超ゆる本書こそ正に精讀を薦めたい第一の書である。

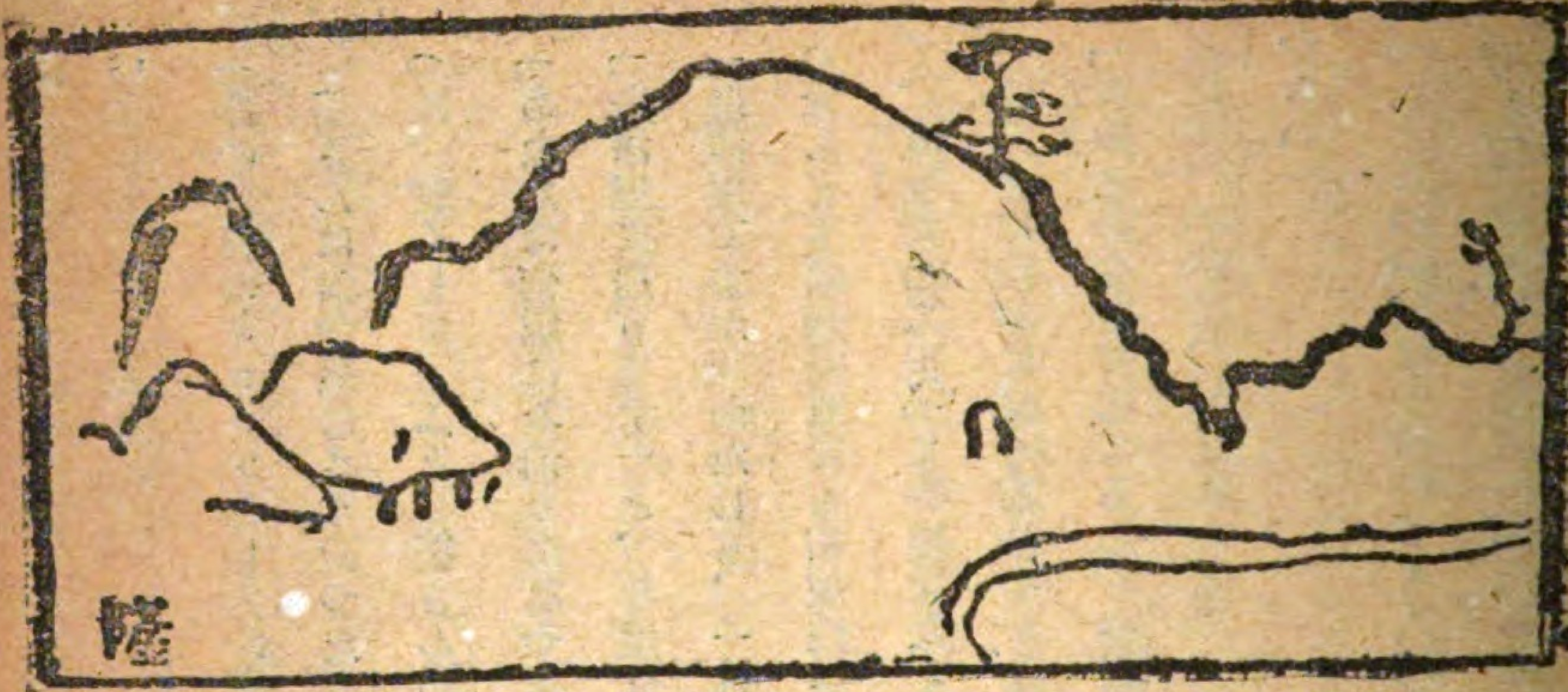
ベルグソン著・廣瀨哲士譯

笑の哲學

定價二圓 送料十二錢

本書は現代哲學界の最高權威たるアンリ・ベルグソンの滑稽と喜劇に就ての透徹した研究であり、即ち笑の哲學である。造化の笑、言葉の可笑味、シチエエションの可笑味より、更に高級なる喜劇の滑稽に至る迄悉くこれを氏獨得の哲學體係に網羅し、進んで笑と社會生活、藝術の本質と笑文學の關係等の諸問題を柔軟自在、明確に解答を與へゐる。文學、藝術、哲學に志す人は勿論敢て萬人の必讀を薦む。

東京神田表神保町
株式會社
東京堂書店
振替東京二七〇番



癌その他

正宗白鳥

青褪めた顏や痩せた身體を美しく粧つた多くの外來患者の中に、一人、頭髮を無雜作に束ねて白粉氣もなしに、艶のない銘仙の不斷着のまゝの、痩衰へた中婆さんがまじつてゐた。待合室の入口にしよんぼり坐つて、をり〳〵光澤のない目を凝らして周圍を見廻してゐた。

「あなた樣はどこがお惡いんで御座いますか。」

と、側にゐた稍々若い婦人が、退屈を紛らすために訊ねると、

「癌です」と、婆さんはぶつきら棒に答へて、目を外らした。

「……」訊ねた女は、浮かり話しかけて相手の感情を害ねたのを氣にしたやうに、ちよつと顏を紅らめたが、やがて、

「あの。……癌でもこちらで手術して頂けば、よく癒るんで御座いますつてね。わ

たしと同じ宿に泊つてゐらつしやる方も、瘤の手術をお受けになつて、すつかりよくなつたと、大變喜んでゐらつしやいましたよ」と云ふと、

「あの、目のギョロッとしたお婆さんですか。……瘤は一度切つて取つても、また出來るんでせう」

婆さんは無愛想にさう云つた。相手の女も話の接穗がないので、口を噤んだ。診察の順番を待つてゐるは、時が永かつた。暫くして、ふと、婆さんの方から、

「あなたは何處にお泊りになつてゐらつしやいます？」と訊ねた。

「舟津屋に居ります」と、今度は相手の女が冷淡に答へると、

「舟津屋ですか。わたしも、一月ばかり前まではあしこに泊つてゐました。あしこは近くつてよろしいんですけれど、わたしどもは何時までも宿屋住ひをしてゐちややり切れませんから、鍛冶町の下宿へ移りました。部屋も夜具も汚くつて、食物だつて至つてお粗末なんですけれど、宿料がお安いんですから、……」

「ほんとに宿屋に長くゐちややかなひませんわ」

「有餘るお金を持つてるんぢやないんですからね」婆さんは棘々しく云つて、着飾つた患者が入つて來るのを見上げてゐたが、やがて、しほれた聲で、「わたしどものは、あちらからもこちらも、借りられるだけ借りて來たお金なんですからね」

「……この病院は手術料でも入院費でも大變に高いんで驚きましたわ」

「どんな難病でも此方へ來たら癒して貰へるつていふ評判を聞いて來たのですけど、わたしどもも貧乏人の寄付ける所ぢや御座いませんです。千圓といふお金はもう疾つくに費つてしまひました」

婆さんは、千圓といふ言葉を痛い所へ觸つた時のやうな聲音で口へ出した。

「此方へ入らつしやる方はどなたでもそのくらゐはお拂ひになるんでせう。でも病氣が癒りさへすれば、お金には替えられませんわ」

「さう思つて通つて來てゐるのですけど、當てになりやしません。わたしなんか、今にお金の工面が盡きたら、死ぬるのを待つばつかしです」

さう云つてゐるところへ、順番が廻つて來たので、婆さんは稍々力を得たやうな顏して立上つて診察所へ向つた。

「あの人ですよ。此間の晩そこの廊下でいきり立つて大騷ぎをしてゐたのは」と、患者の一人は侮蔑を含んだ目で婆さんの後を見送つてから、側の一人に囁いた。

「あの人は大抵は朝早く、一番手に來てるんですよ。それで、何時も入口の同じ所に坐つてゐますわ」

「あの人の病は性質が惡くつて手術が出來ないんでせう。それで、ラヂュームで治療をして貰つてゐんですつて。此間の晩、わたしが退院する前の晩だつたのですがね。あの人はラヂュームをかけて貰ふ日取りがその晩と極つてゐたので、十一時頃に夜具を持込んで用意をしてゐたんですつて。さうするとそこへ、品のいゝお婆さんが、やはりラヂュームで治療して貰ふために、娘に連れられて自動車でやつて來たんです。院長さんの思違ひか、患者の方の間違ひか二人の治療の日取りがかち合つたのです。ラヂュームは前もつて病院から會社へ申込んで置いて借りるので、それに、一晩に二人の治療を一しよにする譯には行かないんですつて。それで病院の方では、成るべくお金持のお婆さんの方を宿めることにして、さつきの人は次の日に廻さうとしたらしんですが、さうすると、あの人がいきり立つてどうしても承知しませんの。自分は遊びに來てるんぢやない。院長さんが今日の今夜治療してやるから來いと仰有つたから、夜具まで

持て來たのだ。一日遲らされてもわたしは大概諾惑すると、事務の人に喰つてかゝつて大きな聲を出して喚いたのです。病院でも仕末に困つたやうでしたが、どのお醫者さんだか機轉を利かせて、お金持の患者さんを呼んで、今よく調べて見たらあなたの方が明日になつてゐるんですが、十三日と申上げたのを十二日とお間違へになつたんぢや御座いませんかと云ふと、その婆さんはそれは困つたことになつた、自動車も返したのだしと、娘さんと二人で當惑してゐなすつたのだけど、別段病院へ苦情は云はないで、ぢや仕方がない、電車で歸りませう。まだ終電車には間に合ふでせうからつて、おとなしく引下つたのですつて」

一人の患者が小聲でこんな話をすると、

「お金のある方は鷹揚で御座んすわね」

と、他の一人は感じたやうに云つて、「でも、病に罹つたら、どうしたつて癒りつこないつて云ふぢやありませんか」

この二人の話に耳を留めながら、自分の順番を待ちあぐんでゐた側の若い患者はかすかに欠伸を洩らした。

宿屋の主婦

菊子は愛宕下の燒跡で宿屋をはじめようと思ひついて、知合の頭立つた人々に相談をして、二月頃から建築に取掛つて眞夏には工事を終つて、必要な家具をも略々整へた。

彼女は若い時分には、新橋で相當に名前の賣れてゐた藝者であつた。ある商人に引かされてから間もなく、その旦那と一しよに滿洲へ渡つて溫泉旅館を經營して、殖民地特有のぼろい儲けを貪つてゐたのであつたが、數年前に旦那に死なれると、要するに旦那の傀儡として腕を揮つてゐたに過ぎない彼女一人では、稼業が持ちこたへられなくなつたし、それに四十を越してまで他郷で氣苦勞をするのは愚劣な事と、多年突張つてゐた慾の皮も、俄かに弛んで來たので、いい引受け手のあつたのを幸ひに、相當な價段で讓渡して、東京へ歸つて來た。自分には實子がないのだが、早くから寡婦となつてゐる病身の姉と、その子供の三人をも引取つて育てゝゐるので、家の中は賑かだつた。

本郷町に手頃な住宅を構へて、四五軒の借家をも持つて、一生衣食に窮しないだけの用意をして氣樂に世を過すことになつて、彼女は長年の重荷をおろしたやうな氣で、ホツと息を吐いたが、それと同時に自分の容色が衰へて婆さんじみて來たのを感じない譯に行かなかつた。こんな筈ではなかつたのにと、自分に老いの迫つて來たのに驚いて身慄ひした。十數年滿洲の荒い風に皮膚の艶も血の氣も吸ひ取られて、身體中がガサ〳〵してゐるのに、自分でも氣がついて、それがまたたまらなく心淋しかつた。

「お前だちの學資の出惜みをすりやしないけれどね。生やさしいことでお金が出來たのぢやないから、そのつもりで確り勉强しなきや困るよ。人に負けたりなんかしちや叔母さんが承知しないよ。叔母さんがお前だちには分らないひどい苦勞をして來たお蔭で、お前だちは氣儘な學校通ひなんかしてゐられるんだ。わたしがゐなかつたら、お前だちは、人足か電車の車掌にでもならなきや御飯が食べられないんだよ」と、機嫌の悪い時分には姪などに八つ當りの憎まれ口を叩くこともあつた。

でも、昔の朋輩の多くが、夭死をしたり、悲慘な境涯に落ちたりしてゐるのを聞くと、自分の身がまだしも運のいゝ

のを思つて、自から慰めることもあつた。しかし、去年の震災は、彼女の持つてゐる幸運をも滅茶々々にしてしまつた。住宅も貸家も、滿洲から持つて歸つた金目のある器物をも、一切合切煙と灰とにしてしまつた。「あのまゝ滿洲にゐればよかつた」と、彼女はくど〳〵と役に立たない後悔をもしたが、「わたしも、も一稼ぎしなければなるまい」と、暫く眠つてゐた元氣を出した。

三四千圓ばかりの資本で、うまく行けば月に二三百圓くらゐは利益が上る筈の玉突屋をはじめたらと勸める人もあつたが、滿洲でうまい汁を吸つて來た彼女には、玉突屋なんぞは商賣としても素人くさくつて、ちよつと手を出す氣にはなれなかつた。と云つて、料理屋や待合となると、事が面倒だつたので、とに角多年習ひ覺えてゐる宿屋稼業を東京の土地でやることにした。

餘財を掻集めたり、滿洲での知合ひの重立つた人達に縋つたり、殆んど自分一人で驅摺り廻つていろ〳〵に資本の工面をして、彼女の晩年の大事業に着手したのであつたが、旅館の形だけが出來上ると、それは早速知人の媒介で某工銀行へお嫁入りさせなければならなかつた。

彼女自身の名前にちなんで、菊家と名づけた。今樣の旅館風がギコチなくつて殺風景なのを嫌つてゐた彼女は、自分の好みのまゝに設計したのであつたが、玄關から部屋々々の樣子がどことなく待合風になつた。地所も狹いし、どうせバラツクに毛の生へた建築であるのに、猫の額くらゐな中庭をつくつて雅致のありげな飛石や燈籠を置いたり、床柱に曲りくねつた一癖ありげな材木をつかつたり、二階に玩具みたいな手摺を設けたりした。門と玄關との二間ばかりの通路の左右にごた〳〵と樹木を植ゑて、小さな家の中を奥床しく見させようとした。建築後間もなく、彼女に取つて多少の後援者と見なされてゐた老人がわざ〳〵見に來て、

「主婦の趣味が一月で分つて面白いね。かういふ洒落れた宿がこの邊にも一軒くらゐあつてもいゝだらう。案外繁盛するかも知ないな」と、半ば冷かし氣分で云つた。

「どうせ間に合せの安普請で、彼方のやうにやまゐりませんよ。でも、わたしには痴人相應の理解が御座いますから、末永く見てゐて下さいましな。」

「ムン、そのことだ。通り一片の宿屋で、田舍の田吾作を相手にして、晩餐を一度食外しても宿料を減して貰ひたがるやうなお客を泊たつて爲方がないね」

「わたしどもでは世間の旅館とは違つた趣向にいたしませうよ。わたしの方でも氣輕で、お客様にも餘計な御散財は掛けないことに」

彼女は、簡單な朝餐以外には食事は宿の方で出さないで、泊り賃と席料だけを取ることに極めて、新時代のやり口らしい氣持になつて、一ぱし知慧を働かせた氣になつてゐた。しかし、それは客の便利を計つたのではなくつて、腕のいい料理人を雇つて料理場の設備をするのは、面倒で多額の經費の掛るのを恐れたゝめであつた。

方々の知人に開業披露の手紙を出して、客の周旋をも依頼したのは、八月のはじめであつた。紹介のないフリの客は泊めないと初めのうちは頑張つて、折角來て呉れたものを二三人斷つたくらゐであつたが、料理屋とはちがつて、醉狂な人がわざ〳〵泊りに來てくれる筈はないので、一月あまり經つても部屋はガラ空きだつた。雇つた女中も毎日掃除をさせられるばかりで實入りはちつともないのに張合ひが拔けて、「冬になつて議會が開いたら、滿鐵のえらい方が大勢入らつしやるんだよ」と主婦に云はれても、その冬の來るのを待兼ねて暇を取つて出て行つた。

菊子女將もいらだちだした。そして、偶然入つて來た客でも、身裝さへ見窄らしくなければ泊らせることにした。す

べての室數が十二三あるうちで、辛うじて二室くらゐがふさがつた。

「宿代はいくらです？」と、客の方から豫め訊ねると、

「一泊三圓五十錢と四圓と四圓五十錢と三いろにお極めしてゐるので御座います」と彼女は答へた。

が、支拂ひの際には、宿料の外にそれと同額の席料を書込むので、どの客もみな闇打に會つたやうに驚いた。

「飯も食はせないで一日八圓もふんだくるとはひどいことをしやがると」、女中に向つて怒つた客もあつた。そのために、女中はお祝儀をフイにされた。

「家の中が待合みたいだからつて、待合なみに一時間いくらの高い席料を取られちやたまらない。柔い夜具の上にかうやつて寢てゐたつて、女がそこへ來る譯ぢやないんだからね」ある客はさういつて「それとも誰れか呼んで呉れるのかい」と、場馴れない田舍出の女中に云つた。

「どうでございますか」

「主婦（おかみ）にさう云つて御覧」

「へゝゝ」と、女中は笑ひにまぎらせたが、客が立つたあとで主婦にさう云ふと、菊子は「馬鹿にしてるよ」と、不機嫌な顔を見せたが、かねて腹の中にひそかに宿してゐた魂膽は、それであつた。この家がひとり手に建つたのぢやあるまいし、極つた宿料くらゐ貰つただけで引合ふものぢやない、日本の人間もこの頃はみんなケチ臭くなつたのか知らと、姉に向つて憤慨した。

一ころまぐれ當りに時々ふさがつた部屋も、九月の末から十月にかけてはガラ空きに空いて、強雨の降頻るをり〳〵は、あちらこちらに雨洩りがして、新しい天井や壁には汚染（しみ）が出來たので、彼女は氣を腐らせて、八ツ當りの荒い口

を、家の者に向つて利いて、わづかに鬱憤を晴らしてゐたが、昔は同じ家にゐた姉さん株で、今は烏森で可成りな待合を出してゐるある女から、ある晩電話が掛つて來た。

「あなたにお話したいことがあるのよ。お暇なら直ぐにいらしやらない？」

「さうね。わたし今ちよつと手が離せないんですけど」稼業が暇だと知人に見くびられてゐるのが業腹だつたので、咄嗟にさう答へて「お話と云つてどんなお話……」

「あなたに知慧を貸さうつて人があるんですけどね。あなたはその人に會ふ氣になれないの？」

「戯談でせう」彼女は笑つて、「そのことはまたの時にして頂きませうよ。わたしの家には文珠様がちやんと祭つてあるんだから、知慧に不自由はしないわよ。お金を貸して下さるのなら、早速拜借に上るのですけれど……」

「あなたは本當に慾一方なのね」と、相手は笑つて、「戯談は戯談として、明日でもお暇な時に遊びにいらつしやいな」

電話が切れてから、菊子は電話の意味に心を集めた。十何年か前、死んだ旦那と滿洲へつてつ走る前には、深い馴染を重ねてゐたので、その後もをり／＼思出に浮ぶことのあつたある男の昔の面影が、愛憎を伴つたいろ／＼な場景とゝもに目の前にちらついた。

「あゝ、いやなことだ。今さらそんなことが」

彼女はわれとわが心を叱るやうに呟いで、それよりも、燒失して財産を取返すための旅館稼業の隆興策を考へながら、氣晴らしに、階下から二階へとガラ空きの部屋々々を検分して、汚れたり亂れたりしてゐるところを見つけると、番頭や女中の名を呼立てゝ小言を浴せかけた。そして、最後に入つて行つた上等部屋の鏡臺の前に、ふと惹付けられたやうに蹲んで、鏡面にあり／＼と映つた自分の顔を見ると、不斷よりも心淋しい氣持がした。

破産

蠣殼町で可成り大きな店を持つてゐた相場師の山井は、店の常得意であつた伊澤の周旋で、大磯に手ごろな別荘を構へて、妻子をそこへ住はせて、自分は土曜毎に大抵は通つて行くことにしてゐた。

彼れの妻は芳町の藝者上りで、才氣の勝つた女であつた。左右前後を藝者家で取圍まれてゐる東京の本宅にゐて、小さい時から近所の風俗に馴染ませては子供の將來のためによろしくないといふ見識を有つてゐたのと、三人の子供がみんな蒲柳なのも氣遣はれてゐたので、彼女は二年ほど大磯に落着いてゐた。足腰の自由でない自分の老母を引取つて、一二人の下女を使つて、氣儘に豐かな生活をしてゐた。土曜の晩には夫が誘つて來た同業の知人や店の者と一しよに花牌をひいて夜明しをすることもあつた。近所の娘たちとも親しくして氣前のいゝ奧樣として崇められるのを喜んでゐた。呉服屋の出入りも頻繁でこの田舍町の呉服屋への支拂でさへ月々數百圓に上つてゐた。それでも都戀しくつて、知人の祝儀不祝儀のお義理のために、子供を下女まかせにして、自分だけ上京した次手には、五日も十日も遊んで來ることがあつた。

さうしてゐても、彼女はまだ退屈であつた。ちよつとでも口を休ませ身體を休ませてゐると、何か物足らないやうな張合ひのないやうな思ひに襲はれた。それで、一ころ身を入れて習つたことのある琴の稽古を、大磯に假寓して指南の看板を出してゐる人について、新たにはじめることにした。

「わたしどもゝ主人の商賣は明日の日どうなることやら分らないんですから、自分の力で口過ぎの出來るやうに身に藝をつけて置きたいんで御座いますよ」と、懇意になつた近所の別莊の妻君に向つても云つてゐたが、それは口先ばかりではなくつて、腹からさう思つてゐたので、從つて稽古には熱中した。

師匠には惜しげもなく附屆けをして、他の弟子だちよりも幅を利かせてゐた。役に立つことを一つゞゝ覺えて行くのだと思ふと、他の勝負事などよりも賢いやうで、琴を彈いてゐると、退屈さまし以上に心が引しまつた。氣の合つた相手があると、家へ呼んだり自分から出掛けて行つたりして、合奏をすることもあつた。

田舍の師匠にばかり教はつてゐたのでは上手になれぬ譯はないのだが、來年は長男が學齡に達しるのだから、その時までに東京に新しい家を建てゝ引上げて、さうしたら、自分は一流の名人について技藝を磨くことにしようと、他人にも話すし、夫にも話してゐた。

「おれも暫く打やつといた謠曲の稽古をはじめて、山井商店瓦解の時には謠曲の門づけでもやつて飯の種にしようか。謠曲と琴の合奏は出來ないものか」と、夫は揶揄つて、遊び半分の稽古で、一かどの師匠になれさうに思つてゐる妻のお目でたい空想を笑つてゐた。

一々打明けて聞かされなくつても、東京からやつて來た時の夫の目顏や擧動で商賣の吉凶は察せられた去年の暮れから春へかけては、動搖が激しさうで、手が外せないから今日は行かれないといふ電話が土曜の晩に掛つて來ることが多くなつた。

「どうも變だよ、お母さん」と、彼女は、琴をさらへながら、不斷とちがつて一心になれなくつて、心が外へ外れるのを不思議に感じた。替へたばかりの琴の糸がつゞいて切れだすのをも不思議に感じた。

「主人では隱してるけれど、商賣がいけないんぢやないか知ら。先日來た時にも懷中がいやに淋しさうだつたよ。竹の屋

からも去年のを催促されてゐるんだから、半分だけでも早く入れときたいし、わたし、明日でも東京へ行つて様子を見て來ませうよ」

彼女はかねて恐れてゐた一家の危險が目の前に迫つてゐるのではないかと胸騒ぎがした。それで、翌日は珍らしく早起して一番列車で出掛けたが、二三日して、反物や玩具などドッサリ買込んで歸つて來て、母親の顏を見ると、

「あゝ弱いちやつた。山井は歸つて來ない筈だわよ、お母さん」と、息もせかせかと吐いてぶつゝけるやうに云つた。

「どうしたのさ。あの人の思惑が外れて足掻いてるかい」頭もボンヤリしてゐる老母は不氣らしく訊いた。

「わたし呆れちやつた。道理で琴の糸がいやに切れると思つた。わたしがうつかりしてゐるうちに、山井は勝手に巣を拵らえて、意氣な褞袍なんぞ着てぬくぬくと巣籠りしてるぢやないの。わたしが探當てて訪ねて行くと、今日風呂桶を買つて湯殿開きをしたから入つて行けだつて。大磯なんかへ足の向かない譯なんですよ」

「あの人は近年は堅くなつたと思つてゐたのに、わたしだちがいゝやうに騙されてゐたのかね」老母は溜息を吐いた。

「それがいゝ女とでもいふことか、お荷力さんのやうな藝者なのよ。顏をもつて集まつたといつたやうな顏したあまり賣れさうでないのを二人ほど抱へて、ケチな藝者屋なんだけど、あれでも山井は隨分お金を注ぎ込んでるんでせう。馬鹿々々しいつたらない。わたし、一晩そこへ泊つちやつたの」

「お前も呑氣だねえ」

「でも、その女はおとなしい氣立のよささうな女なのよ」

彼女は腹癒せに夫の懷中に持つてゐる者をみんな捲上げて、いろいろな好きな者を買つて來たことを、自慢らしく話した。しかし、その夜から大磯の別莊での眠りが今までのやうに閑かでなかつた。

夫の商賣の事は得も損も、その後はあまり彼女の心を煩はさなくなつて、子供を連れた散歩の次手の神詣でにも、今

までのやうに家業繁盛を祈らなくなつた。東京を思ひ出すたびに、かの妾宅の有様ばかりが目の前にちらついた。

「お父さん暫くだね、大磯はもういやになつたのかい」と、長男は久振りに父親の顔を見ると、母親に口授されてゐるませた口を利いた。

父親を顔を掻いて苦笑した。

彼女の東京通ひはそれから頻繁になつた。從來の本宅は例の九月一日に焼かれて今は借地權も人手に渡してゐたので、彼女は外に身を寄せる家がなくなつて、滯京中はかの妾宅に寝泊りすることにした。さうして四人目の子をそこで孕んだ。

「わたしも××さんや△△さんと一しよに布さらしを踊つて褒められたことがあつたのよ、も一度あの時のやうになりたいわね」と、出仕度をしてゐる小妓の姿を見て述懐をして、卑しい境涯を脱却してゐるといふ日頃の高ぶりをも忘れるやうになつた。

琴の修業もおろそかになつた。そして、三十いくつといふ年齢に不似合な若造りをして、お化粧にも前よりも一層凝りだした。鼻の兩側が窪んで老の影がそこから差してゐるのを、自分でも認めて、化粧で塗潰さうとつとめた。夫がたまにやつてくると、今までになく誘出してあるひは子供をつれ、あるひは二人つきりで、海岸を散歩したり知人の家へ遊びに行つたりした。

「今年中には東京にわたくしだちの住める小サッパリした家を建てゝ下さらなきや承知しませんよ。あなただつてわたしだち母子を袖乞をさせる日に會はせようとは思つてやしないでせう」と、人目のない所では、ねち／＼と悪く絡んだ口を利いてゐた彼女も、人の家へ行つた時などには、三人もの子持ちとは思はれないやうな睦まじさを見せた。

避暑をかねての來客の多かつた夏が過ぎかける頃は、米屋町の神經の激動する時節で、かねて自分の店に勞費の入り

がけてゐた山井の焦立しさはことに激しくつて、大磯へ寄付くことはいよ〳〵稀れになかつたが、ある夜、土曜でもないのに、十二時の終列車でやつて來て、締鎖つてゐる別莊の戸を叩いた。

そのあたりを忍んで叩いてゐる音、呼掛けてゐる聲を聞きつけた妻は、たゞ事でないことを豫感して、頭に血の上るのを覺えた。寢卷のまゝ戸口へ忍び寄つて雨戸をそつと開けると、軒燈の光に照らされてゐる夫の顏は眞青であつた。

「話はあとだ。此處にある物はみんな、運べるだけ東京へ運ばなきやならないんだよ。貨物自動車は直ぐに來るやうに云つといたから、下女を起して仕度させろよ」

それはかつて耳にしたことのない夫の眞面目な聲であつた。

「よく分りました」

彼女は、先づ心を巡らして金目のある重要な家財調度を思浮べてから、下女を揺起して夜逃げの仕度に取掛つたが、却つて次第に心が落着いて、かうして大磯を引上げて、この頃のやうな生活や夫婦關係に一區切をつけることは、ちよつと氣味がいゝやうにさへ感ぜられた。

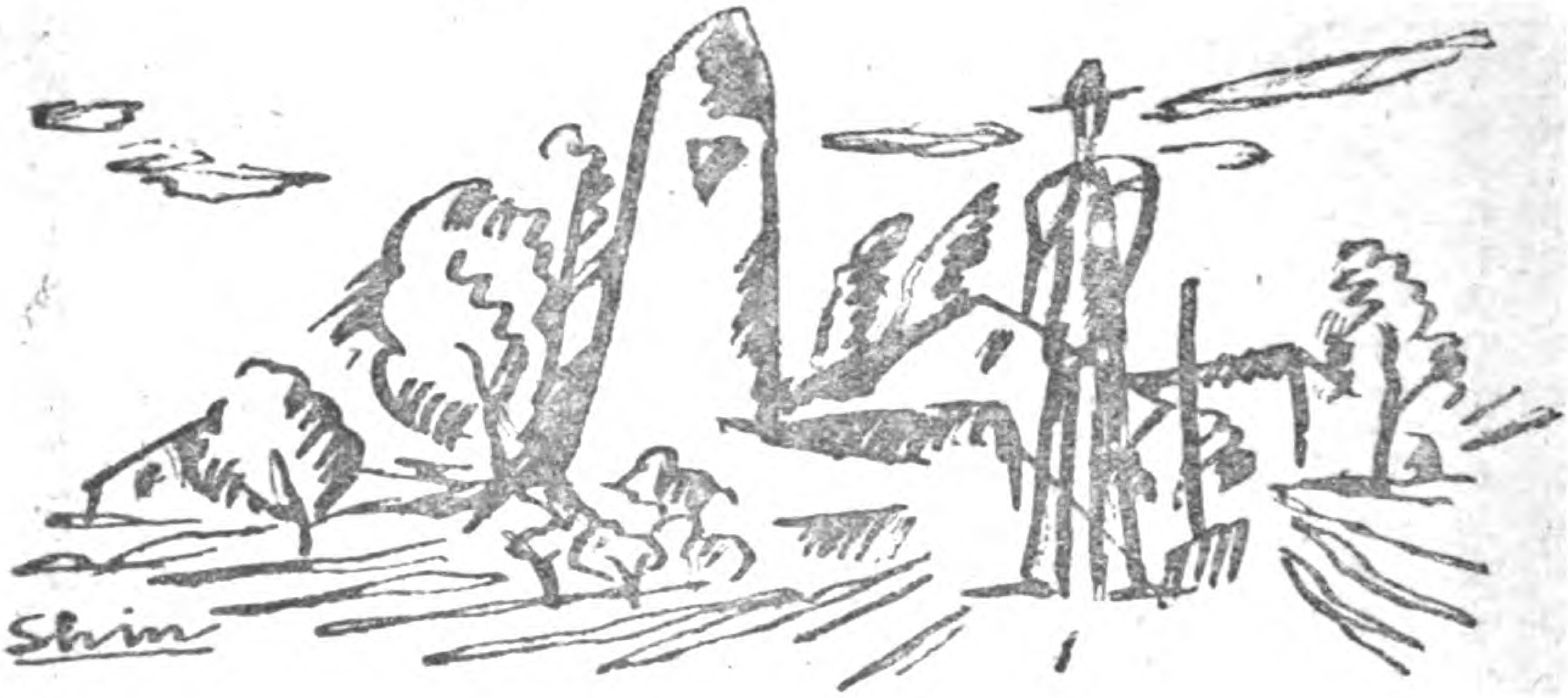
載せられるだけの荷物を貨物自動車に載せて、下女には暇をやつて、三人の子供を夢幻のまゝ、他の自動車に載せて、老母と夫婦と揃つてそこを出た時には、東の空が薄明るくなつてゐた。

「この自動車はどこへ着けるのです?」と、街道を疾走してゐる車の上で彼女は、夢から醒めたやうな氣持で訊ねた。

「さあ、何處へ着けるかな」夫はまだ惡夢に襲はれてゐるやうな顏して、萎れた聲して云つた。「例の家へは知らせてあるんだが……」

「ぢや、よ御座んすわ。わたし當分子供と一しよにあしこの居候になりませうよ。あの人は人情のある人らしいから、さう居づらくはなささうに思はれるわ」

彼女は不安のうちにも稍々安心して、久振りの野面の朝景色を眺めた。



應接隊

諏訪三郎

彼にしてみればいたつて不便なかうした土地へ越して來たのも、氣儘者の細君の駄々ッ兒染みた望みからであつた。――まつたく彼は、結婚してから十年近くもなる細君を、年と共にだんだん可愛がつて來てゐた。彼も割合に肥えてる方だが、細君は彼よりもずつと肉づきがよく、太つてゐた。それに、よくいふ餅肌といふ質で、そのなんともいへない柔かい觸感は、彼を無性に滿足させるものであつた。いつも燻つてばかりゐるからこんな趣味を帶びてゐるが、金持の奥樣のやうにしやんとして置いたなら、嘸美しい肌になるのだらう、その證據には、荒い風に觸れないところはあのやうに眞白で、柔かい……彼は細君をこんな風に惚れ〲と思つて見ることがあつた。それに、彼女の左の瞳は、厚味のある瞼の奥に少し中心から眦の方へと外れて、眞黒い液體のやうに澱んでゐた。だから、機嫌のわるいときなどには陰險らしくまた憂鬱さうにも見えるその瞳が、なんの蟠りもなく笑ふときにはくるくると動いていかにも無邪氣にたまらなく可愛いく彼に見えてくるのである。彼はその點だ

けでもなるべく細君の機嫌を損ねまいとしてゐた。――それだのに彼女は、越して來てまだ一月と經たないのに、一日も早くどつかへ引越して行きたいとがみ〳〵愠りだした。

彼の收入がこの頃減切り殖えて來たにつけても細君は、何處か、誰もなにも知らない土地へ移つて行身廣く威張つて暮らしたかつた。實はさういふ氣持から、地震で壞れかゝつたとはいへ、まだいくらでも住めるこれまでの借家を立退いて、この土地へ越して來たのであつたが、彼女はまた同じその心から一日も早く別な土地へ移つて行きたくなつたのである。………

これも細君の發案からであつたが、彼等は越して來るときもわざわざ日中を避けて夜を選んだ。どうせ、貧乏な點では變り榮えもない街へ行くのだから、持物などでは、決してひけを取らない積りである。だが、見透かされてはならないものがどうも見透かされさうな氣がしてならなつたからである。そのことでは、平常あまり緻密でもない頭でもつて彼女は、十分注意深く用心したのであつた。

越して來た翌る朝も彼は、いつものやうに暗い中に起ると、自分ひとりで食事を濟して――それに道程がずつと遠くなつたので、四時前といふに家を出た。細君は、彼が家を出てからしばらく經つて寢床から離れた。一人ッ兒の七ッになる子供がまだ眼覺めない中に、何か御飯のお菜を買つて來ようとして、木綿ではあるが仕立卸しの着物に着換えると、顔を、鐵瓶の湯でしめしたタオルで慌てゝふいて、粘白粉をぺたぺたつけたりした。

震災に伴ふひとつの現象といふべきであらう。この年の東京附近は、蒸暑い殘暑から急に冬が來た。自然からいふと、天高く馬肥ゆるといふ秋日和も續いたのであらうが、人々はそれを眺め暮す餘裕がなかつた。自然に注意を拂ふくらゐ

の心に落着が出來た頃には、もう底冷えのする冬が來てゐた。木の葉も紅葉しないで落ちたやうに思はれたし、秋の匂の深いコスモスや菊の花も咲いたのか、咲かないでしまつたのか確でない記憶をもつてゐるものが多かつた。………こんな自然の推移や、風物の變化などにはいたつて無關心な彼女にも、引越して來た郊外の街で初めて朝の空氣に浸つたとき、一足飛びに急に寒くなつて來たやうに感じられた。青空は大きく展けてゐるし、それに空氣は爽かに澄んで水のやうに張りきつてゐた。これまでとは違つて外を歩いてゐても肩が輕々しく、なんとなく展んびりした心持にもなれたが、それだけにまた譯もなく面羞しいやうな氣にもなつて妙に心がてれて來るのであつた。誰にも憚ることのなくなつたといふ心の隙には、誰かゞ意地惡く自分の擧動を疑り深い瞳で竊に覗いてゐるやうな邪推も湧いて來て、彼女にはなんとなく落着きがなかつた。袷の背縫が綻びてゐて、そこから汚ない襦袢が露はれてゐるやうな氣がしたり、踵の邊に湯文字の裾擦切れがさがつてゐるやうに思はれたりして來て、彼女は歩きながらも幾度となく背中に手をやつたり、腰や足元などを振向いて注意した。そしてそれは彼女の臆病な神經がさうさせるのに氣づいたとき、急に可笑しく莫迦莫迦しくなつて來て、思はず吹き出さうとしたが、彼女はそれを怺えてすつかり腹を立てゝしまつた。これも引越して來るについて新調したゴム櫛で、寢起きのまゝの束髮を自棄にかきあげながら彼女は、誰にとも宛のない文句をひとりぶつぶつと呟いた。「こんな、けち臭えとこでびくびくしてたまるもんか。………なんだつていゝ、金が澤山とれゝば威張つたものだ。それも惡いことをしてなどぢやない。ちやアんと立派に働いてだ。どんな奴にだつて氣兼なぞすることはない。」――

そんな氣持から、彼女はその日引越してくる匆々、長屋八軒に一つしかない井戸端に陣取つて洗濯物をながいこといぢつてゐた。そしてそのお蔭で彼女は、早くも一人の近づきを拵えることが出來た。それは彼女の家の入口の鼻先へ盃

所の尻を向けてゐる家の細君であつた。足音とバケツの音とがつひ近くでしたので、誰か水汲みに來たのだと知りながら彼女は、顔をあげてその方を振り向かうとは勿論しなかつたし、そればかりでなく、邪魔になるのも構はずにじつとしてゐてやらうかとさへ、ひよつと所從いてみる氣にもなつたのであつたが、どうせこれからつき合はなくてはならぬ人だらうに、それほど威張り散すこともないと思つて、盥をずつと隅の方へとずらした。

「どうも濟みません。」

すると相手から先にかう云はれたので、

「いゝえ、私こそお邪魔しまして。」

と彼女も愛想よく應へて、お互に顔を見合せた。のつぺりした顔で、綺緻などはあまりよくないが、彼女よりは五つ六つ若いだらうと思はれる中丈の細君が虔ましげに立つてゐた。そこで二人は、更らにあらたまつた物腰で、昨夜引越し蕎麥を貰つたお禮と、新らたに越して來た者だからよろしくお願ひしますといふ挨拶をとり交した。そんなことをきつかけに、一人はバケツをさげたまゝ、一人は盥の側に蹲んだまゝ、手の方は留守にして話をつゞけた。

「いままでは、どちらにいらつしやいましたの？」

「あの、芝の方なんですの」

「あゝ左様でございますか。うちでも高輪の方に親類があるんですが、お宅はどの邊なのでございましたの？」

「芝公園に近いところだつたんですよ。地震で壞れてしまひましたもんですから。」彼女は、ちやんと豫め考へて置いたとほりのことを言つたが、あまりそのことには觸れたくなかつたので、「この邊には一度も來たことがありませんので、方角もわからないんですよ。」とうまく話をそらした。

「それでも、これでよくなつたんですよ。私どもがこゝへ越して參りましたときは、近所に家など一軒もなかつたんですの。お宅のお出になる家などもずつと後になつて出來ましたのですし、向ふに一軒、こつちに一軒といふ風にぽつりぽつりとしかなくて、それア淋しかつたんですよ。」

彼女は、ずつと年下な女からこんな教へられるやうな口調でものを言はれるのは癪に觸つたが、それでも我慢して聽いてゐた。相手の女はそんなことには少しも頓着なしに、この近所では一番古く住んでゐるので長いこと取りつけてゐるが、米屋はどこが一番いゝとか、炭屋はどこが確かて信用出來るとか訊ねもしないことまで詳わしく教へてくれた。

「お酒やおしたぢなどはこの前の通りを右に行きましてね、煙草屋のところを右に曲りますと、四辻が御座いますのよ。その角に角屋つていふのがありますの。角だから角屋つていふのでせうねホヽヽ、その家がこの近所では一番かたいんですよ。なんでしたら、いまに私どもへ御用聽に參りますから、お知らせしてもよろしう御座いますが。……」

少しの間だと思つて出來るだけ叮嚀な口をきいてゐたが、相手がいつまでもかう莫迦叮嚀な言葉遣なので、彼女はもう面倒臭くぢれつたくなつてしまつた。それに、どこから何を取らうと、そんなおせつかいまでして貰はなくともいゝと思つた。それで彼女は濯ぎかけてそのまゝにして置いた洗ひ物を、急に亂暴にもみだしながら「いろいろお世話樣です」といつた。そして、たうに切りあげてよかつた洗濯物をいゝ機會が來たとでもいふ風に、盥の水を濺してその中に入れると、

「お暇のときに、どうぞお遊びにお出で下さいまし。」

と頭をぺこりと一つさげると、相手の言葉など耳へも入れないで自分の臺所の方へ歸つて來てしまつた。物干竿は越して來るとき一緒に持つて來たのだが、それを架けるところはどこにも見當らなかつた。「前にゐた人は、洗濯などしな

かつたのかしら？」彼女はちよつと見も知らぬ人に突つかゝつてみたが、「いたつてお人好しさ……」といま井戸端で話した女のことを思ひ出すと、嬉しさうにひとり笑をした。

彼女は、引越して荷物がまだ少しも片附いてゐないのに洗濯にとりかゝつたのであつた。で、子供を相手に家の掃除をぼつぼつ初めようかなどゝしてゐる中に、もう正午になつてしまつた。朝のお菜も殘つてゐるし、お茶漬で濟まさう……彼女はさう思つて面倒臭さうに食ひ散らかされたまゝ臺所に放り出されてある茶碗類を洗つたりなどしてゐると、表の戸口の開く音がして、「御免下さいまし」から上品にものいふ女の聲が聞えて來た。初めは、自分の家にお客が、しかも上品な女の聲などのする人が訪ねてくる筈はないので、どこかよその家だと氣にもしないでゐたが、戸の開く音は確に自分の家のやうであつた。それで彼女は臺所から怖ろ怖ろ――まつたく怖る怖る戸口の方へ顏をさしのべながら來て見ると、なんのことだ、いましがた井戸端で話合つた前の家の細君が立つてゐた。

「さきほどは、失禮いたしました。」

彼女を見ると、また相手の女が先きにかういつた。

「まア……」――おかみさん、さう呼んでいゝのか、それとも奥さんと上品に呼ぶのがいゝのか、彼女はちよつと間誤ついたが、そこは誤魔かしてしまつて、「……お入んなさいましよ。」と出來るだけ愛想よく言つた積りであつた。

相手は、閾の外に佇つたまゝ、それには應へずに、

「まだでございませう奥さん？おひるは。」

といやに狎れなれしい態度で言つた。

「えゝ、いま仕度をしてゐるところなんですよ。」

「さうですか。それぢやうれしい。」――さう言つたかと思ふと、前の家の細君は、すたすたと慌しく、恰度彼女の入口と對ひ合つてゐる臺所へ戻つて行つた。そして、ちやんと用意してあつたと見えて、蕪や牛蒡や小芋などで拵えたおにしめを盛つた小皿をすぐ持ち出して來て、

「ほんとにつまらないものなんですよ。」

と、彼女の上りかまちのところへいきなり突き出した。

彼女は、詐りでも傷けられたやうな淡い反感をちよつと抱いたが、この相手の親切さにつひ吊り込まれて、

「まア、おいしさうに出來ましたこと。有難う御座います。」

と、にこにこしながらお叩頭をした。「……そこにお立ちにならないで、お入り下さいましよ。」

「ありがたうございます。」

相手がかうもぢく〳〵してゐるので、彼女は前の言葉の行き懸りからもう一度それを繰り返さなければならなかつた。

「……では、遠慮しませんでちよつとお邪魔いたしますわ。」

かう相手が閾をしとやかに跨いだときには、彼女も内心吃驚してしまつた。家の中が少しも片附いてはゐないので、ごたごたしたなかから、覗き出されてゐけないものが覗き出されさうな不安があつたし、それよりも、六疊の床の間には阿彌陀如來の掛軸が懸つてゐた。彼女はそれを他人に見られることを何よりも嫌がつてゐた。で、彼女は、まだ越さない前から、今度越したならばそれを取り外してしまふと口煩るさく言ひ張つたのであつたが、細君のいふことならどんな無理なことでも彼の力で出來得る限りのものは二つ返辭で容れてゐた彼も、そのことだけはどうしても贊成しなかつた。「そんなわけのわからねえことをいふもんぢやねえ、俺たちの商賣で、阿彌陀樣をお粗末にして何うなる。令孃の親爺

を見ろ」——あまり執拗くいふと彼は、かう云ひながら顔色さへ變へていつになく突慳に言つた。令嬢といふ綽名のある同業者の親は、矢張り同じ仕事をしてゐた時分、庭隅にある石の六地藏に小便をして——醉つぱらつた揚句だつたが——その夜から重い眼病を患つて三日ばかりの中に双方とも見えなくなつてしまつた。そのことはよく彼女も知つてゐるので、さう言はれゝばそれでも強つてともいはれなかつたが、何か良人にやり籠められたやうで忌々しがつてゐると、「それにさ、かうしてあまり不自由もせずにゐられるのも、いへば、阿彌陀様のお陰ぢやねえか」かう彼が言つたので、「だからお前さんは阿彌陀さんだつて人から馬鹿にされるんだよ。何處までお芽出てえかわかりやしない」と彼女はがみがみ浴びせかけてやつた。「馬鹿にされたつて、阿彌陀様なら、おらア結構さ。」彼は人の好さゝうな笑ひを顔一杯に溢れさせた。そして、昨夜も引越して來ると何よりも先に、早速床の間にその軸をかけたのであつた。………それで彼女は六疊にだけは他人を入れたくなかつた。

「まだ　少しも片附いてゐないので、坐るところもないんですよ。」

彼女はかう豫防線を張つて置いて、急いで蒲團を持つてくると、それを上りかまちの所へ置いた。

「どうぞ、おかけなさい。冷えますから。」

「はい、ありがたうございます。」

相手はかう叮嚀にお叩頭をしたが、板間に腰をおろしたまゝそれを敷かうとはしなかつた。幾度すゝめてもお叩頭を繰り返すだけなので彼女も面倒になつたのですゝめることを止してしまつた。結局二人はその座蒲團を間に挾んで、地震當時は何うしてゐたとか、食物の窮乏をどうして凌いだとかいふことをものゝ二三十分も話合つた。

「……でもねえ、かうして見ず知らずのところへきまして、ご親切にしていたゞくとわたし嬉しいんですよ。」

どうかしたきつかけからか彼女は、こんなお世辭が口を衝いて出て來た。

「あらア厭ですわ、そんなことをおつしやつてはわたし。なんにもお構ひ出來ないんですもの。それにこんなこと、誰だつてお互さまですわ。」前の細君はかういつてからちよつと間を置いたが「でもねえ……この近所の方は、それやア人がわるいんですよ。」と聲を落して、いかにも複雜な事情がありさうに顏を顰めた。

「さうなんですかねえ」

好奇心が急に頭を擡げて來たので、彼女もかう小聲で應へた。

「えゝえ、それアひどいんですよ。」前の家の細君は、それまで開けられたまゝになつてゐる入口の戸を斜めに立つと、またもとのところへ戻つて來た。

「……こんなことは大きな聲で申されませんがね、わたしのお隣りは、旦那さんが小學校の教員をしてゐる方ですが、その奧さんと來ましたら、ばかに見識ばかりが高う御座いましてね、こゝへ越して參りましてからもう一年近くにもなるんですが、私などへはつひぞ挨拶なすつたことがないんでございますよ。そこへ行きますと、旦那さんはそれア頭が低い方でございましてね。……それからお宅の裏、——向つ裏のお家は、——旦那さんが大工さんですが、怠け者で少しも仕事に出ないらしいんですよ。ですもんだから內儀さんと喧嘩ばかりしてゐまして、——それアいくら內輪喧嘩をなすつてもご隨意ですわ——でも裏の內儀さんと來ましたら、その飛沫を私どもまでにあてつけまして、井戸端などで說々々してゐますとつけつけ當り散らすんですよ。なんですか、この近所の方はみんなのらくらばかりしてゐる方が多うございまして、眞面目に勤めてゐる方が少ないですよ。通りからこちらへ入つて來ます右角の旦那さんなどは、越して來てもう半年近くもなりますが、しよつちゆう家の中にごろごろしてゐますし、私の家の裏の方など……」

からいつた調子で前後左右に相隣接してゐるいろんな家の職業や內輪のことを、例ののつぺりした顏の薄い唇から、或は譏り或は貶しながらぺらぺら話されるのを、彼女は非常な興味を以て聞いてゐたが、後ろめいた淡い不安がまた彼女を脅して來た。で、彼女特有の癖から、「なんていふお喋りなんだらうこの女は、まアだ若い癖に。人の陰口ばかり吐いて、さういふお前さんはいつたい何んなのだい？」と、そろそろ惡體を浴びせかけながら相手の顏をじろじろ見詰めはじめた。一通り陰口を喋り終へた前の家の細君は、ちよいと呼吸をついて、

「失禮ですが、お宅の旦那さまは、どちらへお勤めなすつてらつしやいますの？」

と彼女に尋ねた。他意があつて尋ねたのでもなかつたらしいが、それが彼女にはぐつと鋭く突つ込まれたやうな氣がした。慌てゝはいけない――彼女は先づいましめてから、

「あの、社會局なんですのよ。」

と、これも豫め考へておいたことを返辭した。

「あゝ、左樣で御座いますか？社會局は何の方面なのでございます？」

彼女はそんな詳しいことまでは考へて置かなかつた。でちよつと返事に窮してしまつたが、何處へ勤めて何をしてゐるからつてこつちの勝手ぢやないか、大きなお世話だ（！）――から彼女は心の中でやり返へして、

「なに、ほんの下ツ端なんですよ。」と早口で無愛想に言つてから、「お宅などでは、さぞいゝところへ行つてらつしやいますのでせうね。」と逆襲する積りで訊ね返した。

「えへへゝゝ……うちなどこそ駄目ですわ。」

……えへへゝゝゝと變んにうはづつた笑ひ方をしながらさういふ言葉は、言葉通りの意味をまともにとつていゝのか、

それとも表面では非常に謙遜していつてゐるのだが、といつて言葉通りの意味にとられるのは厭なのでそれを暗に仄めかしてゐるのか、或は實は本當のところを言つてゐるのだがなるべくならば謙遜していつてゐる風にとつて貰ひたいためにそんな風に言つたのか、いたつて曖昧なものであつた。……人にばかり言はせて置いて、狡るい女だ——彼女は自分よりも年若い相手の女が憎々しくなつて來て、

「隠さなくたつていゝでせう？　なにをしてらつしやるの。銀行員？　それともお役所へですか？」

ことによると本當の社會局へでも行つてゐるのでないかしら——などと臆測してくるとたまらなく焦れ焦れして、性急(せつかち)にぞんざいな口のきゝ方をした。すると前の家の細君は、

「えへゝゝゝ……」

と、また曖昧な笑ひ方をしたが、今度はあり〳〵と困惑の色がその表情から見えて來た。そしてそれを彼女に氣取られまいとして努めてゐるらしくさへ見えたが、

「あら、わたし、とんだお喋りをしちまいましたわ。ご飯前にお邪魔いたしまして」

と、いまになつて初めて氣附いたといふ風に頓興な聲でたちあがつた。

なんて、いけ圖々しい女だらう——彼女はさういつた眼附きで相手を見詰めたまゝ默つてゐた。癪に觸るからお煮メなども突返してやらうかとも思つたが、それをする勇氣もなかつたし、それに何かあとでこちらからも返へしてやれば同じことだから、貰つて置くことにした。

「ほんとに失禮しましたわ。ごめんなさいまし。どうぞ奥さん、たくへもお暇のときはいらしつて下さいませ。きたなく取り散らかつてゐますが……」

前の家の細君は、たうとう自分の家の職業を言はずじまひで歸つて行つてしまつた。——彼女はその後、といつてそれは二三日しか經たないすぐのことであるが、前の家の主人の職業を人からきいたとき、「なるほどねえ、それぢやア言はれない筈だわ。監獄の看守なんて、人殺しの番人みたいぢやないの。いくら、ひゐき目に見たつて、まアだ小學校の敎員の方がましだわよ。」と、かう勝誇つたやうに心の中で冷笑したものだ。——

彼はその夜、非番だつたので十時過ぎになつてから家に歸つて來た。途中の往復などもそれまでは印半纏ですましてたのだつたが、こちらへ越して來ると——その日の朝からであるが——高貴の對の着物と二重まわしとを彼は細君から强制的に被せられた。どちらかといへば丈の低い方である彼は、さういふ風裝をしながら、たいして嵩ばらない風呂敷包を手首に通して、家の中に入つて來た。

「たゞいま……」

子供はもう熟睡してゐた。が、同じ蒲團の中にごろ寢をしてゐる細君は、まだ寢入らないで氣倦るさうに瞬きしてゐたが、彼がかう言つても振り向かうともしなかつた。彼もまたそれを氣に止めぬらしく、提げて來た風呂敷包みをそのまゝ阿彌陀樣の掛物の前に置くと、そこで二重まわしを脫いで、それから合せた掌を難有さうに揉みながらしばらくは阿彌陀樣を拜んだ。

「どうだつたい？」

阿彌陀樣を拜んでしまつた彼がかう細君に言葉をかけても、彼女は懶さうな氣振りを見せるだけで相手にしなかつた。それで彼が、「えゝおい、どうだつたよ？」と催促をすると、

「どうだつたつて、なにをさ？」

と彼女は慍つてるやうに言つた。

「なにをさつて、住まゐ心地さ。」

彼は細君の意を迎へるやうに、にこ〳〵しながら言つた。

「當り前ぢやないの。誰に鐚一文借りてるぢやなし。氣兼ねや遠慮をしてたまるもんぢやない。」

細君がこんなに鼻呼吸の荒いのは、萬事が具合いゝからに違ゐないと彼はさうとつた。しかし細君にしてみれば、あのお喋り好きな前の細君が近所の家の内輪話をぶちまけて歸つてからの半日は、自分の家の職業についての外聞が厭に氣に障つてならなかつた。その中にはわたいの家のことなども陰へ廻つてどんな風に惡口いふか知れやしない——さう邪推されてくると苛立たしい氣持ちの中にも、耳を掩えたくなるやうな恥かしい思ひに苦しくなつてさへ來るのであつた。——しかし彼女は、彼をさんざん手古擦らせた揚句、强情にもかうした土地へ越して來た手前もあつて、匆々弱音や愚痴はいひたくなかつた。

「それにね、わたいが思つた通りさ。この近所は。……」

細君がかう得意らしくいふと、何が思つた通りなのだか、そんなことにはお構ひなしに彼は

「さうかい。」

と合槌を打つた。

「……みんな貧的さ。前の左隣りは、小學校の教員だつてさ。その前は株屋の小使、裏の右は怠け大工……」

彼女はさつき聞いた通りのことを、いつさう野卑な句調に變へていちいち繰り返した。「……だから、みんなせいぜい六七十圓のところね。何んといつたつて家が一番よ。」

「だつてお前、よくそんなことを知つてるなア」

「知つてるさ。前の……いやに白粉をべたべたつけた若いおかみさんが來て、近所のことを洗ひ浚ひ棚おろしして行つたわよ。」

「さういへばなんだ。お前だつて白粉などをつけてるぢやねえか」

にたにた彼が笑つても彼女はそんなことには取りあはなかつた。

「……おかしくつてしようがないわ。わたいのことをね、奥さんだつてさ。この邊の者はみんな新米だと見えて、言葉遣がいやに叮寧ね。自分をお上品に思はれたがつてなのだよ。でも、こんな長屋に入つて六七十圓しきや取れなくちア、奥さんなんて上品がつたつておつつかないや。」

——彼女はちよつと話を杜切らしたが、熟々考へたといふ風に言つた。

「………でも、上品ぶつてゐるのが、一番利巧なやり方ね。わたいもさうしようと思つたわ。さうすれば、奥さんで通るわよ。」

「さうだ。それになるだけ親切に叮寧にするんだな。」

「そして、たまには物を買つてあげたりすればね、顏だつてさうひけもとらねえで、暮らしていけるわよ。」

彼女は寢床から半身をもたげて床の間の方へずり寄ると、彼が阿彌陀樣の前に置いた風呂敷包を手を、さし延べて寢床の方へ引き寄せた。仕事から歸つて來る彼が定つて風呂敷包を手首に提げて來ること。そしてそれを定つて床の間に置く——彼からいへば阿彌陀樣にお供する積りなのである——こと、その中には燒饅頭か蒸菓子が入つてゐることなどは、彼女は見ないでも知つてることであつた。それをひろげた彼女は、小判形の餡ン子の澤山入つてゐる燒饅頭の一つを

いきなり口の中にもつて行くと、薄い舌先をくるりくるりとまくりながら食ひはじめたが

「滑頭ツきりなのね」

と、不服さうに言つた。

「なんだつていゝぢやないか、阿彌陀様の下さるものをさ。」

「だつてわたい、蒸し菓子が食べたいんだもの。――」駄々つ子らしくいつてから、「どうお前さん、現玉の方は?」と彼女は訊いた。

「皆んなおぢや二十錢は出たらうね。なにしろ、赤蛙の、奴がうまく仕向けるんだよ。俺アあんまり氣が進まないんだが。」

「進むもすゝまないもない、當り前のことぢやないか、そんなこと。だからお前さんは、阿彌陀さんだよ。」

彼女はぷりぷりしながら良人を叱つた。彼はたゞ笑ひながらそれを聞きながしてゐた。彼女も口先では憤つてみせたが

「今日も分前が二十圓近くもある」――と胸算してみると、決してわるい氣持ではなかつた。

轉居後二日目からである。彼の細君は――尤も彼に對する態度などは以前と變りはなかつたが――まるで生れ變つたやうに音無しく、お世辭がよく、誰にも親切な、一口に言へば近所づきあひのいゝ物腰のいたつて低い奥さんになり變つてゐた。そんな風であつたから、近所の人達ともすぐ親しくちかづきになつた。そして彼女の氣持をこの上なく安心させ晴れ晴れしくさせたものは、彼女の良人が社會局に勤めてゐるといふことを誰一人として疑つてゐないらしいことゝ、彼女がそれとなく仄めかした――いかに多額の給金をとつてゐるかといふこと――を、近所の女達からそのまゝ受容れられて、誰彼から一樣に羨しがられてゐることであつた。――と少くとも彼女はさう信じてゐた。……

ところが彼女は一週間とさうした幸福な氣持ちを續けることが出來なかつた。といふのは、朝は近所の誰よりも早く隔日毎に泊つて十一時前後である、それも誰よりも遲く定つて十一時前後である、彼女はだんだん苛々して來た頃眞暗い中に家を出るのに、夜の歸りはといふとこれもまた誰よりも遲く定つて十一時前後である、彼女はだんだん苛々して來た頃てくるといふ彼女の良人についていろんな質問を近所の人達から煩るさく受けるので、彼女はだんだん苛々して來た頃であつた。——彼女はその日、氣位が高くてつひぞ私などには挨拶をしたことがないと前の看守の細君が批難した小學校敎員の細君と、井戸端で小一時間ばかりお互に態度を愼みながら話し合つた。それほど氣位が高いといふ敎員の細君も、彼女へは最初から愛想のいゝ挨拶もすれば、なにかと親切らしい素振りを見せた。彼女はそれを相手が彼女にだけ特に示してくれる敬意でもあるかのやうに取つて、内心得意がつてゐたのである。——それだのに、二人が井戸端でながいこと睦じさうに話し合つてゐるところへ、看守の細君がバケツを提げて出て來たのであつた。彼女は前に述べたと同じ得意さでこの細君にも親密らしく愛想のよい言葉をかけた。ところが彼女にとつて甚だ意外なことは、それまで仇同志でもあるかのやうに眺めてゐた前の長屋の細君たちは、このとき彼女へ對したと同じ親密さで——いや彼女には、彼女へ對したよりはもつと溫かい親密さを有ちあつてゐるやうにさへそのときの空氣を見てとつた——お互に言葉を交しはじめたことであつた。彼女はいまがいままで自分の抱いてゐた誇りに對する幻滅に呆氣にとられたが、自分よりはどちらも年の若いこんな女達から欺されてゐたのだと思ふと、いゝ加減なおもちやにあしらはれてゐたやうな氣がして來て腹が立つてならなかつた。——隱さうとしても顏色が險しく眞紅になつてくるのを自分でもわかるやうな氣がした。しまひには口惜しくて、淚が滲み出て來さうにさへなつて來たので、彼女は圓心を外れてゐる瞳をいつさう他方へ向けると、言葉もかけずに自分の家に引つ込んでしまつた。そして、しばらくは臺所にぼんやりと突つ立つてゐたが、變んに氣になるので表の三疊へ來ると、障子を細目にあけて井戸端の二人の擧動を窺つた。ひそひそと話合つてゐるので話聲さへ聞え

て來ないのも彼女の神經を苛々させたが、さうひそひそ話合ながら、言葉の裏の裏までもお互の心が融け合つてゐるといつた風に、ときどきいかにも空つたらしくにつたりと無言で笑ひ合ふのを見せられるとき、彼女は忌々しくて堪らなかつた。「どうせお前たちは、人の惡る口を言ふより他に樂しみはないんだらうよ」彼女はから怒鳴りつけたいやうな憤りに驅られて來た。……

それまでは一日の大部分を、近所の細君達ととりとめもない話で潰してゐた彼女は、その日から家の中に引籠つて用事以外には外へ出なくなつた。彼女には、良人の仕事がどうやら近所から悟られたのではないかしら（?）悟られないまでも、どうせ碌でもない臆測で噂されてゐるのだ（!）――と思ふと、面目なくて近所へ顏向けが出來ないやうな氣もして來たのであつた。そして彼女は、近所の者を全部敵に廻してゐるやうに始終、理由もなくぷりぷりと憤つて近所の人達に絶えない敵意をもつやうになつて來た。自分の發した情報によつて、自分で密偵になつたり、密偵の報告によつて昂然と戰鬪準備にとりかゝつたり、彼女の短かい冬の一日はいつもそんなことの爲めに負け戰の陣營のやうに騷がしかつた。かうして移轉後二日目の朝から、心持の上でも態度の上でもすつかり平和な非鬪的な圓みを帶びて來た彼女の輪廓は、もとの尖げ尖げしい粗暴さに復つてしまつた。……

といつたからとて、彼女は、近所のすべてのものを敵に廻すといふことは、なんといつても寂しいことであつた。彼女は忠實な一人の味方が欲しくなつた。で彼女は、あれかこれかとその忠實な味方を物色してみたが、それまで心易くしてゐた人達は、それだけに誰一人油斷がならないやうな氣がして心が許せなかつた。そんな中で結局彼女が白羽の矢を立てた女といふのは、彼女が最も口數少なくつき合つてゐた「怠け大工」の細君であつた。ことにその女が彼女の忠實な味方として適任らしく思はれたことは、相手の家がこの近所でも一番貧乏で、月々の店賃ひも幾月となく滯つてゐ

る位で、そんなことの爲めに何とはなしに近所から爪彈きされて、彼女に似た心持ちでその日その日を苛立しく寂しく送つてゐるらしく見えることであつた。それに都合のいゝことには、宗一――彼女の一人兒である――と同い年の子供が相手の家にも居て、しかも二人は取り立て仲好く、いつもどちらかの家へ行つて遊んでゐることであつた。――

彼女は先づその子供から手馴づけにかゝつた。その爲めに、毎日幾回となくお菓子をやつたり、焦つてくると五錢銀貨を掴ませたりした。……かうして彼女の計畫はどうやら成功したかに見えた。子供の母親は、彼女に逢ふたびに子供の禮を言ふやうになつた。それをきつかけに二人はいろんな世間話をするやうになつた。二人の友情がだんだん密接して來るのを裏書するかのやうに、二人の間には近所の人々への陰口がだんだん露骨に激しく取り換はされて來た。彼女は千人の味方を得たかのやうに嬉しく氣强くなつた。が、まだ相手がどの程度まで彼女に忠實なる味方であるかゞはつきりしないので、彼女にはどうも不安でならなかつた。それで彼女はその程度をはつきりさせ、旁々いつそう忠實な味方になつて貰ひたい爲めに、相手を自宅に引き入れて、何か御馳走でもしたかつた。それに、越して來る前に買つた總桐の簞笥も、メリンスの被ひをしてある鏡臺も見て貰ひたかつた。いづれも入口の三疊に飾つてあるのだから、六疊へ入れなければ何んの差閊えもない譯である。「いかゞですか。お暇ならちよいとおあがんなさらない。」彼女はかう幾度となく――およそ毎日のやうに――言つて誘ふのであつたが、どういふものか、外での立話ならいくらでも好んでする大工の細君も、彼女の家へは入らうとしなかつた。あまり彼女が執拗く誘ふと、いかにも迷惑な顏さへしてくるのである。相手のさういふ態度が彼女にはまた氣になり出して來た。でしまひには、好意といふよりは寧ろ意地突くでも一度は家の中に引き入れようと機會あることにもくろむのであつたが、たうとう、やうやくその日が來のだた。たしか、彼女一家が轉居してから十七日か八日目の午後であつた。その日は、朝から陽光がさしたことのないほどどんよりと曇つてゐてい

やにさそ寒かつた。彼女は、彼女の家に遊びに來てゐる子供を迎へに來た大工の細君を、無理矢理に家の中に引込んだのであつた。……

彼女はいそいそと、珍客を迎へたやうに悅しさうであつた。そして大工の細君を三疊に置いたまゝ臺所から外へ脫け出て、かなりな道程を走つて餅菓子を買つて來たりした。昨夜良人がいつものやうに買つて歸つた燒滿頭がまだ澤山殘つてゐるのであつたが、彼女には相手が何も知つてゐないらしいとはいへ、それを客の前に出す勇氣はなかつた。

「どうぞお上り下さい。およびしたつてなにもないんですよ。なにか、もつと旨いものでも買つておけばいゝんですが。」

これ位のものならば常々買つてはあるのだが――といつた口吻でその餅菓子を勸めても

「ありがたうございます。」

と大工の細君は言つたきりで、手をつけようともしなかつた。大工の細君は彼女が口うるさく勸めるのでしまひには手にとつたが、それも「なんてうるさい女なんだらう」と惱つてるやうであつた。相手が餅菓子を取つたのを見ると、それでやうやく安心したとでもいふ風に、彼女はひとりで燥ぎ出した。

「ねえ榮子ちやんのお母さん、わたしこういふ簞笥をも一つ買ひたくて買ひたくて仕樣がないんですよ。うちでは、そんな持物を澤山もつてゐたつて火事にでも逢へばなくなつてしまふから、お金で持つてゐる方が一番確かだつていふんだけど、だつて、この簞笥の中、もう一杯になつてしまつて、入れるところがないんですもの。」から話し出した彼女にはこの大切な唯一人の味方である相手の氣持などはもう顧みる餘裕さへなくなつた「……もうひとつ座敷に簞笥があるんですけどね、それも一杯なのよ。うちの宗坊はそらア着物持ちでしてね、六疊のは宗坊のでぎつしりなの。……あ、

さうさう、わたし榮子ちゃんのお母さんに見て戴かうかしら。こないだ六拾圓も出して指環を買つたんだけど、私たんだか、柄が氣にくわないので厭になつちまつたんだが……」

彼女はこんなことを喋りたてながら、壁際にある箪笥の方へ寄つて行つた。どこへしまつてあつたのか彼女の頭の上でコロコロと鈴の音がした。箪笥の鍵につけてある鈴なのである。それまで、默つたまゝいかにも詰らなさうに餅菓子を摘んで食つてゐた大工の細君は、

「ねえお前さん、いくらいゝ着物を拵えたからつて、眼を療さなくちや駄目だわよ。箪笥を買ふお金があるなら、その眼玉を眞中に擬すんだね。」

かちつけ、つけいふと、食べかけを盆の上に置いて、彼女の後姿を憎悪に充ちた陰險な瞳で睨んだ。彼女は顏が眞紅になつた。錆ついた刃物ですがめの瞳を剔り出されたやうな痛みを全身に感じた。でも彼女は從順であつた。

「さうね、眼の方を先に療さうかしら？　でもわたし、お金の方はどうにでもなるから、なんだら一緒にしてもいゝわ。」

「あ、そんならさうなさい。そんなこと、お前さんの勝手だわよ。」

大工の細君は立ち上つた。「どうも御馳走さま。」かういふと、なにか口の中でもぐもぐ愚りながら彼女の家を出てしまつた。

意外な味方の裏切りに彼女はまつたく狼狽してしまつた。いつもの彼女の性癖にも似ず馬鹿に口惜しく悲しくなつて淚がぼろぼろと流れて來た。何故かうも世間の人は意地がわるいのだらうとつくづく思ふと、體も細るやうなたよりなさを感じて來たが、これも、皆んなが貧乏なものだから自分達を蔑んで燒餅燒いてゐるのだといふやうに解釋して來ると、幾分かは胸がすいて來さうであつた。が、運のわるいときは何處までも惡るいものであつた。彼女はこのとき、

外手で他の子供達を相手に怒鳴つてゐる宗一のたゞ事でない聲を聽いた。つひいましがたまで大工の家の子供と家の中に遊んでゐたので、彼女もつひうつかりしてゐたのだつたが。

「なんだい、なア、俺れンちにはなア、かういふでつかい滿頭がいつぱい、こんなにいつぱいあるんだぞ。」

かういふ宗一の得意に滿ちた聲を聞いたとき、彼女はハツとして驚いた。あれほど、常々――家の中でだといくらでもあげるから、その代り――外へ持ち出して食べてはいけない、外でものを食ふのはお乞食だけだ――と固く言ひきかせてそれを禁じてゐた滿頭を、宗一は外へ持ち出して自慢さうに食つてゐるらしかつた。

「宗坊！」

彼女はかういきなり家から呶鳴つたが、矢張り同い年位の子供を相手に言ひ合つてゐるらしい宗一は母親の聲などには耳を籍さなかつた。

「そんなちつぽけなまんぢゆう、どこにだつてあらア、なアあ。」

よその子供が負けぬ氣で言ひ返した。

「あるかい馬鹿ア、おめえンちなんか貧乏だらう、おれンちではなア、お父オちやんが……」

「宗坊！宗坊！」

彼女は氣が氣でなくなつてまた怒鳴つたが、子供はそんなことに少しも取り合つてゐなかつた。

「お父オちやんがな、毎日いつぱひ貰つて來るんだぞ。お前えンちの父オちやんなんか、貰つて來ねえだらう。」

「貰つてなんかこねえぞやい」別な子供がから反抗的に言つたが、好奇心に捉えられたらしく、急に聲を和げて、「お前のお父オちやん、毎日まんぢゆを貰つてくるつて、そんなら、どこへ行つてるんだい？」

「お父オちやんか、俺れンちのお父オちやんはなア……」

彼女はもう堪らなくなつて家の中から飛び出すと、彼女の家の横側で、板壁に背を凭らせてまんぢゆうを食ひながら昂然としてゐる宗一の、頬つぺたを先づいきなり張り飛した。そして、子供が鐵力鍋を掻き廻すやうな音を立て、泣き出したなどには少しの遠慮もなく、小脇に抱へると家の中に引きずり込んでしまつた。

「馬鹿!、馬鹿!、馬鹿!」

彼女は深い理由も言はず、たゞかういひながら、いつも可愛がつてゐる宗一の頭を、――さうした取亂した中でも、子供の頭を打つと馬鹿になるといふことに氣附くと、――着物をくるりと捲つてお尻りを、續けさまに打つた。

「母アちやんごめん、ごめんごめんよう母アちやん!」

子供は叫び泣きながらあやまつた。あれほど、かたく禁じられてゐるものを、外へ持ち出して食つたから母親がこのやうに叱るのは當り前のことだと、子供心にもさう思つてひたすら詫びた。といつて子供にしてみれば無理もないことであつた。外で、皆なの友達に見せびらかして食つてこそ本當に美味いのである。家の中などでいくら食つたからとて、少しもおいしくないのである。――然し、彼女にして見れば、たかゞ滿頭くらゐでといつて濟まされない理由があつた。彼の女の吩附を守らない子供がどうのといふやうな些細なことではなくなつた。もう取り返へしのつかないことになつてしまつたのである。……

彼はその夜、不寢の番だつたので家へ歸らなかつたから、留守中にどんな騷ぎが起つたかは知らずにしまつた。その翌る晩、いつもの通り十一時近くになつて歸つて來て、はじめてこれを知つた。彼を迎へる細君の態度が慍つてるや

うに無愛想であつたからとて、それは毎度のことであるから氣にも留めずに濟むのだつたが、阿彌陀樣にお供物をして拜んでから、まるで長い旅から歸つて來たやうな積りで寢床の中に潜り込むと、このときだけはいくら慍つてゐても親切にしてくれる細君が、その夜に限つて湯氣を受けつけない油のやうに冷淡であつた。あまり温くはないが、――いや寧ろ、どちらかといへば、ひやりとして冷めたいのである――それだけに怖ろしいほど柔かい感じのする餅肌のどの部分にも彼は××××××××××れた。彼は細君が病氣なのではないかしら？　と、ふと思つて見たが、これ迄の例からいふと大抵の病氣ではそんな筈はないのである。ことに彼女は病氣には怯え性がなくて、極く輕いものでも大袈裟に唸つたりするのであつた。留守中に何か起きたのだ――彼は適切りさうだと思つた。

「どうしたんだい？」

彼がさういつても細君は　たゞ寢卷の裾を踵で堅く抑えつけてゐるだけで、何んとも言はなかつた。

「えゝ？　どうしたんだ。默つてゝはわからねえぢやないか？」

左う執拗く彼が機嫌をとるやうに言ふので、彼女は面倒くさくなつて意地が通せなかつた。また、いつまでも意地を通さうとする心もなかつたのである。

「どうも、かうもないわよ。みんな露れちまつたわよ。」

「なにが？」

「なにがつて、きまつてるぢやないか。わたしなどのことさ。」

彼女ほどに神經過敏にはなつてゐないが、もしさうだとすると彼とてもあまりいゝ心はしなかつた。

「どうしてだい？」

「だつて宗坊がさ、あれほど矢釜しく言つてゐるのに、外で食べてるのよ。」
「でも、それだけぢやア、露れたときまらないや。」
「だつて、お父ちやんが毎日いつぱい貰つてくるぞ、なんて宗坊は大きな聲で自慢してるんだもの。近所の人に皆んな聽かれつちまつたわよ。」
「宗の奴、しようのねえ奴だなア。」
　彼は、細君の氣持を和げようとして、笑ひながら言つた。
「朝は暗い中に家を出てさ、夜の歸りはいつだつて十一時近くだし、それに一晩置きに泊つてくるしさ。おまけにお葬ひの燒滿頭をいつぱい毎日貰つて歸るなんていつたら、いくら社會局なんて誤間化したつて誰も本當にしやしないわよ。わたいならすぐ何んの商賣をしてるかすぐわかる。どんな近所の間抜けだつてわかるわよ。わからない奴は大馬鹿だ！」彼女はがみ〳〵口から泡を出しながらいひ續けた。「……あゝあ、どこへ行つたつて、こんな商賣をしてゐると爪彈きさ。」彼女はいつになく弱音を吐いた。
「……………」
　彼の足も、彼女の寢卷の裾とのこぜりあひを止めてしまつた。
「どつかへ越して行かうよ。」
「またか？」
「またかつて、それアお前さんは家にゐないからいゝさ。わたいは厭だわよ。なんていつたつていや！　もつと、どつか遠くの方へ越して行かうよ。」

「これより遠くへ行つたら、通ふに大變ぢやないか。」

「大變でもいゝから、わたい越さなくちやいやだよ。」

「さうすると、時間に間に合はなくなるよ。いまだつて一杯なんだからな。」

「間に合はなくたつて構へやしない。越さなくちや、わたいひとりでどつかへ行つてしまふから。」

彼女一流の、分別のない我儘がはじまつた。結局彼は、細君の要求を實現することにして、長い旅から歸つて來たやうな氣持ちを休めることにした。

新らたに貸家を探すにしたところで、彼にはその暇が全然なかつた。で彼はいま住んでゐる家を探したときのやうに、方々から集つてくる出入りの顔馴染に頼むより他なかつた。ところが誰一人としてすぐそれを知らしてくれるやうな者はなかつた。地震以後貸家は減切り拂底してゐるのである。それに、屋敷街などにちよつとした構えの空家がみつかつたとして、彼の職業が職業であるから、「これやア向かない」――と人々はそれを相談するまでもないことゝして知らさなかつたのかも知れないのである。――

細君は、自分から家を探さうなどとは決してしなかつた。その癖彼には執拗く催促して、彼が家へ歸つてくると必らず駄々を捏ねた。

「どう？　家あつた。」

彼が返辭をするのに間誤ついてゐると

「ないんだらう、お前さんの頼み様がわるいからさ。わたい、近所へ顔向けが出來ないでるぢやないか。いますぐ越してくれなけや、わたい、家のことなんか少しもしないから。」

事實彼女はその後、なるべく家の中にばかり閉ぢ籠つてゐて、たまに近所の人達と顏を合はせるやうな機會があつても知らぬ振りして挨拶をしなかつた。すつかり曝露（ばれ）てしまつたと思ひ決めてからは、氣がさして反抗する氣にもなれないでゐるのである。——たゞ彼に對してだけは、いつさう氣難しく、我儘になつて來た。そして、家を探しだしてからまだ一週間と經たないのに、空家を見つけてくれないから、といふ理由で彼女は、主婦としての、また人妻としての職務に就てすつかり退業狀態を固執してしまつた。家の中は散らかし放題、寢床は敷いたまゝ——それも子供と自分との分は入口の三疊に移してしまつた。入口の戶は錠をおろしたまゝであつたし、食べ物なども自分と子供とが食べてしまへば、それより他のことはうつちやつて置いた。彼が歸つて來ても、

「どう？　みつかつたかい？」

と、かう尋ねはするが、いつものやうに彼の返辭を待たないで、「ないんだらう、きまつてらア。賴み方がわるいんだよ。それに人任せだから駄目さ。自分で探す氣がないんだから。」などと自分の言ふことを一通り言つてしまふと、あとは彼がなんと言つても返辭をしなかつた。……

彼も、かう不貞てゐる細君にはまつたく手古擦つてしまつた。といつてどこまでも善良な彼は、餅肌ですがめの細君と子供とはどんなことがあつても可愛がらずにゐられないのである。彼もすつかり悲觀してしまつた。ある日などは忙しい仕事を休んで自分で探しに歩いた。が、矢張りみつからなかつた。——かうしてまで見つからないのだから仕方がなかつた。彼はたうとう自棄を起してしまつた。……

その夜彼は非番だつたが、いつになく早く八時頃に家に歸つて來た。それも、此地へ越してからつひぞ出入しない仕事仲間を多勢——實は五人なのだが、家が小さく、周圍も狹小（せこ）ましかつたからさういふ感じがしたのである——併れて歸

つて來た。

彼にはいたつて氣難しく我儘な彼女も、彼の仲間にはひどく愛想がよかつた。此地へ越して來るまでは、同じ長屋に棲んでゐて毎日顏を合してゐた、謂はゞ彼女にも氣の置けない仲のいゝ友達なのである。お互がお互の職業を知り合つてゐるといふことだけでも彼等をどんなに親密にさしたか知れない。——彼女は喜んでそれらの人を迎へ入れた。彼にも手傳はせて蒲團を押入へ入れるやら、箒を使ふやら、彼女は珍らしく燥ぎ出した。

「奥さん、神酒はお客様が持參いたしやしたから」

頭がつるりと禿げて、茹で章魚のやうな顏をしてゐる年寄りが、冗談らしくいひながら二升入の罎詰を前に出した。

「小父さん、からかつちや、わたいいやだよ。」

「毛頭、からかひません。この頃は奥様に御出世なさいましたさうで、結構で……。」年寄りは顏を下げると、「おい、お滝、お前のも出さねえか」と自分よりは少し後方に座つてゐる、六尺は十分あらうと思はれる骨格の逞しい男に催促した。

「うむ」

お滝と言はれた男は、默り屋だと見えて、ちよつと笑つたきりで、同じ二升入りの罎詰を背後の方から出した。

彼等は、いち樣に仕事先から貰つた揃ひの印袢纏を着てゐた。彼女は以前さういふ姿を見つけてゐただけ、酒の燗をはじめる頃になつてやうやくそれに氣づいた。そして、一時は仕樣のない破落戸がころがり轉んだやうに思つてぞつとしたが、どうせ近所に露れてしまつたのだから構ふものか——と思ふと、たいして氣にならなかつた。それどころか、さうした同じ袢纏を着てゐる人がかうもずらりと並んでゐることは、なんともいへない氣強さを彼女に與へずには置かなかつた。

彼等は、これも途中から買つて來たすぢこを舐めずりながら茶碗酒を飲み出した。お喋り屋も、無口屋も、皆んなが飲み方が荒らかつた。あまりいけない彼も負けぬ氣になつて飲んでゐた。とりとめもない話と一緒にものゝ一時間も經つた頃には、四升の酒も殘り少なであつたが、彼等はひどく醉が廻つてゐた。

「おい、みんな聽いてくんねえ。ぴかーツてえ痛快なことがあるんだ。」

さつきから令孃といふ綽名で呼ばれてゐる血氣盛りの壯者が眼を卸しながら言つた。

「令孃のぴか一はいつもおどかしだよ。役札よりも大切なんだからな。」

竾草魚のやうだと言つた年寄りが、かう冗談らしくひやかした。

「いや、今度はわけが違ふぞ。素晴しいぴか一だ、おい、そつちもくだらねえ話はよして、ぴか一つて話を聽いてくれこ」

壯者はかう皆んなの視聽を自分に集めてから言ひ出した。

「そらア、この頃俺は主人の用で毎日鎌倉河岸までやられるだらう。歸える時は怜度丸ノ内あたりの勤人と一緒になるんで、あそこではどうしても電車が乘れねえんだ。で俺ア、吳服橋まで行つて乘るんだが、それがまた大變な騷ぎさ乘らうとする人の列で四五町は續くだらうな。ところがこゝで癪に觸つてならねえつてことは、こんな多勢の者が後から後から待つてゐるのに、前の方にゐる奴らがさ、まアだいくらも乘れるものを、腰かけてえつてばかりに次の電車を待つてやがるんだ。俺ア運がわるいのか、それとも馬鹿正直つて奴か、その爲めにいつも立ン坊さ。いま五六人の奴が前の電車に乘つてくれゝば、俺ア次ぎの電車にはちやんと腰をかけられるものを、そいつらが乘らねえばつかりに腰掛けられねえくなつたことが續いて三四回あつたんだ。そいつらの心根を思ふと、俺ア癪で癪で堪らねえかつたが、昨日のこつ

た。ぴか一と出てやつた。」
「第一卷の終り。」
醉ひ潰れて、上半身をがつくりと折つて胡座の上に頭を凭せてゐた一人が寢呆けたやうな聲で怒鳴つた。
「赤蛙、聽いてゐたのか？」
甲州と呼ばれてゐる目立つて小柄な——それでも四十近い年號であらう。そして、顏も眼も口もくちやくちやとして小ぢんまりな——男が言つた。
「夢の中で、聽いてやつたんだ。
彼——本篇の主人公である彼——が口を狹んだ。
「令孃、早く言へ。そのぴか一つてえ奴を。」
本物の花も大好きだが、無口屋の癖に氣短で癇癪持ちの大男——お猿が惱つてるやうに言つた。
「早く言へッて、俺に喋らせねえんぢやないか。」壯者は、全部の視聽を集めないでは話し榮えがないといふ風であつた。「……そのぴか一ッてえ奴はよ。ね、昨日の歸りも俺ア、前の十人ばかりの奴がずるけて電車に乘らねえもんだから、またその次の電車に腰掛けられさうもなくなつたのよ、形勢がさ。電車になんか俺アこの若さで腰掛けたくなんかないさ。でも前に居る奴の心根が癪で癪でたまらねえからな。そこで俺ア、次ぎの空電車が線に入つて來たとき、いきなり列から拔けて、一番前へ行つてやつたんだ。すると、電車の監督や、前の奴等が承知しねえんだ。文句言ひやがつたから俺はそいつらを怒鳴りつけてやつたんだ。「しやらくせえ！」つてね。「てめえ達は、前の電車にいくらも乘れるものを何故乘りやがらねえんだ。ねえおい監督！」つて俺は電車の監督に言つてやつたんだ。「こいつらア、電車に乘りた

くねえんだつてよ。電車に乘りたくねえ奴等は、列から抓み出してしまへ！」――さう八ヤ當りしながら俺ア、悠々といの一番に電車に乘つてやつたんだ。」

「それやおもしれえ」

　誰かゞ言つた。皆んなはさいぜんから痛快さうに笑ひながら聽いてゐた。

「……いや、ぴか一つてえのはこれからなんだ。ね、俺アそれまで氣がつかねえかつたが、俺に先を越されて後から電車にけだもののやうに先を爭つてどやどや入つて來やがる奴等は、どれもこれも一角の紳士面アしてゐる奴さ。洋服などを着込みやがつて。馬鹿野郎共、俺えみたいな袢纒着に厭味吟に惡口言はれやがつても、それでも樂してえからつて我先きに腰掛けようとぢたばたしてやがるのを見ると、俺ア痛快を通り越して淺猿しくなつて來たんだ。ふゝん――とそいつらを輕蔑する笑がなんの氣なしに浮んで來たときには、俺ア、これアぴか一だ！と胸の中で叫んだね。」

「なるほどそいつアぴか一だ！」

「令孃にしちや、芝居が大出來だ！」

「令孃にしちやアはなんだい……俺アいつでもこんなもんでえ。」

　醉に乘じてみんながやがや騷ぎたてるのに混つて、大男のお孃がひとりで怒鳴つてゐた。

「ぴか一だ！ぴか一だぞ令孃！あはゝゝゝ、紳士面をした奴等がか。そこがおもしれえよ。會社員馬鹿野郎、銀行員間拔野郎、重役馬鹿野郎！　支配人馬鹿野郎、金持ちの間拔け、吝つたれ！乞食！陸ン坊！」

　無口屋が牛の吼えるやうな、それこそ間拔けな聲でかう怒鳴りつゞけるので、皆のものはどつと笑ひ出した。

「さア、ついでだ！歌はふぢやないか！」

令嬢がかう元氣よく言つた。

「さうだ、もう時間も遲くなるからやつて貰ふかな。」

彼もいつになく元氣よく言つた。

「やれ、やれ、俺は斷るぞ！」

お龍が怒鳴つた。

「そいちややらう。おい赤蛙起きろ！甲州も、御隱居もいゝか」かう指揮者らしく言つたのは、さいしよから誰も相手にせずに、たゞ酒ばかりをぐいぐい呷つてゐた、それでゐて誰よりもまだ醉つてゐない、河童のやうに頭髮をもぢやもぢや長くしてゐる將校であつた。仲間の中でもこの男の過去について詳しく知つてゐる者は誰もなかつたが、三四年前から一緒に仕事するやうになつたこの男が、ある年の正月に陸軍少尉の軍服を着て、佩劍の音をガチャつかせながら年賀廻りに步いてから、人々は彼を將校と呼んでゐた。仲間中での唯一人の智識階級で、一番の怠け者であつたが、筆がたつところから皆から調法がられてゐた。

「よーし！」

彼等は皆な、胡坐のまゝではあるが昂然と體を構えた。

「いゝか！一ツ　二ツ　三ツ！」

將校が號令をかけた。これらは豫めちやんと企んでゐたことゝ見えて。彼等は一齊に高い聲で歌ひ出した。壯者の張ち切れさうな肉聲、年寄りの嗄れたがさがさした聲、……それらは錯然として少しも歌の調子はとれなかつたが、みんなが元氣よく、歌詞のすゝむまゝに彼等は、だんだん自棄氣味に大きな聲で怒鳴り出した。

わたしや、町屋の隠ン坊焼き、
お前も、　町屋の隠ン坊焼き、
どうオせ、俺れたちは、この世では、
人の厭がる隠ン坊焼き、

彼等は三回も、かういふ歌を續けて唱つた。二回目は一回より、三回目は二回より、だんだん大きな聲で喚れ出すやうに歌つた。お隨だけは總身に知恵が廻りかねるといふやうなその大きな骨格のいゝ體つきで、中途から滅茶苦茶に踊りだした。すると他の者たちも、三回目の歌が終りかける頃から、一人立ち二人立ちして、しまひには總立になつて滅茶苦茶に踊り出した。

わたしや隠ン坊焼き
お前も　隠ン坊焼き
俺の嬶も隠ン坊焼き
お前の倅も隠ン坊焼き
隠ン坊が揃つて隠ン坊焼き

踊りも出鱈目だが、歌もまた出放題になつて來た。

彼の細君は、あまりいけない盃を嘗めながら、皆に混つてそれまで笑ひ興じてゐたが、この傍若無人な歌を皆なが一齊に歌ひ出したときには、恰も敵の伏兵の喊聲を足許で聽いたやうに、呆ッ！として驚きのあまり何うしてよいのかなす術を知らなかつた。といつて、

「そんな歌よして頂戴！」

から叫ぶ氣にもなれなかつた。さういふことは、この場になつて猶近所の思惑を怖れてゐることになるので、彼女にはさういふ意氣地ないことは厭であつた。さうしてどきまぎしてゐる中に、彼女にはひとつの勇氣が出て來た。なんともいへない痛快な、晴れ晴れしい心が胸に躍つて來た。突然彼女は、

「あはゝゝゝゝ」

と氣狂ひ染みた甲高い聲で笑ふと、皆の人達の調子に眞似て、彼女も出鱈目に歌ひ出した。……

わたいは隠ン坊燒き
わたいは隠ン坊燒き
宗坊も隠ン坊やき
とオちやんも隠ン坊燒き
隠ン坊が揃つて隠ン坊燒き



西郷吉之助

吉田絃二郎

第一幕

時　文久二年二月十五日の午後

場所　薩南大島龍郷村海岸丘の上

人物　流人菊池源吾（西郷隆盛）三十六歳

島の與人劉佐民の娘アイガナ　十九歳

島の與人劉佐民

同　妻

島の大男　川口三五郎

薩藩の使者　伊集院五郎

同　柴山武左衛門

同　從僕數名

島の役人
島の住持　白夢和尚
島の子供等

茅葺きの小屋、やゝ上手に片寄りてあり。八疊の座敷、正面左手とも濡れ緣にてめぐらす。正面一間の床の間には粗末なる懸軸。小さき位牌一つ。獵銃、刀架に懸けたる大刀等。左手の濡れ緣には軒より網、釣具、魚籠、簑などが懸けてある。正面座敷に降りて右手に茶の間及び勝手などある意。座敷と茶の間との境には板戸あり。床の間と板戸との間には一間の壁。板戸には羅紗のマントが無雜作に引つ懸けてある。すべて流人の閑居にふさはしく簡素なる體。

上手及び下手一面に高き椿の木立。椿の幹の白きと花の紅きが殊に美しき對照をなして見える。地上一面に椿が散り重なつて居る上手に芭蕉、棕櫚、竹など亞熱帶地らしき植物が繁り居る。雲雀及び鶯の聲のどかに聞ゆ。椿の木立の後は切り岸になりて、直ぐ下は濱になつてゐる。下手、椿の木立の下から海岸に通ずる徑あり。椿の木立の間から、遠き島々など見ゆ。靜かな浪の音。

七八歲の島の女の子二人、椿の下にて、無言のまゝ落ちたる椿の花を拾つては糸に刺してゐる。すでに二尺ばかりの長さに花を刺してゐる。椿の花二つ三つぱたと落つ。

鶯啼く。

島の男の子等六七人下手椿の木立の下より騷ぎながら登場。二人の女の子を見つける。

男の子一　やあ、あまつちよらがあんなことしてるぞう。

男の子二、三、四　やあい、やあい……

（みなにて囃し立て、落ちたる椿を投げかける。女の子二人、上手椿の中へ隱れる。）

男の子五　さあ、こゝでいつものやうに相撲を取らう。先生さまいつものやうに來て相撲の手敎へてくださるといゝがのう。

男の子六　先生さまさつき、お寺の方へ行かしつたのを、おら、濱で見た。今に歸つて來なさるだらうよ。

男の子一　それまでおらたちこゝで相撲取つてゐようよ。

男の子等　さうだ〳〵。

（椿の下にて子供等相撲を取る。川口三五郎、犬を連れ、火繩銃を持ち、狩仕度にて登場。子供等の相撲を見る。）

男の子二　やあ、三五郎だ三五郎だ。

三五郎　何が三五郎だい。なまいきな、小童(こわつぱ)のくせに。

男の子三　威張るない、威張るない。そんな大きな態(なり)をしてゐても、こないだは先生に芋(いも)の子のやうに、づんでんところりと投げられたではないか。

他の男の子等　さうだ〳〵やあい大男の三五郎、五郎の芋の子やあい。

三五郎　ハツハツハツ惡い奴らぢや。おれが敗けた敗けた。勘辨してくれ。

男の子等　そんならゆるす。威張るない。わあい〳〵。

三五郎　いま〳〵しい餓鬼らぢやなあハツハツハツ

アイガナ（板戸を明けて濡れ緣に走り出て來る。色白き美しき女。產後の面やつれ見ゆ。）これ〳〵みんないゝ子ぢや、家(うち)の坊やがいまねんねしたばかりぢやで、ちつとの間靜にしてあつちにゐて遊んでください。先生が歸つておいでなされたら、また何ぞよいおみやげがありませうよ。

男の子五　先生さまがお歸りになつたらわしらと相撲取つてくださるかなあ。

アイガナ　あゝ取つてくださるともホヽホ・・・・

男の子等　ぢやあ、あつちに行つて遊んで來よう。

（子供等下手椿の下に退場。）

三五郎　やあ、奥さま、よいお天氣でございます。ずつと引きつゞきおからだもお宜しいさうで結構でございます。先生は今日はお留守でございますかい？

アイガナ　ありがたうございます。まあ三五郎さんとしたことが、今日は十五日、月照上人さまの御命日ではございませんか。

三五郎　いや、なるほど月照上人さまの御命日、それではまたお寺詣りにおいでなされたのでございますか。

アイガナ　雨が降らうと風が吹かうと、この島においでなされてから、たゞの一度でも御命日にお寺詣りを怠りなされたことはありませぬ。

三五郎　先生はまことに御殊勝なことで……

アイガナ　このころこそ、坊もできたりしましたので、（ちよつと羞恥の態）あきらめておいでなさるやうですが、ひところはいつ自殺をなさるかも知れないと思ひました。家の父さんが一度は刀をもぎ取つてやつと、それで自殺を思ひ止まりになりました。

三五郎　さうだつたさうでございますな。何でも月のよい晩だつたと申すぢやありませんか。

アイガナ　お月見の晩でございました。こゝの縁端であそこの海をごらんになつておいでゝしたが、だしぬけに床の

間の刀をお拔きなされて。

三五郎　おう〳〵。（不ト人聲に耳を傾け。）いや先生のお噂をいたしてゐましたら、どうやらあの濱を步いておいでのは先生らしうございます。和尚さまと濱で話をしておいでなさいますやうぢや。

アイガナ　あゝたしかにさうでございます。

三五郎　いや、實はな奥さま。あの岬の棕櫚林の横でございますよ。二三日兎が大分寄つて來て、畑を荒してゐますので、先生をお誘ひしようと思ひましたが、今日は御命日では、飛んだ惡い日に伺ひました。まあ先生に叱られませぬうちにハッハッハッ……どうぞ宜しく仰つしやつて下さい。（三五郎上手へ退場。）

アイガナ（後に殘りて下手を眺める）どうなされたのか。濱のところで、立ちとまつて和尚さまと何かまたお話なされてゐるやうぢや。このころは旦那さまは、またどうかすると、わしは尙一度だけは國に歸らねばならぬかも知れぬとばかり仰つしやるが、もし旦那さまとお別れしなければならぬのならわたしやどうしたら宜からう。一日でもお別れすることはわたしにはできぬに。それかと言ふて、せつかくあれほどの御器量人を見す〳〵あたし一人の女のために、この島に埋めてしまうのもお氣の毒だし……一層わたしが死んでしまうか（板戶の方を振りかへる）……それもならぬし。どうか十年でも二十年でも御赦免の使などが來ませぬやうに（手を合せて拜む。板戶の彼方にて子供の泣き聲。アイガナ急ぎ板戶の中に退場）

舞臺しばらく空虛。しきりに蟲の聲。

西郷隆盛下手より腕を組み、俯向き勝にて登場。袴を着け、小刀を帶し、藁草履。巨眼巨軀の偉丈夫。

隆盛（椿の下に立ちとまり、落ちたる椿を見る。）昨夜の嵐でよう椿が落ちた。（鶯の聲を聽く）あゝすつかり春になつた。長閑なものぢや。（濡れ縁に近寄る）いかにも春ぢや、あれが薩摩の山でもあらうか。あれが大隅の見當でもあらうか。山も海もすつかり霞んでしまうた。

アイガナ（茶を運んで登場）お歸りなさいまし。

隆盛　小僧たちは眠つてゐるかのう、おい！

アイガナ　よう二人とも眠つてばかりをります。

隆盛　さうか。（いかにもうれしさうな表情）さう寢てもいゝものかのう。どれ一つ……（板戸の方へはいる）

アイガナ　旦那さまさう顏をおいぢりになつてはいけませぬ。眼をさましますから。まだお抱きになつてはいけませせん……。

隆盛　あゝまだ抱いてはいけぬか。

アイガナ　はい。

隆盛　おつ母さんがさう言つてゐたのう。坊やのお臍が落ちるまではまだ抱いてはいけないつてハツハツハツ…

アイガナ　はい（かるき羞恥）

隆盛　まだ臍が落ちぬかハツハツハツ。坊主の方もよく寢てるなあ。わるさばかりしよるが。坊主の眠つた顏はいゝとしいのうハツハツハツ……

アイガナ　さう、そこでお笑ひなさいますと坊が眼をさまします。

隆盛　まあさう言ふな。（板戸の中より出て來る）あんまり可愛いものだからのうハツハツハツ……お前はもう起き

てよいのか。何でも二十一日はいやでも發てゐなければならぬといふぢやないか。　縁端へ坐る）

アイガナ　それは城下あたりの身分ある方々のお娘たちのことでございませう。わたくしらのやうな島の女たちはそのやうなことは……

隆盛　また島の女、島の女といふ。

アイガナ　でも、島の女なればこそ、美しい城下や、都の女たちに見かへられてしまうのでございます。

隆盛　何をいふばかな。またそのやうなことをいふ。

アイガナ　でも旦那さまには城下にも立派な奥様がきつとお待ちでございませうし、都では都で……

隆盛　わしはまつたくまだ獨身ぢや。鹿兒島にも、都にも妻も何もない。わしも男ぢや。そりや、都では女を呼んだこともある。しかしわしには女に魂を奪はるゝやうな暇はなかつた。二十二で殿樣のお側に召し使はるゝやうになつてから今日まで、わしの頭にはいつもたゞ恐れ多いことだが、主上と、殿樣と日本といふものばかりがあつた。都で遊んだ女などといふものは、ほんのその日その場かぎりの戯れであつた。その無風流なわしがこの島に流されて、三十三歳でこの胸が痛むほど、心の底から初めて女に惚れるといふことを知つたのぢやハツハツハツ……

アイガナ　まあ旦那さまは……

隆盛　いやまつたくぢや。嘘は言はぬ。大島に流さるゝまでのわしにとつては天下、國家がわしの戀人であつた。わしはいつでも何事に對しても生命を賭けてかゝらねばすまぬ性分ぢや。匹夫の勇とそしらるゝかも知れぬが、昔から薩摩武士には一人の少年のために命を投げた男もあつた。そこが薩摩隼人たる性根かも知れぬ。わしの體中にもそんな血が燃えてゐるやうぢや。薩摩隼人には名も入らぬ。金も入らぬ、命も入らぬものぢや。この島に流されてから、初めて

天下國家にもまさるものを見出した。お前のその美しい眼ぢやハツハツハツ……

アイガナ　まあ旦那さまの……………

隆盛　いや、まつたくだ。わしはお前がはじめてこの家に手傳ひに來てくれた日から、お前が好きであつた。お前が二日來てくれ、三日來てくれるにつれてわしはお前が好きで好きでたまらなくなつた。すまないことだと思ふたがわしは月照上人の命日にお寺に通ふ路すがらさへお前のことを考へてゐた。恥づかしいことだが、わしはあの濱を歩きながらお前の名をあの濱の砂の上に幾度書いたか知れぬハツハツハツ……

アイガナ　……………………………

隆盛　もしお前がわしのところに來てくれなかつたら、わしはお前の親父どのと果し合ひしてもお前を奪ふたかも知れぬ。

アイガナ　まあ……

隆盛　ハツハツハツ……驚かぬでもいゝ。まあたとへばだ。わしのその時の心持ちを言つて見ればだ。

アイガナ　でも旦那さまはもうこのごろでは、わたくしのことなんかどうでも宜しいのでございませう。また天下とやら國家とやら、それの方が大事になつて來たのでございませう。

隆盛　どうしてその可愛いゝ美しいお前を忘れられようぞ。天下、國家といへばいかにも立派だが、そこにはなあ、生命(いのち)の欲しい奴、名や、金の欲しい奴、權勢の欲しい奴ばかりがゐる。一片の肉をあさる野良犬の群のやうな男たちばかりが、やれ天下、やれ國家、と大きな聲で叫んでゐる。尊王といひ、攘夷といひいづれ皆腐肉をあさる犬の群だ。わしは思つたばかりでもいやだ。二度とあのやうな世界へ還つて行かうとは思はぬ。安心せえ。

アイガナ　（茶をいれかへてすゝめる）そんならほんにうれしうございますが……

隆盛　どうしてお前のやうな美しい女を捨てゝ行かれようぞ。

アイガナ　ほんに、わたしを捨てゝお出でなされてはいやでございます。

隆盛　これ見い、あの鳥の影を、あの海を。すつかり春になつたのう。大方あれが九州の山でゝもあらうな。まるで小ひさな一片の雲のやうではないか。あの小ひさな世界でやれ尊王ぢや、やれ倒幕ぢやと、我慾に驅られ、憤怒に燃え修羅の巷を驅けめぐつてゐる人たちの姿があさましいではないか。これ、春の日はあのやうに照り、春の風はこのやうに吹くに……（雲雀の聲しきりに。沈默。）

アイガナ　まだ、月照さまの命日でございますのに朝からあたゝかい御飯も上げてをりませぬ。

隆盛　さうだつたのう。わしらだけは朝から、冷飯ですませたが、和尚にはそれではすむまい。あたゝかい飯でも焚いて上げてくれ。

アイガナ　ではさういたしませう（板戸の中へ退場。隆盛床の間の位牌の前に坐り、瞑默する。）

（鳥の聲のどかに、波の音聞ゆ）

アイガナ　（登場）旦那さま大變でございます。

隆盛　何うした？

アイガナ　お米がもう一粒もございません。

隆盛　與人殿からのお米はまだ來てゐなかつたのか？

アイガナ　いゝえ、いつもの御扶持米はちやんと十日分だけ來てゐたのでございますが、昨日も一昨日もあの……

隆盛　あゝ、あの流人の仲間どもが來て食つてしまつたのか。それでもう一粒もないのかハッハッハッ……

アイガナ　はい。

隆盛　今度はいつ、お扶持米をいたゞくことになつてゐるのぢや。

アイガナ　十七日でございます。

隆盛　では十七日まで斷食しよう。

アイガナ　旦那さまはいつでも、あの無遠慮な流人たちにお扶持米を喰べ荒らされてしまつて、御自分では二日も三日も斷食なさるが、わたくしは齒痒うてなりませぬ。

隆盛　いや、さうではない。同じ流人でもわしはまだ殿様のおなさけで、勿體なくもこの流人に年に十八俵といふお扶持米をいたゞいてをるが、あの仲間の男たちは一合の米もいたゞいてをらぬのぢや。元は見ず知らずの男でも、かうやつて一つ島に流されて來るのはよく〳〵の緣ぢや。まあわしが持つてゐるものは、あの男たちに食はしてやれ。わしが二日や三日食はぬところで死にもしまい。實際わしは、斬罪にも當る大罪を犯した男、一粒の米でも殿様から頂戴するのは涙がこぼれるやうだ。(默然とする)

アイガナ　でも旦那さま……

隆盛　さうだつた。お前はそれでは乳が止まつてしまうであらう。それは可哀さうなことをしよつた。

アイガナ　わたくし、一走り母の家まで走つてまいりませう。

隆盛　まだお前、そのからだで。わしが行つて來る。わしはともかく、お前や子供らが可哀さうだ。

アイガナ　旦那さまが、……飛んでもない。では裏に子供たちが遊んでゐるやうでございますから、子供たちに賴み

ませう。(板戸の中に退場)

(雲雀の聲遠くに聞ゆ。夕暮れの色かすかに迫る。間。)

隆盛 (濡れ縁の端に立ち、沖を眺む)どうも氣が靜いでならぬ。(床の間の大刀に目をつけ刀架から大刀を手に取る。急いで元の場所に置く。再び誘惑さるゝかのやうに大刀を手に取る。)初めて御先代さまのお伴をして江戸に上つた時、越前候へお使した折、御先代さまから拜領いたしたのであつた。昔を思ひ出すやうな物はみな捨てたがこればかりは捨て得なかつた。久しく手にもしなかつたが(鞘を拂ひ、刀身を見る。)形といひ、香といひ、燒といひ……(次第に引き付けらるゝやうに見つめる)まるで秋の大空のやうな……明月のやうなこの心。ううむ、かう、この刀を見つめてゐるとわしの心の邪念も、鬱結も日の前の雲のやうに消えてしまふ。うむ、さうであつた御先代さまのお伴をして江戸からの歸りに、桐野利秋や篠原國幹等と一緒にこの刀で京の鴨川べりで關東の奴等を無二無三に切りまくつたのは。あの時はまだわしも血氣さかりであつたが、うむ(突然跣足にて庭に飛び下りやにはに大刀を振る)あゝ、宜い氣持ぢや。わしの腕もまだなか〳〵鈍つてはをらぬやうぢや。しかしもうあのやうな全身の血が沸き立つやうな機會はわしの一生に二度とは來まい。有村治左衛門の奴うまいことをしよつたわい。もしわしが江戸にゐたら井伊大老の首は人手には渡さなかつたがなあ。杉山彌一郎や佐野竹之助の奴等さぞ勇ましう戰ふたであらう。思ふたゞけでも腕が鳴る。あゝこの腕が…………(いま〳〵しさうにそこいらを歩き、大刀を揮ふ。)聽けば京方と關東との間にも、今にも合戰が始まらうも知れぬとのこと、この腕で、幕府の奴等を切つて〳〵切りまくつたらあゝどんなにかこの積年の胸が空かうに。わしは桐野だの篠原だの大久保だのあいつらが羨ましい。わし一人がこんな島で、あゝ〳〵この腕が……(縁に腰かける。嬰兒の泣き聲聞ゆ。)だが待てよ、あれも、これもみな迷ひか。(刀を鞘に入れ足を拭いて緣

に上り、刀を刀架に懸ける。嬰兒の泣き聲に耳を傾ける。風出で、波の音高まる。海の方を見つめる。暮色迫り、十五夜の月水平線の上に昇る。）おうあの月、あの滿月が。あの……（縁の上を走る。）

浪の上に碎くる月の影が、今夜もあれあのやうに銀鱗を撒き散らして薩摩までもつゞいてをる。……あの夜も雲一つなかつた。藩の重役等はわしに上人を連れて法華獄に行けと言ふた。彼奴等はあの日向境で和尙を切るつもりだつたのだ。都からわざ〳〵お連れした和尙をどうしてわしの手で殺すことができよう。わしはともかく船に乘つて逃がれるだけは和尙と一緖に逃がれて見ようとも思ふたが、所詮免れる術はないと思ふたので、船もひそかに御先代さまのお船をお借り申した。わしは船窓に書いてあつた草花の模樣まではつきり覺えてゐる。わしは和尙と一緖に一つの棺に入るつもりで船に乘つた。わしはどうしても和尙一人を海の底にやるには忍ひなかつたので、一緖に抱き合ふて飛び込んだが、水音を聽いて平野が馳けつけた。帆をかけてゐたので船は矢のやうに走る。待て、舟を廻せと命じても船は止まらぬ。平野は一刀の下に綱を切る。抱き合ふた二人の死骸が引き上げられた。わしは何でその時死なゝかつたのか。和尙一人を殺してわしはかうおめ〳〵と生きながらへて、いつまでこの月を見るのか。………それにしても抱き合ふて飛び込んだ男の一人が死に、一人が生きるとは………人間の運命ほどわからぬものはない。死ぬるも、生きのこるもみな天運のまゝか。明日のこの身がどうなるものかそれも知れぬ………。

アイガナ　（板戸の奧よりあわたゞしく息苦しさうにして）旦那樣大變でございます。（泣き伏す）

隆盛　どうしたんぢや。體の具合でも惡くなつたのか。冷てはいけぬ。

アイガナ　いえ〳〵、かね〳〵わたくしが案じてをりましたことが………

隆盛　かね〲案じてゐたことゝは？

アイガナ　薩摩からの御使者の方がお見えになりました。

隆盛　えッ！薩摩からの使者ッ！

劉佐民の妻（上手より走り來り縁側にしやがむ）旦那さま、たうとう大變なことになりました。（泣く）

隆盛　して、それは不吉の使者か、喜びの使者か？（刀架より刀を掴み取り、きつとなる。）

劉佐民の妻　何のためのお使者でございますやら、それはまだ……

隆盛　ふうむ。大かたわしに詰め腹でも切らせるつもりであらうソッハッハッ……（刀を握り構へ決心の體）

劉佐民（上手より走り込み）詰め腹どころではございませぬ。旦那さまにとりましてはこの上もないお芽出度い御使者でございます。（娘の方を向き、涙を拭く。）

隆盛　なにわしには芽出度い使者と？

劉佐民　はい、御赦免の御使者らしうございます。

隆盛　えッ！御赦免の！眞實か？（板戸の中に駈け入り拜領の袷をかゝえて出づ）もう直ぐこれへ見えるか御使者は？

劉佐民　はい、もう直きそこの濱を歩いておいでになります。

隆盛　あゝ、もうそこの濱まで見えたか。（隆盛狼狽氣味にて部屋の中を何か探しつゝ歩きまはる。）あゝこれおあいあの何をどうした？

アイガナ　旦那さま何でございます？

隆盛　あのそれ、御拜領の袷だッ！

劉佐民の妻　旦那さま、あなたさつきから腋の下にお抱えになつておいでゞございます。

隆盛　ワッハッハッ……これは、成る程（板戸の中に駈け入る。アイガナつゞいて入る）

（薩摩の使者二人、僕数人、提灯を持ち、島役人の案内にて下手より登場）

隆盛　（服を改め板戸の中より出づ。アイガナつゞいて出づ。）やあ、お珍らしう。伊集院殿、柴山殿、御遠路大儀でござりましたのう。

伊集院　先生にも御機嫌克く。

柴山　わたくし等も何よりうれしう存じます。

隆盛　して、先づ何より。

伊集院　殿様よりの御言葉をおつたへいたします。（二人座敷正面に坐る。）

隆盛　（にぢり寄り、軽く頭を下ぐ）

伊集院　この度遠島の儀御赦免なされ、即刻歸參致さるべしとの仰せでございます。

隆盛　（頭を下げたるまゝにて暫く無言）

柴山　先生にもさぞお喜びでございませう。わたくし等もこんなにうれしいことはございません。（柴山、伊集院二人濡れ縁の方へ退く）

隆盛　（なほ無言。そつと涙を拭く）

伊集院　先生の御心中お察しいたします。

柴山　では、先生お別れを惜まるゝ方々もおいでになるでございませうが、國許にても殿様始め大久保、小松、中山

の重役方も一刻を爭ふ目下の狀態であれば、十七日までには是非とも先生をお連れ申せとの御仰せでございましたが、生憎出船以來暴風雨つゞきのため二日も遲れましてこの島へ着きましたやうな次第。甚だお氣の毒でございますがどうぞ即刻お立ちを……

隆盛（頭を上げたまゝ呆然と正面を見つめる。月朧にかすむ）

伊集院 先生、いかゞでございます。殿樣はじめ重役方も、この際先生をお呼び申さんでは、どうしても……

隆盛（ぢつと大きな眼にて伊集院を見つめる。伊集院默り込む。白夢和尚上手の木蔭に佇む。）

隆盛 だまらつしやい。わしは今になつて大久保や小松等の計らひで御赦免にあづからうとは思はぬ。わしは鹿兒島に歸るのはいやぢやといふて下され。

伊集院 でも、殿樣の仰せでございます。

隆盛 二言目には殿樣をかつぎ出す。そのやうな世界はもう飽きましたのぢや。わしはこの大島が一番好きになりましたのぢや。わしにはもう可愛いゝ妻もできた、子供も出來た。（板戸の方を見る）この島で芋でも拵へてをるのが一番わしには似つかはしい仕事でござるのぢや。わしにしてもまだ若い、この島に來てからも、時には一度國へ歸つて乾坤一擲の大事業を計畫して見ようと思ふたこともある。現に、つひ今しがたであつた。わしはそのやうなことを夢みてゐた。しかしあんたらが見えて、殿だの、重役だのといふ言葉を頭から聽かされると、わしはつくづくそのやうな窮屈な世界がいやになりました。もうわしは昔の西郷吉之助ぢやない。大島のたゞの百姓ぢや。もうそのやうな苦しい世界はいやでござる。

（栗山、伊集院二人、困り果てた顏をする。上手の木立より島の寺の住職白夢和尚登場。霧悉く白し。）

白夢　（縁の下に立つたまゝ使者に會釋し、しばらく月を眺めてゐる。）あゝ先生、先刻は失禮いたしました。

隆盛　あゝこれはようこそ。まあこちらへお上り下さい

白夢　あまり月がようございますのでつひ月に浮かれてハツハツハツ……春の夜の月もまた格別なものでございますのう。

隆盛　和尚、よいところへおいでゞございました。恰度鹿兒島から友人が訪ねてくれましたので、一獻掬まうと思つてゐたところでございます。これおあいお客さまへ。

（アイガナ退場）

白夢　（縁に腰を卸し月を眺め入る。）先生、まことによい月ではございませぬか。

隆盛　（縁に近づく）まことによい月でございます。（アイガナ酒を持ち來る。）まあ一獻。

白夢　ありがたうございます。（杯をいたゞく）まづ先生も。

隆盛　伊集院殿　柴山殿もどうぞこちらへ。これはこの島のお住持白夢と申されるお上人……（伊集院、柴山挨拶をする）さあ、あんた方もお疲れであつたらうが先づ一獻……。

伊集院　先生、でも、わたくし等は殿樣のお使ひにまいりましたので、先づ先生の御返事を………

隆盛　返事は返事だ。酒なくしてこの良夜を奈何せんだワツハツハツ………（人々しばらく杯を廻し飲む。）

白夢　先生、あなたが月照上人と一緒に薩摩潟に身をお投げなされたも、このやうな滿月の夜であつたと承りますが。

隆盛　十一月の滿月の夜でございました。（暗然とする）

白夢　その後先生には一日も上人のことをお忘れなきやうにお見受けいたしますが。

隆盛　あの時武士らしく刀を持つて相果てますれば、生き恥をさらすこともなかつたかと思ひますが、和尚に刀を當てまするのも心苦しく、つひあのやうなことになつて、まことに殘念に思ひます。

白夢　では、先生は今でも上人のためならば、喜んで何も彼も打ち捨てなさるでございませうな。

隆盛　仰つしやるまでもございませぬ。

白夢　では申しませう。拙僧のやうな老人が斯様なことを申し上るもいかゞでございますがこのごろの江戸幕府を何とお考でございます。違勅また違勅の罪を犯して憚ることなく、傍若無人、惡逆無道。曩に井伊大老が櫻田門外に刺されましたも唯天罰の然らしむるところ。幕府の威勢日に墜ちまするもみな天の配劑。今若しこゝに薩藩を盟主とし、九州四國の雄藩を集め勤王の軍を起しまするならば、一擧にして幕府を倒し、新らしい日本を生み出しますことは日を見るより明かでございます。ところで。その四國九州の各藩を打つて一丸とするには、こゝにたゞ一つの土臺石がなければならぬ。

隆盛　土臺石？

白夢　いかにも、二百五十年來ばら／＼に割り碎かれてをつた各藩の力を一つに打ち堅むるための鎚と申さうか、土臺石と申さうか、それがなくてはこの乾坤一擲の大事業はできませぬ。

隆盛　うむ……

白夢　その土臺石は先生でなくて、誰が他に日本國中にありませう。

（柴山、伊集院うなづいて見せる）

先生がたゞ一人、都の眞ん中へお出かけになるばかりで、長州、土州、肥州……すべての雄藩、日本國中の人々の心は先生を中心に動いて參りませう。恰かも水の低きに隨ふやうに。

隆盛 …………

白夢 先生御一人を中心として、今日本は新らしい世界を生み出すために、苦しんでゐるのでございます。動き初めたのでございます。今は、この日本の片隅に安逸を貪つておいでなさる場合ではございません。先生はあの日本中の人人の呻き聲をお聞きにはなりませぬか。日本中がたゞ先生一人をお待ちいたしてをるのでございます。先生は日本の眞ん中にお出でなされて日本開闢以來の大搏奕、乾坤一擲の大事業を成就なさらねばなりませぬ。月照上人の御志もそこにあつたかと思ひます。今の世には先生を除いてどこに日本國の新らしい世界を築く土臺石がございませう!

伊集院 いかにも和尚の言はるゝ通り先生は日本の唯一つの土臺石でございます。

隆盛 その土臺石もやがてふたゝび不用になれば大島の海の中へ捨てられるのであらうワツハツハツ……

白夢 これは先生ほどのお方のお言葉とも存じませぬ。土臺石なればこそ最初から捨てらるゝは覺悟ではございませぬか。(しばらく沈默)

隆盛 うむ、面白い。役に立つた後ではまた捨てらるゝを覺悟で土臺石になるのも面白からう。世界にはそのやうな大馬鹿者も一人くらゐはなくてはなるまい。わしはその大馬鹿者になつて行かうかワツハツハツ……(杯をぐつと乾して、和尚に獻す)

柴山、伊集院 では先生には早速……

隆盛 うむ、直ぐ出立としよう。船の用意は?

伊集院　何時でも宜しいやうに取りはからうてございます。

隆盛　では……(アイガナを見る)

アイガナ　旦那さま。ではいよ〳〵わたくしが案じてをりました通り(泣く)

隆盛　案ずることはない……

アイガナ　でもわたくしは旦那さまとお別れいたしましては一日でも……

隆盛　あゝ、それもさうだらうが……。こいつは困つたのうハツハツハツ……和尚、わしはやつぱりこの島で芋を作ることにしよう。

和尚　芋なまた來年も出來ます。今年だけは……

隆盛　都に上つて、天下對手の芋を作れといふのですかい？

和尚　左樣でございます都でのお仕事がおすみにさへなればいつでもまた大島へは……

隆盛　では、天下對手の芋を作つたら、わしはまた直きにこの島に歸つて來るぞ。

和尚　さうなさつた方が宜しい。拙僧もこの島でお待ち申してゐます。早う歸つて來てくだされ。なうアイガナ殿、ほんの、三月か半年の辛抱ぢや。別れにくいところぢやらうが、辛抱しておやりなされ。

アイガナ　わたくしは一日でも別れるのはいやでございます。(泣く。板戸の中にて子供泣く。アイガナの母板戸の中に入り子供を連れ、嬰兒を抱いて出づ。)

劉佐民　娘、われも悲しからうが旦那さまの御出世のためぢや、我慢せえ。辛抱せえ。

アイガナ　いやでございます。もうあゝ仰つしやるか、都へおいでになれば何で二度とこんな邊鄙な島へお歸りなさ

いませう。

隆盛　和尚、まつたく困つたのう。もう都行きは止めにせうか。

白夢　一殺多生！　こゝが御辛抱でございます。

隆盛　……………（默然としてアイガナとアイガナの母に抱かれたる子供等とを見る）

幕

第二幕　第一場

時　文久二年四月上旬、第一幕より二ケ月後

場所　兵庫湊屋奥座敷

人物　西郷隆盛

大久保市藏（利通）

村田新八

森山新藏

平野次郎

有馬新七

弟子丸龍助

森山新五左衛門（森山新藏の子）

若侍等

湊屋奥の廣間、上手寄りに床の間、違ひ棚等。成るべく落ちつきたる風に。中央四間は障子になつてゐて、障子を明くれば兵庫の夜の海濱が見える。下手及び上手に椽ありて廊下につゞく。中央に燭臺一つ。火ゆらぐ。何となく森としたる感じ。遠くにて蛙の聲。

森山新藏（四十三四歳）村田新八（いかにも精悍らしき美丈夫二十三四歳）燭臺を挿みて坐り、打ち沈みたる表情。

村田　それにしても、もう今日あたりはお上から何とか御沙汰がありさうなものでございますなあ。

森山　わたしもそのことばかり考へて居ります。殿様がこゝへお着きになつたのは今月四日。わたくしらは早速先生のお伴をして大阪から兵庫へ馳けつけ、その夜にもお目見えがかなうことゝのみ思つてをりましたが、二日經つても三日經つてもお上よりは何の御沙汰もない。

村田　吾々ごとき者ならばお上の御都合次第でいつまで待たせなさらうと不服もございませぬが、先生ほどのお方を。

森山　まつたくでございます。それに今度の先生のお働きと申したら、吾々傍にゐてまあよくもあれほどの根氣がおありだと驚き入るばかりでございました。

村田　まつたくでございます。先生のお伴をして鹿兒島を立ちましたのは三月三日、人吉に出で、肥後、筑前の諸藩に立ち寄り、夜を日についで下の關に着いたのは三月十二日。下の關で殿様をお待ちいたす筈でございましたが、九州諸藩にての風聞では、もう京都では血氣に逸る浪士たちが今にも無謀な軍を起しさうな狀況でありました。下の關に來ると、かの浪士等は殿様の御入京をきつかけに愈々戰を開かうと企てゝゐることが分つたのでした。さすがの先生もあの時ばかりは驚きなされました。これは下の關で殿様をお待ち合せいたしてゐる場合ではない。一刻を爭ふ危急の場合だと仰つしやつて、お上には手紙を認めて先發いたしました。幸ひあなたが下の關へお出で下されたので、あれからは

三人で夜に日をついで大阪まで驅けつけましたが……

森山　大阪に着きましてから今日まで約二十日、先生のお骨折と申したら、とても人間業とは思はれませぬ。まるで網を張つたやうな嚴しい幕吏の眼をくゞり、血迷ふた浪士等の刄の下をくゞり、逸りに逸つた京中の命知らずの若者たちをぐつと押へておしまひになされたあの膽力、あの豪氣。あれでこそ島津家の御威光も立ち、殿様の御一身にも恙なきことができたのでございます。

村田　それにしても氣にかゝるは、今日も夜になつてもまだ何の御沙汰もないのは……

森山　そのことについては先達てからわたくしも案じてをりますが、先月下旬先生が伏見のお邸でお留守居の堀江殿と逢はれた時であつた。――堀江どん、あんたは長州の永井雅樂と腹を合せてをらるゝやうぢやが、永井は追つて長州の勤王の志士たちが打つた切るといふてゐた。あんたはよつぽど馬鹿者ぢや。あんたも心を入れ替えなさい。權謀術策では天下の事は成らぬ。誠心ぢや〳〵と諭つてをられた。何でも餘程氣に喰はぬことがおありだつたと見えて大きな聲で叱つてをられた。

村田　それなら大阪の藩邸でも松江田殿が小なまいきなことを申し上げてうんと叱られてをりました。あの二人は佐幕派でもあり、なか〳〵の男ですから油斷はなりませぬ。

森山　今度の一件も、堀江や松江田が、眞つ先に姬路までお迎へして、お目見えいたしたと申しますから、どうもそこいらに根が潜んでゐようも知れませぬ。

村田　成る程。眞實それにちがひありませぬ。でなければ今日までまるで閉門同樣にして、先生をこゝに押しこめて置くといふことはありませぬ。不屆千萬なは堀江、松江田の徒ぢや。先生は……（拳に一涙を拭き、忽然刀を掴んで立ち上る）

森山　村田どん、どうなさる。

村田　もう、それにきまりました。今夜直ぐ大阪に立ち歸り先づ堀江を打つた切り……

森山　いや〳〵、それは悪い。もしそれが眞實であるとすれば、そのやうなことをなさつては、一層先生の立場を悪くする……

村田　いや、先生に御迷惑はかけませぬ、もしもの場合は腹掻つ切つてでも（なほ飛び出さうとする。森山止める。）

隆盛（上手の襖を明けて登場。袴を着け、小刀を帯し、大刀を握つたまゝしばらく二人を見てゐる。旅疲れと物思ひにやゝやつれてゐる。顔色も蒼白で、沈痛な眼をヒてゐる村田を止める。）あゝこれ〳〵村田、さう逸つても仕方はない。何事も成るやうにしきや成らぬ。

村田　でも先生、あんまりでございます。あれほど先生がお盡しなされたに。如何に殿様にしても、あまりひどいお仕打でございます（手の甲にて涙を拭く。隆盛も、森山もしばらく默然として佇む。）

隆盛　人を對手にすればこそ腹も立つ、天を對手として誠を盡すまでぢや。まあよい〳〵怒るな。若い者はすぐ怒るでのうハツハツハツ（寂しき笑ひ）…………何となく今夜は鬱陶しいのう。（障子を明ける。兵庫の海岸の火影見ゆ。火影はあまり多からぬが宜し。遠くにて蛙鳴く。）あゝ月も落ちてしまうたやうだ。かうやつて眺めてゐると故郷のことが出ひ出さるゝのう。（しばらく沈黙

森山　左様でございます。もうこのごろは故郷でもあのやうにお城の濠では夜蛙が鳴いてゐませふ。

村田　あの蛙の聲を聴くと、まつたくたまらなくなります。先生、やつぱり故郷の方が宜しうございますなあ

隆盛　故郷を出て來てわづかに一月経つか経たぬに、もう故郷が戀ひしいかハツハツハツ……

村田　あの城山の上から月の夜の櫻島や、城下の火影を眺めた景色は忘れられません。

隆盛　わしも城山から見た薩南の眺めは好きぢや。今朝もわしは大島の子供たちのことを夢に見てゐた、不思議なことぢやが、おあいがしきりにわしを止めてもう兵庫なんかに二度と行くんぢやないと言つてゐたハツハツハツ人間といふものは弱いものぢやのう。

村田　先生、もう故郷へ歸りませう。

隆盛　さう急に故郷に歸りたうなつても困るが、そのうちには城山の月も見られよう。

森山　もう故郷では杜鵑が啼いてゐませう。

村田　おう故郷のあの山の色、あの日の光り、海の光り、あゝあの初夏の風……先生、故郷に歸りませう。

隆盛　さう急がんでもよい、わしも都より、どこより故郷が一番よいと思ふ。どうせ死ぬなら屍は故郷のあの光つた山に埋めてもらふさ。だがまだ早い、故郷に歸るのは。一度はいやでも歸らねばならぬ。せかぬがよい。

村田　でもあの蛙の聲を聽くと、南の故郷がたまらなく懐しいなあ。

（三人默然として蛙の鳴く音に耳を傾ける）

若侍一（下手の襖を明けて）お客様でございます。

森山　どなたぢや。

若侍一　筑前の平野二郎さまでございます。

隆盛　なに、平野二郎。おうそれは珍らしい。直ぐこれへ御案内申せ。

若侍一　かしこまりました。

隆盛　平野二郎か。ほんに珍しいことぢや（うれしさうに部屋の中を歩きまはる）

平野（總髪にて旅仕度。下手より登場。精悍の氣面に溢れたる丈夫。）やあ、これは西郷先生、御健祥にて………

隆盛　あんたも達者で…………（兩人追想の感に打たれしばらく無言。）あんたのお顏を見れば折角忘れようとしてゐた和尚のことが思ひ出されてのう……

平野　わたくしもこちらへの道すがらもあの夜のことばかり考へてまいりました。

隆盛　あんたのおかげでわしはこの通り生きのびてをりますが、和尚だけを殺して面目次第もござりませぬ。

平野　いや、それもこれもみな天運でございます。さんぶといふ水音に驚き、わたくしがたち上りました時は、折からの疾風に船は矢のやうに走る。船と二つの亡き骸とは一丁餘も隔つてをりました。突差の氣轉に太刀を拔いて帆綱を切り、舟を廻して艫の上に、お二人の亡き骸をお上げは致したものゝお二人ともすでに事切れておいでなされました。あの時の先生が今このやうによみがへつて、天下の大業をお一人の肩に擔ふておいでなさるのを見まするとまだまだ天の先生に命ずるところ大なるがゆゑだと思ひます。で早速でございますが、本日四日には薩州侯も當兵庫へ御着きなされました由。京、大阪の諸國の志士は、ひたすら今日のあるを待つてをりました。實を申すと先生が大島を出られたといふ噂が傳はりました日から、吾々勤王黨の浪士どもは百萬の味方を得ましたより心強く感じました。先生、今を措いて、勤王の師を擧ぐる時節はありませぬ。先生一日も早く吾々のために……

隆盛　してあんた等の御決心はどういふ風になつてゐますかな。

平野　第一に京都所司代酒井若狹守、九條關白の首を斬り、彦根、鯖江の城を燒き、島津侯を盟主として大阪城に據つて天下に號令いたす考でございます。

隆盛　成るほど戰ひの法としてはそれが宜しい。だが一つおたづねいたしたい。先づ京都、大阪地方に兵を集めるとして、いよ〳〵江戸に上るまでには相當の日數もかゝり、準備もかゝるであらうか、幕府はこのころ佛蘭西政府と密接な交渉を持つてゐるやうである。もし佛蘭西の軍艦、兵力などを借りて大阪灣から、吾々の背を衝くやうなことがあるとしたら、どうなさるつもりだ。萬一、その場合に吾々が英吉利を味方に賴んだとする。吾々は勝利を得るかも知れぬ。だが、その結果は英吉利の勢力を日本に植ゆるだけのことになる。それは幕府より恐ろしい勢力でござる。

平野　先生の御說、さすがに敬服いたしました。擧兵の方法等につきましては尙一應同志の士とも懇談いたしまするが、いかがでございませう薩摩侯は吾々勤王の士へ御助力下さるでせうか。

隆盛　いや、それはわしの一存だけでは何とも御返事いたしかねる。主君ともゆる〳〵相談いたした上御返事申上げよう。ただ何事も時期の問題だ。時節を待たねば仕損ずる。若い人達ばかりだからみんなが、無謀なことをせぬやうに、あんたがよく押へて置いて下され。でないと千仭の功を一簣に缺くことになりますぞ

平野　しかし、先生時期を逸しましては……

隆盛　いや〳〵逸する時期はまだ來てをらぬ。時期はわしにお任せ下さい。

平野　では先生は時期さへ來れば吾々のために。

隆盛　無論命は投げてをる。この前は和尙と死んだ。今度は平野さん、あんたと一緒に死なう、

平野　忝う存じます。（下手へ下る、不圖立止まり）失念いたしましたが、先生はいつごろ京都へお上りなされますか。

隆盛　さあ、いつ京都へ上れるかわしにも分りませぬ。

平野　では薩州侯の御都合は？

隆盛　實は（やゝ躊躇して）まだお目見えもかなうてをらぬやうな次第で………

平野　あの、先生にはまだお目見えもかなうてをらぬと仰つしやるのでございますか！

（隆盛うなづく。森山、村田俯向いてしまう）

平野　ふうむ、さつきから先生のお顔色がいつもほどでないと思ひましたが、それではやつぱり君側の小人等が（大刀を掴みくやしさうに歯ぎしりをする）………………

隆盛　何事も天に任すまでぢやハツハツハツ（寂しき笑ひ）

平野　お察し申します（涙を拭く）ではこれにて失禮いたします。

隆盛　あんたも天下の爲ぢや、達者でのう………

平野　ありがたうございます。先生もどうぞ……（退場）

隆盛（平野を見送り）立派な武士ぢや。だが、どうもみんな逸り過ぎて困るのうハツハツハツ……（森山村田を見る）時にもう何時だらう（憂欝な顔）

森山　もう大分夜も更けたやうでございます

村田　今日もたうたうお上よりのお使ひはございませんでしたなあ………

隆盛　…………………………（沈思）

若侍二（下手より登場）大久保様からのお使でございます。（手紙をわたす）

隆盛　なにツ！（嬉しさうに）大久保から？（手紙を受取り讀む）うむ、早速、濱までお出を乞ふ。內々にて申上度儀有之………ふゝむ……。

森山　どういふ理由でございませう。

村田　先生をおびき出しで、もしかすると堀江、松江田の佞人どもが大久保殿を說いて……。先生ッ！お一人でお出かけでは危險千萬でございます。お伴いたします。

隆盛　ワッハッハッ……おんた等は大久保をそのやうな人間と思ふのか、わしの心を知つてをるのは大久保一人ぢや。わしはどこに行かうと、またどのやうなたくらみがあらうと人は恐れぬ。恐るゝのは天ぢや……わし一人で行く。誰も隨いて來てはならぬぞ（上手へ入る。人々心配げに見送る。）

幕

同第二場　海濱の場

兵庫海岸松並樹。遠くに兵庫の町の火かすかに見ゆ。曇り空。蛙の聲。

（上手より西郷、下手より大久保登場。中央に近きところにて逢ふ。）

大久保　（すかし見て）吉之助ではないか？

隆盛　市藏か？

（兩人近づいて肩に兩手を置く。しばらく沈默。）

大久保　このほどからのお前の苦衷お察し申す。（兩人松の根方に腰を卸す）

隆盛　……………………

大久保　お前が兵庫に來たことも、お上はちやんと御承知ぢやが…………

隆盛　…………………………

大久保　お前がさぞ毎日お使を待つてゐるであらうと思ふて、お上にもそれとなくお話をしたが、何も彼も變なことになつてしまつた。こんなことなら、お前をわざ〳〵大島から呼び出すやうなことをするのではなかつたものを。みんなわしが悪かつた。ゆるしてくれ。

隆盛　わしには、何が何だかさつぱりわけが分らぬが、お上には何ぞ？

大久保　悪い奴等があつて姫路まで出て來て、お上を途中で待ち受け、お前のことをあることないこと申し上げたのだ。

隆盛　さうであつたか（沈默）

大久保　お上には大變な御立腹だ。

隆盛　それはまた何で？（立ち上る。）

大久保　（立ち上り）第一、お前が浪人どもと結んで決議をやつたといふこと、第二、年少客氣の者どもの尻押をいたしたといふこと、第三、お上御着京の上は當分御滯京なさるやう勝手に取り決め置いたといふこと、第四、下關でお上を待ち合せるといふ約束を反古にし、お前等大阪へ出發いたしたのはお上の御威光を恐れぬ仕打といふこと、先づこの四ケ條だ。

隆盛　（やゝ沈默腹立たしげに。）市藏、わしや、何も言はん。

大久保　うむ、わしにはお前の心はよく分る。お前ほどの大忠臣を、むざ〳〵（泣く）

隆盛　ありがたう。かたじけない。で何か、まだなか〳〵お目見えはできさうもないか？

大久保　お目見えどころか、お前はせつかく大島を出て、これほど働いてくれたに、お上の御立腹はとてもお前には想像はつくまい。
隆盛　むゝ、
大久保、お前はやがて切腹か、遠島か…………
隆盛　わしがか？わしを切腹ツ！遠島ツ！（忌々しさうに松の根方を歩く。）
大久保　吉之助、今夜こゝでわしと死んでくれ。わしは實に、こゝでお前と刺し違へて死ぬ覺悟で出て來たんぢや。
吉之助わしと一緒に死んでくれ（腰の小刀を拔く。）
隆盛（しばらく果然として大久保を見る。）ありがたい。市藏お前のその志は忘れぬぞ。しかしよく考へて見ろ。今お前とわしと二人がこゝで刺し違へて死んだとしたら、誰が島津一藩の者を率ゐてゆくか。島津家はともかくとしても、お前とわしが死んだとしたら日本の將來はどうなると思ふか。お前の志は誠にありがたいが、お前が死ぬ時ではない。わしもこゝでは死なぬ。お互にいつ、どこで、殺されるかも知れぬが、その時節が來るまでは死んではならぬ。お前は生きのびてゐて藩論を改むることに盡力してくれ。でないと、藩の若い奴等が可哀相だ。
大久保　うむ、わしが誤つた。お前一人を窮地に陷れ、わし一人殘るのは耐え切れぬことぢやが、ゆるしてくれ、わしは、もすこし生き殘つて働くから。
隆盛　うむ、それでわしも安心した。だが、せめて一度だけお目見えがしたいが……
大久保　お前にはまことに氣の毒だが、それだけは思ひ止まつてくれ。とてもそれどころのさわぎではないのだから。お前はよし卅に乘るまでは無事であつても、いつ、どこで切腹の御沙汰がないとも限らぬから……

隆盛　それほどまでにお上はわしをお憎みになさつてをるのか。

大久保　…………………………（俯向いたまゝ泣く。）

隆盛　…………………………

大久保　言ひ忘れたが、お前は多分、今夜、夜が明けぬ前に鹿兒島へ歸さるゝことになるだらう。天祐丸が夕方から出帆の準備をしてゐた筈だ。

隆盛　今夜、船で歸國を命ぜらるゝのか。

大久保　さうだ、今夜、船で……お上の眼にはお前はもう大罪人なのだからなあ。

隆盛　わしが大罪人？（きつと空を睨み、歯を食ひしばる。）

大久保　萬一、命だけは助かるとしても、輕くて琉球くらゐには流さるゝことになるだらう……達者でゐてくれ。さよなら……（大久保俯向きながら下手へ退場。）

隆盛　さよなら、お前も達者で……（森山、村田木蔭より走り出づ。）

森山　先生ッ！

村田　殘念です！

（兩人、左右に跪く。）

有馬新七、弟子丸龍助、森山新五左衛門他數名の若侍、木蔭より出づ。

有馬　先生お察し致します。しかし、おめ／＼とこのまゝ御歸國になつてはいけません。

弟子丸　わたくし等の命に替へても先生の船は出させませぬ。

新五左衛門　もし先生が鹿兒島へお歸りになるのでございましたら、わたくし等は此の人等を斬り殺した上で、御前に出て美事に腹を切ります。

有馬　わたくし等はこれから濱に行つて天祐丸を燒いて來ます（濱の方へ走り行かうとする。）

隆盛　待て。今は血を以て血を洗ふ場合ではない。何事も時節ぢや。諸君、諸君の志は吉之助肝に銘じて感謝します。その決心を尙少し後まで忍んで置いていたゞきたい。吉之助はたとへ何處へ流されても、なか〳〵死にませぬ。尙少し諸君の命はおあづけします。

弟子丸　では、先生はこのまゝ鹿兒島へお歸りになりますか？

隆盛　君命でござるからには…………（悄然として上手へ步み寄る）

人々見送りつゝ相抱いて泣く。蛙一しきり鳴く。

幕

第三幕

德之島謫居の場

時　文久二年八月十四日午後

場所　德之島岡前村海岸

人物　大島三左衛門（西郷隆盛）

一（西郷吉之助）一

アイガナ
長男太郎
代官中原萬次郎
代官の家來一、二、
薩藩の使者一、二、
若者甲、乙、
駕籠人足

竹と棕櫚林に取り圍まれたる板葺の家、屋根の上には平たき石が數多並べてある。六疊の座敷のみが上手竹林に寄つて見える。竹林の中には上、下とも徑がある。正面一間の床には素燒の瓶子に芒が投げ込まれてある。壁には大刀が立てかけられてある。三四冊の佛書と袋入の天吹が瓶子の傍に重ねて置かれてある。疊の上には着物が脱ぎすてゝある。左手の庇に沿ふてのうぜんかつらが紅く咲いてゐる。座敷の左右に向日葵、玉蜀黍などが繁つてゐる。時々小鳥の聲。秋の靜かなる曇り日の午后。遠く浪の音。

隆盛（部屋の中央に瞑默したまゝ坐つてゐる。頭髮蓬々と亂れ鬚髯延び、肉落ち、骨秀でたる貌。）

島の若者甲、乙、釣竿を擔ぎ上手より登場。跫音を偸むやうにして家の前を過ぎ、下手の竹林の徑に近づき立ち止まる

若者甲　いつ來て見てもあの男は本を讀んでをるか、あのやうに眼を瞑るかしてをる。あれでよう飽かぬものぢやなあ。

若者乙（聲を忍ばせるやうにして）まつたくだ。でも俺はこなひだ、さうだこの前の月待ちの夜だつた。烏賊釣りに行つて、恰度お月さまが出たころこゝを通りかゝつたが、膽つ玉が潰れたかと思ふほどびつくりしたよ。

若者甲　ふうむ？

若者乙　あの大きな侍が庭に出てよ、熊の吼へるやうな聲で、ほれ、あすこに立てかけてあるだらうあの長い刀を引つこ拔いて、びう〳〵と振り廻してゐるのだもの。そしてこんな大きな眼で、ぢつと俺を見るんだ。

若者甲　そいつは凄かつたらうなあハツハツハツ……あの大きな眼で見られたら。

若者乙　凄いの凄くないのつて、まつたく兩脚がわな〳〵と顫へたよ。

若者甲　それでもあの侍は何でも城下では豪い一方の大將だつたといふではないか。みんなに推されて謀叛人の大將になつたので、流されたといふことだよ。

若者乙　さうだらう、あの面構を見たゞけでも、並の人間ではないことが分る。

若者甲　何んな悪いことをして島流しになつたのか知らぬが、城下には妻や子もあるだらうに、考へて見ると氣の毒なものぢやのう。

若者乙　氣の毒ぢやとも。あの蓬々と亂れた髮や、蒼ざめた顔を見ると、どうしてもあの侍はもう氣が狂つてゐるにちがひない。

若者甲　でなければ夜も晝もあのやうに默りこくつてばかりはをれまい。狂人ぢやのう屹度。

若者乙　氣が狂ふてゐるとも。立派な狂人ぢやとも。氣の毒なものぢや。

若者甲　それにしてもあの侍が、生まるゝ時、もすこし背が低いか、力が弱いかしたら、謀叛人の大將にも推されもしまいし、そしたらそのやうな大それた考も起すまいしのう。それを考へると人間は生まるゝ時、ちやんと一生の運といふものを擔いで來るのぢやのう。あの侍があの大きな體で、あの大きな眼たしてをる間は、一生島流しばかりくりかへしてをるだらうよ。

若者乙　さうすりや、俺たちのやうに小つぽけな人間で、あるかたしか、茅で切つたほどの眼を持つた者の方が安心といふものだのうハツハツハツ……

若者甲　さうだとも、さうだともハツハツハツ……

（兩人下手竹林の中の徑に退場。小鳥の聲）

隆盛　（しづかに眼を閉く。）眼を閉づれば却つて慾念の世界が現はれ、耳を塞げば却つて苦患の聲が響く。わしはまだ迷ふてをる。天下が何ぢや。日本が何ぢや。わしの心を秋の水のやうに澄まして、そこに映り來るたゞ一箭の正覺の光明に比ぶれば、日本が生れ更らうと、日本が海の底に沈まうと、そのやうなことは、朽ち葉が一つ梢から落ちるほどのこと。わしは何う二度とこの島を出てはならぬ。狡猾しい鯯牛角上の爭にあたら魂を磨り減らす愚を繰りかへしてはならぬ。（立ち上り緣端に出て空を仰ぎ、小鳥の聲を聽く。）いかにも、何時の間にかすつかり秋になつてしまうた。わしは幾年振りでこのやうな靜かな心で秋を見ることが出來たであらう。馬鹿々々しい忠義立てなどして、やれ武士だの、やれ御奉公だのと、考へて見ても恥かしい。今度こそは死ぬまでこの島は出ぬぞ。龍郷には三月前に手紙を賴んで置いたが、おあいにもうあのあたりを讀んだであらうか。おあいと子供等さへこの島へ來てくるれば、わしのこの家も何少しは家らしくなるであらう。あいつらも大きうなつたであらう。このごろはまたあいつらの夢ばかり見るが……（遠き濱にて着を報知らせる法螺貝の聲聞ゆ）船が着いたさうな。（緣の柱に凭りかゝり身を延ばして正面の遠き濱を見る）いや〳〵あの音は聽かぬがよい。あの音を聽くと不思議に胸騷ぎがしてならぬ。何か嬉しいたよりでもあるかと、豫期してあの音を聽くが、船は幾度濱に着いてもつひぞ嬉しいたより一つ運んで來てくれたことはない。（ふたゝび法螺貝の音聞ゆ。）しかし、嬉しいたよりもないかはりに悲しいたよりもない。それを思ふと、幾度濱に船が着いても何のたよりもない方がまだ仕

合せかも知れぬ。（なほ殘り惜しげに正面を見つめる。）

代官の家來一　（上手より急ぎ足にし登場）先生、鹿兒島からの船が着いたやうでございます。

隆盛　わしもさう思ふてさつきから見てをるが、こゝからは見えぬが。

代官の家來一　あゝ、なるほどこゝからは見えませぬ。（走つて竹林の横から正面を覗く。）先生こゝからでございますと、よく見えます。ずゐぶんいつもの船より大きうございます。眞黑な船でございます。帆檣も二本あります。

隆盛　（庭にドり竹林の方へ歩み寄る）成る程、二本檣だのう。帆檣の上には旗がひら〳〵動いてゐるやうぢや。櫓舟で人が上つて來るは。

代官の家來一　また城下から流人でも（不圖氣付いて隆盛を見る）送られて來るのではありますまいか。お氣の毒な。

隆盛　うむ、眞つ先に歩いて來るのは侍ぢやのう。その次に歩いて來るのも侍らしい。

代官の家來一　三番目には商人らしい男がまいります。それから、その次の男は舟に何か忘れ物をしたのか、白い砂の上を走つて戻ります。

隆盛　さうぢやのう。病人でもあるか、駕籠のやうな物を擔いで來るではないか。

代官の家來一　左樣でございます。あんなものを擔いで來るとは、不思議でございますなあ。

隆盛　そして代官所の方へ行くではないか。蕎麥畑の中を歩いて行く……

代官の家來一　あの榕樹の下を右にまがりました。あゝ、それから濱をこちらの方へ女が歩いてまいります。

隆盛　どこへッ！

代官の家來一　粟畑の横のあの牛小舍の前でございます。それからその女は子供の手を引いてをります。

隆盛　なにッ！子供の手を引いて（伸び上る）うむ、ほんとに……

代官の家來一　そして懐にも子供を一人抱いてをります。

隆盛　あつ、そこに來た。もうそこにやつて來た。

代官の家來一　若い女でございます。立ち止まつて道を訊ねてをります。走り出しました。

隆盛　あ！おあいだッ！子供たちだッ！

（狂氣のやうになつて走らうとする。よろめく。アイガナ下手より登場。男の子の手を引き、赤ん坊を抱いて急ぎ足で。）

アイガナ（第一幕の時よりずつと面やつれしてゐる。髪も亂れてゐる。船に醉つたので顳顬に頭痛膏を貼りつけてゐる　隆盛の前に跪いて泣く）旦那さま…………

隆盛　よう來てくれたのう…………

アイガナ　旦那さま、ああおいたはしい…………

隆盛　坊主たちも達者だつたのう。船には弱つただらう（男の子を抱きかかへて頬ずりをする　太郎、ようお母さんと一緒に來てくれたのう。お父さんは待つてゐたよ（緣側へ連れてゆく。）

太郎　こゝ、お父さんのお家？

隆盛　さうだ。今日からは坊やのお家だッ！

太郎（きよろきよろと見まはし）何だか變だな。

隆盛　そんなに變かい？ハツハツハツ……

太郎　何も玩具はないから。

隆盛　玩具かい？こいつは困つたなあ。京都で玩具を買つて來ればよかつたなあハツハツハツ…（アイガナを見て笑ふ。アイガナも笑ふ。）あゝ、いゝ玩具があるぞ。これだ、これだ（アイガナを導いて座敷へ上る。床の間の袋に入れた天吹――長さ七八寸の尺八樣の小笛、昔、薩摩隼人が陣中にて吹きし物といふ――を袋から取り出して太郎の手に持たせる）ほらよい笛だらう。これは家の祖父さまが初陣の時鎧櫃の中に藏れてお吹きなされたものださうだ。兵庫から船でこの島へ流された時もこの天吹だけはわしは離さんで持つて來た。わしにとつては大事な物だから。

アイガナ　坊やも今に大きうなつたら初陣の時この笛を吹きますねえ。

隆盛　（子供の手より天吹を取りて吹く）ワツハツハツハツ……もう駄目だ。これでも子供のころは上手に吹けたものだが（子供を抱き、太郎の口に笛を當てさせる。）

アイガナ　（懷の子を傍に寢させ、脫き捨てゝある隆盛の着物を疊む）まるで夢のやうでございます。かうやつて旦那さまにお目にかゝりましたことを思ひますと。旦那さま、もうどのやうなことがありましても、こゝの島からお出になつてはなりませぬ。お殿樣のためにあれほどおつとめなされても、ちよつと御意にかなはぬことがあればこれでございますもの。いくら殿樣だからといつてもあまり人情がなさ過ぎます。

隆盛　今度といふ今度はわしもつくぐ忠義立てなどといふことの馬鹿々々しさを知つた。もうどんなことがあつても、坊やなんかを捨てゝ出かけはしない。

アイガナ　さうでしたらわたしもどんなに嬉しいか知れませぬ（着物を疊み終りて、隆盛の後にまはり、肩を揉む。子供は隆盛に抱かれたまゝしきりに笛をてあそぶ）

隆盛　それほど別れるのが辛いかハツハツハツ……

アイガナ　はい（そつと涙を拭く）

隆盛　そして、お前等が乘つて來た船は、やはり鹿兒島から出たのであらうな。

アイガナ　はい、お城下からまいつた船に賴んで便をさせていたゞいたのでございます

（この時、上手より代官中原萬次郎家來二人を連れ、薩藩の使者を案内し、座敷を覗く。困り切つた顏をしてふたゝび上手の棕櫚林の中に隱れる。）

隆盛　大きな船のやうぢやのう。

アイガナ　はい、ずゐぶん大きうございました。船には殿樣のお使者とかいふお侍が乘つておいでになりました。それからその船の底には船牢とか申す暗い船牢舍が出來てあるといふことでございましたが、わたくしは恐しいので、どうしても覗いて見る氣はいたしませんでした。

隆盛　船牢と申すものか。誰か氣の毒な人が入れられてゐたであらうのう。

アイガナ　わたくし、名を聽いただけでも恐しうございましたので、どのやうなお方がよいつでおいでになるか、少しも見ませんでございました。まああのやうな暗いところに入れられて、鬼界ケ島などに流さるゝ方のことを思ひますと、お氣の毒でなりませぬ。ほんに旦那さま、もう二度とこの島をお出になつてはいけません。それこそこの次は、船牢入りでも仰せ付けなさることがありましたらわたくしはとても生きてはをれませぬ。

隆盛　安心するがいゝ。この前龍郷に流されてゐたころはまだ何一度世に出たい、思ふ存分働いて見たいとも思つてゐたので、御赦免の御使者をいたゞくまでは、ずゐぶんと癇癪も起したが、今度ますつかり世間を捨てゝ覺りを開いたので、わしは毎日々々を實に氣持よく送つてゐる。今度こそはどのやうな御上のお咎があつても、一足もこの島からは

出ないで、お前と一緒に死ぬことに決めた。

アイガナ　勿體なうございます。旦那樣へこの家に一生お止り下さるのでしたら、わたくし、もう二度と龍郷の父や母の家にも歸りませぬ。わたくしほど仕合せな女はありませぬ。（俯向いて袂で涙を拭く）

（上手、棕櫚林の蔭から、家の中の樣子を見てゐた代官や、島津家の使者等も顔を掩ふ。西郷に藩よりの命令書を手交するに忍びないで躊躇する。代官中原は涙を拭つて緣端へ近づく）

中原　先生ッ！

隆盛　（不圖中原の方を見る。使者二人を見て不思議に思ふ。）中原さん！

アイガナ　（驚く。）あのお使者は、わたくしと一緒の船で來ましたか………

隆盛　お前と同じ船で？

中原　先生！お氣の毒で、何とも申し上げられません。先生はもうこの島においでになることもかなひません

隆盛　（意を決して）中原さん、覺悟よしておりましたで………

中原　どうぞ御覽下さい、これを。（眼を拭ふ）

隆盛　（しづかに書面を開く。）うむ、しかしこれではまだ命だけは別狀もないやうで………。

薩藩の使者一　では先生、只今から直ぐに沖之永良部島へお越しを………

隆盛　では、その船牢と申すのはわしを入れるためて準備して來られたのか？

薩藩の使者二　左樣でございます。

隆盛　ではわしは今日からは船牢の中ばかりで暮さなければならぬのか。

薩藩の使者一　はい。

隆盛　（床の間の大刀を掴み、くやしげに瞋恚の苦惱に耐へぬ表情。アイガナ及び子供等を見守る。躊躇する。しづかに立ち上る。）

薩藩使者二　（籠をさしまねく。上手の棕櫚蔭より乗物來る）先生どうぞ………

隆盛　（しばらく駕籠を見る）いやどうぞ船まで歩かせてください。もう二度と土を踏むことは出來ないでせうから……

（片手に草履持ち、跣足で砂を踏み、しづかに下手へ退場）砂が冷たうてよい心持ちだハツハツハツ…………

（中原、使者等俯向いたまゝ涙を拭ふ。アイガナ椽に突つ伏して泣く。太郎火吹を握つたまゝ呆然として立つ。夕暮の色迫る。しばらく時が經つてから船の法螺貝の音。

幕

第四幕

江戸城内の場

時　明治元年四月四日の豊、第三幕より十年の後

場所　江戸城内大廣間

人物

西郷隆盛

勝　安房
田安中納言
大久保越中守
幕臣二人
若き侍
參謀　海江田信義
同　木梨精一郎
同　吉村長兵衛
同　村田新八

（正面襖、板戸などすべて取りはずしてあるので、廊下を歩く人の姿や、庭園や、庭園をへだてた建物なども見える。正面及び左右に列んだ大きな柱や、高い欄間のみが目立ちて見える。飾物などは取り去られてあるので、全體に落ちついた簡素な伽藍のやうな感じを與へる。欄間の釘隱しだけが光つて見える。櫻はもうたいてい散つてしまつてゐるが、八重の遲咲だけが葉櫻の間に交つて咲いてゐる。風もないのに絕えず散つてゐる。山葵の花が櫻の根方に咲いてゐる。全體に、最も歷史的な江戶開城の森嚴、悲壯感と、空城の打ち沈んだ空氣を漂はす。

勅使が坐る座間と、幕府方や、官軍方の人々の坐る廣間とは別々になつてゐるが、上手から下手へずうつと、襖を取り外して一つの大廣間にしたものである。舞臺にあらはれる廣間は、その一番下手の一部分だけを表はしたものになつてゐる。

舞臺の上手に見える金屛風は隣りの部屋から、續いてゐる屛風の一部分に過ぎない。

正面の廣間と庭園との間は長廊下になつてゐて、庭園を貫いて上手より下手へ廣い道が通じてゐる意。

幕が明くと同時に、金屛風の上手の隣りの廣間から勅使が江戶開城の勅書を讀んでゐる聲が微かに聞えて來る。水を打つたよう

に森んとしてゐる。隆盛は中央よりやゝ上手寄りの柱にもたれたまゝ快く眠つてゐる。隆盛から少しはなれて上手に吉村、海江田、大久保の参謀連が控つてゐる。きはめて興奮した風で。

次の文言は金屏風のなかにて、きはめて明晰に、おごそかに読むこと。

第二條　城明渡尾張藩へ可相渡之事

第三條　軍艦鉄砲引渡可申追て相當可被差下之事

第四條　城内居住の家臣　城外に引退き謹愼可罷在之事

第五條　慶喜叛謀相助候者重罪たるに依り厳科に處せらるべきの處別格の寛典を以て死一等可被宥之間相當の處置可被為在之事

隆盛、黒き詰襟の軍服の上に陣羽織を引つかけ、朱鞘の大刀を傍に置いたまゝ眠つてゐる。櫻の白い花辨がひとしきり散る。勅語の傳達が終つたので、吉村海江田や大久保参謀等は立ち上つて金屏風に沿ふて上手の隣りの廣間の方へ出て行つてしまふ。隆盛だけが一人取りのこされる。

退出する馬上の人々が正面の庭の櫻の下を上手より下手へ走るのが廊下をへだてゝ見える。田安中納言、憂惧な表情にて俯向たいまゝ勅書を抱いて金屏風の陰から下手へ退場。つゞいて大久保越中守。……越中守は不圖立ち止まつて隆盛を見るが、そのまゝ行き過ぎる。幕臣二名上手より、越中守よりもやゝ遅れて登場。非常に興奮してゐる。隆盛を見て近づき急に刀を抜からとする。終に刀を抜き得ずして、殘り惜しげに退場。同じく金屏風の陰より上下姿にて、勝安房登場。

勝（悠然無策の面持ち、両手を袴の下に入れて、舞臺中央に立ち止まり俯向いたまゝやゝ久しく沈黙。二三歩歩き出して初めて隆盛に氣付く。）あゝさすがに稀代の英雄……もし西郷先生一人生れなかつたら、徳川の幕府はなほ百年はつゞいたであらう……しかし、この英雄のために倒されたことは徳川にとつて決して不名與ではなかつた（輕く默禮して七八歩隆盛の前を行き過ぎる。その時急に馬の蹄の音が聞えるので、隆盛眼をさます。）

隆盛　あゝゝツ！（あたりを見まはす）こゝは何處だ。こゝは大島ではないのか。あゝ江戸城の大廣間だつた。おい大

久保さん、越中守さん、おう、もう江戸城の引渡しの儀式は濟んでしまつたのか？

勝　（立ち止まり、笑ひながら）西郷先生ッ！お目がさめましたか、江戸城引き渡しの儀式はすつかりすみました。

隆盛　（立ち上る、おう勝先生ですか。面目次第もございません。實は田舍武士の悲さ、あまり御見事な御殿の結構に見とれまして、あの欄間の釘隱しを算へております間にすつかり眠つてしまひました。

勝　いや、お察しいたします。この十年間といふもの、あんたはこの江戸城を落すために一睡もなさらなかつたのだから……。

隆盛　さういへばさうぢやなあ勝先生……もしあんた程の英傑がこの城におらんぢやつたら、わしは一年でこの城を落して見せたが……

勝　わたしもあんたが攻めて來るのでなかつたら、なかなかこの城は渡さなかつたが……

隆盛　あんたも今度はずゐぶんお困りぢやつたらうな……

勝　あんたとわしと立場を替へて一太刀交へて見たかつたなあハツハツハツ……でもあんたのお蔭でこの城も助かる、百五十萬の江戸市民も易々と眠られる……

隆盛　お互にこれまでの寢不足の埋め合せにうんと眠らうハツハツハツ……

勝　西郷先生、あんたのお蔭で日本中が今日から安心して眠られるんぢや……

隆盛　勝さん、さうおだてゝくれるな、恥づかしいが……

勝　いや、まつたくあんたのお蔭ぢや。

隆盛　いや、わしもまつたくのところ、いよいよこれで江戸城引き渡しまで濟ぎつけたかと思ふたら、急に重荷が下

りたやうで、張りつめてゐた氣も緩んでしまうたのか、うと／＼と眠つてしまひました。勝さん、わしはひる半時ばかり江戸城を枕にして、故郷の夢が見たかつたハツハツハツ……

勝　ハツハツハツ……あんたほどの英雄でもやつぱり故郷は忘れられぬものかなあ。

隆盛　一日も早う故郷に歸りたけりやこそ、蛤御門の戰から鳥羽伏見と夜に日をついで戰さもし、江戸城引渡しまで命がけの仕事をしましたのぢや。あゝ、もうわしの一生の御奉公も濟みました。（やゝ沈痛な心持さらに大刀を枕にする。）

（下手より村田新八登場。歩卒の姿をしてゐる）

村田　先生！御馬はどちらへ曳きませう？

隆盛（村田の姿を見て驚く）おう、あんたは村田さんではないか。その姿で？

村田　先生のお叱りを蒙るかと思ひましたが、今日の先生の御身邊が危ぶまれましたので……

隆盛　勝先生、御免し下さい。このやうな可愛いゝ無法者が居りまして、お約束外の人數を江戸城に入れまして、お詫びいたします。

勝　何の。西郷さん、あんたは羨ましい。

隆盛　わしはこのやうな可愛いゝ無法者をあまやかすので、つい時々飛んだしくじりをいたしますよハツハツハツ……でも若い者は可愛いゝ者でのうハツハツハツ……

勝　いかにも、あんたの性分では……

隆盛　村田さん、相すまぬが、それぢやわしの馬は北の御車寄の方へ廻して下され。もう愈々江戸城引渡しもすんだで、鹿兒島を立つ時、あんたと約束しといたやうに、あんたと二人でお暇を願ふて故郷に歸らう。

村田　先生忝うございます。

隆盛　あんたは故郷に歸るのがそんたにうれしいかのう！

村田　はい。死にもせんで先生と御一緒に南の國へ歸ることができますと思ひますと……（俯向いたまゝ泣く）

（隆盛、勝安房共に默然とゐる。村田下手へ退場。）

隆盛　勝さん、あんたも今日からゆつくりおやすみハツハツハツ……

勝　あんたのおかげで慶喜公のお首も助かり、わしも今夜から初めてのびのびと眠れます……（深い溜息）

隆盛　では、御達者で（大刀を握り直し目禮する。）

勝　あんたも……

（隆盛ふたゝび默禮して上手へ退場）

勝……………

（廊下中央に近く歩み寄り、默然としていつまでも西郷を見送る。幕降る。しづかに白き花片庭をかすめて散る。）

第五幕

城山の場

時　明治十年九月二十三日眞夜中より二十四日十日

場所　岩崎谷

人物

西郷隆盛　五十二歳

桐野利秋　四十歳

村田新八

邊見十郎太　二十八歳

池上四郎

野村忍助

山野田一輔　三十三歳

別府晋介　三十二歳

隆盛の子菊一郎（太郎改）　十七歳

少年兵

斥候

（下手に暗い木蔭を作つた老樟がある。青竹に荒繩をぐる〳〵と卷き附けて作つた銃架がその根方に置かれてあつて、マルチネー銃が五六挺立て懸けられてある。一つの銃には喇叭が結びつけてある。銃架から少し上手の方へ離れて土を堀り、石を築いた竈があり、火が燃え、その上には鉛を鎔かす鍋が懸つてをる。

上手に土嚢を積み重ねて壁にした小屋がある。屋根は椎の丸木を並べたもので、上に土をかけ、さらにその上を柴や茅などで掩ふてある。粗末な低い小机が片寄せに置かれてあつて、机の上には蠟燭が一本燃えてゐる。

小屋の中には蓆を布き、その上に緋の毛氈が敷れてある

小屋の後は丘になつてゐて、小屋の直ぐ左側からそこへ上つて行く赭土の徑がついてゐる。岡の彼方には陰暦八月十七日の月がかゝつてゐる。月の光に照らされた陸峡湯いつたいの海、櫻島、沖の島、天保山、甲突川、鹿兒島の町が手に取るやうに見える。かすかに遠く閻魔獄の影が夢のやうに月光に照らされてゐる。天保山、甲突川畔及び磯にかけて包圍軍の篝火が見える。城下の街は喪に服した町のやうに暗い感じをあたへる。

詰襟の服に袴を着けた若者や、飛白の單衣に袴の少年たちが、樟の下の鍋で鉛を鎔かしては、型に流し込んで、小銃の彈丸を作つてゐる。みんな白い鉢卷をして、刀を帶してゐる。無言のまゝほとんど機械的に同じ動作を繰りかへしてゐる。岡の上には一人の少年の歩哨が劍を着けた小銃を擔いで、小ひさな木立を盾にして旗の方を警戒してゐる。時々木立から離れては岡の上を左右へ動く。

土藏の小屋から下手へ二間ばかり離れたところに、古い板を並べて机にした寐が据え付けてあつて、そこには陣營用のカンテラが一つ點されてゐる。別府晋助　池上四郎、野村忍助三人がしきりに机の上で地圖を展げて案じてゐる。木の株、石などを腰かけにして。別府晋介は額と、右の脚を繃帶してゐる。歩くごとに刀を杖にしてゐる。野村は腕を繃帶してゐる。逸見十郎太は肩と左の脚を繃帶してゐるが、重傷なので、別府等から少し離れて岡へ上る徑の傍に蓆席を布いてその上に時々呻きながら寢てゐる。小屋の中には低い机を前にして、陸盛が坐つたまゝ身じろきもしないで本を讀んでゐる。

絶えず蟲の聲が聞える。

人々は二月出陣以來打ち續いての戰ひに疲れ切つてゐる。）

少年斥候　（銃を提げ、下手より走り登場。別府等の前に止る。）傳令ッ！

池上　（少年の方を向き）うむ、竹之内か？

少年斥候　隊長からの報告でございます。（報告紙を渡す）

池上　（報告紙を展げて讀む。別府等地圖を案じながら聽く。）水上街道より原良、小野及び西田、常盤方面の敵は今、日沒と

共に一齊に運動を開始せしもの丶如し、その主力は甲突川右岸に在りて機を待つもの丶如し。兵力は約五千、野砲八門を備ふ。………（讀み終る）うむ、味をやりをるわいハツハツハツ……（報告書に走り書して少年に渡し）御苦勞だつたのう。隊長に宜しく（少年下手へ退場）

別府　いよ／＼今夜ぢやのう。それにしても軍使に行つた小野田も河野もまだ歸つて來ぬが、どうしたのだらう。

野村　出かけて行つたのに晝飯食つて直ぐだつたらう。それにしてもあまり手間取るのは宜いことぢやない。川村さんの本陣はどこにあるんぢや（この時遠くにて小銃の音響く。）

池上　敵のことぢやからはつきりは分らぬが、多分磯御殿であらうと思ふ。誰か夕方角矢倉の方から來た男があつたが、軍使の連中が若宮小路あたりを通つてゐるころ、銃聲がちよつと聞えたやうだつたと言ひよつたが、まさか白旗をか丶げて行つた軍使を殺すこともあるまい。

別府　それに川村中將は先生の御縁家だし、立派な人物だからなあ。

邊見（席の上に起き）諸君はまだ軍使の返事を待つてをるのか。すでに今夕、先生からはあのやうな悲壯な御決心の訓令も出てゐるぢやないか。おいどんは一刻も早くこの城山を枕に討死したい。

別府　吾々が討死をするのは最初からの覺悟ぢやが、たゞ先生を（西郷の方を向く、西郷は端然として本を讀み耽つてゐる）……先生は曠古の英傑、日本の土臺石だ。日本のために先生はなくてはならぬ唯一人の英雄だ。吾々は幾度死なうと、怨みも悲しみもせぬが、先生をどうして殺すことができよう。吾々すべてが川村さんの陣へ行つて腹を切つても、先生一人をお助け申したい（涙を落す）

邊見　おいどんも、その心に何のかはりがあらう。さう思つたればこそ、桐野には怒られたが諸君に贊成して、軍使

を出すことにしたが、たとへ吾々の希望が川村さんに聽かれたとしても、先生がどうして吾々を捨てゝお一人で助かるやうなことをなさるものか。もし先生がそんなことをなさるくらゐの人間なら、最初から二月の出陣においたちと一緒に鹿兒島を立たれるものか。先生は最初から今日あるを知つてをられた。先生はおいどん一萬五千の薩摩隼人のために死んで下さるんだ。日本の西郷先生が、おいたちのために死んで下さるんだ。おいたちは日本で一番仕合せもんだ。

(別府等、及び彈丸を作つてゐる少年等と暗然として俯向く。遠くから笛の音が聞えて來る。)

野村　誰か笛を吹いてるなあ。

別府　天吹の音ぢやなあ。

池上　明日の戰さが愉快でたまらぬといふので、下の方では若い者がみんな騷いどる。野村さん、あんたどつたらう、最前、大小荷駄本部の谷本六兵衛に歌を書いてやつて、本部の酒を出さしてしまうたのはハツハツハツ……

野村　ハツハツハツ……でも、今夜かぎりの命だもの、みんなに飲ませてやりたかつたので、それに今夜のこの月ではこたへられぬよのう。

池上　狙擊隊の方では浦生さんが眞つ先になつて琵琶をやる、詩吟をやる盛んなものぢや。みな元氣がいゝぞ。(下關棒の下の少年たちを見て)おい、稚兒さんたち、彈丸の準備はどうぢや。

少年兵一　こゝに笊一ぱいだけ出來てをります(笊をかゝえて見せる。)

池上　それだけが、明日の朝の戰さに使へるのか(池上、別府等絶望的な表情)

少年二　昨日は敵が朝からたくさん城山を目がけて射擊をしてくれましたので、後で鍬を持つて行つて敵の彈丸を堀り出して拾うて來ましたが、今日はちつとも敵の方の彈丸が飛んで來ませんので、もう鉛もございません。

邊見　明日の朝になればおいどんの死骸の上に、敵の奴等の彈丸か山と積まれるやうにのうハッハッハッ……

別府　もうよいわ、どうせこつちが討死するんだから、今更幾ら殺生しても勝戰さにもなるまい。彈丸はそれでたくさんぢや。あんたらも下の方へ行つて、みんなと一緒に思ふ存分遊んだ方がいゝ。（少年部下手へ退場）

斥候有馬平八　（銃を持ち上手より走り登場頭と手を繃帶してゐる。）斥候報告ッ！

別府　どうだつた！有馬？

斥候有馬平八　天神馬場、千石馬場、中福良地區に亘り約三四千の敵が陣地を占領してをります。その右翼五六百の地點に野砲陣地らしいものが見えます。高見馬場附近には盛に蹄の音が聞えましたが、敵の前哨らしきものに遮られまして充分偵察することが出來ませんでした。（この間、池上、野村等一々地圖を案ずる。）

別府　御苦勞でした。あんたも早う下の方へ行つて、みんなと一緒に遊んだがよい

斥候有馬平八　はい、ありがたうございます。（櫓の下に行き、銃腔の掃除をし終つて、銃を持つて、下手へ退場。遠くにて小銃の音しばらくつゞけさまに響く。人々耳を傾ける。

邊見　おう大分やつちよるぞ。斥候の衝突にしては少し念が入りすぎてるやうぢや。（丘の上の歩哨に聲をかける）おい、逸次郎どん、何か變つたことはないか。

少年歩哨　たゞ今川の岸を五六人走つて行く者があります。みんな刀を拔いてゐます。味方の人たちのやうです。

邊見　さうか。味方の若い者が月が良いのでわるさをしてゐるのだなハッハッハ……

少年歩哨　その前を十人ばかり敵の兵らしい者が逃げて行きます。銃は川向うから撃つてをります。

邊見　うむ。

少年歩哨　刀を拔いた男たちが川を渡つて行きます。あゝ切り込みました。(銃の音はげしく聞える。)

邊見　うむ、勇ましいのう。おいどんもこの腕さへ動かせたら、思ふ存分切り入つてやるがのう。

山野田　(軍使山野田一輔上手よりあわたゞしく登場。)いや、みなさんがお待ちかねでございましたらう(と、別府等の前に立つ)……實は河野と兩人で軍使だと名乘つて參りましたが、何を誤解いたしたのか小銃を撃ちかけたりしましたが、ついには二人を捕縛いたしまして紡績機械場の倉庫に押し込めるといふやうな亂暴です。しかし川村中將に逢ひましたら、大變氣の毒がつて下されて。ともかく午後五時までに先生、御自身川村さんの陣所に(桐野利秋長劍を提げ上手より登場傍にありて聽く)おいであるか、或ひは御返答をといふことでございましたが、歸りの途中で再びわたくしは敵に捕へられ、河野はまだあちらに殘されて居るやうな次第で今では萬事休したといふより他はありません。(人々溜息をつく)。

邊見　いよ／＼おいどんのために先生を殺さねばならぬのか！

池上　でもまだ敵の總攻擊までには時間もあらう。

山野田　朝の四時に攻擊を開始するといふことでした。

邊見　四時ッ！

池上　でも、私學校の馬が一疋ある。あれを走らすればまだ間に合ふ。

桐野　ワツハツハツハツ……諸君は今になつてなほそのやうな女々しいことを語るのか。

池上　女々しいことでない。先生を殺すに忍びないからだッ！

桐野　では先生におたづねして見い。

別府　(痛む足を引き摺りつゝ小屋にゆく)先生ッ！

隆盛　（初めて書物から目を離す。）晋どん、何です？

別府　たゞ今軍使はまいりました山野田が歸つてまへりましたが、先生どうぞ川村中將の陣へ……

隆盛　さつき軍使を出すと同時に、諸君には、訓令を出したであらう。わしの決心はあれより他にない。あんたらのやうな有爲の青年をみすみす殺してしまうのは忍び得ぬところぢやが、何も天運ぢや、あんたらわしと一緒に城山で討死して下さい。（隆盛小屋を出で正面へ出る。）まだ攻擊が始まるまでには時間があらう、みんな下の方で、酒でも飲んでおいでなさい。諸君のために最後の酒樽が二本兵站部の方へ置いてある筈だから。桐野さんあんた下に行つて鏡を開いて下さい！（みなみな上手へ退る）あつ、それから桐野さん、あんたの弟御も、さうぢやが、少年兵だけは今直ぐ城山を逃れ落ちるやうに命じて下さい。あの人たちはたとへ官軍に捕へられても罰せらるゝことはあるまいと思ふから。若い人たちを殺すには忍ばんでのう……。

桐野　でも、どうしても落ちません者は？

隆盛　あの立派な若者たちが生きのこつてくれるのは、日本のためなんだから。あの若い人たちの命は、あの人たちの美しい魂と一緒に明日の日本のために殘して置くのが、わしらの義務であらうぢやないか。一萬五千の若い人たちをわしはむざむざと殺してしまうた。わしはあんたたちを殺すために故郷に歸つて來たことになつてしまうた。あの若い人々の親御たちの心中を察するとわしはもう……（默然とする。）さあみなさんあつちに行つて……（一同退場。）別府晋介と辺見十郎太は人の肩にたすけられて。）

隆盛　（庭の石へ歩み寄り、不圖そこに立つてゐる少年歩哨に氣付きておゝ、そこに誰かゐるのう。誰です？

少年歩哨　わたくしでございます。

隆盛　おゝあんたは池田どんの……か、彦次郎さんがやつたのう。あんたは幾つがやつたかのう。

少年歩哨　十四歳でございます。

隆盛　十四歳……おつ母さんに逢ひたからうのうハツハツハツ……

少年歩哨　……………………　…………

隆盛　わし、ほんにあんたにお禮を言ひますぞ。さあ、その場所はわしがあづかつて、立つてゐるで、みんなと一緒にあつちで何か喰べてのう。それから桐野さんに話しといたから、あんた等少年組は攻撃が始まらぬうちに、こゝを落ちてくださ い。一刻も早い方がよい。裏山の方に落ちればたいてい落ちのびられようから。

少年歩哨　（しづかに下手に退場）

村田新八　（少年と引きちがひに上手より登場。顔を繃帶してゐる。）先生ツ！どこにおいでになります？

隆盛　村田さんか、こゝぢや。

村田　（森の中のカンテラを持ち岡の方へ上つてゆく。懐から地圖を出して草の上に展げる、敵から見えないやうにカンテラの火をこちらに向けて地圖の傍に置く。）

隆盛　ではもう準備はすつかり整ひましたか。

村田　はい。さつき桐野さんとも御相談いたしまして、このやうにいたしました。（二人草の上にしやがむ。村田地圖を指す。）

敵の陣地から申し上げます。これが水上街道でございますが、こゝの高地點から、この畑地を經まして、甲突川の右岸これが第一旅團らしうございます。この攻撃方向はこの旅團らしうございます。

隆盛　第一旅團長は野津だつたのう。

村田　はい野津少將でございます。それからこれが多賀山になつてをりますが、これから島越坂、葛山の線にわたつてこれが、第四旅團らしうございます。この高地には山砲が一門、野砲が六門ばかりあるやうでございます。この道を出て、こゝに出て來るらしうございます。

伊敷、丸岡、淨光明寺、この線に居りますのが第二旅團らしうございます。

隆盛　（うなづく）

村田　この線を山田少將の別動第二旅團が占領してをります。それから味方の方の配置は最初先生がお決め下すつたまゝになつてをります。たゞ蒲生さんの狙擊隊の位置が兵員の關係で少し左翼に寄りました。それから新照院越と夏陰下の橋口さんの持場がこれも有賀部隊の關係から、後方へ約二百ばかり引くことになりました。……（地圖を卷き懷に入れる。）

隆盛　御苦勞さまでした。それで結構でせう。（笛の音やゝ近く響く。）

あんたとはずゐぶん久しいお馴染でしたなあ。あんたがわしを訪ねて來て下されたのは、わしがはじめて大島から歸つて來た時だつたが、あれからあんたと二人で京都へ急いで行つたのがあの雛のお節句の日だつたなあ。下の關まで九日の道中、菜の花と桃の花の中を歩いてをるやうぢやつたが、あれから兵庫ではあんなことになつて、大久保がわしと刺しちがへて死のうといふた。

村田　あのころは大久保さんも親切な人でございましたが……

隆盛　今日でも大久保は親切な男だよ。

村田　でも先生を暗殺するやうにわざ〳〵東京から……

隆盛　いや、あれは決して大久保の本意ではない。わしは信じてゐます。實際に證據も何もないのだからのう。あれこそ疑心暗鬼を生ずだ。わしが故郷に歸つて來て、私學校を立てゝから、私學校の風を見て一番驚いたのは長州の連中だ。内務卿の大久保を突つついては、わしのことを批難したにちがひない。大久保は止むを得ない、私學校を調べに役人を遣つたのぢや。きはめて單純な動機さ。大久保の命を受けた下々の役人どもが惡かつたのぢや。大久保の誠心を曲解したのぢや。何時も國を誤るのは上の心を曲解する下々の役人どもぢや。わしは大久保の立場を氣の毒に思ふ。おう（町の方を指し）あすこに甲突川の白い瓦が見える。霧が少しこめてゐるやうだが、水も昔のまゝに月の光りに映つてゐる。わしが生まれた邸は、おうあの黑い木立がある。あの少し右手であらう。市藏の家は……あの銀杏樹のやゝつた木立がある。あの近くぢや。大久保とわしはようあの甲突川で相撲を取つたもんぢや。あのころは川村もわしらとあすこで相撲を取つた。川村の軍艦がもう三時間早く鹿兒島に着いてゐたら、今度の戰爭は起らなかつたらうと、川村が、神戸から手紙を出しよつた。わしは人吉の陣中であの男の手紙を讀んだ。さういへばわしなり、篠原なりが、もう一日、鐵砲打ちから早く鹿兒島に戻つてをつたら、私學校の若い者を、から怒らせることもなかつたらうがのうハッハッハッ……

村田　しかし運命とはあきらめますが、先生をこゝで殺さねばならぬかと思ひますと（涙を拭ふ）

…………しかし何も彼も人生のことは運命だのう村田さん……

隆盛　欲をいへばかぎりはない。あんたは鬼界ケ島へ流され、わしは二度目の大島流し、あの時はもう死んだ筈ぢやつたからのう。蛤御門でも死なず、伏見鳥羽でも、江戸城でも死なず……わしだけがかうして生きのびてゐたのぢやからのう……

村田　先生もさすがに可愛ケ嶽では未だ死にたうないやうに仰つしやいましたなハッハッハッ………
隆盛　ハッハッハッ……あんたぢやないがわしもあの時は故郷が懐かしかつたよ。
村田　死ぬなら、鹿兒島まで落ちて死のうと仰つしやいましたな。
隆盛　鹿兒島はやつぱりよいのう。あんたが江戸城の大廣間で、故郷に歸りたいといふたが、わしも鹿兒島が好きぢや。かうして子供時代相撲を取つた甲突川に映る月の影を見て、櫻島を見て、………
村田　それにこの玉のやうに美しい南の故郷の姿を見まして………
隆盛　故郷の町を見ながら死ぬのは果報なことぢやのう……
村田　先生、大分涼しい風が吹いてまいりました。（笛の聲近づく）
隆盛　あゝもう秋ぢやからのう。（不圖人影を見て）誰ぢや、そこにゐるのは………
菊一郎　（笛吹を持ち、椋の木蔭より登場、足及び頭に繃帶をしてゐる。）お父つあん、わたくしでございます。
隆盛　（なつかしさうに）菊一郎だつたか。どうだ傷は痛まぬか？（心配げに菊一郎の繃帶に觸つて見る。）
菊一郎　はい、さほどでもありません。
村田　菊一郎さんは可愛ケ嶽ですでに御戰死なすつたといふ噂まで傳はりましたのでしたが、よくまあ、お達者で、それまでにおなりでございましたなあ。
隆盛　お前だつたか……さつきから笛を吹いてゐたのは？
菊一郎　はい、わたくしでございました。
村田　たいさうお上手ですなあ。

隆盛　大島にをつたころから天吹ばかり吹いてをつたのです。あの天吹はわしの祖父が初陣の時持つて行つたものださうですが、大島で菊一郎にやりましたが、今日まで壞しませず吹いてをりますのぢや。妙な子で、笛がばかに好きでしてのう。(菊一郎を見て)お前みんなとあつちで騒いではゐなかつたのか。

菊一郎　わたくしは今夜になつて、いよ〱今日きりで死ぬのだと思ひましたら、大島のことが思ひ出されまして、さつきからあすこの山の上で沖を見てゐました。

隆盛　あすこの山から……

菊一郎　あすこの山の上からは何だか大島が見えるやうな氣がしたのです。島は見えます。大島か何か知りませんが。だから、わたくしはさつきからあすこにしやがんでゐたのです。

村田　大島は菊一郎さんにはお懐しいでせうなあ……

菊一郎　わたくしには鹿兒島よりか、大島の方が懐しうございます。大島はわたくしの故郷ですから……

隆盛　(しばらく俯向いてゐたが伸び上つて沖の方を眺めやらうとする。しかし村田に憚るやうな態で再び俯向いてしまう。)

菊一郎　おつ母さんは……お父さんが、二度目に大島にお歸りになつた時、もう二度と大島から離れてはいけないと仰つしやつたさうですねえ……

隆盛　女といふものはいつでもそんなことをいふものだよハツハツハツ……(村田を見てきまり惡げに笑ふ)お前大島に歸りたいか？

菊一郎　…………………(答へないで俯向く)

隆盛　わしと一緒に死ぬか。

菊一郎　はい。

隆盛　死ぬのはいやと思はぬか。

菊一郎　…………………（答へないで父の顔を見つめる）

隆盛　死んでくれるか。お父さんと一緒に。

菊一郎　はい

隆盛　大島でも今夜はあの和尚や……二五郎や……………みんなが月を眺めてゐるだらう。のう……………

菊一郎　おつ母さんや妹も……………

村田　（背を向けて俯向く）

（桐野利秋、別府晋介、池上清、新しい白薩摩飛白に着替へて、袴を着、草鞋を穿いて下手より登城、池上新らしく仕立卸しの飛白着物、襦袢、脚袢等を抱へて來る。）

桐野　先生、わたくし等はお先に着替えました。これですつかり仕度は出來ました。

隆盛　（岡より下りて來る。）涼しさうでハツハツハツ………

桐野　さつぱりいたします。先生もどうぞお着替を………。（池上、隆盛の前に着物を出す。）

隆盛　ありがたう。（受け取つて臺の上に置く。）

（岡の上を見る。菊一郎なほ神の方を見つめてゐる。隆盛しばらく無言。）

（遠くで砲聲が聞える。近くで小銃の音がはげしく聞える。）

桐野　うむ、いよいよ總攻撃を始めたなあ。（砲聲近く聞ゆ）うむ、直ぐ眞近くやつて來たな。（桐野、池上等岡の上へ登る）

直ぐ下まで寄せてをります。（と隆盛を見る、隆盛うなづく。桐野岡より走り下りて、銃架の銃を摑み、穴の中の弾丸を摑つて、岡の上からつゞけさまに射撃する。）おう命中ツー……。（二度撃つ）あつ、残念…はづれた。（三度撃つ）うむ、倒れた……

隆盛　桐野さん、殺生はたいていにして、それぢや下の方へ行つて指揮をねがひます。

桐野　はい。（残念さうに銃を置く。そこに國分壽介が傷き隆盛の前に來て、何か言はうとしたが言葉が出ない、しばらくもだえ、突然刀を胸に刺して倒れる。桐野はそれを見る。）ちえツ、死ぬのはまだ早い。………（長刀を抜き、三四度地を打ち）諸君、先生のために最後まで戦はう。一人でも多く敵を叩き切つて死ぬのぢや。諸君行かう！（刀を揮って上手へ入る。人々走り從ふ。少年等出で來り銃を取つて走る。）

隆盛　（小屋の中から長刀を取り、舞臺中央に來り、銃聲を聞く、敵彈のため樟の枝折れる。）

村田　（岡の上より）先生、大分戦は面白うなつてまいりました。甲突川を眞つ黒になつて敵の大部隊が渡つてまゐりました。照國神社の前に火がつきました。（岡を走り下り）さあ、先生あちらへまいりまして最後の一戦を…………

隆盛　（かろくうなづき、刀を持つたまゝ、砲聲を聴きつゝ、）村田さん…………

村田　はい………

隆盛　今、何時ですかのう？

村田　（懐より時計を出し、カンテラにて見る）今恰度三時五十五分でございます………

隆盛　夜が明けるのも間があるまいのう。

村田　はい…………

隆盛　（上手へ二三歩行き、立ち止つて、振りかへつて岡の上を見る）

菊一郎　………（岡の上に立つたまゝ沖の島を見つめてゐる）

隆盛　…………（村田を見て、再び上手へ歩む。村田隨ふ。空やゝ白みわたる。）

幕

編輯だより

□無情なる朝の術は、人生を後からヒッパタイて行く、寒さにも困る、バラックの風にも弱る、知識階級の首級が飛ぶ行財整理もここ何日の間だ。獵官の諸君が勇退して悲壯の河を乘越すのは今の時機だ。

□冗官も除く内閣が、無殘にも下級の屬官雇員を馘り、有爵議員、多額議員の俸給も全廢する事なく有害無益なる滿鐵社長、臺灣總督の機密費を削除するなく、參謀本部に手を觸れず、鎮守府や艦隊、旅團司令部　要港部を其儘として、官立學校は濫設して充實に意なく、樞密院もそのまま、府縣もそのまま、遞信局もそのまま、大きく痛い所には手をつけざるか近頃の行財整理。お負けに農林省獨立とかで大きな頭丈けが又一つ出來る。

□ロイド・ジョージと共に十五年前の英國政界の立役者であつたチャーチルが漸く副總理の職に出世した。前者は老朽で後者は新進。

□米國は一向變り榮えがないドーズが出たところでドーズるもの出來ない米國の嫌な資本主義國家。

□佛領印度支那に何故に特使を派する。然し私どもは治者である佛國の見舞に行くより安南國民であるその被治者を見舞ふことを忘れてはならぬ。

□岡田文相は軍閥への最後の忠義立てのつもりか軍事教育實施を高閣間に定めてしまつたらしい。岡田といひ松浦といひ時代錯誤の代表者だ、此等の徒が文政に携はる以上、神聖なるべき教育がいつも隷屬的地位に置かれる。慨はしいことだ。ただし一年志願兵制の廢止には同感だ。一年兵役制には其以上の同感だ。

□近來すべての爭議解決の背後に暴力を擁するの傾向があるのは遺憾だ。東洋大學問題の如きは暴力の連續で決た、

□婦人聯盟ではこれから名士講演會を開くことになつた。今度の講演者は穗積重遠博士で「判例に現れたる親族問題の種々相」の題下に十一月十九日より十二月十日まで毎水曜日午後六時より午後九時まで全四回小石川區柳町成城小學にて講演す。會費は一回參拾錢四回壹圓だ。聽講者は婦人聯盟若くは改造社まで申出でられたしとの事。

□儲かつた金で婦人運動をやるとのこと。貧乏な聯盟の事故、百萬圓位寄附して貰つてもさら〳〵文句は申さぬとのこと、百圓でも難有く頂戴すると。

□賀川豐彦氏は太平洋沿岸米國學生大會に招聘されて來る十一月廿五日春洋丸にて橫濱發渡米する。布哇で・一週間講演し　米國で約二ケ月間講演。來年三月英國に到着六月日本歸着の豫定。

□渡歐中の矢崎彈好君は一月早々歸國すると。

□正月號の本誌は空前の盛觀を見せて十二月廿日頃發行する。創作欄も大家、中堅、新進が異常の緊張味を見せている。論壇でも、趣味欄でも、とにかく全世界に並びない雄大な、そして藝術味の勝れた雜誌が出來る。

□本年も幾百となく新進作家の創作を讀んだが、どうも異常な深刻さを有つたものにも出會はず、大關角力まで伸びると感じた大物にも接せず歲末となつて言ひやうのない寂しさを感ぜしめる。論壇も聊かその感じがある。來年は一層新進作家の紹介に努力する。趣味欄も新人のために開放したいから出來るだけ清新なところを御投稿下さい。

□そして創作でも、論文でも何でも第一義的なものであつて欲しい。中傷や、誹謗を含んだ論評は避けられたい。反駁するときは揚足取りでなく堂々と正面論文であつて欲しい。政治の上にも、文藝の上にも我邦人はあまりに嫉妬深い、だから太い線でグン〳〵推して行けないのだ。清朝の沒落や大震災なぞは此上なき創作の大題材であ

ゐのだ。
[]農村問題研究の爲め本誌が率先して特號權威ある論文を發載することについて讀者より賛辭の辭と、註文とが隨分澤山多く舞込むのは嬉しい。何卒雜誌全體に對する註文、改革を意味した御投稿を下さるならば、私共一層の悦びです。
[]來年よりは「讀者欄」を設けたいと思ゐます。そして特號數頁を讀者の爲に開放したいと思ゐます。この欄は讀者の研究、批評、紹介に提供するものですから自由に、面白く、且つ相互に利益あるやうに御利用下さい。ただし一人一回八百字以內として匿名は可成避けられたし、原稿は一切返還せざること。
[]姉妹誌「女性改造」の讀者は今後『改造』の讀者となつて下さることを希望します。
[]無名の新人北村壽夫氏の處女作、幻の森屋」出版されて好評あるは喜ぶべし、
[]「女工哀史」は十一月號で一段落とする。中途でやめるのは遺憾だが編輯の空氣を新にする關係上已むを得ぬ。何れ來春には單行本として「女工哀史」が本社から出版される。
[]本月は隨分いい書が多く出る、末弘博士の「農村法律問題」は代表的の農村研究書だし、植田氏の「藝術哲學」も藝術に携る人々の必讀の良著だ谷崎氏の潤一郎小說集」は或る意味の氏の自敍傳的のもので、その排列なぞも年次順序をよく逐ふた。新村博士の「南蠻更紗」は近頃珍しい讀物である。
[]十一月全國の圖書協會で全國的に表彰された名著は本社發行の「大震火災誌」穗積博士著「離婚制度の研究」本博士「日本社會史」であつた。河田博士の「家族制度と婦人問題」はその選に入るところその筋から讀まれてそのまま外れてしまつたさうだ。
[]それから震災後帝國圖書館及日比谷圖書館で一番多く讀まれたのは長谷川氏の「犬・猫・人間」、倉田百三氏の「超克」同廚川白村氏の「苦悶の象徵」河田博士の農村問題と對策」等であつたさうだ。
[]飛花落葉、宣統帝宮城を逐はれ清朝の遺臣秋風に泣く。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	[illegible]共不要
壹ケ年	拾壹圓廿錢	[illegible]共不要

註文の注意

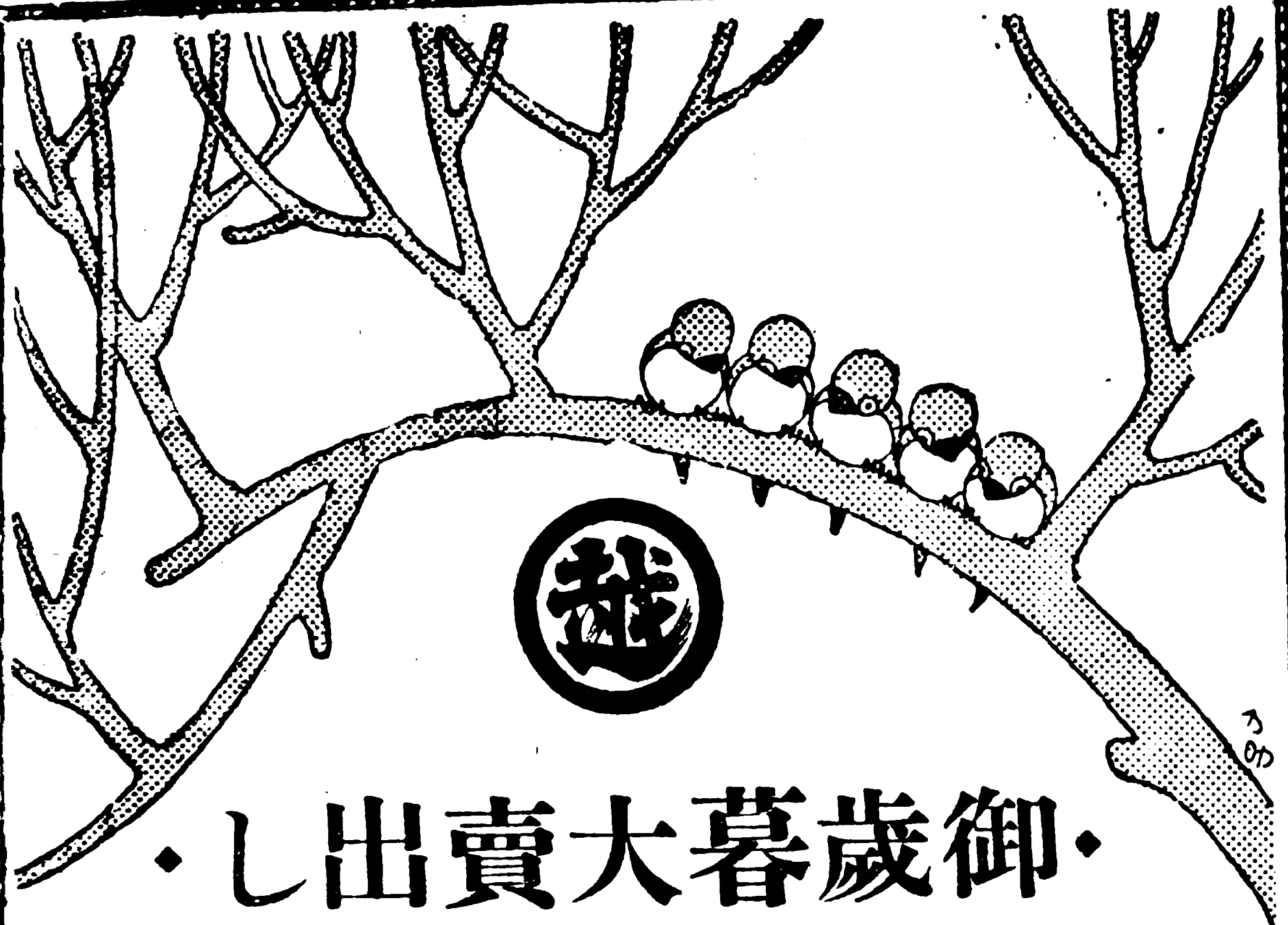
▲御註文は凡て前金に申受く前金切れの時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價前り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾參年十一月廿日印刷納本
大正拾參年十二月一日發行
（價八拾錢）
東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯兼發行人　平田貫一郎
東京牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍
發行所　東京芝區愛宕下一ノ一　改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

改造社重版書

著者	書名	體裁・定價
慶大教授 小泉信三著	價値論と社會主義	菊判上製 定價參圓 送料貳拾壹錢
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本社會史	菊判上製 定價貳圓五拾錢 送料貳拾壹錢
勝部謙造著	ディルタイの哲學	四六判上製 定價壹圓八拾錢 送料拾七錢
板垣鷹穗著	新カント派の歷史	四六判上製 定價壹圓五拾錢 送料拾五錢
文學博士 朝永三十郎著	カントの平和論	四六判上製 定價壹圓五拾錢 送料拾五錢
文學博士 桑田芳藏著	ヴントの民族心理學	四六判上製 定價參圓五拾錢 送料廿壹錢
大杉榮著	自叙傳	四六判並製 定價貳圓 送料拾五錢
山川均著	レーニンとトロツキー	四六判上製 定價壹圓五拾錢 送料拾五錢
ゲージノーウイエフ著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	四六判並製 定價九拾錢 送料拾壹錢
ニコライ・レーニン著 茂森唯士著	レーニニズム	四六判並製 定價壹圓貳拾錢 送料拾參錢

發行所 東京市芝愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二 電話高輪四九九三



・御歳暮大賣出し・

御歳暮の御贈答品は、何方様にも喜ばれる三越の品を御用ひ遊ばすに限ります。三越では、御選擇の御便宜の爲め、「御歳暮御贈答品賣出し」を開催致し、季節用品や家庭用品を豐富に取揃へます。御用命を願上ます。商品券は、現金同樣、御望の品は、何とでも御引換が出來ますから、贈るに便利、受けて重寶で御座います

◆新製羽子板陳列……（一日より廿一日まで）
◆よせぎれ其他切反物賣出し……（一日より十五日まで）
◆畫林社主催 東西大家新作畫展覽會……（二日より六日まで）
◆三越歳の市……（十日より廿一日まで）
◆新年用品陳列會……（十七日より廿一日まで）

東京市 **三越呉服店** 駿河町

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

植田壽藏著

藝術哲學

菊判 上製

定價二圓七拾錢 郵送料十七錢

最新刊

この書の如く、世界に於て燦々たる光輝ある藝術國日本に向つて、深く要求せられた研究を、この著者の如き著者に依て公表し得ることは、本社の聊か悅びとする處である。憾むらくは、著者の固執する希望の故に、この書に就て、自ら價値を主張することを、本社は凡て差控えねばならない、唯だ眞に嚴肅なる新時代文化の建設者たり、支持者たらんとする諸君自ら、藝術の最も深き眞理に沈潜せられん爲に、(夫れは人類の輝ける義務の一つである)この書が一つの堅固なる階段として役立ち得ることは、著者と共に本社の深く希望する處である。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

東京株式會社秀英舍印刷